

再考 真理のことば ver. 2 (再生版)

2021年4月8日

掲載 URL : <http://tsukiyonoryu.seesaa.net/article/480893828.html>

目次

第1部はじめに

経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

導入・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

新旧の詩番号対応表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

第2部詩文一覧

第1章さまざまの事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

GS1 節 心と意・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

GS2 節 己（おのれ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

GS3 節 はげみ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

GS4 節 老いること・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

GS5 節 世の中・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

GS6 節 道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

GS7 節 千という数にちなんで・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

GS8 節 花にちなんで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

GS9 節 楽しみ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

GS 10 節	さまざまなること	20
GS 11 節	象	21
GS 12 節	ひと組ずつ	22
第2節	さまざまなる悪	24
GS 13 節	悪	24
GS 14 節	怒り	25
GS 15 節	汚れ	26
GS 16 節	欲と執着	27
GS 17 節	悪いところ	29
第3節	さまざまなる人	30
GS 18 節	仏弟子	30
GS 19 節	修行僧	32
GS 20 節	道を実践する人	35
GS 21 節	愚かな人	35
GS 22 節	賢い人	37
GS 23 節	真人	38
GS 24 節	ブツダ	40
第3部	再考「真理のことば」	42
記述方法	の説明	42

第1章	さまざまなる事	42
GS 1 節	心と意	43
GS 2 節	己(おのれ)	47
GS 3 節	はげみ	50
GS 4 節	老いること	55
GS 5 節	世の中	58
GS 6 節	道	62
GS 7 節	千という数にちなんで	68
GS 8 節	花にちなんで	72
GS 9 節	樂しみ	78
GS 10 節	さまざまなること	82
GS 11 節	象	85
GS 12 節	ひと組ずつ	90
第2章	さまざまなる悪	94
GS 13 節	悪	95
GS 14 節	怒り	97
GS 15 節	汚れ	102
GS 16 節	欲と執着	108
GS 17 節	悪いところ	118
第3章	さまざまなる人	122

GS 18 節 仏弟子	123
GS 19 節 修行僧	130
GS 20 節 道を实践する人	143
GS 21 節 愚かな人	145
GS 22 節 賢い人	149
GS 23 節 真人	157
GS 24 節 ブツダ	167

第4部 付録

付録1 魂と脳と守護霊 最終版ーリプレイス	174
付録2 「心を整える」と「心が治まる」と「心を慎(つつし)む」についての考察	188
「心を整える」と「心が治まる」	188
心を慎む	189
付録3 仏道	190
(1) 四諦	190
(2) 仏道	192
(3) 仏道の目標	194
付録4 人間の分類	195
(1) 分類方法	195
(2) 仏弟子	197

(3) 修行者

付録5 心の汚れ

(一) 汚れと煩惱

(二) 欲と執着

(コーヒーブレイク) 仏道のキーナンバー

(コーヒーブレイク) 三界についての感想

付録6 武力と暴力

付録7 さとりと空

(1) さとりと解脱と涅槃

(2) 空相色

(3) 般若心経

(4) 諸行無常、一切皆苦、諸法非我

第5部 削除詩

謝辞

第1部はじめに

経緯

本書は【再考「真理のことば」ver. 2（再生版）】となります。

中村元氏著の「真理のことば」（岩波文庫）を元に書き始めたブログ記事

(<http://tsukiyonoryu.seesaa.net/article/467312289.html>)

をまとめたものが【再考「真理のことば」月夜の龍著】（初版）

(<http://tsukiyonoryu.seesaa.net/article/464214534.html>)

となります。初版をマイナーチェンジしたものが【再考「真理のことば」ver. 1（訂正版）】

(<http://tsukiyonoryu.seesaa.net/article/467312289.html>)

です。

上記のブログ記事の着手の2017年から4年近く、初版からも二年の歳月が過ぎ、大幅な改正が必要であると感じましたので、【再考「真理のことば」ver. 2（再生版）】として記しました。

主な変更点は、主に「真理のことば第3章さまざまな人」の節編成（以下にも記します。）と「本書第4部付録」の充実と改訂です。各付録とも内容を大幅に増やし、さらに「付録7さとりと空」を新設しました。

導入

お釈迦様の直接の教えが、「真理のことば」と「ブツダのことば」には非常に多いと言われています。これは、お釈迦様を慕う先人たちの忍耐と努力の結晶で、感謝してもし尽くせないほどです。

「真理のことば」は、短く、お釈迦様の教えの一部ですが、原始仏教の教えとされ、その中核に位置すると当方は思うと同時に、分類、順序を中心にかなり乱れていると感じ、この混乱を解きほぐすことを目当てとして、本シリーズを記しています。最も参考にしてているものは、日本の神道の一二三神示であり、本書ではたくさんの引用をさせていただいております。なかでも、「真理のことば」の再考作業を遂行するにあたりもっとも注意を払ったのは、「何事も順正しくやりて下されよ、神は順であるぞ、順乱れた所には神の能（はたらき）現はれんぞ。」という教えです。

そこで本書では中村氏の使った章（本書ではOSと記す。）と前回使用した章（FS）に対応する単位を節（GS）とし、それらの節を内容によって ver. 1と同様に3つに分類し、「第1章さまざまな事」、「第2章さまざまな悪」、「第3章さまざまな人」という章を作りました。各章、節の名前と順を、図1に示します。

この結果、「OS10暴力」と「OS16愛するもの」「OS26バラモン」は章を解体し、「GS18仏弟子」を新設しました。

また、中村氏の詩文では、仏教用語の使い方もあやふやな部分
が非常に多いため、主に付録で、仏教用語を調べ定義を行い、出
来るだけ定義した言葉で詩文を書き換え訂正を行いました。お釈
迦様の教えとしてのお経に親しんでいない方々にもなるべく正し
く教えを伝えられるようにしたこの作業によって、使われる単語
が激減して、中村氏が再現なさった美しさや文学性が犠牲となり
ました。

また、訂正ではどうしても対応できない詩に関しては、ヒンズー
（バラモン）教の詩が混ざった可能性が高いと判断しましたので、
削除しました（第5部に書き出しました）。おそらく、ブツダゴ
サによる「真理のことば」編纂時に編入されたものではないかと、
当方は考えています。

お釈迦様はヒンズー教とバラモンを批判なさったのですが、一
方で、バラモンが正しく存在していた時のお話を、「ブツダの言葉
第二小なる章7バラモンに相応しいこと」で説かれてらっしゃい
ます。その中で、真人であるバラモンは武器で守られたのではな
く法（真理）に守られていたとお説きになっています。

元来、仏という字はムの間人という意味で、真人間（真人）を
意味するのではないかと考えております。古来は、このような人
間が圧倒的に多く、地球が平和で豊かであったのではないかと思うのです。

図1 中村氏と本書の章と節の割振り

本書での章一節の割振り				中村元氏版の割振り			
章題	節番	節題	詩の数	章番	章題	整理番号	詩の数
1章 お釈迦様の教え	GS01	心と意	9	第一章	ひと組ずつ	OS01	20
	GS02	己（おのれ）	9	第二章	はげみ	OS02	12
	GS03	はげみ	12	第三章	心	OS03	11
	GS04	老いること	12	第四章	花にちなんで	OS04	16
	GS05	世の中	12	第五章	愚かな人	OS05	16
	GS06	道	15	第六章	賢い人	OS06	14
	GS07	千という数にちなんで	13	第七章	真人	OS07	10
	GS08	花にちなんで	14	第八章	千という数にちなんで	OS08	15
	GS09	楽しみ	13	第九章	悪	OS09	13
	GS10	さまざまなこと	9	第一〇章	暴力(*)	OS10	14
	GS11	象	13	第十一章	老いること	OS11	11
	GS12	ひと組ずつ	14	第十二章	自己	OS12	10
2章 お釈迦様の教え	GS13	悪	13	第十三章	世の中	OS13	12
	GS14	怒り	14	第十四章	ブツダ	OS14	16
	GS15	汚れ	19	第十五章	楽しみ	OS15	12
	GS16	欲と執着	20	第十六章	愛するもの(*)	OS16	12
	GS17	悪いところ	11	第十七章	怒り	OS17	14
3章 お釈迦様の教え	GS18	仏弟子(**)	17	第十八章	汚れ	OS18	20
	GS19	修行僧	32	第十九章	道を実践する人	OS19	15
	GS20	道を実践する人	9	第二〇章	道	OS20	17
	GS21	愚かな人	16	第二一章	さまざまなこと	OS21	16
	GS22	賢い人	14	第二二章	地獄	OS22	14
	GS23	真人	20	第二三章	象	OS23	14
	GS24	ブツダ	20	第二四章	愛執	OS24	25
				第二五章	修行僧	OS25	23
				第二六章	バラモン(*)	OS26	41

(**)は新設した章

(*)は解体した章

当方は、インドにおける真人たるバラモンの墮落が、お釈迦様のヒンズー教刷新のためのいわゆる仏教流布へとつながったのではないかと考えています。

他方で、お釈迦様の教えは、お釈迦様への個人崇拜ではなく、この諸行無常の世の中にあつて、絶対不変の真理に依拠して大多数を占める在家者たちを正しく教え導くといういたってシンプルで常識的なものであったと確信しております。そして、自分たちのための教えを必要としていた大多数の庶民から、強い支持を得たのでしよう。

お釈迦様の教えは、各個人が正しく生き真人や仏へと進化させることが目的であるので、全ての者に示された教えだと、当方は信じています。仏道という言葉には、この意味を込めました。

以上のような観点と一二三神示地つ巻第二帖(148)(下記引用あり)から、「バラモン」という言葉は使用せず、「修行僧」に集約しました。

(引用始)

一二三神示地つ巻第二帖(148)

「世界丸めて一つの国にするぞと申してあるが、国はそれぞれの色の違ふ臣民によりて一つ一つの国作らずぞ。その心々によりて、それぞれの教作らずのぞ。旧きものまかりて、また新しくなるのぞ、その心々(こころこころ)の国と申すは、心々の国であるぞ、一つの王で治めるのぞぞ。天つ日嗣の実子様が世界中照らすのぞ。」

(引用終)

個人的には、バラモンは、主にインドと中国の一部(ある特定の地域)で作られた教えの役職的地位と捉えるべきでしょう。

中村氏の「真理のことば」では、霊格という観点がありませんが、本書では順を正すことが一つの目的ですので、霊格を降順で「神」み仏(ブツダ)《真人》一般人」と考えて詩文の整理を行いました。神がみ仏(ブツダ)を呼ぶ場合はブツダともなりますが、人類はみ仏もしくは仏様とお呼びすることになります。またコメントにおいては、明らかにお釈迦様に限定されている場合は、み仏は使わず、「お釈迦様」を使用しました。

まとめると、本書では、「真理のことば」の再考作業として、

第一に、章・節・詩の編成と順序の変更(OS10章暴力、OS16章愛するもの、OS26章バラモンは解散、GS18節仏弟子新設)

第二に、仏教用語の定義や常識的な概念導入に伴う、詩文の変更

第三に、不要な詩や文章の削除
を行いました。

また、「真理のことば」は「法句経」とも言われますが、少し古い訳出書である

「荻原雲来氏訳の法句経（ダンマパダ） <https://twitter.com/hokkugyo>」
「立花俊道氏訳の法句経（ダンマパダ） <https://twitter.com/hokkugyo2>」
さらに、浄土宗大辞典 WEB 版を参照にしました。

中村氏の精緻な注釈訳詩があつてこそ、さらに、引用させていただいた丁寧で良心的な文献が、書店でインターネットで手軽に手に入れられるわが国の平和で安定した社会情勢とこの文献の維持に携わられた方々に心より敬意と感謝を表します。

今後、本書の「真理のことば」の書き換えの必要が生じ、人が書き換えを行う際には、ブツダゴーサの編纂時に起きた悲劇を防止するため、本書と同様に過去の詩を記し、新しい詩を書くという形での書き換えを行ってください。（合掌）

新旧の詩番号対応表

「真理のことば」における、章、節、詩の記号と番号は以下の通りです。

- OS 番号と O 番号は、それぞれ、中村元氏著「真理のことば」（岩波文庫）の章番号と詩番号です。
- FS 番号と F 番号は、【再考「真理のことば」月夜の龍著】と【再考「真理のことば ver.1】】で用いた章番号と詩番号です。
- GS 番号と G 番号はそれぞれ本書の節記号と詩番号のシリアル番号です。

新旧章・詩番号の検索表を以下に掲載します。この表のエクセルデータは、

<https://tsukiyonoryu.up.seesaa.net/image/>

<E79C9FE79086E381AEFE38193E381A8E381B0E8A9A9E7AF80E795AAEF58FB7.xlsx>

にアップしてありますので、ご利用ください。

G番号順 1/4

Ver.2 番号		Ver.1 番号		プログ 詩番号	中村氏オリジナル	
詩番号	節番号	詩番号	節番号		詩番号	節番号
G001	GS01	F001	FS01	B027	O033	OS03
G002	GS01	F002	FS01	B028	O034	OS03
G003	GS01	F003	FS01	B029	O035	OS03
G004	GS01	F005	FS01	B031	O037	OS03
G005	GS01	F006	FS01	B032	O038	OS03
G006	GS01	F007	FS01	B033	O039	OS03
G007	GS01	F008	FS01	B034	O040	OS03
G007	GS01	F009	FS01	B034	O041	OS03
G008	GS01	F010	FS01	B035	O042	OS03
G009	GS01	F011	FS01	B036	O043	OS03
G010	GS02	F012	FS02	B178	O160	OS12
G011	GS02	F013	FS02	B179	O157	OS12
G012	GS02	F014	FS02	B180	O161	OS12
G013	GS02	F015	FS02	B181	O162	OS12
G014	GS02	F016	FS02	B182	O158	OS12
G015	GS02	F017	FS02	B184	O164	OS12
G016	GS02	F018	FS02	B185	O163	OS12
G017	GS02	F019	FS02	B186	O165	OS12
G018	GS02	F020	FS02	B187	O166	OS12
G019	GS03	F021	FS03	B015	O021	OS02
G020	GS03	F022	FS03	B016	O022	OS02
G021	GS03	F023	FS03	B017	O023	OS02
G022	GS03	F024	FS03	B018	O024	OS02
G023	GS03	F025	FS03	B019	O025	OS02
G024	GS03	F026	FS03	B020	O026	OS02
G025	GS03	F027	FS03	B021	O027	OS02
G026	GS03	F028	FS03	B022	O028	OS02
G027	GS03	F029	FS03	B023	O029	OS02
G028	GS03	F030	FS03	B024	O030	OS02
G029	GS03	F031	FS03	B025	O031	OS02
G030	GS03	F032	FS03	B026	O032	OS02
G031	GS04	F033	FS04	B215	O146	OS11
G032	GS04	F034	FS04	B216	O147	OS11
G033	GS04	F035	FS04	B217	O148	OS11
G034	GS04	F036	FS04	B295	O135	OS10
G035	GS04	F037	FS04	B218	O149	OS11
G036	GS04	F038	FS04	B219	O150	OS11
G037	GS04	F039	FS04	B220	O151	OS11
G038	GS04	F040	FS04	B221	O152	OS11
G039	GS04	F041	FS04	B222	O153	OS11
G040	GS04	F042	FS04	B223	O154	OS11
G041	GS04	F043	FS04	B224	O155	OS11
G042	GS04	F044	FS04	B225	O156	OS11
G043	GS05	F045	FS05	B203	O167	OS13
G044	GS05	F046	FS05	B204	O168	OS13
G045	GS05	F047	FS05	B205	O169	OS13
G046	GS05	F048	FS05	B206	O170	OS13
G047	GS05	F049	FS05	B207	O171	OS13
G048	GS05	F050	FS05	B208	O172	OS13
G049	GS05	F051	FS05	B209	O173	OS13
G050	GS05	F052	FS05	B210	O174	OS13
G051	GS05	F053	FS05	B211	O175	OS13
G052	GS05	F054	FS05	B212	O176	OS13
G053	GS05	F055	FS05	B213	O177	OS13
G054	GS05	F056	FS05	B214	O178	OS13

G055	GS06	F057	FS06	B188	O273	OS20
G056	GS06	F058	FS06	B189	O274	OS20
G057	GS06	F059	FS06	B190	O275	OS20
G058	GS06	F060	FS06	B191	O276	OS20
G059	GS06	F061	FS06	B192	O277	OS20
G059	GS06	F061	FS06	B192	O278	OS20
G059	GS06	F061	FS06	B192	O279	OS20
G060	GS06	F062	FS06	B193	O280	OS20
G061	GS06	F063	FS06	B194	O281	OS20
G062	GS06	F064	FS06	B195	O282	OS20
G063	GS06	F065	FS06	B196	O283	OS20
G064	GS06	F066	FS06	B197	O284	OS20
G065	GS06	F067	FS06	B198	O285	OS20
G066	GS06	F068	FS06	B199	O286	OS20
G067	GS06	F069	FS06	B200	O287	OS20
G068	GS06	F070	FS06	B201	O288	OS20
G069	GS06	F071	FS06	B202	O289	OS20
G070	GS07	F072	FS07	B226	O100	OS08
G071	GS07	F073	FS07	B227	O101	OS08
G072	GS07	F074	FS07	B228	O102	OS08
G073	GS07	F075	FS07	B229	O103	OS08
G073	GS07	F075	FS07	B229	O104	OS08
G073	GS07	F075	FS07	B229	O105	OS08
G074	GS07	F076	FS07	B230	O106	OS08
G074	GS07	F076	FS07	B230	O107	OS08
G075	GS07	F077	FS07	B231	O108	OS08
G076	GS07	F078	FS07	B232	O109	OS08
G077	GS07	F079	FS07	B233	O110	OS08
G078	GS07	F080	FS07	B234	O111	OS08
G079	GS07	F081	FS07	B235	O112	OS08
G080	GS07	F082	FS07	B236	O113	OS08
G081	GS07	F083	FS07	B237	O114	OS08
G082	GS07	F084	FS07	B238	O115	OS08
G083	GS08	F085	FS08	B037	O044	OS04
G084	GS08	F086	FS08	B038	O045	OS04
G085	GS08	F087	FS08	B039	O046	OS04
G086	GS08	F088	FS08	B040	O047	OS04
G086	GS08	F088	FS08	B040	O048	OS04
G087	GS08	F089	FS08	B041	O049	OS04
G088	GS08	F090	FS08	B042	O050	OS04
G089	GS08	F091	FS08	B043	O051	OS04
G090	GS08	F092	FS08	B044	O052	OS04
G091	GS08	F093	FS08	B045	O053	OS04
G092	GS08	F094	FS08	B046	O054	OS04
G093	GS08	F095	FS08	B047	O055	OS04
G094	GS08	F096	FS08	B048	O056	OS04
G095	GS08	F097	FS08	B049	O057	OS04
G096	GS08	F098	FS08	B050	O058	OS04
G096	GS08	F098	FS08	B050	O059	OS04
G097	GS09	F099	FS09	B266	O197	OS15
G098	GS09	F100	FS09	B267	O198	OS15
G099	GS09	F101	FS09	B268	O199	OS15
G100	GS09	F102	FS09	B355	O219	OS16
G101	GS09	F103	FS09	B356	O220	OS16
G102	GS09	削除より	FS09	-	O200	OS15
G103	GS09	削除より	FS09	-	O201	OS15
G104	GS09	F104	FS09	B269	O202	OS15

G番号順 2/4

G105	GS09	F106	FS09	B271	O204	OS15
G106	GS09	F107	FS09	B272	O205	OS15
G107	GS09	F108	FS09	B273	O206	OS15
G108	GS09	F109	FS09	B274	O207	OS15
G109	GS09	F110	FS09	B275	O208	OS15
G110	GS10	F111	FS10	B239	O290	OS21
G111	GS10	F112	FS10	B240	O291	OS21
G112	GS10	F113	FS10	B241	O292	OS21
G113	GS10	F114	FS10	B242	O293	OS21
G114	GS10	F115	FS10	B243	O302	OS21
G115	GS10	F116	FS10	B246	O305	OS21
G116	GS10	F117	FS10	B353	O217	OS16
G117	GS10	F118	FS10	B244	O303	OS21
G118	GS10	F119	FS10	B245	O304	OS21
G119	GS11	F120	FS11	B247	O320	OS23
G120	GS11	F121	FS11	B248	O321	OS23
G121	GS11	F122	FS11	B249	O322	OS23
G121	GS11	F122	FS11	B249	O323	OS23
G122	GS11	F123	FS11	B250	O324	OS23
G123	GS11	F124	FS11	B251	O325	OS23
G124	GS11	F125	FS11	B252	O326	OS23
G125	GS11	F126	FS11	B253	O327	OS23
G126	GS11	F127	FS11	B254	O328	OS23
G127	GS11	F128	FS11	B255	O329	OS23
G128	GS11	F129	FS11	B256	O330	OS23
G129	GS11	F130	FS11	B257	O331	OS23
G130	GS11	F131	FS11	B258	O332	OS23
G131	GS11	F132	FS11	B259	O333	OS23
G132	GS12	F133	FS12	B001	O001	OS01
G133	GS12	F134	FS12	B002	O002	OS01
G134	GS12	F135	FS12	B003	O003	OS01
G135	GS12	F136	FS12	B004	O004	OS01
G136	GS12	F137	FS12	B005	O005	OS01
G137	GS12	F138	FS12	B006	O006	OS01
G138	GS12	F139	FS12	B007	O007	OS01
G139	GS12	F140	FS12	B008	O008	OS01
G140	GS12	F141	FS12	B009	O011	OS01
G141	GS12	F142	FS12	B010	O012	OS01
G142	GS12	F143	FS12	B011	O013	OS01
G143	GS12	F144	FS12	B012	O014	OS01
G144	GS12	F145	FS12	B013	O019	OS01
G145	GS12	F146	FS12	B014	O020	OS01
G146	GS13	F147	FS13	B350	O209	OS16
G147	GS13	F148	FS13	B276	O116	OS09
G148	GS13	F149	FS13	B277	O117	OS09
G149	GS13	F150	FS13	B278	O118	OS09
G150	GS13	F151	FS13	B279	O119	OS09
G151	GS13	F152	FS13	B280	O120	OS09
G152	GS13	F153	FS13	B281	O121	OS09
G153	GS13	F154	FS13	B282	O122	OS09
G154	GS13	F155	FS13	B283	O123	OS09
G155	GS13	F156	FS13	B284	O124	OS09
G156	GS13	F157	FS13	B285	O125	OS09
G157	GS13	F158	FS13	B287	O127	OS09
G158	GS13	F159	FS13	B288	O128	OS09
G159	GS14	F160	FS14	B300	O222	OS17
G159	GS14	F160	FS14	B085	O094	OS07

G160	GS14	F161	FS14	B293	O133	OS10
G161	GS14	F162	FS14	B294	O134	OS10
G162	GS14	F163	FS14	B301	O223	OS17
G163	GS14	F164	FS14	B303	新設	OS17
G164	GS14	F165	FS14	B304	O227	OS17
G165	GS14	F166	FS14	B305	O228	OS17
G166	GS14	F167	FS14	B306	O229	OS17
G167	GS14	F168	FS14	B307	O230	OS17
G168	GS14	F169	FS14	B308	O231	OS17
G169	GS14	F170	FS14	B309	O232	OS17
G170	GS14	F171	FS14	B310	O233	OS17
G171	GS14	F172	FS14	B311	O234	OS17
G172	GS15	F173	FS15	B312	O235	OS18
G173	GS15	F174	FS15	B313	O238	OS18
G174	GS15	F175	FS15	B314	O239	OS18
G175	GS15	F176	FS15	B315	O240	OS18
G176	GS15	F177	FS15	B316	O241	OS18
G177	GS15	F178	FS15	B317	O242	OS18
G178	GS15	F179	FS15	B318	O243	OS18
G179	GS15	F180	FS15	B319	O244	OS18
G180	GS15	F181	FS15	B320	O245	OS18
G181	GS15	F182	FS15	B321	O246	OS18
G181	GS15	F182	FS15	B321	O247	OS18
G182	GS15	F183	FS15	B322	O248	OS18
G183	GS15	F184	FS15	B323	O249	OS18
G184	GS15	F185	FS15	B324	O250	OS18
G185	GS15	F186	FS15	B325	O251	OS18
G186	GS15	F187	FS15	B326	O252	OS18
G187	GS15	F188	FS15	B327	O253	OS18
G188	GS15	F189	FS15	B302	O226	OS17
G189	GS15	F190	FS15	B328	O254	OS18
G190	GS15	F191	FS15	B329	O255	OS18
G191	GS16	F192	FS16	B330	O334	OS24
G192	GS16	F193	FS16	B331	O335	OS24
G193	GS16	F194	FS16	B332	O336	OS24
G194	GS16	F195	FS16	B351	O212	OS16
G194	GS16	F195	FS16	B351	O213	OS16
G194	GS16	F195	FS16	B351	O214	OS16
G194	GS16	F195	FS16	B351	O215	OS16
G194	GS16	F195	FS16	B351	O216	OS16
G195	GS16	F196	FS16	B352	O212	OS16
G195	GS16	F196	FS16	B351	O213	OS16
G195	GS16	F196	FS16	B351	O214	OS16
G195	GS16	F196	FS16	B351	O215	OS16
G195	GS16	F196	FS16	B351	O216	OS16
G196	GS16	F197	FS16	B333	O337	OS24
G197	GS16	F198	FS16	B334	O338	OS24
G198	GS16	F199	FS16	B335	O339	OS24
G199	GS16	F200	FS16	B336	O341	OS24
G200	GS16	F201	FS16	B337	O340	OS24
G201	GS16	F202	FS16	B338	O342	OS24
G201	GS16	F202	FS16	B338	O343	OS24
G202	GS16	F203	FS16	B339	O344	OS24
G203	GS16	F204	FS16	B340	O345	OS24
G203	GS16	F204	FS16	B340	O346	OS24
G204	GS16	F205	FS16	B341	O347	OS24
G205	GS16	F206	FS16	B342	O356	OS24

G番号順 3/4

G205	GS16	F206	FS16	B342	O357	OS24
G205	GS16	F206	FS16	B342	O358	OS24
G205	GS16	F206	FS16	B342	O359	OS24
G206	GS16	F207	FS16	B343	O349	OS24
G207	GS16	F208	FS16	B344	O350	OS24
G208	GS16	F209	FS16	B345	O355	OS24
G209	GS16	F210	FS16	B354	O218	OS16
G210	GS16	F211	FS16	B346	O354	OS24
G211	GS17	F212	FS17	B357	O306	OS22
G212	GS17	F213	FS17	B358	O309	OS22
G213	GS17	F214	FS17	B359	O310	OS22
G214	GS17	F215	FS17	B360	O312	OS22
G215	GS17	F216	FS17	B361	O314	OS22
G216	GS17	F217	FS17	B362	O315	OS22
G217	GS17	F218	FS17	B363	O316	OS22
G218	GS17	F219	FS17	B364	O317	OS22
G219	GS17	F220	FS17	B365	O318	OS22
G220	GS17	F221	FS17	B366	O319	OS22
G221	GS17	F222	FS17	B286	O126	OS09
G222	GS18	F291	FS22	B126	O183	OS14
G223	GS18	F292	FS22	B127	O185	OS14
G224	GS18	F310	FS23	B109	O360	OS25
G225	GS18	F311	FS23	B110	O361	OS25
G226	GS18	F297	FS22	B131	O188	OS14
G227	GS18	F298	FS22	B132	O189	OS14
G228	GS18	F299	FS22	B134	O190	OS14
G228	GS18	F299	FS22	B134	O191	OS14
G229	GS18	F300	FS22	B133	O192	OS14
G230	GS18	F306	FS23	B106	O392	OS26
G231	GS18	F296	FS22	B130	O194	OS14
G232	GS18	F301	FS22	B260	O296	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B261	O297	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B262	O298	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B263	O299	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B264	O300	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B265	O301	OS21
G233	GS18	F260	FS19	B299	O143	OS10
G233	GS18	F260	FS19	B299	O144	OS10
G234	GS18	F302	FS22	B066	O075	OS06
G235	GS18	F323	FS23	B122	O364	OS25
G236	GS18	F294	FS22	B121	O368	OS25
G236	GS18	F294	FS22	B121	O381	OS25
G237	GS18	F343	FS24	B158	O384	OS26
G238	GS18	F295	FS22	B129	O187	OS14
G239	GS19	F342	FS24	B150	O388	OS26
G240	GS19	F305	FS23	B105	O375	OS25
G241	GS19	F314	FS23	B114	O390	OS26
G242	GS19	F304	FS23	B298	O142	OS10
G243	GS19	F285	FS21	B098	O266	OS19
G244	GS19	F286	FS21	B099	O267	OS19
G245	GS19	F307	FS23	B107	O365	OS25
G246	GS19	F308	FS23	B108	O366	OS25
G247	GS19	F333	FS24	B142	O393	OS26
G248	GS19	F334	FS24	B367	O307	OS22
G249	GS19	F335	FS24	B143	O394	OS26
G250	GS19	F336	FS24	B144	O395	OS26
G251	GS19	F337	FS24	B145	O396	OS26

G252	GS19	F284	FS21	B096	O264	OS19
G253	GS19	F303	FS23	B297	O141	OS10
G254	GS19	F312	FS23	B111	O363	OS25
G255	GS19	F313	FS23	B113	O379	OS25
G256	GS19	F315	FS23	B116	O369	OS25
G256	GS19	F315	FS23	B116	O377	OS25
G257	GS19	F316	FS23	B117	O370	OS25
G258	GS19	F290	FS21	B103	O271	OS19
G258	GS19	F290	FS21	B103	O272	OS19
G259	GS19	F317	FS23	B119	O371	OS25
G260	GS19	F318	FS23	B368	O308	OS22
G261	GS19	F319	FS23	B369	O311	OS22
G262	GS19	F320	FS23	B370	O313	OS22
G263	GS19	F332	FS24	B141	O389	OS26
G264	GS19	F321	FS23	B120	O373	OS25
G264	GS19	F321	FS23	B120	O374	OS25
G265	GS19	F322	FS23	-	O181	OS14
G266	GS19	F326	FS23	B125	O382	OS25
G267	GS19	F328	FS24	B137	O383	OS26
G268	GS19	F324	FS23	B123	O378	OS25
G269	GS19	F330	FS24	B139	O415	OS26
G270	GS19	F331	FS24	B140	O416	OS26
G271	GS20	F278	FS21	B090	O256	OS19
G271	GS20	F278	FS21	B090	O257	OS19
G272	GS20	F279	FS21	B091	O258	OS19
G273	GS20	F280	FS21	B092	O259	OS19
G274	GS20	F281	FS21	B093	O260	OS19
G275	GS20	F282	FS21	B094	O261	OS19
G276	GS20	F283	FS21	B095	O262	OS19
G276	GS20	F283	FS21	B095	O263	OS19
G277	GS20	F287	FS21	B100	O268	OS19
G277	GS20	F287	FS21	B101	O269	OS19
G278	GS20	F288	FS21	B100	O268	OS19
G278	GS20	F288	FS21	B101	O269	OS19
G279	GS20	F289	FS21	B102	O270	OS19
G280	GS21	F223	FS18	B051	O060	OS05
G281	GS21	F224	FS18	B052	O061	OS05
G282	GS21	F225	FS18	B053	O062	OS05
G283	GS21	F226	FS18	B054	O063	OS05
G284	GS21	F227	FS18	B055	O064	OS05
G285	GS21	F228	FS18	B056	O065	OS05
G286	GS21	F229	FS18	B057	O066	OS05
G287	GS21	F230	FS18	B058	O067	OS05
G288	GS21	F231	FS18	B059	O068	OS05
G289	GS21	F232	FS18	B060	O069	OS05
G290	GS21	F233	FS18	B296	O136	OS10
G291	GS21	F234	FS18	B061	O070	OS05
G292	GS21	F235	FS18	B062	O071	OS05
G293	GS21	F236	FS18	B063	O072	OS05
G294	GS21	F237	FS18	B065	O074	OS05
G295	GS21	F238	FS18	B064	O073	OS05
G296	GS22	F293	FS22	B128	O184	OS14
G297	GS22	F240	FS19	B104	O380	OS25
G298	GS22	F239	FS19	B071	O080	OS06
G299	GS22	F241	FS19	B083	O091	OS07
G300	GS22	F242	FS19	B067	O076	OS06
G301	GS22	F243	FS19	B069	O078	OS06

G番号順 4/4

G302	GS22	F244	FS19	B074	O083	OS06
G303	GS22	F245	FS19	B072	O081	OS06
G304	GS22	F246	FS19	B112	O376	OS25
G305	GS22	F247	FS19	B068	O077	OS06
G306	GS22	F248	FS19	B075	O084	OS06
G307	GS22	F249	FS19	B079	O186	OS14
G308	GS22	F250	FS19	B078	O087	OS06
G309	GS22	F251	FS19	B164	O182	OS14
G310	GS22	F252	FS19	B165	O193	OS14
G311	GS22	F253	FS19	B077	O086	OS06
G312	GS22	F254	FS19	B070	O079	OS06
G312	GS22	F254	FS19	B073	O082	OS06
G313	GS22	F255	FS19	B087	O095	OS07
G314	GS22	F256	FS19	B076	O085	OS06
G315	GS22	F257	FS19	B084	O092	OS07
G315	GS22	F257	FS19	B084	O093	OS07
G316	GS22	F258	FS19	B088	O096	OS07
G317	GS23	F269	FS20	B091	O098	OS07
G318	GS23	F270	FS20	B090	O099	OS07
G319	GS23	F338	FS24	B146	O404	OS26
G320	GS23	F271	FS20	B082	O090	OS07
G321	GS23	F272	FS20	B118	O372	OS25
G322	GS23	F309	FS23	B115	O391	OS26
G323	GS23	F341	FS24	B149	O408	OS26
G324	GS23	F329	FS24	B138	O399	OS26
G325	GS23	F327	FS24	B136	O406	OS26
G326	GS23	F339	FS24	B147	O405	OS26
G327	GS23	F340	FS24	B148	O409	OS26
G328	GS23	F325	FS23	B124	O367	OS25
G329	GS23	F259	FS19	B081	O089	OS06
G330	GS23	F273	FS20	B348	O352	OS24
G331	GS23	F274	FS20	B347	O351	OS24
G332	GS23	F277	FS20	B170	O398	OS26
G332	GS23	F277	FS20	B170	O356	OS24
G332	GS23	F277	FS20	B170	O357	OS24
G332	GS23	F277	FS20	B170	O358	OS24
G332	GS23	F277	FS20	B170	O359	OS24
G333	GS23	F276	FS20	B161	O386	OS26
G333	GS23	F344	FS24	B159	O400	OS26
G333	GS23	F346	FS24	B161	O386	OS26
G334	GS23	F345	FS24	B160	O385	OS26
G335	GS23	F261	FS19	B089	O097	OS07
G336	GS23	F275	FS20	B175	O348	OS24
G336	GS23	F275	FS20	B175	O421	OS26
G337	GS24	F350	FS25	B135	O387	OS26
G338	GS24	F351	FS25	B167	O403	OS26
G339	GS24	F352	FS25	B169	O397	OS26
G340	GS24	F353	FS25	B168	O414	OS26
G341	GS24	F347	FS25	B349	O353	OS24
G342	GS24	F348	FS25	B162	O179	OS14
G343	GS24	F349	FS25	B163	O180	OS14
G344	GS24	F262	FS20	B150	O401	OS26
G345	GS24	F263	FS20	B151	O407	OS26
G346	GS24	F264	FS20	B155	O412	OS26
G347	GS24	F265	FS20	B154	O411	OS26
G348	GS24	F266	FS20	B153	O410	OS26
G349	GS24	F267	FS20	B152	O402	OS26

G350	GS24	F268	FS20	B156	O413	OS26
G351	GS24	F354	FS25	B171	O417	OS26
G352	GS24	F355	FS25	B172	O418	OS26
G353	GS24	F356	FS25	B173	O419	OS26
G354	GS24	F357	FS25	B174	O420	OS26
G355	GS24	F358	FS25	B176	O422	OS26
G356	GS24	F359	FS25	B177	O423	OS26
削除					O009	OS01
削除					O010	OS01
削除					O015	OS01
削除					O016	OS01
削除					O017	OS01
削除					O018	OS01
削除	GS01	F004	FS01	B030	O036	OS03
削除				B080	O088	OS06
削除				B289	O129	OS10
削除				B290	O130	OS10
削除				B291	O131	OS10
削除				B292	O132	OS10
削除					O137	OS10
欠番					O138	OS10
欠番					O139	OS10
削除					O140	OS10
削除					O145	OS10
削除	GS02	詩で考察		B183	O159	OS12
削除				B166	O195	OS14
削除				B166	O196	OS14
削除	GS09	F105	FS09	B270	O203	OS15
削除					O210	OS16
削除					O211	OS16
削除					O221	OS17
削除					O224	OS17
削除					O225	OS17
削除					O236	OS18
削除					O237	OS18
削除				B097	O265	OS19
削除					O294	OS21
削除					O295	OS21
削除					O362	OS25

0番号順 1/4

Ver.2 番号		Ver.1 番号		ブログ 詩番号	中村氏オリジナル	
詩番号	節番号	詩番号	節番号		詩番号	節番号
G132	GS12	F133	FS12	B001	O001	OS01
G133	GS12	F134	FS12	B002	O002	OS01
G134	GS12	F135	FS12	B003	O003	OS01
G135	GS12	F136	FS12	B004	O004	OS01
G136	GS12	F137	FS12	B005	O005	OS01
G137	GS12	F138	FS12	B006	O006	OS01
G138	GS12	F139	FS12	B007	O007	OS01
G139	GS12	F140	FS12	B008	O008	OS01
削除					O009	OS01
削除					O010	OS01
G140	GS12	F141	FS12	B009	O011	OS01
G141	GS12	F142	FS12	B010	O012	OS01
G142	GS12	F143	FS12	B011	O013	OS01
G143	GS12	F144	FS12	B012	O014	OS01
削除					O015	OS01
削除					O016	OS01
削除					O017	OS01
削除					O018	OS01
G144	GS12	F145	FS12	B013	O019	OS01
G145	GS12	F146	FS12	B014	O020	OS01
G019	GS03	F021	FS03	B015	O021	OS02
G020	GS03	F022	FS03	B016	O022	OS02
G021	GS03	F023	FS03	B017	O023	OS02
G022	GS03	F024	FS03	B018	O024	OS02
G023	GS03	F025	FS03	B019	O025	OS02
G024	GS03	F026	FS03	B020	O026	OS02
G025	GS03	F027	FS03	B021	O027	OS02
G026	GS03	F028	FS03	B022	O028	OS02
G027	GS03	F029	FS03	B023	O029	OS02
G028	GS03	F030	FS03	B024	O030	OS02
G029	GS03	F031	FS03	B025	O031	OS02
G030	GS03	F032	FS03	B026	O032	OS02
G001	GS01	F001	FS01	B027	O033	OS03
G002	GS01	F002	FS01	B028	O034	OS03
G003	GS01	F003	FS01	B029	O035	OS03
削除	GS01	F004	FS01	B030	O036	OS03
G004	GS01	F005	FS01	B031	O037	OS03
G005	GS01	F006	FS01	B032	O038	OS03
G006	GS01	F007	FS01	B033	O039	OS03
G007	GS01	F008	FS01	B034	O040	OS03
G007	GS01	F009	FS01	B034	O041	OS03
G008	GS01	F010	FS01	B035	O042	OS03
G009	GS01	F011	FS01	B036	O043	OS03
G083	GS08	F085	FS08	B037	O044	OS04
G084	GS08	F086	FS08	B038	O045	OS04
G085	GS08	F087	FS08	B039	O046	OS04
G086	GS08	F088	FS08	B040	O047	OS04
G086	GS08	F088	FS08	B040	O048	OS04
G087	GS08	F089	FS08	B041	O049	OS04
G088	GS08	F090	FS08	B042	O050	OS04
G089	GS08	F091	FS08	B043	O051	OS04
G090	GS08	F092	FS08	B044	O052	OS04
G091	GS08	F093	FS08	B045	O053	OS04
G092	GS08	F094	FS08	B046	O054	OS04
G093	GS08	F095	FS08	B047	O055	OS04

G094	GS08	F096	FS08	B048	O056	OS04
G095	GS08	F097	FS08	B049	O057	OS04
G096	GS08	F098	FS08	B050	O058	OS04
G096	GS08	F098	FS08	B050	O059	OS04
G280	GS21	F223	FS18	B051	O060	OS05
G281	GS21	F224	FS18	B052	O061	OS05
G282	GS21	F225	FS18	B053	O062	OS05
G283	GS21	F226	FS18	B054	O063	OS05
G284	GS21	F227	FS18	B055	O064	OS05
G285	GS21	F228	FS18	B056	O065	OS05
G286	GS21	F229	FS18	B057	O066	OS05
G287	GS21	F230	FS18	B058	O067	OS05
G288	GS21	F231	FS18	B059	O068	OS05
G289	GS21	F232	FS18	B060	O069	OS05
G291	GS21	F234	FS18	B061	O070	OS05
G292	GS21	F235	FS18	B062	O071	OS05
G293	GS21	F236	FS18	B063	O072	OS05
G295	GS21	F238	FS18	B064	O073	OS05
G294	GS21	F237	FS18	B065	O074	OS05
G234	GS18	F302	FS22	B066	O075	OS06
G300	GS22	F242	FS19	B067	O076	OS06
G305	GS22	F247	FS19	B068	O077	OS06
G301	GS22	F243	FS19	B069	O078	OS06
G312	GS22	F254	FS19	B070	O079	OS06
G298	GS22	F239	FS19	B071	O080	OS06
G303	GS22	F245	FS19	B072	O081	OS06
G312	GS22	F254	FS19	B073	O082	OS06
G302	GS22	F244	FS19	B074	O083	OS06
G306	GS22	F248	FS19	B075	O084	OS06
G314	GS22	F256	FS19	B076	O085	OS06
G311	GS22	F253	FS19	B077	O086	OS06
G308	GS22	F250	FS19	B078	O087	OS06
削除				B080	O088	OS06
G329	GS23	F259	FS19	B081	O089	OS06
G320	GS23	F271	FS20	B082	O090	OS07
G299	GS22	F241	FS19	B083	O091	OS07
G315	GS22	F257	FS19	B084	O092	OS07
G315	GS22	F257	FS19	B084	O093	OS07
G159	GS14	F160	FS14	B085	O094	OS07
G313	GS22	F255	FS19	B087	O095	OS07
G316	GS22	F258	FS19	B088	O096	OS07
G335	GS23	F261	FS19	B089	O097	OS07
G317	GS23	F269	FS20	B091	O098	OS07
G318	GS23	F270	FS20	B090	O099	OS07
G070	GS07	F072	FS07	B226	O100	OS08
G071	GS07	F073	FS07	B227	O101	OS08
G072	GS07	F074	FS07	B228	O102	OS08
G073	GS07	F075	FS07	B229	O103	OS08
G073	GS07	F075	FS07	B229	O104	OS08
G073	GS07	F075	FS07	B229	O105	OS08
G074	GS07	F076	FS07	B230	O106	OS08
G074	GS07	F076	FS07	B230	O107	OS08
G075	GS07	F077	FS07	B231	O108	OS08
G076	GS07	F078	FS07	B232	O109	OS08
G077	GS07	F079	FS07	B233	O110	OS08
G078	GS07	F080	FS07	B234	O111	OS08
G079	GS07	F081	FS07	B235	O112	OS08

O番号順 2/4

G080	GS07	F082	FS07	B236	O113	OS08
G081	GS07	F083	FS07	B237	O114	OS08
G082	GS07	F084	FS07	B238	O115	OS08
G147	GS13	F148	FS13	B276	O116	OS09
G148	GS13	F149	FS13	B277	O117	OS09
G149	GS13	F150	FS13	B278	O118	OS09
G150	GS13	F151	FS13	B279	O119	OS09
G151	GS13	F152	FS13	B280	O120	OS09
G152	GS13	F153	FS13	B281	O121	OS09
G153	GS13	F154	FS13	B282	O122	OS09
G154	GS13	F155	FS13	B283	O123	OS09
G155	GS13	F156	FS13	B284	O124	OS09
G156	GS13	F157	FS13	B285	O125	OS09
G221	GS17	F222	FS17	B286	O126	OS09
G157	GS13	F158	FS13	B287	O127	OS09
G158	GS13	F159	FS13	B288	O128	OS09
削除				B289	O129	OS10
削除				B290	O130	OS10
削除				B291	O131	OS10
削除				B292	O132	OS10
G160	GS14	F161	FS14	B293	O133	OS10
G161	GS14	F162	FS14	B294	O134	OS10
G034	GS04	F036	FS04	B295	O135	OS10
G290	GS21	F233	FS18	B296	O136	OS10
削除					O137	OS10
欠番					O138	OS10
欠番					O139	OS10
削除					O140	OS10
G253	GS19	F303	FS23	B297	O141	OS10
G242	GS19	F304	FS23	B298	O142	OS10
G233	GS18	F260	FS19	B299	O143	OS10
G233	GS18	F260	FS19	B299	O144	OS10
削除					O145	OS10
G031	GS04	F033	FS04	B215	O146	OS11
G032	GS04	F034	FS04	B216	O147	OS11
G033	GS04	F035	FS04	B217	O148	OS11
G035	GS04	F037	FS04	B218	O149	OS11
G036	GS04	F038	FS04	B219	O150	OS11
G037	GS04	F039	FS04	B220	O151	OS11
G038	GS04	F040	FS04	B221	O152	OS11
G039	GS04	F041	FS04	B222	O153	OS11
G040	GS04	F042	FS04	B223	O154	OS11
G041	GS04	F043	FS04	B224	O155	OS11
G042	GS04	F044	FS04	B225	O156	OS11
G011	GS02	F013	FS02	B179	O157	OS12
G014	GS02	F016	FS02	B182	O158	OS12
削除	GS02	詩で考察		B183	O159	OS12
G010	GS02	F012	FS02	B178	O160	OS12
G012	GS02	F014	FS02	B180	O161	OS12
G013	GS02	F015	FS02	B181	O162	OS12
G016	GS02	F018	FS02	B185	O163	OS12
G015	GS02	F017	FS02	B184	O164	OS12
G017	GS02	F019	FS02	B186	O165	OS12
G018	GS02	F020	FS02	B187	O166	OS12
G043	GS05	F045	FS05	B203	O167	OS13
G044	GS05	F046	FS05	B204	O168	OS13
G045	GS05	F047	FS05	B205	O169	OS13

G046	GS05	F048	FS05	B206	O170	OS13
G047	GS05	F049	FS05	B207	O171	OS13
G048	GS05	F050	FS05	B208	O172	OS13
G049	GS05	F051	FS05	B209	O173	OS13
G050	GS05	F052	FS05	B210	O174	OS13
G051	GS05	F053	FS05	B211	O175	OS13
G052	GS05	F054	FS05	B212	O176	OS13
G053	GS05	F055	FS05	B213	O177	OS13
G054	GS05	F056	FS05	B214	O178	OS13
G342	GS24	F348	FS25	B162	O179	OS14
G343	GS24	F349	FS25	B163	O180	OS14
G265	GS19	F322	FS23	-	O181	OS14
G309	GS22	F251	FS19	B164	O182	OS14
G222	GS18	F291	FS22	B126	O183	OS14
G296	GS22	F293	FS22	B128	O184	OS14
G223	GS18	F292	FS22	B127	O185	OS14
G307	GS22	F249	FS19	B079	O186	OS14
G238	GS18	F295	FS22	B129	O187	OS14
G226	GS18	F297	FS22	B131	O188	OS14
G227	GS18	F298	FS22	B132	O189	OS14
G228	GS18	F299	FS22	B134	O190	OS14
G228	GS18	F299	FS22	B134	O191	OS14
G229	GS18	F300	FS22	B133	O192	OS14
G310	GS22	F252	FS19	B165	O193	OS14
G231	GS18	F296	FS22	B130	O194	OS14
削除				B166	O195	OS14
削除				B166	O196	OS14
G097	GS09	F099	FS09	B266	O197	OS15
G098	GS09	F100	FS09	B267	O198	OS15
G099	GS09	F101	FS09	B268	O199	OS15
G102	GS09	削除より	FS09	-	O200	OS15
G103	GS09	削除より	FS09	-	O201	OS15
G104	GS09	F104	FS09	B269	O202	OS15
削除	GS09	F105	FS09	B270	O203	OS15
G105	GS09	F106	FS09	B271	O204	OS15
G106	GS09	F107	FS09	B272	O205	OS15
G107	GS09	F108	FS09	B273	O206	OS15
G108	GS09	F109	FS09	B274	O207	OS15
G109	GS09	F110	FS09	B275	O208	OS15
G146	GS13	F147	FS13	B350	O209	OS16
削除					O210	OS16
削除					O211	OS16
G194	GS16	F195	FS16	B351	O212	OS16
G195	GS16	F196	FS16	B352	O212	OS16
G194	GS16	F195	FS16	B351	O213	OS16
G195	GS16	F196	FS16	B351	O213	OS16
G194	GS16	F195	FS16	B351	O214	OS16
G195	GS16	F196	FS16	B351	O214	OS16
G194	GS16	F195	FS16	B351	O215	OS16
G195	GS16	F196	FS16	B351	O215	OS16
G194	GS16	F195	FS16	B351	O216	OS16
G195	GS16	F196	FS16	B351	O216	OS16
G116	GS10	F117	FS10	B353	O217	OS16
G209	GS16	F210	FS16	B354	O218	OS16
G100	GS09	F102	FS09	B355	O219	OS16
G101	GS09	F103	FS09	B356	O220	OS16
削除					O221	OS17

O番号順 3/4

G159	GS14	F160	FS14	B300	O222	OS17
G162	GS14	F163	FS14	B301	O223	OS17
削除					O224	OS17
削除					O225	OS17
G188	GS15	F189	FS15	B302	O226	OS17
G164	GS14	F165	FS14	B304	O227	OS17
G165	GS14	F166	FS14	B305	O228	OS17
G166	GS14	F167	FS14	B306	O229	OS17
G167	GS14	F168	FS14	B307	O230	OS17
G168	GS14	F169	FS14	B308	O231	OS17
G169	GS14	F170	FS14	B309	O232	OS17
G170	GS14	F171	FS14	B310	O233	OS17
G171	GS14	F172	FS14	B311	O234	OS17
G172	GS15	F173	FS15	B312	O235	OS18
削除					O236	OS18
削除					O237	OS18
G173	GS15	F174	FS15	B313	O238	OS18
G174	GS15	F175	FS15	B314	O239	OS18
G175	GS15	F176	FS15	B315	O240	OS18
G176	GS15	F177	FS15	B316	O241	OS18
G177	GS15	F178	FS15	B317	O242	OS18
G178	GS15	F179	FS15	B318	O243	OS18
G179	GS15	F180	FS15	B319	O244	OS18
G180	GS15	F181	FS15	B320	O245	OS18
G181	GS15	F182	FS15	B321	O246	OS18
G181	GS15	F182	FS15	B321	O247	OS18
G182	GS15	F183	FS15	B322	O248	OS18
G183	GS15	F184	FS15	B323	O249	OS18
G184	GS15	F185	FS15	B324	O250	OS18
G185	GS15	F186	FS15	B325	O251	OS18
G186	GS15	F187	FS15	B326	O252	OS18
G187	GS15	F188	FS15	B327	O253	OS18
G189	GS15	F190	FS15	B328	O254	OS18
G190	GS15	F191	FS15	B329	O255	OS18
G271	GS20	F278	FS21	B090	O256	OS19
G271	GS20	F278	FS21	B090	O257	OS19
G272	GS20	F279	FS21	B091	O258	OS19
G273	GS20	F280	FS21	B092	O259	OS19
G274	GS20	F281	FS21	B093	O260	OS19
G275	GS20	F282	FS21	B094	O261	OS19
G276	GS20	F283	FS21	B095	O262	OS19
G276	GS20	F283	FS21	B095	O263	OS19
G252	GS19	F284	FS21	B096	O264	OS19
削除				B097	O265	OS19
G243	GS19	F285	FS21	B098	O266	OS19
G244	GS19	F286	FS21	B099	O267	OS19
G277	GS20	F287	FS21	B100	O268	OS19
G278	GS20	F288	FS21	B100	O268	OS19
G277	GS20	F287	FS21	B101	O269	OS19
G278	GS20	F288	FS21	B101	O269	OS19
G279	GS20	F289	FS21	B102	O270	OS19
G258	GS19	F290	FS21	B103	O271	OS19
G258	GS19	F290	FS21	B103	O272	OS19
G055	GS06	F057	FS06	B188	O273	OS20
G056	GS06	F058	FS06	B189	O274	OS20
G057	GS06	F059	FS06	B190	O275	OS20
G058	GS06	F060	FS06	B191	O276	OS20

G059	GS06	F061	FS06	B192	O277	OS20
G059	GS06	F061	FS06	B192	O278	OS20
G059	GS06	F061	FS06	B192	O279	OS20
G060	GS06	F062	FS06	B193	O280	OS20
G061	GS06	F063	FS06	B194	O281	OS20
G062	GS06	F064	FS06	B195	O282	OS20
G063	GS06	F065	FS06	B196	O283	OS20
G064	GS06	F066	FS06	B197	O284	OS20
G065	GS06	F067	FS06	B198	O285	OS20
G066	GS06	F068	FS06	B199	O286	OS20
G067	GS06	F069	FS06	B200	O287	OS20
G068	GS06	F070	FS06	B201	O288	OS20
G069	GS06	F071	FS06	B202	O289	OS20
G110	GS10	F111	FS10	B239	O290	OS21
G111	GS10	F112	FS10	B240	O291	OS21
G112	GS10	F113	FS10	B241	O292	OS21
G113	GS10	F114	FS10	B242	O293	OS21
削除					O294	OS21
削除					O295	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B260	O296	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B261	O297	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B262	O298	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B263	O299	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B264	O300	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B265	O301	OS21
G114	GS10	F115	FS10	B243	O302	OS21
G117	GS10	F118	FS10	B244	O303	OS21
G118	GS10	F119	FS10	B245	O304	OS21
G115	GS10	F116	FS10	B246	O305	OS21
G211	GS17	F212	FS17	B357	O306	OS22
G248	GS19	F334	FS24	B367	O307	OS22
G260	GS19	F318	FS23	B368	O308	OS22
G212	GS17	F213	FS17	B358	O309	OS22
G213	GS17	F214	FS17	B359	O310	OS22
G261	GS19	F319	FS23	B369	O311	OS22
G214	GS17	F215	FS17	B360	O312	OS22
G262	GS19	F320	FS23	B370	O313	OS22
G215	GS17	F216	FS17	B361	O314	OS22
G216	GS17	F217	FS17	B362	O315	OS22
G217	GS17	F218	FS17	B363	O316	OS22
G218	GS17	F219	FS17	B364	O317	OS22
G219	GS17	F220	FS17	B365	O318	OS22
G220	GS17	F221	FS17	B366	O319	OS22
G119	GS11	F120	FS11	B247	O320	OS23
G120	GS11	F121	FS11	B248	O321	OS23
G121	GS11	F122	FS11	B249	O322	OS23
G121	GS11	F122	FS11	B249	O323	OS23
G122	GS11	F123	FS11	B250	O324	OS23
G123	GS11	F124	FS11	B251	O325	OS23
G124	GS11	F125	FS11	B252	O326	OS23
G125	GS11	F126	FS11	B253	O327	OS23
G126	GS11	F127	FS11	B254	O328	OS23
G127	GS11	F128	FS11	B255	O329	OS23
G128	GS11	F129	FS11	B256	O330	OS23
G129	GS11	F130	FS11	B257	O331	OS23
G130	GS11	F131	FS11	B258	O332	OS23
G131	GS11	F132	FS11	B259	O333	OS23

第2部 詩文一覽

第1章 さまざまな事

GS 1 節 心と意

G001 心は動揺し、ざわめき、護り難く、制し難い。賢い人はこれを直くする――弓師が矢の弦を直くするように。

G002 水の中（霊界）の住処から引き出されて陸「おか」の上（この世）に投げ捨てられた魚のように、この心は、悪魔の支配から逃れようとしてもがきまわる。

G003 意は、顕在的で、軽々（かるがる）とざわめき、欲するがままにおもむき捉え難い。

心は、この顕在的な意と、極めて見難く微妙な潜在部から成る。

G004 心は独りで動きまわり、遠くに行ってしまう顕在部がある。また、形体なく、胸の奥の洞窟（心臓）にひそんでいる潜在部もある。これら心を整える人々は、死の束縛から逃れるであろう。

G005 信ずるところと念いが汚されているならば、正しい真理が見極められない。よって心の安楽（安住）は得られず、さどりの智慧は湧いてこない。

G006 心が煩惱に汚されず、念いが乱れず、善悪のはからいを捨てるに至った覚醒者は、何も恐れることが無い。

G007 ああ、この身はまもなく地上によこたわるであろう。魂は抜け、水瓶の破片のように無用になる。身体は死に対しこのように脆いものだと知れよ。

そして、心を城郭のように（堅固に）安立させ、智慧の武器をもって悪魔と戦え。勝ち得たものを妄執することなく守りぬけ。
G008 憎む人が憎む人にたいし、怨む人が怨む人にたいして、どのようなことをしようとも、邪なことをめざしている心はそれよりもひどいことをする。

G009 母も父もその他親族がしてくれるよりもさらに優れたことを、正しく向けられた心がしてくれる。

GS 2 節 己 (おのれ)

G010 己(霊)こそ(吾の)心の主である。他人がどうして(吾の)心の主であろうか？

心をよく整えたならば、得難き主である

己(霊)を得る。

G011 もしも人が己(霊)を愛しいものと知るならば、心(吾)をよく守れ。賢い人は、怠らずに励み、常に心を慎み整え目ざめて
いるようにせよ。

G012 心が作り、心から生じ、心から起った悪が知慧悪しき人を打ちくたく。 — 金剛石が宝石を打ちくたくように。

G013 愚かな人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、己(霊)に対してなす。 — 蔓草(ツルクサ)が沙羅の木にまといつくよ
うに。

G014 先ず(吾の)心を正しく整え心が治ってから、次いで他人に教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことが無いであ
ろう。

G015 愚かにも、悪い見解にもとづいて、真理に従って生きるブツダ・真人たちの教えを罵るならば、その人は悪い報いが熟する。
— カッタカという草は果実が熟すると自分自身が滅びてしまうように。

G016 善からぬこと、己のためにならぬことは、なし易い。ためになること、善いことは、実に極めてなし難い。

G017 人が悪をなすならば心が汚れ、人が悪をなさないならば心が浄まる。浄いのも浄くないのも各人の人のありようである。人
は他人を浄めることができない。

G018 たとい他人にとっていかに大事であろうとも、他人の目的のために(吾の)心のつとめをすて去ってはならぬ。己の目的を熟
知して、(吾の)心のつとめに専念せよ。

GS 3 節 はげみ

G019 努め励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境地である。

努め励む人々は死ぬことがない。怠りなまける人々は、死者のごとくである。

G020 このようにはつきりと知って、努め励むことをよく知る人々は、努め励むことを喜び、覚醒者たちの境地を楽しむ。

G021 真理に従う道を進むよう努め励み、堪え忍ぶこと強く、思慮ある人々は、涅槃（悟りによる解脱）に達する。
これは無上の幸せである。

G022 意（思い）つつましく、行いは清く、気をつけて行動し、心は奮起し、法（真理）にしたがって生き、努め励む人は、名声が高まる。

G023 思慮ある人は、怠らず、努め励み、心を整え、妄執と憎悪と迷妄に打ち勝て。それにより、欲望による激流に押し流されない心の拠り所（己）を鎮（しず）めまつれ。

G024 智慧乏しき愚かな人々は怠惰になじむ。

しかし賢い人は、最上の財宝（たから）を守るように、努め励むのを守る

G025 怠たらず、執着と歓楽に親まらずに、思念をこらす者は、大いなる楽しみを得る。

G026 人は怠惰を退け、努め励むことにより、智慧を得て、憂いをなくす。

山上にいる人が地上の人々を見下ろすように、その人は憂いを持つ他の多くの人々を、自分とは異なると、はっきりと見極める。

G027 怠りなまけている人々の中で努め励み、そして、眠っている人々の中で目覚めている賢い人は、疾く走る馬のようなものである。

G028 努め励む事が生の旗印で、放逸なることは死の旗印である。

G029 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、微細なものでも粗大なものでも心のわずらいを、焼きつくしながら生活する。

G030 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、墮落するはずはなく、すでに涅槃（悟りによる解脱）の近くにいます。

GS 4 節 老うるや

G031 何の笑いがあろうか。何の喜びがあろうか？ — 世間は常に燃え立っているのに —。汝らは暗黒に覆われている。どうして燈明を求めないのか？

G032 見よ、粉飾された形体を！（それは）傷だらけの身体であって、いろいろのものが集まっただけである。病いに悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく、安住していない。

G033 この容色は衰えはてた。病いの巢であり、脆くも滅びる。腐敗のかたまりで、やぶれてしまう。生命は死に帰着する。

G034 牛飼いが棒をもって牛どもを牧場に駆り立てるように、老いと死とは生きとし生けるものどもの寿命を駆り立てる。

G035 秋に投げすてられた瓢箪（ひょうたん）のような、鳩の色のようなこの白い骨を見ては、なんの快さがあるのか？

G036 骨で城がつくられ、それに肉と血とが塗ってあり、老いと死と高ぶりとごまかしとがおさめられている。

G037 いても麗しい国王の車も朽ちてしまう。身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いに道理を説き聞かせる。

G038 学ぶことの少ない人は、豚のように老いる。その人の肉は増えるが、その人の知恵は増えない。

G039 わたくしは幾多の生涯にわたって生死の流れを無益に経めぐって来た、—家屋の作者（ツクリテ）をさがしもとめて。—あの生涯、この生涯とくりかえすのは苦しいことである。

G040 家屋の作者よ！ 汝の正体は見られてしまった。心は、妄執を滅ぼし尽くし（身体の）形成作用を離れたので、汝（心）はもはや家屋を作ることではないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまった。

G041 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、魚のいなくなった池にいる白鷺のように、痩せて滅びてしまう。

G042 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、昔のことばかり思い出して、かたくなな心となって、壊れた弓のように横たわる。

GS 5 節 世の中

G043 下劣なしかたになじむな。怠けてふわふわと暮らすな。邪な見解をいだくな。世俗のわずらいをふやすな。

G044 奮起（フルイタ）てよ。怠けてはならぬ。道理に従った善い行ないを實行せよ。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、穏やかに過ごす。

G045 道理に従った善い行ないを實行せよ。道理に従わない悪い行ないを實行するな。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、穏やかに過ごす。

G046 世の中の実相と泡沫（うたかた）を見よ。泡沫はかげろうのごとしと見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王もかれを見ることがない。

G047 さあ、この世の中を見よ。王者の車のように美しい部分が目立つ。愚かな人はそこに耽溺（たんでき）するが、賢い人はそれを妄執しない。

G048 以前は怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。―あたかも、雲を離れた月のように。

G049 以前には悪い行ないをした人でも、のちに善によってつぐなうならば、その人はこの世の中を照らす。―あたかも、雲を離れた月のように。

G050 この世の中は暗黒である。ここではつきりと理（コトワリ）の実相を見分ける人は少ない。―網から脱れた鳥が少ないように。

G051 渡鳥は日中に往来を繰り返し、通力によって動く者は虚空の道を回り、正しい心を持つ真人は悪魔とその軍勢にうち勝って因縁からむこの世から放（はな）れブツダとなる。

G052 唯一無二の真理を逸脱し、偽りを語り、涅槃（悟りによる解脱）の世界を無視している人は、どんな悪でもなす。

G053 愚かな人々は分かちあうことをたたえない。しかし賢い人々は分かちあうことを喜ぶ。

G054 大地の唯一の支配者となるよりも、全世界の主権者となるよりも、真人となるほうがすぐれている。

G5 6 節道

G055 人の道のうちでは、仏道の八正道が最もすぐれている。

もろもろの真理のうちでは、四諦（苦・集・滅・道）が最上である。

もろもろの徳の中では、情欲から離れることが最もすぐれている。

人々のうちでは、ブツダ（＝眼ある人）が最もすぐれている

G056 これこそ道である。（真理を）見るはたらきを清めるためには、この他に道は無い。汝らはこの道を実践せよ。これこそ悪魔を迷わして（打ちひしぐ）ものである。

G057 汝らがこの道を行くならば、苦しみをなくすることができよう。（棘が肉に刺さったので）矢を抜いて癒す方法を知って、わたくしは汝らにこの道を説いたのだ。

G058 もろもろの修行完成者は（ただ）教え（この道）を説くだけである。汝らはこの道をひたすら努めよ。心を整えこの道を歩む者は、心治まり悪魔の束縛から脱れるであろう。

G059 「この世のほとんどが色（我）により形成されている。

これらは全て無常で（諸行無常）、苦しみの素（もと）へと変化する（一切皆苦）。しかし、法（真理）は、決して色や我を含むことはない（諸法非我）。」
と明らかな知恵をもってこの世を観るときに、人は苦しみから遠ざかり放（はな）れる。
これこそ人が清らかになる道である。

G060 起きるべき時に起きないで、若くて力があるのに怠りなまけていて、意志も思考も薄弱で、怠惰で物憂い人は、明らかな知恵によって道を見出すことがない。

G061 言葉を慎しみ、意を落ち着けて慎しみ、身に悪を為してはならない。これらの三つの行ないの路を淨くたもつならば、み仏の説きたもうた道を克ち得るであろう。

G062 実に心が統一されたならば、豊かな知恵が生じる。心が統一されないならば、豊かな知恵がほろびる。生じることとほろびることとの、この二種の道を知って、豊かな知恵が生ずるように心を整えよ

G063 一つの樹を伐るのではなくて、（煩惱の）林を伐れ。危険は林から生じる。（煩惱の）林とその下生えとを切って、林から脱れた者となれ。修行僧らよ

G064 たとい僅かであろうとも、男女の淫らな欲望が断たれないあいだは、その人の心は束縛されている。

G065 心と意の妄執を断ち切れ、一池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を選び進め。めでたく行きし人であるみ仏は涅槃（悟りによる解脱）への道を説きたもうた。

G066 「わたしは雨期にはここに住もう。冬と夏とはここに住もう」と愚者はこのようにくよくよと慮って、死が迫って来るのに気がつかない。

G067 子どもや家畜のことに気を奪われて心がそれに執著している人を、死はさらって行く。――眠っている村を大洪水が押し流すように。

G068 子も救うことができない。父も親戚もまた救うことができない。死に捉えられた者を、親族も救い得る能力がない。

G069 賢い人はこの道理を知って、教えをまもり心を清め、涅槃（悟りによる解脱）に至る仏道をすみやかに進め。

GS 7 節 千といふ数にちなんで

G070 無益な語句を千たび語るよりも、聞いて心の静まる有益な語句を一つ聞く方が優れている。

G071 無益な語句よりなる詩が千もあっても、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

G072 無益な語句よりなる詩を百も唱えるよりも、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

G073 常につつしみ、心を整え、心が治ることは、愚かな自己にうち克つ事である。

愚かな自己に克った者の勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンダルヴァ（天の伎楽神）も、悪魔も、梵天もなす事ができない。唯一愚かな自己に克つ者は最上の勝利者となる。

G074 百年の間、月々千回ずつ祭祀（まつり）を営む人や、林の中で祭祀（まつり）の火につかえる人々がいる。もし、それらの人々が心が治まり愚かな自己を修養した人（ブツダや真人）を尊び供養するなら、たとえその供養がつかの間であっても、ただ、百年祭祀を営むだけよりも優れている。心が治まり愚かな自己を修養した人（ブツダや真人）を尊び供養することは優れている。

G075 功德を得るために、人がこの世で、一年間、神をまつり、犠牲（いけにえ）をささげ、あるいは火にささげ物をする。しかし、その全てをあわせても、ただ、行ないの正しい人々を尊ぶ真正なる祭りの方が、はるかに優れている。

G076 人が心が治まり愚かな自己を修養した人（ブツダや真人）に常に敬礼を守れば、魂の寿命と美しさと楽しみと力が増大する。

G077 素行が悪く、心が乱れていて百年生きるよりは、徳行あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

G078 愚かに迷い、心の乱れている人が百年生きるよりは、知恵あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

G079 怠りなまけて、気力もなく百年生きるよりは、堅固につとめ励んで一日生きる方が優れている。

G080 物事が興り消え失せる因果を見極めずに百年生きるよりも、この因果を見極めて一日生きる方が優れている。

G081 心が不死であるのを見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

G082 四諦の真理を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

G58 節花にちなんで

G083 だれ（どの魂）がこの大地（心）を正しく治めるであろうか？

だれが閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを正しく治めるであろうか？

わざいに巧みな人が花を摘むように、善く説かれた真理のことはを摘み集めるのはだれであろうか？

G084 学び努める人こそ、この大地（心）を正しく治め、閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを正しく治めるであろう。

わざいに巧みな人が花を摘むように、学びつとめる人々こそ善く説かれた真理のことはを摘み集めるであろう。

G085 死に際しこの身は泡沫（うたかた）のようだと思ふであろう。だが、死ぬよりも前に 実にかげろうのようなはかないものは悪魔の花の矢と知り、これを断ち切り 悪魔に魅入られないよう生きよ。

G086 花を摘むのに夢中になっていて人を死がさらって行き、眠っている村を洪水が押し流す。

花を摘むのに夢中になっていて人が、未だ望みを果たさないうちに、死神（悪魔）が彼を征服する。

G087 蜜蜂は（花の）色香を害（そこなわず）に、汁をとって、花から飛び去る。

修行僧が村に行くときは、そのようにせよ。

G088 他人のした事としなかった事を見極めて、他人の過ちから学び、良い行ないを実行せよ。

自分のした事としなかった事を省み、愚かな自己の過失はすみやかに改めよ。

G089 うるわしく、あでやかに咲く花でも、香りの無いものがあるように、善く説かれたことばでも、それを実行しない人には実りがない。

G090 うるわしく、あでやかに咲く花で、しかも香りのあるものがあるように、善く説かれたことばも、それを実行する人には、実りがある。

G091 うず高い花を集めて多くの華鬘（はなかさざり）をつくるように、人として生まれまた死ぬべきであるならば、多くの善いことをなせ。

G092 花の香りは風に逆らっては進んで行かない。梅檀（せんたん）もタガラの花もジャスミンもみなそうである。

しかし徳のある人の香りは、風に逆らっても進んで行く。徳のある人はすべての方向に薫る。

G093 梅檀（センダン）、タガラ、青蓮華、ヴァツシキー——これら香りのあるものうちでも、徳行の香りこそ最上である。

G094 タガラ、梅檀（センダン）の香りは微かであって、大したことはない。しかし徳行のある人々の香りは最上であって、天の神々にもとどく。

G095 学び努めて、徳行を完成し、正しい智慧によって解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

G096 塵芥にも似た盲（めしい）た凡夫のあいだにあって、正しくめざめた真人は智慧により輝く。

あたかも、大道に捨てられた塵芥（ちりあくた）の山堆（やまずみ）の中から香しく麗しい蓮華が生じ輝くように。

GS 9 節 樂しき

G097 安らぎに帰した真人は、怨みをいだいている人々の間にあつて怨むこと無く大いに楽しく生きる。怨みをもっている人々の間にあつても怨むこと無く暮らす。

G098 安らぎに帰した真人は、悩める人々のあいだにあって、悩み無く大いに楽しく暮らす。

G099 安らぎに帰した真人は、貪っている人々の間にあつて患い無く貪らないで、大いに楽しく暮らす。

G100 久しく旅に出ていた人が遠方から無事に帰って来たならば、親戚・友人・親友たちは彼が帰って来たのを祝う。

G101 そのように善いことをしてこの世からあの世に行った人を善業が迎え受ける。——親族が愛する人が帰って来たのを迎え受けるように。

G102 安らぎに帰した真人は、所有にとらわれず喜びとともに、いつも楽しく生きるであろう。

G103 安らぎに帰した真人は、勝敗と怨みから放（はな）たれる。

G104 妄執に等しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、増悪に等しい不運は存在しない。

色によるかりそめの事象に等しい苦しみは存在しない。涅槃（悟りによる解脱）にまさる楽しみは存在しない。

G105 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の親族であり、涅槃（悟りによる解脱）は最上の楽しみである。

G106 一人になり心を落ち着けて、禅定により真理と知慧の味を知れば、恐れがなくなっていく。

G107 もろもろのブツダ・真人に会うのは善いことである。愚かなる者どもに会わないならば、心はつねに楽しいであろう。

G108 愚人とともに歩む人は長い道のりにわたって憂いがある。愚人と共に住むのは、常に辛いことである。――仇敵とともに住むように。賢い人と共に住むのは楽しい。――親族に出会うように。

G109 よく気をつけていて、明らかな知慧あり、学ぶところ多く、忍耐づよく、真理を護る、そのような立派なブツダ・真人に親しめよ。

GS 10 節さまざまなこと

G110 つまらぬ快樂を捨てることによって、広大なる楽しみを得ることができるのなら、賢い人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。

G111 他人を苦しめることによって自分の快樂を求める人は、愚かな人であって怨みの絆にまつわれて怨みから免れることができない。

G112 なすべきことをなおざりにし、なすべからざることをなす、遊びたわむれ放逸なる愚かな者どもには汚れが増す。

G113 人が正しく努め、身体を慎み、為すべからざることを為さず、為すべきことを常に為している賢い人々は、もろもろの心の汚れがなくなる。

G114 在家の生活は困難であり、家に住むのも難しい。なぜならば、心を同じくしない人々と共に住むのは難しいからである。

出家の生活も困難であり、それを楽しむことは難しい。出家者が策を弄して利益を求めると、苦しみに遇う。だから、出家者は、策を弄して利益を求めてはならない。

G115 修行僧は、林の中でひとり坐し臥し歩むだけの行に意味がないことを知り、常になおざりになることなく心を整えることを楽しむ。

G116 徳行と見識とをそなえ、法にしたがって生き、眞実を語り、自分のなすべきことを行なう人は、人々から愛される。

G117 信仰あり、徳行そなわり、名声と繁栄を受けている人は、いかなる地方におもむこうとも、そこで尊ばれる。

G118 善き人々は遠くにいても輝く、――雪を頂く高山のように。
善からぬ人々は近くにいても見えない、――夜陰に放たれた矢のように。

GS 11 節象

G119 戦場の象が、射られた矢にあたっても堪え忍ぶように、われらは人のそしりを忍ぼう。多くの人は実に性質(たち)が悪いからである。

G120 心がおさまり、世のそしりを忍ぶ人は、人々の中にあっても最上の人となる。馴らされた象が、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなり、最上の象となるように。

G121 馴らされた騾馬は良い。インダス河のほとりの血統よき馬も良い。クンジャラという名の大きな象も良い。しかし心が治まった人は、これらよりもすぐれている。なぜならば、これらの乗物(身分、血統や財)によつて、未到の地(涅槃)に行くことはできない。そこへは、心を整え心が治まった人がおもむく。

G122 「財を守る者」という汚れに染まった心は、いかんとも制し難く、かたくなに真理を拒む。この心は、情欲を慕っている。

あたかも、捕らえられても、一口の食物も食わず、こめかみから液汁をしたたらせて強暴になっている発情期の象が象の林を慕うように。

G123 大食いをして、眠りをこのみ、ころげまわって寝て、まどろんでいる愚鈍な人は、大きな豚のように糧を食べて肥り、くりかえし母胎に入つて(迷いの生存をつづける)。

G124 この心は、――以前には愚かな自己にしたがい――望むがままに、欲するがままに、快きがままに、さすらっていた。今やわたくしはその心をすっかり抑制しよう、――象使いが鉤をもって、発情期に狂う象を全くおさえつけるように。

G125 心は泥沼に落ち込んだ象のようである。

だから、努め励むのを楽しめ。おのれの心を護れ。愚かな自己を難処から救い出せ。

G126 もしも思慮深く聡明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができれば、あらゆる危険困難に打ち克つて、こころ喜び、念いをおちつけて、ともに歩め。

G127 しかし、もしも思慮深く聡明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができないならば、国を捨てた国王のよ

うに、また林の中の象のように、ひとり歩め。

G128 愚かな者を道伴れとするな。それなら独りで行くほうがよい。
悪いことをするな。

— 求めるところは少なくあれ。
— 林の中にいる象のように。

G129 (大きかろうとも、小さかろうとも)、どんな果報にも満足するのは楽しい。
善いことをしておけば、命の終るときに楽しい。
(悪いことをしなかったので)、あらゆる苦しみ(の報い)を除くことは楽しい。

G130 世に父を敬うことは楽しい。また母を敬うことは楽しい。世にブツダや真人を敬うことは楽しい。天下に正しい道があるのは楽しい。

G131 老いた日に至るまで憤みをたもつことは楽しい。信仰が確立していることは楽しい。明らかな知恵を体得することは楽しい。もろもろの悪事をなさないことは楽しい。

GS 12 節ひと組ずつ

G132 ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によって作り出される。もしも、汚れた心で話したり行なったりするならば、苦しみはその人に付き従う。

— 車をひく(牛)の足跡に車輪がついてゆくように

G133 ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によって作り出される。もしも清らかな心で話したり行なったりするならば、福樂はその人に付き従う。

— 影がそのからだから離れないように。

G134 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝った。彼はわれから強奪した。」という思いを抱く人には、怨みはついに息(や)むことがない。

G135 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝った。彼はわれから強奪した。」という思いを抱かない人には、ついに怨みが息(や)む。

G136 この世においては、怨みによって怨みに報いても、怨みが息（や）むことはない。怨みを離れ愛をもってこそ怨みが息（や）む。これは永遠の真理である。

G137 私は常に死を覚悟している。

この覚悟を普通の人々は知らない。

しかし、（この）覚悟をした人は、（この世に常住する）争いから放たれる。

G138 この世のものを浄らかだと思ひなして暮らし、（五感の）感官を抑制せず、食事の節度を知らず、怠けて努めない者は、悪魔にうちひしがれる。

― 弱い樹木が風に倒されるように。

G139 この世のものを不浄であると思ひなして暮らし、（五感の）感官をよく抑制し、食事の節度を知り、信念あり、努め励む者は、悪魔にうちひしがれない。

― 岩山が風にゆるがないように。

G140 まことではないものを、まことであると見なし、まことではないと見なす人々は、あやまった思いにとらわれて、ついに真実（まこと）に達しない。

G141 まことであるものを、まことであると知り、まことではないものを、まことではないと見なす人は、正しい思いにしたがつて、ついに真実に達する。

G142 屋根を粗雑に葺いてある家には雨が漏れ入るように、心を修養していないならば、煩惱が心に侵入する。

G143 屋根をよく葺いてある家には雨の漏れ入ることがないように、心をよく修養してあるならば、煩惱が侵入することはない。

G144 たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。かれは道を実践する人にはならない。

G145 たとえためになることを少ししか語らないにしても、

法にしたがつて正しく実践するように、

妄執と憎悪と迷妄と疑惑と慢心を離れるように、

常に気をつけている人は、心を整える人であり、道を実践する人であり、心がしずまりおさまる。

第2節 さまざまな悪

GS 13 節 悪

G146 道に違(タゴ)うたことになじみ、道に順(シタガ)ったことにいそしまず、目的を捨てて快いことだけを取る人は、みずからの道に沿って進む者を羨むに至るであろう。

G147 善をなすのを急げ。悪から心を退けよ。善をなすのにのろのろしたら、心は悪事をたのしむ。

G148 人がもしも悪いことをしたならば、それを繰り返すな。悪事を心がけるな。悪が積み重なるのは苦しみである。

G149 人がもしも善いことをしたならば、それを繰り返し返せ。善いことを心がけよ。善いことが積み重なるのは楽しみである。

G150 まだ悪い報いが熟さない間は、悪人でも幸運に遭うことがある。しかし悪の報いが熟したときは、悪人は災いに遭う。

G151 まだ善い報いが熟さない間は、善人でも災いに遭うことがある。しかし善の果報が熟したときは、善人は幸福(サイワイ)に遭う。

G152 「その報いは私には来ないであろう」と思って、悪を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされるのである。愚かな者は、水を少しずつでも集めるように悪を積むならば、やがて災いに満たされる。

G153 「その報いはわたしには来ないであろう」と思って、善を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされる。気をつけている人は、水を少しずつでも集めるように善を積むならば、やがて福德に満たされる。

G154 同行する仲間が少ないのに多くの財を運ばねばならぬ商人が、危険な道を避けるように、また生きたいと願う人が毒を避けるように、人はもろもろの悪を避けよ。

G155 もしも手に傷が無いならば、その人は手で毒をとり去ることもできるであろう。傷の無い人に、毒は及ばない。悪をなさない人には、悪の及ぶことがない。

G156 汚れの無い人、清くて咎のない人をそこなう者がいるならば、その災いは、かえってその浅はかな人に至る。風にさからって細かい塵を投げると、(その人にもどって来る)ように。

G157 大空の中においても、大海の中においても、山の中の奥深いところに入っても、およそ世界のどこにおいても、悪業から脱れることのできる場所は無い。

G158 大空の中においても、大海の中においても、山の中の洞窟に入っても、およそ世界のどこにおいても、死の脅威のない場所は無い。

GS 14 節 怒り

G159 御者が馬をよく馴らすように、おのが感官の高ぶりを静め、怒りの汚れをなくせ。

走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人―その人をわれは【御者】とよぶ。多くの人はずただ手綱を手にしているだけである。

G160 荒々しい言葉を言うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだ言葉は苦痛である。報復が汝の身に至るであろう。

G161 壊れた鐘のように、声を荒げないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。

G162 怒りを制すことによって怒りに、

善いことによって悪いことに、

わかち合うことによって物惜しみに、

真実によって虚言の人に立ち向かわなくてはならない。

G163 アトウラたちは、お釈迦様に帰依した三人の長老に教えを請い求めましたが、十分に納得出来る教えを示されませんでした。彼らは不満を抱いて、ついに、お釈迦様の元を訪ね、今までの経緯を述べて、教えを請いました。そのアトウラたちにお釈迦様は、次のように語られました。

G164 アトウラよ。これは昔にも言うことであり、いまに始まることでもない。沈黙している者も非難され、多く語る者も非難され、すこしだけ語る者も非難される。世に非難されない者はいない。

G165 ただ誹られるだけの人、またただ褒められるだけの人は、過去にもいなかったし、未来にもいないであろう、現在にもいない。

G166 もしも賢い人が日に日に考察して、「この人は賢明であり、行いに欠点がなく、知恵と徳行とを身にそなえている。」と行って称讚するならば、

G167 その人を誰が非難するのか？ かれはジャンブーナダ河から得られる黄金でつくった金貨のようなものである。神々もかれを称讚する。梵天でさえもかれを称讚する。非難するものは愚かな人ばかりである。

G168 身体がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。身体について慎んでおれ。身体による悪い行いをやめよ。

G169 言葉がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。言葉について慎んでおれ。言葉による悪い行いをやめよ。
G170 意がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。意について慎んでおれ。意による悪い行いをやめよ。
G171 落ち着いて思慮ある人は、いかなる時でも、身を慎み、ことばを慎み、意を慎しむ。このように彼らは実によく己れをまもっている。

GS 15 節 汚れ

G172 汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝には資糧（カテ）さえも存在しない。
G173 だから、心のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをはらい、罪過がなければ、汝はもはや生と老いとに近づかないであろう。
G174 聡明な人は順次に少しずつ、一刹那ごとに、心の汚れを除くべし、――鍛冶工が銀の汚れを除くように。
G175 鉄から起った錆が、それから起ったのに、鉄自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところにみちびく。
G176 読誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおざりになるならば、努め励む人が汚れる。
G177 不品行は婦女の汚れである。もの惜しみは、恵みを与える人の汚れである。悪事は、この世においてもかの世においても（つねに）汚れである。
G178 これらの汚れより、さらに根元的な汚れが、己を覆う無明である。修行僧らよ、努め励み、慎むことにより、もろもろの汚れを順次捨て、ついには無明が消滅するのを見とどけよ。
G179 恥をしらず、鳥のように厚かましく、凶々しく、人を責め、大胆で、心のよごれた者は、生活し易い。
G180 恥を知り、常に清きをもとめ、執着を離れ、慎み深く、真理を見て清く暮す者は、生活し難い。
G181 不当に生きものを殺し、虚言（イツワリ）を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯す人は、この世にお

いて心（自分）の根本（己）を掘りくずす人である。

G182 人よ。このように知れ、――慎みがないのは悪いことである。――貪り（妄執）と不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けることのないように。

G183 人は、信ずるところにしたがって、きよき喜びにしたがって、他の人へ施しをなすべきである。このような施しに満足しない人は、心の安定は得られない。

G184 この（不満の思い）を絶ち、根だやしにしたならば、昼も夜も心の安定を得る。

G185 不利な骰（サイ）の目を投げたとしても、怒りに等しい不運は存在しない。迷いに等しい網は存在しない。情欲に等しい河は存在しない。妄執に等しい火は存在しない。

G186 他人の過失は認識しやすく、自己の過失は認め難い。心の汚れた人は他人の過失を糞殻のように吹き散らす、自分の過失は、隠してしまう。――狡猾な賭博師が不利な骰（サイ）の目をかくしてしまうように。

G187 他人の過失を探し求め、つねに怒りたける人は、煩惱の汚れが増大する。かれは煩惱の汚れの消滅から遠く隔っている。

G188 人が、涅槃（悟りによる解脱）を得ようとめざし、常に目ざめているように昼も夜も学び努めるならば、もろもろの汚れは消え失せる。

G189 （魔の通力による）虚空には正しい道がなく、（仏道から外れた）外道には道はない。愚者は論と虚栄を楽しむが、修行完成者はこれら汚れの現れを楽しまない。

G190 （魔の通力による）虚空には正しい道がなく、外道には道を実践する人はいない。因縁（いんねん）によって生じた現実の事象は無常だが、み仏（ブツダ）には動揺はない。

GS 16 節 欲と執着

G191 恣（ホシイママ）のふるまいをする人には妄執が蔓草（ツルクサ）のようにはびこる。林の中で猿が果実を探し求めるように、輪廻転生し、あちこちさまよう。

G192 この世において執着のもとであるこのうずく愛欲のなすがままである人は、もろもろの憂いが増大する。――雨が降ったあと

にはビーナ草がはびこるように。

G193 この世において如何ともし難いこのうずく愛欲を断ったならば、憂いはその人から消え失せる。―水の滴が蓮華から落ちるように。

G194 欲の快樂から愛欲と妄執が生じる。欲の快樂を離れたならば、愛欲と妄執が減る。

G195 情欲と妄執から憂いが生じ、情欲と妄執から恐れが生じる。情欲と妄執を離れたならば、憂いは存しない。どうして恐れることがあろうか。

G196 さあ、皆さんに告げます。―ここに集まった皆さんに幸あれ。妄執の根（愛欲と愛執）を掘れ。

（香しい）ウシーラ根（正しい教え）を求める人が（雑草の）ビーナ草（悪魔の教え）を掘るように、また、葦が激流に碎かれるように、魔にしばしも碎かれてはならない。

G197 たとえ樹を切つても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、妄執の根源となる潜勢力（愛欲と愛執）を滅ぼさなければ、妄執による苦しみはくりかえし現われ出る。

G198 この世の中には、快いものに向って流れる激流があり、その流れは、妄執をいなく人を漂わし去る。―その流れとは、まさしく在住する様々な欲である。

G199 人の快樂を求める執着は、はびこるもので、また愛欲と愛執で潤される。実に人々は歡樂にふけり、楽しみをもとめて、生れと老衰を受ける。

G200 （情欲の）流れは至るところに流れる。（妄執の）蔓草は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知慧によってその根を断ち切れ。

G201 愛欲と愛執に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。妄執になずみ、情欲の激流に束縛され、永い間繰り返し執着しては得られない苦悩を受ける。それ故に、愚かな自己の愛欲と愛執を除き去れ。

G202 欲の林から出ていながら、また欲の林に身をゆだね、欲の林から免れていながら、また欲の林に向かって走る。その人を見よ！束縛から脱しているのに、また束縛に向かって走る。その人にはまだ愛欲が残っている。

G203 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、ブツダや真人は堅固な縛とは呼ばない。

財や寶石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、なりふりかまわず家族に惹かれること、―それが堅固な縛である、と彼らは呼ぶ。

それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。
賢い人々は、これらへの執着を続べなくてはならない。

G204 愛愛欲、愛執にならずにいる人々は、自らの妄執により激流に押し流される。――蜘蛛がみずから作った網にしたがって行くようなものである。思慮ある人々は、これを断ち切って顧みることなくすべての執着を離れ制して歩んで行く。

G205 田畑は雑草によって害（ソコナ）われ、この世の人々は、妄執、怒り、誤った見解（迷妄）、疑惑、慢心によって、害（ソコナ）われる。

G206 あれこれ考えて心が乱れ、愛欲がはげしくうづくのに、愛欲を淨らかだと見なす人には、愛執がますます増大する。この人は実に束縛の絆を堅固たらしめる。

G207 あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、常に心身の汚れ（不浄）を観察して心を整える人は、実に悪魔の束縛の絆を取り除き、断ち切るであろう。

G208 激流の中で、涅槃（悟りによる解脱）を求める賢い人は享樂に害（ソコナ）われることがない。愚かな人は享樂のために害（ソコナ）られるが、享樂を妄執するがゆえに、愚かな人は他人を害（ソコナ）うように己（おのれ）も害（ソコナ）う。

G209 言葉で説き得ないもの涅槃（悟りによる解脱）に達しようとする志を起し、意（オモイ）は満たされ、欲の激流に心の礙（サマタ）げられることのない人は、（流れを上る者）と呼ばれる。

G210 教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えの妙味はすべての味にまさり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまさる。妄執を滅ぼすことはすべての苦しみにうち勝つ。

GS 17 節 悪いところ

G211 偽りを語る人、あるいは自分でおきながら「私はしませんでした。」と言う人、――この両者は死後には等しくなる――来世では行ないの下劣な業を持った人々なのであるから。

G212 放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。――すなわち、禍をまねき、臥して楽しからず、第三に非難を受け、第四に悪しきところに墜ちる。

G213 禍をまねき、悪しきところに墜ち、相ともにおびえた男女の愉楽は少なく、王は重罰を課する。それ故に人は他人の妻になれ近づくな。

G214 その行ないがだらしなく、慎みが乱れ、清らかな行ないなるものもあやしげであるならば、大きな果報はやって来ない。

G215 悪いことをするよりは、何もしない方が良い。悪いことをすれば、後で悔いる。単に何かの行為をするよりは、善いことをする方が良い。なし終わって後で悔いがない。

G216 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られているように、そのように己を守れ。瞬時も空しく過ごすな。時を空しく過した人々は悪いところに墜ちて、苦しみ悩む。

G217 恥じなくてよいことを恥じ、恥すべきことを恥じない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

G218 恐れなくてもよいことに恐れをいだき、恐れねばならぬことに恐れをいだかない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

G219 避けねばならぬことを避けなくてもよいと思ひ、避けてはならぬ(＝必ず為さねばならぬ)ことを避けてもよいと考える人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

G220 遠ざけるべきこと(＝罪)を遠ざけるべきであると知り、遠ざけてはならぬ(＝必ず為さねばならぬ)ことを遠ざけてはならぬと考える人々は、正しい見解をいだいて、善いところにおもむく。

G221 汚れの無い人々は全き安らぎに入り輪廻を離れ、それ以外の人々は輪廻にとどまり、行いにより死後に赴く所が決まる。

第3節 さまざまな人

GS 18 節 仏弟子

G222 すべて悪しきことをなさず、善いことを行ない、心を浄めること、—これが諸のみ仏の教えである。

G223 他を罵らず、害わず、慎んで己を守り、食事に関して(適当な)量を知り、適時禪定(念定)を行ない、心に関することに努め励む。—これがもろもろのみ仏の教えである。

G224 目について、耳について、鼻について、舌について、身について、意について、言葉について慎しもう。

G225 あらゆることについて慎しめば、すべての苦しみを超える。

G226 人々は恐怖にかられて、山々、林、園、樹木、霊樹など多くのものにたよろうとする。

G227 しかしこれは安らかなよりどころではない。これは最上のよりどころではない。それらのよりどころによってはあらゆる苦惱から免（まのが）れることはできない。

G228 法（真理）とみ仏と真人（聖者）の集いを愛し敬い、四つの尊い真理を見る事によって、あらゆる苦惱から免（まのが）れることができる。

G229 この四つの尊い真理とは、（1）苦しみと（2）苦しみの成り立ちと（3）苦しみの超克（チヨウコク）と（4）苦しみの終滅（オワリ）におもむく八つの尊い道（八聖道）である。

G230 正しく覚った人（||み仏）の説かれた教えを、はつきりと学び得たなら、教示した人が、いかなる人であろうとも、その人を恭しく敬礼せよ。また、その師に頼ることなく、常に自分で考え判断する自立した心を養え。

G231 もろもろのみ仏の現われたまうのは楽しい。

正しい教えを説くのは楽しい。

つどいが和合しているのは楽しい。

和合している人々がいそしむのは楽しい。

G232 必要に応じ「法（真理）、み仏、心身」について禅定（念定）をすれば空を体現し、常に気をつけてこれを繰り返せば、覚醒し涅槃（悟りによる解脱）の境地に入る。

G233 みずから恥じて意を制し、良い馬が鞭に邪魔されないように、世の非難に邪魔されない人が、この世に誰か居るだろうか？

鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。

正しい信仰、慎み、努め、禅定により思念をこらし、真理を確かに知り、この少なからぬ苦しみを除けよ。そして、知慧と行ないを完成させよ。

G234 我の利得ばかりを求めると、心が退化する道を進む。この道はあたり一面張り巡らされ選択しやすい。しかし、繁栄と心の成長をもたらす涅槃への道もある。仏弟子はこのことわりを知って、虚栄を求めず、涅槃への道を努め励み進め。

G235 真理を喜び、真理を楽しみ、真理をよく知り分けて、真理にしたがっている者たちは、正しいことわりから墜落することがない。

G236 仏の教えを喜び、慈しみに住し、怠らずに努め励めば、悪因の形成が止み、涅槃（悟りによる解脱）に到達する。

G237 禅定（止）と智慧を得ること（観）が完成したならば、その人はよく知る人であるので、その人の束縛はすべて消え失せるであらう。

G238 天上の快樂はめでたいものだが、妄執の消滅はさらにめでたい。

GS 19 節 修行僧

G239 禅定と慎みが完成し、悪を鎮めたので、真の修行僧と呼ばれ、正しい教えのもとで出家し努め励むので、修行僧と呼ばれる。

G240 この世において明らかな智慧を求める修行僧のはじめのつとめは、
怠らず

感官に気をくばる

分限と足るを知る

慎みを守る

淨らかに生きる善い友と付き合う

ことである。

G241 愛好するものへの執着から意（オモイ）を遠ざけることは、修行僧にとって少なからずすぐれたことである。この執着する意

は心を害する妄執となるからである。

この妄執がやむにつれて、苦悩が静まる。

G242 修行僧は、身の装いはどうあらうとも、心身を整え慎しみ深い行いを実行し、生きとし生けるものに対して（不当な）暴力を用いず、心が正しくおさまらなくてはならない。

G243 他人に食を乞うからとて、それだけでは托鉢僧なのではない。汚らわしい行ないをしているならば、それは托鉢僧ではない。

G244 この世の福樂も罪惡も見極め、執着を離れ続べ、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、その人こそ托鉢僧である。

G245 自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ることができない。

G246 修行僧は、怠ることなく清く生き、自分の得たものをが少なくても、それを軽んじない。

G247 氏姓と生れによってバラモンとなる。

氏姓と生れによって修行僧となるのではない。真理と理法とをまもり涅槃（悟りによる解脱）に入りし修行僧が、真の修行僧でありバラモンとは言わない。

G248 袈裟を頭から纏っていても、性質（タチ）が悪く、つつしみのないバラモンが多い。かれら悪人は、悪いふるまいによって、悪いところに生まれる。

G249 愚かなバラモンよ。身なりだけ整えて、何になるのだ。汝は内に密林（＝汚れ）を蔵して、外側だけを飾る。

G250 またバラモンは粗末な身なりで、痩せて血管があらわれていようとも寂しい場所で一人で瞑想に専念するとも言われている。

G251 しかし、（バラモン女の）胎から生れ（バラモンの）母から生れた人をバラモンと呼ぶのである。この人が「君よ」といって呼びかける者」でも、「妄執にとらわれている者」でもバラモンである。

執着を離れ制す修行僧、—その人を吾は真の修行僧と呼び、バラモンとは呼ばない。

G252 頭を剃ったからとて、教えをまもらず、偽りを語る人は、出家した修行僧ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして出家者であろうか？

G253 裸の行も、髻に結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、蹲って動かないのも、—真理とみ仏への疑いを離れていない人を浄めることはできない

G254 修行僧が、意が浮わつくことなく、言葉をつつしみ、思慮して語り、事実と真理とを明らかにするならば、その人の説くところはやさしく甘美になる

G255 心を励まし、行いを反省せよ。修行僧よ。心を整え、正しい念いをたもてば、汝は安楽に住するであろう。

G256 修行僧よ。この舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。貪りと憎悪を断ち、ジャスミンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと憎悪を捨て去れば、汝は安らぎにおもむくであろう。

G257 五下分結の五上分結の順に理解して、これらの執着を離れ続べよ。

さらに、信、精進、念、定、慧による五つ（のはたらき）を修めよ。

そうすれば、修行僧は、五つの汚れ（貪り、憎悪、迷妄、高慢、疑惑）を超え、激流を渡った者とよばれる。

G258 私は、解脱の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけによっても、また博学によっても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによっても、得られないものである。修行僧らよ、正しい禅定により法（真理）を体得し汚れが消え失せない限りは、油断するな。

G259 修行僧よ。禅定せよ。なおざりになるな。汝の心を情欲の対象に向けるな。なおざりのゆえに鉄丸を呑むな。（灼熱した鉄丸で焼かれるときに、「これは苦しい！」といって泣き叫ぶな。

G260 法（真理）を守らず、自ら慎むことがないのに国の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがまだ。G261 茅草でも、とらえ方を誤ると、手のひらを切るように、修行僧の行も、誤っておこなうと、地獄にひきずりおろす。

G262 もしも為すべきことであるならば、それを為すべきである。それを断乎として実行せよ。行ないの乱れた修行者はいっそう多く塵をまき散らす。

G263 修行僧を打つな。修行僧は打つ人に対して怒りを放つな。修行僧を打つものには禍がある。しかしただ怒るだけの修行僧にはさらに禍がある。

G264 修行僧が念と定の修行のために、人のいない場所で心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。この修行により、個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを、徐々に正しく理解する。それにつれ、個人存在の不死のことわりを知り、それによる喜びを、彼は体得する。

G265 世間から離れた静けさの中で、念いを静め、禅定に専中している修行僧は、正しいさとりを開く。神々でさえもその人を羨む。G266 たとい年の若い修行僧でも、仏の道にいそしむならば、雲を離れた月のように、この世を照らす。

G267 修行僧よ。勇敢であれ。情欲の流れを断ち、諸の妄執を去れ。諸の現象の生成と消滅を知って、作られざるもの―法（真理）を知る者であれ。

G268 修行僧が、身も静か、語（ことば）も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享樂物を吐きすてたならば、真の修行僧とも真人とも呼ばれる。

G269 出家して修行し、この世の情欲の激流を超え、妄執の尽きた人、―その人を吾は【真の修行僧】と呼ぶ。

G270 出家して修行し、愛欲を断ち切り、愛欲の生存の尽きた人、その人を吾は【真の修行僧】と呼ぶ。

GS 20 節 道を実践する人

G271 あらあらしく軽率な裁断する人は道を実践する人ではない。法（真理）に照らして誠と誠でないものをはっきりと区別する人が法を守る道を実践する賢い人である。

G272 多く説くからとて、それゆえに賢明なのではない。心穏やかに、怨むことなく、恐れることのない人、その人こそ道を実践する賢い人である。

G273 多く説くからとて、それゆえに道を実践している人なのではない。たとえ教えを聞くことが少なくても、身をもって真理を見る人、怠って道からはずれることの無い人―その人こそ道を実践している人である。

G274 頭髪が白くなったからとて「長老」なのではない。ただ年をとっただけならば「空しく老いぼれた人」と言われる。

G275 誠あり徳あり慈しみがあって他を害せずつつしみあり心身を整え汚れを除くよう気をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

G276 嫉み、吝嗇（りんしょくヶチ）、偽りを断ち、根絶やしにし、さらに、憎しみをのぞき、聡明である人、かれこそ「端正な人」とよばれる。口先や美しい容貌では、「端正な人」とはならない。

G277 ただ沈黙しているからとて、道を実践する人と思ってはならない。そのような中には、愚かに迷い無智なる人がたくさんいる。

G278 秤を手にもっているように、いみじきものを取り、もろもろの悪を除く賢者こそ道を実践する人なのである。この世にあつて善悪の両者を（秤りにかけてはかるように）よく考える人こそ道を実践する人とよばれる。

G279（悪だからといって）他の生きものを害なうのは、聖者の道の実践ではない。生きとし生けるもの全てを害わないのが聖者の道の実践という。

GS 21 節 愚かな人

G280 眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い。

G281 旅に出て、もしも自分よりもすぐれた者か、または自分にひとしい者に出会わなかったら、むしろきっぱりと独りで行け。愚かな者を道伴（づ）れにしてはならぬ。

G282 「わたしたちには子がある。わたしには財がある。」と違って愚かな者は悩む。

しかしすでに己が自分のものではない。

ましてどうして子が自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか。

G283 もしも愚者がみずから愚であると考えれば、すなわち賢者である。愚者でありながら、しかもみずから賢者だと思ふ者こそ、「愚者」だと言われる。

G284 愚かな者は生涯賢者に仕えても、真理を知ることが無い。匙が汁の味を知ることができないように。

G285 聡明な人は瞬時（またたき）のあいだ賢者に仕えても、ただちに真理を知る。舌が汁の味をただちに知るように。

G286 あさはかな愚人どもは、己（おのれ）に対して仇敵（かたき）に対するようふるまう。悪い行いをして、苦い果実（このみ）をむすぶ。

G287 もしも或る行為をした後に、それを後悔して、顔に涙を流して泣きながら、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善くない。

G288 もしも或る行為をしたのちに、それを後悔しないで、嬉しく喜んで、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善い。

G289 愚かな者は、悪いことを行っても、その報いの現れないあいだは、それを蜜のように思いなす。しかし、その罪の報いの現れたときには、苦悩を受ける。

G290 愚かな者は、悪い行ないをしておきながら、気がつかない。しかし浅はかな愚者は自分自身のことによって悩まされる。あたかも、火がこの愚者を焼きこがすように。

G291 愚かなものは、真理をわきまえた人が得る功德と同じように、断食行により功德が得られると考える。しかし、愚者の行う行に功德はない。

G292 悪事をしても、その業は、しぼり立ての牛乳のように、すぐに固まることはない。（徐々に固まって熟する）その業は、灰に覆われた火のように、（徐々に）燃えて悩ましながら、愚者につきまとう。

G293 愚かな者に念慮（オモイ）が生じてても、ついにその人には不利なことになってしまう。その念慮はその人の好運（シアワセ）を滅ぼし、その人の頭を打ち砕く。

G294 「これは、わたしのしたことである。在家の人々も出家の人々も、ともにこのことを知れよ。およそなすべきこととなすべか

らざることについては、私の意に従え」―愚かな出家者（修行僧）はこのように思う。こうして欲求と高慢（たかぶり）とがたかまる。

G295 愚かなバラモンや修行僧は、実にそぐわぬ虚しい尊敬を得ようと願うであろう。修行僧らのあいだでは上位を得ようと、僧房にあっては権勢を得ようとし、他人の家に行つては供養を得ようと願うであろう。

GS 22 節 賢い人

G296 忍耐・堪忍は最上の苦行である。涅槃（悟りによる解脱）は最高のものであると、もろもろのみ仏は説きたまう。他人を害する人悩ます人は、賢い人ではない。

G297 実に己（守護神）は心（自分）の主（あるじ）で、帰趨（よるべ）である。故に心を整えよ。商人が良い馬を調教するように。

G298 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は心を整えよ。

G299 賢い人々は努め励みあの執着から離れ統べる。

G300 （おのが）罪過（ツミトガ）を指し示し過ちを告げてくれる聡明な人に会つたならば、その賢い人につき従え―隠してある財宝のありかを告げてくれる人につき従うように。そのような人につき従うならば、善いことがあり、悪いことは無い。

G301 悪い友と交わるな。卑しい人と交われ。善い友と交われ。尊い人と交われ。

G302 賢者は、どこにいても、執着を離れ統べるので、楽しみを欲してしゃべることは無い。楽しいことに遭（あ）つても、賢者は心の慎みを忘れず動ずることはない。

G303 一つの岩の塊りが風に揺るがないように、賢者は非難と賞賛により心が乱れることはない。

G304 その行ないが親切であれ。（何ものでも）わかち合え。善いことを実行せよ。そうすれば、喜びにみち、苦悩を減するであろう。

G305 聖者が道を説く時、その聖者を賢い人は愛し、愚かな人は疎む。

G306 自分のためにも、他人のためにも、子を望んではならぬ。財をも国をも望んではならぬ。

邪なしかたによって自己の繁栄を願うてはならぬ。
（道にかなった）行いあり、明かな知慧ある者と真理にしたがっておれ。

G307 たとえ貨幣の雨を降らすとも、愚者の妄執が満足されることはない。「愚かな楽しみは短くして後は苦となる。」と知るのが賢い人である。

G308 賢者は、悪いことがらを行わず、善いことがらを行え。愚者には楽しみ難い孤独（ひとりい）のうちにも、賢者は喜びを見出すであろう。

G309 人は、身体が死んでも魂は存在したままである。

人の身を受けることは、稀で貴重ゆえ、無駄にしてはならない。
もろもろのみ仏の出現したもうことも正しい教えを聞く機会も稀であり、人間の身を受けなくては実現し難い。

G310 尊い人（||み仏）は得がたい。その人はどこにでも生れるのではない。思慮深い人（||み仏）の生れるところは、光り輝くであろう。

G311 真理が正しく説かれたときに、真理にしたがう人々は、渡りがたい輪廻転生を超えて、涅槃（さとりによる解脱）にいたるであろう。

G312 真理を喜ぶ賢い人は、真理を聞き、正しく生活を送り心穏やかに暮らす。その人の心は、深い澄んだ湖のように穏（おだ）やかで清らかなになる。

G313 大地のように慎み深く、整った門のように分別を保ち、汚れた泥がない深い湖のように心が清らかな、そのような境地にある人には、もはや生死の世は絶たれている。

G314 人々が多いが、涅槃（さとりによる解脱）に達する人々は少ない。他の（多くの）人々は輪廻転生をさまよっている。

G315 心の汚れが消え失せ解脱するとは、空を体現してこの世の実相を認識することである。この解脱者たちの行く手は広大で測りがたい。――空飛ぶ鳥の行く手が測り難いように。

G316 空の体現によって解脱して、やすらいに帰した人――そのような人の心は穏（おだ）やかである。ことばも穏（おだ）やかである。行いも穏（おだ）やかである。

GS 23 節 真人

G317 村にせよ、荒地にせよ、低地にせよ、平地にせよ、真人の住む土地は楽しい。

G318 真人は人のいない荒れ地でも楽しい。世人の楽しまないところにおいて、愛執なき真人は楽しむであろう。かれらは快樂を求めないからである。

G319 在家者・出家者のいずれとも束縛の絆を作らず、住居にこだわらずに修行し、愛欲の少ない人、――その人を吾は真人と呼ぶ。

G320 (この世で) 正しく生きて涅槃(悟りによる解脱)に入った真人は、束縛の絆をのがれ憂いや悩みは存在しない。

G321 精神の安定統一していない人には明らかな知慧が無い。

精神の安定統一と明らかな知慧とがそなわっている人は涅槃(悟りによる解脱)に入る。

G322 身にも、言葉にも、心にも、悪い事を為さず、(この)三つについて常に慎んでいる人、――その人を吾は真人と呼ぶ。

G323 粗野ならず、ことがらをはつきりと伝える真実のことばを発し、ことばによって何人の心を害する意のない人、――その人を吾は真人と呼ぶ。

G324 罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、――その人を吾は真人と呼ぶ。

G325 敵意ある者どもの間にあつて敵意なく、暴力を用いる者ども間にあつて心おだやかに、妄執する者ども間にあつて妄執しない人、――その人を吾は真人と呼ぶ。

G326 強くあるいは弱い生きものに対して暴力を加えることなく、無益な殺生を行うことも、行わせることもない人、――その人を吾は真人と呼ぶ。

G327 この世において、長かろうと短かろうと、微細であろうとも粗大であろうとも、浄かろうとも不浄であろうとも、すべて与えられていない物を取らない人、――その人を吾は真人と呼ぶ。

G328 名称とかたちについて「わがもの」という想いが全く存在しない、何もかも無いからとて憂えることの無い人は、真人とよばれる。

G329 八正道により、心を正しくおさめ、妄執なく貪りを捨てるのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほごされている。

G330 愛欲を離れ、妄執なく、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、その人は最後の身体をたもつものであり、「大いなる知慧ある人」と呼ばれる。

G331 愛欲をなくし、汚れを滅ぼしつくした真人は、さとの究極に達した人で、生存の矢を断ち切った人となる。

G332 この世の人々は、憎悪、誤った見解、愛欲・愛執、疑惑、慢心、無明によって害われる。

憎悪、誤った見解、愛欲・愛執、疑惑、慢心を消滅させ、さらに、無明を滅ぼした真人―その人を吾はブツダと呼ぶ。

G333 慎みと禅定を完成させ、常になすべきことをなし、汚れと汚れによる身体形成の絆を消滅させ、涅槃（悟りによる解脱）に達した真人を最後の身体に達したと言う。その人を吾はブツダと呼ぶ。

G334 彼岸（カナタノキシ）もなく、此岸（コナタノキシ）もなく、恐れもなく、束縛もない真人、―その人を吾はブツダと呼ぶ。

G335 作られたもの―既存の信仰や神を軽信することなく、作られざるもの―法を知り、生死の絆が絶たれ、善悪の計らい、もろもろの情欲から離れた真人―その人を吾はブツダと呼ぶ。

G336 現在、過去、未来の全ての汚れを精算せよ。

その様な人を生存の彼岸に達したという。

その様な人は覚醒していて、もはや汚れによる生れと老いを受けることが無いであろう。

そして、現在、過去、未来の全てのものを認識するであろう。

―その真人を吾はブツダと呼ぶ。

GS 24 節 ブツダ

G337 太陽は昼にかがやき、月は夜に照し、武士は鎧を着てかがやき、真人は禅定に専念してかがやく。しかしブツダはつねに威力もて昼夜に輝く。

G338 明らかな知慧が深く、聡明で、種々の道に通達し、禅定を完成させ涅槃（悟りによる解脱）に入りし人、―その人を吾はブツダと呼ぶ。

G339 すべての束縛から放たれ、恐れることなく、執着を超越して、とらわれることの無い人、―その人を吾はブツダと呼ぶ。

G340 この障害・険道・輪廻（サマヨイ）・迷妄を超えて、渡り終わって彼岸に達し、禅定・熟考し、興奮することなく、疑惑なく、妄執することなくて、心穏やかな人、―その人を吾はブツダと呼ぶ。

G341 我はすべてに打ち勝ち、すべてを知り、あらゆることがらに關して汚されていない。すべてを捨てて、愛欲は尽きたので、こころは解脱している。みずからさとしたのであって、誰を（師と）呼ぼうか。（「その我とは何ぞや、釈迦よ、答えよ。」）

G342 ブツダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、ブツダの勝利には達しえない。ブツダの境地はひろくて涯しがない。足跡をもたないブツダを、いかなる道によって誘い得るであろうか？
(さあ、答えよ、釈迦よ。)

G343 誘うために網のようにならみつき執着をなす妄執は、ブツダにはどこにも存在しない。ブツダの境地は、ひろくて涯しがない。足跡をもたないブツダを、いかなる道によって誘い得るであろうか？
(さあ、答えよ、釈迦よ。)

G344 蓮葉の上の露のように、錐(キリ)の尖(サキ)の芥子のように、緒の情欲に汚されない人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G345 芥子粒が錐(キリ)の尖端から落ちたように、愛欲と憎悪と高ぶりと隠し立てとが脱落した人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G346 この世の禍福いずれにも妄執することなく、憂いなく、清らかな人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G347 こだわりあることなく、疑惑なく、不死の底に達した人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G348 この世でもあの世でも、妄執を抱かず、意を慎み、束縛を持たない人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G349 すでにこの世において自分の苦しみの滅びたことを知り、重荷をおろし、とらわれの無い人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G350 曇りのない月のように、清く、澄み、濁りがなくなった人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G351 人間の絆を越え、天界の絆を越え、すべての絆を越えた人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G352 【快樂】と【不快】にとらわれることなく、清らかに涼しく、苦樂にうち勝った英雄、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G353 生きとし生ける者の生死をすべて知り、妄執なく、良く生きし人、覚った人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G354 神々も天の伎樂神(ガンダルヴァ)たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G355 牡牛のように雄々しく、気高く、英雄・勝利者・汚れの無い人・解脱者—その人を吾はブツダと呼ぶ。

G356 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至って、直観智を完成した聖者、完成すべきことをすべて完成した人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

第3部 再考「真理のことば」

記述方法の説明

- 「詩番号」の行では、G番号(F番号、最終評価、O番号、オリジナル章番号)を書き記しました。
 - G番号：再考「真理のことば」ver.2(本書)中の詩番号
 - GS番号：再考「真理のことば」ver.2(本書)中の節番号
 - F番号：再考「真理のことば」ver.1(前書)中の詩番号
 - O番号：中村元氏著「真理のことば」中の詩番号
 - OS番号：中村元氏著「真理のことば」中の章番号
- 最終評価は主観的なもので、基準は下記の通りです。
 - A：全面もしくはほぼ受け入れ
 - B：部分的書直し
 - C：大幅書直し
- 「F番号」、「F番号」、「元詩」の行には、それぞれの詩を書き記します。

第1章 さまざまな事

「心、己、自己、自分」などが、定義も曖昧に散りばめられていて、全体にはっきりしない詩になっているのが現状です。中村氏の現代語への訳出は古いものに対してかなり忠実になされていると思われまますので、この辺りの定義があやふやであるのは残念ながらかなり昔からだと思われまます。「付録1 魂と脳と守護霊」と「付録2 「心を整える」と「心が治る」と「心を慎む」についての考察」を参照にしながら、詩文を読んでください。

詩は、全く別なものに書き換えられているのではなく、主に語句の入れ替えによりかなり古い時代から改ざんされている可能性があるという印象を受けます。おそらくブツダゴーサの編纂時には完成してはいたのではないかと考えています。各詩ごとに、付録1、2に基づいて、「(吾の)心、己、意(顕在意識)」などから最も適している言葉を選び置き換えていきます。「自」という言葉

は、意思が決断する「みずから」と意思とは関係ない「おのずと」の意味があり曖昧さが増す字なのでなるべく使用を控えました。また、通常は区別されない「吾」と「我」ですが、本書では区別して使用しています。付録7(4)に詳細を記述します。第1章さまざまな事は、12節編成で、各節番号は、

GS 1 節 心と意、GS 2 節 □(おのれ)、GS 3 節 はげみ、GS 4 節 老いるいと、GS 5 節 世の中、GS 6 節 道、GS 7 節 千とふう数にちなんで、GS 8 節 花にちなんで、GS 9 節 楽しみ、GS 10 節 やまやまないと、GS 11 節 象、GS 12 節 ひと組ずい

ひよ。

GS 1 節 心と意

心の構造について正しく考察した結果、節名を「心」から「心と意」に変更します。これは、古い文献に戻した形となりました。F004 詩は、曖昧なので削除しました。また、詩 F008 と F009 は一つの詩 (G007) としました。本節は9詩から成ります。

詩番号 G001(F001, C, O033, OS3) [@ GS 1 心と意]

G001 心は動揺し、ざわめき、護り難く、制し難い。賢い人はこれを直くするー弓師が矢の弦を直くするように。

元詩 心は動揺し、ざわめき、護り難く、制し難い。英知ある人はこれを直くするー弓師が矢の弦を直くするように。

(コメント)

顕在意識が暴走しやすいのは、心の汚れにより作られた潜在意識の思考回路から流される誤まった情報と、外部(霊も含む)からの悪い刺激を受信するからだと考えています。

潜在部分の命令により顕在部分が誤動作する場合、自分では誤動作している自覚がないのです。他方、外部からの反応を顕在意識が感じ取ったり、守護神からのアドバイスを潜在意識が感じたりして、修正されていくのです。しかし、どちらの場合も、心の汚れにより感覚が落ちたり、正しくない情報を受け取ると、どんどん正しい道から外れてしまうのです。

顕在意識を直接制御する潜在意識を鍛え正流の情報を顕在意識に送れるようにすることが、詩中の「これ(心)を直くする」ことで、これによって、暴走しやすい顕在意識を抑えるよう教示されています。

詩番号 G002(F002, A, O034, OS3) [@ GS 1 心と意]

G002 水の中（霊界）の住処から引き出されて陸「おか」の上（この世）に投げ捨てられた魚のように、この心は、悪魔の支配から逃れようとしてもがきまわる。

元詩 水の中の住処から引き出されて陸「おか」の上に投げ捨てられた魚のように、この心は、悪魔の支配から逃れようとしてもがきまわる。

（コメント）

水の中＝霊界です。霊界はこの世と違いとても広いので、霊界でいた場所（階層）が重要ですから、それに対応して、住処という言葉をつけていると考えています。

陸の上＝この世です。

お釈迦様には、私たち人間の心が、「陸「おか」の上に投げ捨てられた魚」のように、お見えになったのでしょうか。悪魔の支配から逃れようともがき回るところに、神様、仏様が人を救済しようと決心なさる理由があるのでしょうか。しかし、この守護が弱まれば、悪魔の支配に落ち、深みにハマります。

この世で正しい生活を送るには、霊界や神界からの守護が必要なのですが、心を構成する魂の指針が、この真理のことばに書かれているのです。

しかし、この世で生活を送るには、悪魔の守護もあります。

真理のことばで教えていることを自分で理解し実行に移していけば、顕在意識を直接制御する潜在意識を鍛え正流の情報を顕在意識に送れるようになり、神様、仏様の守護の下に行くことができます。

教えを聞かなくても正しく生きれている人は、霊や魂に実力のある人です。そういう人は必ずいますが、大半の人には正しい教えが必要ではないかと感じています。

詩番号 G003(F003, C, O035, OS3) [@ GS 1 心入意]

G003 意は、顕在的で、軽々（かろがる）とざわめき、欲するがままにおもむき捉え難い。

心は、この顕在的な意と、極めて見難く微妙な潜在部から成る。

元詩 心は、捉え難く、軽々（かろがる）とざわめき、欲するがままにおもむく。その心をおさめることは善いことである。

心をおさめたならば、安楽をもたらす。

（コメント）

「捉えがたい」、「軽々とざわめき」、「欲するがままにおもむく」というのは顕在意識部分だと考えています。

詩番号 G004(F005, C, 0037, OS3) [@ GS 1 心と意]

G004 心は独りで動きまわり、遠くに行ってしまう顕在部がある。また、形体なく、胸の奥の洞窟（心臓）にひそんでいる潜在部もある。これら心を整える人々は、死の束縛から逃れるであろう。

元詩 心は遠くに行き、独り動き、形体なく、胸の奥の洞窟にひそんでいる。この心を制する人々は、死の束縛から逃れるであろう。

一次 心は独りで動きまわり、遠くに行ってしまう顕在部がある。また、形体なく、胸の奥の洞窟（心臓）にひそんでいる潜在部もある。これら心を治める人々は、死の束縛から逃れるであろう。

(コメント)

整っていず治っていない心の曖昧さを表現しています。心は独りで動きまわり、遠くに行ってしまう部分が主に顕在部（意識）、形体なく、胸の奥の洞窟（心臓）にひそんでいる部分は主に潜在部（意識）と解釈できます。「制する」は、「整える」としましょう（F004参照）。

詩番号 G005(F006, C, 0038, OS3) [@ GS 1 心と意]

G005 信ずるところと念いが汚されているならば、正しい真理が見極められない。よって心の安楽（安住）は得られず、さとの智慧は湧いてこない。

元詩 心が安住することなく、正しい真理を知らず、信念が汚されたならば、さとの智慧は全うからず。

一次 正しい真理を知らず、信念が汚されたならば、心の安楽（安住）は得られず、さとの智慧は湧いてこない。

(コメント)

条件と結果がちぐはぐです。整理して書き直しました。

詩番号 G006(F007, C, 0039, OS3) [@ GS 1 心と意]

G006 心が煩惱に汚されず、念いが乱れず、善悪のはからいを捨てるに至った覚醒者は、何も恐れることが無い。

元詩 心が煩惱に汚されることなく、おもいが乱れることなく、善悪のはからいを捨てている覚醒者（目ざめている人）には、何も恐れることが無い。

(コメント)

発達には段階があります。

善悪のはからいを捨てるには、心が煩惱に汚されていてもダメです、念いが乱れていてもダメです。

1 ↓ 2 ↓ 3 ↓ … と言う順を追っていくしかなないので、その順番を逸脱すると正しい目的地には着けないばかりか、魂の退化に繋がります。

詩番号 G007(F008+F009, C, 0040+0041, OS3) 【@ GS 1 心々意】

G007 ああ、この身はまもなく地上によこたわるであろう。魂は抜け、水瓶の破片のように無用になる。身体は死に対しこのように脆いものだと知れよ。

そして、心を城郭のように（堅固に）安立させ、智慧の武器をもって 悪魔と戦え。勝ち得たものを妄執することなく守りぬけ。

元詩 0040：この身体は水瓶のように脆いものだと知って、この心を城郭のように（堅固に）安立して、智慧の武器をもって、悪魔と戦え。勝ち得たものを守れ。 — しかもそれに執着することなく。

心をおさめたならば、安楽をもたらす。

0041：ああ、この身はまもなく地上によこたわるであろう。 — 意識を失い、無用の木片（きぎれ）のように、投げ捨てられて。

一次 F008：ああ、この身はまもなく地上によこたわるであろう。魂は抜け、水瓶の破片のように無用になる。身体は、このように脆いものだと知って、身体への執着を離れよ。

F009：心を正しく治めて、智慧の武器を持ち悪魔と戦え。そして執着することなく、勝ち得たものを守れ。

（コメント）

妄執と執着の関係は、付録5（2）参照。身体が心や魂を守ります。また、正しい心が身体を守り、邪まな心は身体も心も害します。

お釈迦様は、悪魔との戦いにおいて、身体を傷つける武器での戦いではなく、（正しい心から湧き出る）智慧を人間の武器とすべきだと説かれています。以前は、身体への強い執着を諫める部分を残しましたが、今回は死と体の関係を言及するにとどめました。また、この2詩を1詩にしました。

「心を城郭のように（堅固に）安立させ」は「心を整え守る（慎む）」の比喩と考えています。

詩番号 G008(F010, A, 0042, OS3) / G009(F011, A, 0043, OS3) 【@ GS 1 心々意】

G008 憎む人が憎む人にたいし、怨む人が怨む人にたいして、どのようなことをしようとも、邪なことをめざしている心はそれ

よりもひどいことをする。

元詩 書換えなし

G009 母も父もその他親族がしてくれるよりもさらに優れたことを、正しく向けられた心がしてくれる。

元詩 書換えなし

GS 2 節 己 (おのれ)

この節名を、「自己」から「己(おのれ)」に変えました。「GS1 節 心と意」とセットで存在する節と捉えます。

詩の順序は、内容を分類分けして、O160, O157, O161, O162, O158, O164, O163, O165, O166 と並べます。

「付録1 魂と脳と守護霊」を参考にしながら読んでください。本節は9詩から成ります。

詩番号 G010 (F012, C, O160, OS12) / G011 (F013, C, O157, OS12) || @ GS 2 己 (おのれ) ||

G010 己(霊)こそ(吾の)心の主である。他人がどうして(吾の)心の主であろうか? 心をよく整えたならば、得難き主

である己(霊)を得る。

元詩 自己こそ自分の主である。他人がどうして(自分の)主であろうか? 自己をよくととのえたならば、得難き主を得る。

一次 魂(自己)こそ心(自分)の主である。他人がどうして心(自分)の主であろうか? 魂(自己)をよく整えたならば、得難き主を得る。

G011 もしも人が己(霊)を愛しいものと知るならば、心(吾)をよく守れ。賢い人は、怠らずに励み、常に心を慎み整え目ざめていようにせよ。

元詩 もしもひとが自己を愛しいものと知るならば、自己をよく守れ。賢い人は、夜の三つの区分のうちの一つだけでも、つつしんで目ざめておれ。

一次 もしも人が魂(自己)を愛しいものと知るならば、心(自分)をよく守れ。賢い人は、怠らずに励み、常に心を治め、つつしんで目ざめていようにせよ。

(コメント)

G010: 「自己」を「己(霊)」、「自分」を「(吾の)心」と変更しました。「得難き(心の)主 || 己(霊)」という解釈で、詩文を書直しました。

G011: 賢い人のカテゴリーになると、常に慎んで目覚めているように努力しなくてはなりません。

元詩に出てくる三つの区分とは、第一の時期は少年期、第二の時期は壮年期、第三の時期は老年期だそうです。第一の時期、第二の時期の行いで、第三の時期が決定されるに決まっています。妻子を養うために悪い事とわかって、それに加担する事は、良くない事で、回避する方法を模索すべきです。このように三つの区分が独立してあるわけではないので、突然、第三の時期だけめざめようなんて不可能です。

この三つの区分については、中村氏の注釈によって、ブツダゴースの意思が強く働いている事がわかります。したがって、後代の付け足し部分なので削除します。

詩番号 G012 (F014, C, O161, OS12) ` G013 (F015, C, O162, OS12) [| @ GS 2 ㊦ (おのれ) |]

G012 心が作り、心から生じ、心から起った悪が智慧悪しき人を打ちくたく。 — 金剛石が宝石を打ちくたくように。

元詩 自分がつくり、自分から生じ、自分から起った悪が智慧悪しき人を打ちくたく。 — 金剛石が宝石を打ちくたくように。

G013 愚かな人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、己(霊)に対してなす。 — 蔓草(ツルクサ)が沙羅の木にまといつくように。

元詩 極めて性の悪い人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、自分に対してなす。 — 蔓草(ツルクサ)が沙羅の木にまといつくように。

一次 愚かな人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、自己(魂)に対してなす。 — 蔓草(ツルクサ)が沙羅の木にまといつくように。
(コメント)

G012: 「自分」を「心」と置き換えます。その人本体、全てが、霊(守護神)と魂(四魂)との体現ですから、「人を打ち砕く」とは、これら全てを打ち砕くことになります。気をつけましょう。

G013: 「極めて性の悪い人」は「愚かな人」、「自分に対してなす」は「己(霊)に対してなす」として、文章を整えます。

詩番号 G014 (F016, C, O158, OS12) ` 削除(なし, なし, O159, OS12) [| @ GS 2 ㊦ (おのれ) |]

G014 先ず(吾の)心を正しく整え心が治ってから、次いで他人に教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことが無いであろう。

元詩 O158: 先ず自分を正しくととのえ、次いで他人を教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことが無いであろう。

O159: 他人に教えるとおりに、自分でも行なえ。 — 自分をよくととのえたるこそ、他人をととのええるであろう。自己は実に制し難い。

一次 先ず自己を正しく整えてから、次いで他人に教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことが無いであろう。

(コメント)

詳細は付録2をお読みください。

真人やブツダは、ただ道を示す(教える)のみで、人を整えることができるのは、「他人ではなく己の指導が入った心」というのが、お釈迦様の、もしくは、真理のことばの一貫した教えです。したがって、「他人をととのえる」というO159の概念自体が誤りです。詩O159の教えはF016に含まれると考えて良いと思いますので、削除します。

詩番号 G015 (F017, B, O164, OS12) [@ GS 2 ㊦ (おのれ)]

G015 愚かにも、悪い見解にもとづいて、真理に従って生きるブツダ・真人たちの教えを罵るならば、その人は悪い報いが熟する。――カッタカという草は果実が熟すると自分自身が滅びてしまうように。

元詩 愚かにも、悪い見解にもとづいて、真理に従って生きる真人・聖者たちの教えを罵るならば、その人は悪い報いが熟する。――カッタカという草は果実が熟すると自分自身が滅びてしまうように。

(コメント)

「聖者＝真人とブツダ」と定義しますので、「真人・聖者」ではなく、「ブツダ・真人」としました。

詩番号 G016 (F018, A, O163, OS12) ` G017 (F019, A, O165, OS12) ` G018 (F020, A, O166, OS12) [@ GS 2 ㊦ (おのれ)]

G016 善からぬこと、己のためにならぬことは、なし易い。ためになること、善いことは、実に極めてなし難い。

元詩 善からぬこと、己のためにならぬことは、なし易い。ためになること、善いことは、実に極めてなし難い。

一次 善からぬこと、自己のためにならぬことは、なし易い。ためになること、善いことは、実に極めてなし難い。

G017 人が悪をなすならば心が汚れ、人が悪をなさないならば心が浄まる。浄いのも浄くないのも各人の人のありようである。人は他人を浄めることができない。

元詩 みずから悪をなすならば、みずから汚れ、みずから悪をなさないならば、みずから浄まる。浄いのも浄くないのも、各自のことからである。人は他人を浄めることができない。

一次 自ら悪をなすならば、自ら汚れ、自ら悪をなさないならば、自ら浄まる。浄いのも浄くないのも、各自のことからである。人は他人を浄

めることができない。

G018 たとい他人にとっていかに大事であろうとも、他人の目的のために（吾の）心のつとめをすて去ってはならぬ。己の目的を熟知して、（吾の）心のつとめに専念せよ。

元詩 たとい他人にとっていかに大事であろうとも、（自分ではない）他人の目的のために自分のつとめをすて去ってはならぬ。自分の目的を熟知して、自分のつとめに専念せよ。

一次 たとい他人にとっていかに大事であろうとも、（自分ではない）他人の目的のために自己のつとめをすて去ってはならぬ。自己の目的を熟知して、自己のつとめに専念せよ。

（コメント）

G017：「自ら」＝「心」、「各自のことがら」＝「各人の心のありよう」と変更しました。

G018：「自分のつとめ」＝「（吾の）心のつとめ」、「自分の目的」＝「己の目的」と変更しました。

GS 3 節はげみ

人間が取り組む課題や取り組む姿勢は、各自の発達段階に応じて異ならないといけないという事を痛感しています。その結果、人間が生きる姿勢として推奨されるものが、魂のレベルに合わせて、

「怠らずに励む（不怠惰）」↓「努め励む」↓「学び努める」

に、順次、変化すると、私は考えました。これらの行為を多くの人のために行う（多利）ことが、どうやら「徳」という行為のようです。

いきなり「学び努める」から始めると、壁が高すぎて、逆に悪影響です。ようするに、人は、「怠らずに励む」という土台が出来ていて初めて、「学び励む」に移行でき、これができるようになると学び努めるといふ相になると、私は考えています。

この結論に至った議論に関しては、GS08 花にちなんで G083, G084 詩のコメントも参照ください。

実際には、人間が怠ってはいけないものとは、

・ 日頃の生活で優先順位が高く、回避すると生活が立ち行かない仕事

・ 生まれながらに持つ自分の勤めや課題

です。後者は自覚するまでが大変ですが、前者を不怠惰で正しくこなせば、後者はおのずと思いついて出されてきます。そして、後者に

着手するあたりから、不怠惰だけではなく、努め励み、さらには学び努めるといふ姿勢も必要になってきます。これは、きつくなるように悪魔が計らいます（必要悪の部分も多いです。）ので、ついつい人間は脇道にそれてしまうのです。そんな人間を諫めているのが、この「はげみ」の章です。そして、この章では、主に不怠惰から努め励みまでの教えが書かれています。修行者に語った形態の詩もありますが、在家者と出家者の広い領域の人々に対して、有益な教えだと思えますので、そのように捉えてください。本節は12詩から成ります。

詩番号 G019 (F021, A, 0021, OS2) ` G020(F022, A, 0022, OS2) [| @ GS 3 はげみ |]

G019 努め励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境地である。

努め励む人々は死ぬことがない。怠りなまける人々は、死者のごとくである。

元詩 つとめ励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境地である。つとめ励む人々は死ぬことがない。怠りなまける人々は、死者のごとくである。

G020 このようにはつきりと知って、努め励むことをよく知る人々は、努め励むことを喜び、覚醒者たちの境地を楽しむ。

元詩 このことをはつきりと知って、つとめはげみを能（よ）く知る人々は、つとめはげみを喜び、聖者たちの境地を楽しむ。

一次 このようにはつきりと知って、努め励むことをよく知る人々は、努め励むことを喜び、真人（覚醒者）たちの明るく生き生きした生活を楽しむ。

（コメント）

覚醒者＝真人とみ仏＝聖者と考えます。

詩番号 G021 (F023, B, 0023, OS2) ` G022(F024, B, 0024, OS2) [| @ GS 3 はげみ |]

G021 真理に従う道を進むよう努め励み、堪え忍ぶこと強く、思慮ある人々は、涅槃（悟りによる解脱）に達する。
これは無上の幸せである。

元詩 （道に）思いをこらし、堪え忍ぶことつよく、つねに健（たけ）く奮励する、思慮ある人々は、安らぎに達する。これは無上の幸せである。
一次 真理に従う道を進むよう努め励み、堪え忍ぶこと強く、思慮ある人々は、安らぎに達する。

これは無上の幸せである。

G022 意(思い)つつましく、行いは清く、気をつけて行動し、心は奮起し、法(真理)にしたがって生き、努め励む人は、名声が高まる。

元詩 こころはふるいたち、思いつつましく、行いは清く、気をつけて行動し、みずから制し、法(のり)にしたがって生き、つとめ励む人は、名声が高まる。

一次 心は奮起し、思いつつましく、行いは清く、気をつけて行動し、自ら制し、法(のり)にしたがって生き、努め励む人は、名声が高まる。

(コメント)

詩 G021: 「安らぎ」を涅槃(悟りによる解脱)としました。

「安らぎ」は、罪穢れだらけの現在の現世において金銭的に安泰に暮らすということではありません。というのも、現世での富裕や生活の安定は、罪穢れを溜めることによって得られるような場合も多いからです。ただし、心が整ってくると、生活が整ってくるのも事実ですし、この世で得られる富や財は本人が正しく努めた結果であることも往々にしてあるのです。「涅槃(悟りによる解脱)」へと近づぐにつれ、生活も追従しバランス良く整っていくようです。

詩 G022: 「自ら制し」は、「気をつけて行動し」に含まれると考えられるので削除し、語順を並べ替えます。

詩番号 G023 (F025, C, O025, OS2) Ⅱ @ GS 3 はげみ Ⅱ

G023 思慮ある人は、怠らず、努め励み、心を整え、妄執と憎悪と迷妄に打ち勝て。それにより、欲望による激流に押し流され
ない心の拠り所(己)を鎮(しず)めまつれ。

元詩 思慮ある人は、奮い立ち、つとめ励み、自制・克己によって、激流も押し流すことのできない島をつくれ。

一次 思慮ある人は、怠らず、努め励み、心を治め、執着と怒りと迷妄に打ち勝て。それにより、情欲による激流に押し流されない心の拠り所(魂)を作れ。

(コメント)

克己(こつき)・・・自分の欲望や邪念にうちかつこと。全体に比喻が多過ぎてわからないので、拠り所Ⅱ己(守護神様方)を心に鎮座していただくような心がける教えの詩としました。妄執と憎悪と情欲は付録5参照。

詩番号 G024 (F026, B, O026, OS2) ` G025 (F027, B, O027, OS2) Ⅱ @ GS 3 はげみ Ⅱ

G024 智慧乏しき愚かな人々は怠惰になじむ。

しかし賢い人は、最上の財宝（たから）を守るように、努め励むのを守る。

元詩 智慧乏しき愚かな人々は放逸にふける。しかし心ある人は、最上の財宝（たから）をまもるように、つとめ励むのをまもる。

G025 怠たらず、執着と歓楽に親まずに、思念をこらす者は、大いなる楽しみを得る。

元詩 放逸にふけるな。愛欲と歓楽に親しむな。おこたることなく思念をこらす者は、大いなる楽しみを得る。

（コメント）

「心ある人」は、今後、「賢い人」に変換します。

欲に関しては人間の「一存ではなくすこと」ができないと、「付録S5 心の汚れ」で考察を行ないました。これに伴い詩G025では、愛欲を執着に置換します。

詩番号 G026 (F028, B, 0028, OS2) ` G027 (F029, B, 0029, OS2) ` G028 (F030, B, 0030, OS2) || @ GS 3 せびみ ||

G026 人は怠惰を退け、努め励むことにより、智慧を得て、憂いをなくす。

山上にいる人が地上の人々を見下ろすように、その人は憂いを持つ他の多くの人々を、自分とは異なると、はっきりと見極める。

元詩 賢者が精励修行によって怠惰を退けるときには、智慧の高閣（たかどの）に登り、自らは憂い無くして（他の）憂いある愚人どもを見下ろす。――山上にいる人が地上の人々を見下ろすように。

G027 怠りなまけている人々の中で努め励み、そして、眠っている人々の中で目覚めている賢い人は、疾く走る馬のようなものである。

元詩 怠りなまけている人々の中で、ひとりつとめはげみ、眠っている人々の中で、ひとりよく目覚めている思慮ある人は、疾くはしる馬が、足のろの馬を抜いて駆けるようなものである。

一次 怠りなまけている人々の中で、一人でも努め励み、そして、眠っている人々の中で、ひとりよく目覚めている思慮ある人は、足のろの馬を抜いて疾く走る馬のようなものである。

G028 努め励む事が生の旗印で、放逸なることは死の旗印である。

元詩 マガヴァー（インドラ神）は、つとめ励んだので、神々の中での最高の者となった。

つとめはげむことを人々はほめたたえる。放逸なることは常に非難される。

一次 努め励む事は常に褒め称えられる。放逸なることは常に非難される。

マガヴァー（インドラ神）は、努め励んだので、神々の中での最高の者となった。

（コメント）

詩 G026 の「山上にいる人が地上の人々を見下ろすように」や詩 G027 の「疾くはしる馬が、足のろの馬を抜いて駆けるようなものである」のような比喻は、実際にお釈迦様が仰ったのか、後代の付け足しか悩ましいのですが、この手の比喻には、表現に光るポジティブな部分だけ今回は残しました。

詩 G027：G019 と 020 を参考に書き換えました。

詩 G028：具体的な神様のお名前については、誰でも仏道の修行半ばの人は認識できないようです。神様の名前は後から付いてくるといふ意見がありますが、私も賛成です。前回の当方は、「マガヴァー（インドラ神）」を捉えられませんでした、今はあまり良い印象がありません。この部分がなくとも教えが成立することから削除します。

詩番号 G029 (F031, B, 0031, OS2) ` G030 (F032, B, 0032, OS2) Ⅱ @ GS 3 はぐみ Ⅱ

G029 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、微細なものでも粗大なものでも心のわずらいを、焼きつくしながら生活する。

元詩 いそしむことを楽しみ放逸に恐れをいだく修行僧は、微細なものでも粗大なものでも全て心のわずらいを焼きつくしながら歩む―燃える火のように。

G030 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、墮落するはずはなく、すでに涅槃（悟りによる解脱）の近くにいる。

元詩 いそしむことを楽しみ、放逸に恐れをいだく修行僧は、墮落するはずはなく、すでにニルヴァーナの近くにいる。

一次 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、墮落するはずはなく、すでに安らぎ（ニルヴァーナ）の近くにいる。

（コメント）

「放逸」は「怠惰」と書き換えます。

怠らない修行の奨励の一步先にある努め励むを楽しむ境地を教えてらっしゃいます。同じ仕事でも、嫌々やるのと、自分に与えられた仕事を嬉しい気持ちで努め励むのでは、周囲に与える影響が違うものです。周囲に与える影響まで責任を持つには、怠惰に恐れをいただき、努め励むのを楽しむくらいにならないといけないと教えてくださっています。この境地まで行くにはかなりの霊格の高さが必要ですので、無理な場合はコツコツと怠らずに目の前のことをこなすよう努力するのがベストです。

「安らぎ（ニルヴァーナ）」↓「涅槃（悟りによる解脱）」に置き換えます。

GS 4 節老いること

この章、全体は、新約聖書に通じる文章仕立てだと感じています。全般的に、とても恐ろしい雰囲気醸し出していますが、非常に正確に人間の体の特徴を説明しています。これらは、お釈迦様がより高次の存在から教授されて私たちに語ってらっしゃる教えだと思えます。多少、筆を入れましたが、極めて改ざんが少なく感じています。

「汝」という字は、目上のもが目下のものに使用する二人称です。当方としては、汝が使われた場合、本守護神様くらいの霊格の存在が四魂くらいの存在へむけて説かれているなど、上下の識別があると考えています。つまり、汝が使われた場合は私たちに人間に上位の存在からの厳しめのご忠告だと考えて良いと思います。

本節は12詩から成ります。

詩番号 G031 (F033, A, O146, OS11) ` G032 (F034, A, O147, OS11) ` G033 (F035, A, O148, OS11) [@ GS 4 老るるん]

G031 何の笑いがあるうか。何の歓びがあるうか？ — 世間は常に燃え立っているのに —。汝らは暗黒に覆われている。どうして燈明を求めないのか？

元詩 書換えなし

G032 見よ、粉飾された形体を！ (それは) 傷だらけの身体であって、いろいろのものが集まっただけである。病いに悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく、安住していない。

元詩 書換えなし

G033 この容色は衰えはてた。病いの巢であり、脆くも滅びる。腐敗のかたまりで、やぶれてしまう。生命は死に帰着する。

元詩 書換えなし

詩番号 G034 (F036, A, O135, OS10) [@ GS 4 老るるん]

G034 牛飼いが棒をもって牛どもを牧場に駆り立てるように、老いと死とは生きとし生けるものどもの寿命を駆り立てる。

元詩 書換えなし

(コメント)

OS10 章暴力から移動しました。

詩番号 G035 (F037, A, O149, OS11) ` G036 (F038, A, O150, OS11) [@ GS 4 老るる]]

G035 秋に投げすてられた瓢箪(ひょうたん)のような、鳩の色のようなこの白い骨を見ては、なんの快さがあるのか？

元詩 書換えなし

G036 骨で城がつくられ、それに肉と血とが塗ってあり、老いと死と高ぶりどごまかしとがおさめられている。

元詩 書換えなし

詩番号 G037 (F039, A, O151, OS11) ` G038 (F040, A, O152, OS11) [@ GS 4 老るる]]

G037 いとも麗しい国王の車も朽ちてしまう。身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いに道理を説き聞かせる。

元詩 いとも麗しい国王の車も朽ちてしまう。身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いに道理を説き聞かせる。

G038 学ぶことの少ない人は、豚のように老いる。その人の肉は増えるが、その人の知恵は増えない。

元詩 学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。かれの肉は増えるが、かれの知恵は増えない。

(コメント)

ことわり↓道理、彼↓その人と置き換えます。 G138: 一次変更詩から、G123詩を参考にして「牛」↓「豚」に置き換えました。

詩番号 G039 (F041, A, O153, OS11) ` G040 (F042, C, O154, OS11) [@ GS 4 老るる]]

G039 わたくしは幾多の生涯にわたって生死の流れを無益に経めぐって来た、—家屋の作者(ツクリテ)をさがしもとめて。—あの生涯、この生涯とくりかえすのは苦しいことである。

元詩 書換えなし

G040 家屋の作者よ！ 汝の正体は見られてしまった。心は、妄執を滅ぼし尽くし（身体の）形成作用を離れたので、汝（心）はもはや家屋を作ることにはないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまった。

元詩 家屋の作者よ！ 汝の正体は見られてしまった。汝はもはや家屋を作ることにはないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまった。心は形成作用を離れて、妄執を滅ぼし尽くした。

（コメント）

詩 G040 では、家屋（人間の体）の作者は誰か？ これが大切です。実は、これが煩惱や妄執に染まった心だと、この詩は私たちに語りかけます。つまり、悪魔の副守護神様の言いなりになっている四魂と副守護神様の念いが人間の体を作るのでしよう。したがって、心が煩惱や妄執を滅ぼせば、実は四魂は体の形成作用を離れるようです。ここまで来ると、涅槃（悟りによる解脱）に入る状況でしょう。

詩番号 G041 (F043, A, O155, OS11) ` G042 (F044, A, O156, OS11) [@ GS 4 老 5 5 5 5]]

G041 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、魚のいなくなった池にいる白鷺のように、痩せて滅びてしまう。

元詩 書き換え不要

G042 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、昔のことばかり思い出して、かたくなな心となって、壊れた弓のように横たわる。

元詩 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、壊れた弓のようによこたわる。―昔のことばかり思い出してかこちながら。

（コメント）

この2詩は、在家者への教えです。正当な手段によって財を獲ることは、清らかな行ないを保つことと、同等に大切なことであることを、教えています。ことにこの世の中でたくさんの経験が必要な若い時の出家修行の励行にブレーキをかけていて、若い時の在家の生活の過ごし方が大切であると注意を呼びかけていると思います。

私なりに、若い時のパターンをこの詩に沿って下記のように洗い出し、考察を行いました。

財を蓄えた＋清らかな行ないを保つ ↓ 真人へとステップアップする中年、老後

財を蓄えない＋清らかな行ないを保つ ↓ 仕事の従事

財を蓄えた＋清らかな行いを保たない↓悪魔との契約か人生やり直し
財を蓄えない＋清らかな行いを保たない↓人生やり直しか悪魔との契約

GS 5 節 世の中

本節は12詩から成ります。

詩番号 G043 (F045, A, O167, OS13) ` G044 (F046, A, O168, OS13) ` G045 (F047, B, O169, OS13) [@ GS 5 節 中]

G043 下劣なしかたになじむな。怠けてふわふわと暮らすな。邪な見解をいだくな。世俗のわずらいをふやすな。

元詩 書換えなし

G044 奮起（フルイタ）てよ。怠けてはならぬ。道理に従った善い行ないを實行せよ。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、穏やかに過ぐす。

元詩 奮起（フルイタ）てよ。怠けてはならぬ。善い行いのことわりを實行せよ。ことわりに従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。

一次 奮起（フルイタ）てよ。怠けてはならぬ。道理に従った善い行ないを實行せよ。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。

G045 道理に従った善い行ないを實行せよ。道理に従わない悪い行ないを實行するな。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、穏やかに過ぐす。

元詩 善い行ないのことわりを實行せよ。悪い行ないのことわりを實行するな。ことわりに従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。

一次 道理に従った善い行ないを實行せよ。道理に従わない悪い行ないを實行するな。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。

（コメント）

「ことわり（理）」を「道理」と置き換えます。当方は「道理∥理∥真理（法）」は同義だと考えています。

「安楽に臥す」を「穏やかに過ぐす」と置き換えます。
日本語を整えます。

詩番号 G046 (F048, C, O170, OS13) / G047 (F049, B, O171, OS13) 【@GS 5世の中】

G046 世の中の真相と泡沫（うたかた）を見よ。泡沫はかげろうのごとしと見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王もかれを見ることがない。

元詩 世の中は泡沫のごとしと見よ。世の中はかげろうのごとしと見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王もかれを見ることがない。

一次 世の中の真相と泡沫を見よ。泡沫はかげろうのごとしと見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王もかれを見ることがない。

G047 さあ、この世の中を見よ。王者の車のように美しい部分が目立つ。愚かな人はそこに耽溺（たんでき）するが、賢い人はそれを妄執しない。

元詩 さあ、この世の中を見よ。王者の車のように美しい部分である。愚者はそこに耽溺（たんでき）するが、心ある人はそれを執着しない。

一次 さあ、この世の中を見よ。王者の車のように美しい部分が目立つ。愚かな人はそこに耽溺（たんでき）するが、賢い人はそれに執着しない。
（コメント）
詩 G046：泡沫＝色です。「付録7 空と色（2） 空相色」を参照してください。
詩 G047：「愚者」は「愚かな人」と書き直しましょう。愚かな人との対応ですから、「心ある人」＝「賢い人」となります。「執着しない」→「妄執しない」とします。妄執は付録5（2）参照。

詩番号 G048 (F050, A, O172, OS13) / G049 (F051, A, O173, OS13) 【@GS 5世の中】

G048 以前は怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。―あたかも、雲を離れた月のように。

元詩 また以前は怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。―あたかも雲を離れた月のように。
うい。

G049 以前には悪い行ないをした人でも、のちに善によってつぐなうならば、その人はこの世の中を照らす。―あたかも、雲を離れた月のように。

元詩 以前には悪い行ないをした人でも、のちに善によってつくなうならば、その人はこの世の中を照らす。―雲を離れた月のように。
(コメント)

G048: 怠りなまけた人の償いは、怠りなまけないことで、悪い行いをした人の償いは、善を行うことなのでしよう。G215詩で記述される、悪いことをするくらいなら、何もしないほうが良いという内容と一致します。
両詩に統一感を出すために、G048から「また」を消し、G049に「あたかも」を足します。

詩番号 G050 (F052, C, O174, OS13) / G051 (F053, C, O175, OS13) [@ GS 5世の中]

G050 この世の中は暗黒である。ここではつきりと理(コトワリ)の実相を見分ける人は少ない。―網から脱れた鳥が少ないように。
うに。

元詩 この世の中は暗黒である。ここではつきりと(ことわりを)見分ける人は少ない。網から脱れた鳥のように、天に至る人は少ない。

一次 この世の中は暗黒である。ここではつきりと理(コトワリ)と実相を見分ける人は少ない。しかし、これらを見分けたならば、悪魔とその軍勢にうち勝つ。あたかも、網から脱れた鳥のように。

G051 渡鳥は日中に往来を繰り返し、通力によって動く者は虚空の道を回り、正しい心を持つ真人は悪魔とその軍勢にうち勝つて因縁からむこの世から放(はな)れブツダとなる。

元詩 白鳥は太陽の道を行き、神通力による者は虚空(そら)を行き、心ある人々は、悪魔とその軍勢にうち勝って世界から連れ去られる。

一次 網から脱れた鳥のような真人は、あるものは白鳥のように太陽の道を行き、あるものは神通により虚空を行き、あるものはブツダとなる。
(コメント)

・この詩の ver. 1 のコメントは頓珍漢でした。あらためて訂正してお詫びします。前回は一二三神示を引用しましたが、今回は取り下げます。

・この2詩の難解な部分が、鳥の部分と神通を使う者でした。

・「鳥」はそのまま「普通の人や大衆」として比喻されていると思われます。

・荻原雲来氏訳の「法句経」ではG051詩の「白鳥」は「鵝鳥」と書かれています。これはガチョウではなく渡鳥の類とのことです。比喻としては、善悪が完全に正しく判断できない多くの普通の人間で、いつも同じ失敗を繰り返して、この世の中を彷徨っているという感じですよ。

・「神通」を「通力」と変更しました。これはいわゆる超常的力（魔法）のことで、それを駆使できる存在（人間じゃない存在も多い）が、虚空道を進んでいるとしました。

・「虚空」は、「むなししい」という意味ですが、虚は「良（うしとら）の金神様の偉大な」という意味で、空は真理となりますので、偉大な真理という意味が裏にあります。「通力」を、「悪い目的のために使う存在は「虚しい道を進む者」であり、良い目的のために使う存在は「偉大な道を進む者」という二面的な意味があるのだと思います。以上はなんといっても人間の領域を超えているので、当方の推論です。皆様も色々と考えてみてください。

・「心ある人」は、「正しい心を持つ真人」とします。

・「世界から連れ去られる」は「ブツダになる」としましたが、今回は「因縁からみつく世界から放れブツダとなる」としました。

詩番号 G052 (F054, B, O176, OS13) ` G053 (F055, B, O177, OS13) [@ GS 5世の中]

G052 唯一無二の真理を逸脱し、偽りを語り、涅槃（悟りによる解脱）の世界を無視している人は、どんな悪でもなす。

元詩 唯一なることわりを逸脱し、偽りを語り、彼岸の世界を無視している人は、どんな悪でもなさないものは無い。

一次 唯一無二の真理を逸脱し、偽りを語り、安らぎの世界を無視している人は、どんな悪でもなす。

G053 愚かな人々は分かちあうことをたたえない。しかし賢い人々は分かちあうことを喜ぶ。

元詩 物惜しみする人々は天の神々の世界におもむかない。愚かな人々は分かちあうことをたたえない。しかし心ある人は分かちあうことを喜んで、そのゆえに来世には幸せとなる。

(ロメント)

G052 : 彼岸の世界⇄涅槃（悟りによる解脱）とします。二重否定を普通の文章にします。

G053 : 「心ある人」は「賢い人」と書き直します。仏道は、天の神々の世界に赴くための教えではなく、ブツダ・真人になるための教えなので、このくだりは、削除します。同様に、仏教のいう来世とは、死後の世界のことですが、個人の死後の世界を良くするための教えは仏道ではありません。その時その時で、必要な行動を取り、喜びの中で生きることが、わたしたち人間にとって大切なのです。

詩番号 G054 (F056, C, O178, OS13) [@ GS 5世の中]

G054 大地の唯一の支配者となるよりも、全世界の主権者となるよりも、真人となるほうがすぐれている。

元詩 大地の唯一の支配者となるよりも、天に至るよりも、全世界の主権者となるよりも、聖者の第一階梯(かいてい)(預流果)のほうですぐれている。

(コメント)

聖者の第一階梯に関しては、本質を突くような解説がありませんでした。仏道は普通の人間がブツダ・真人になることを奨励していますが、み仏(ブツダ)のほうが真人より靈格が高いので、まずは真人になることが、私たち普通の人間の目標です。従って、「真人となるほう」と書き換えます。

「天に至ること」は G050、051 詩で述べましたが、あくまでも暗喩なのでケースバイケースです。あまり必要なさそうなので、詩から削除します。

GS 6 節道

本節は 1-5 詩から成ります。

詩番号 G055 (F057, A, O273, OS20) ` G056 (F058, A, O274, OS20) ` G057 (F059, B, O275, OS20) ` G058 (F060, A, O276, OS20) [@ GS 6 道]

G055 人の道のうちでは、仏道の八正道が最もすぐれている。

もろもろの真理のうちでは、四諦(苦・集・滅・道)が最上である。

もろもろの徳の中では、情欲から離れることが最もすぐれている。

人々のうちでは、ブツダ(=眼ある人)が最もすぐれている。

元詩 もろもろの道のうちでは「八つの部分よりなる正しい道」が最もすぐれている。

もろもろの真理のうちでは「四つの句」(=四諦)が最もすぐれている。

もろもろの徳のうちでは「情欲を離れること」が最もすぐれている。

人々のうちで「眼ある人」(=ブツダ)が最もすぐれている。

一次 人の道のうちでは、仏道の八正道が最もすぐれている。

もろもろの真理のうちでは、四諦(苦・集・滅・道)が最上である。

もろもろの徳の中では、執着から離れることが最もすぐれている。人々のうちでは、ブツダ（＝眼ある人）が最もすぐれている。

G056 これこそ道である。（真理を）見るはたらきを清めるためには、この他に道は無い。汝らはこの道を実践せよ。これこそ悪魔を迷わして（打ちひしぐ）ものである。

元詩 書換えなし

G057 汝らがこの道を行くならば、苦しみをなくすことができるであろう。（棘が肉に刺さったので）矢を抜いて癒す方法を知って、わたくしは汝らにこの道を説いたのだ。

元詩 書換えなし

G058 もろもろの修行完成者は（ただ）教え（この道）を説くだけである。汝らはこの道をひたすら努めよ。心を整えこの道を歩む者は、心治まり悪魔の束縛から脱れるであろう。

元詩 汝らは（みずから）つとめよ。もろもろの如来（＝修行を完成した人）は（ただ）教えを説くだけである。心をおさめて、この道を歩む者どもは、悪魔の束縛から脱れるであろう。 Ⅱ@GS6道Ⅱ

一次 汝らは自ら努めよ。もろもろの修行完成者は（ただ）教えを説くだけである。心をおさめて、この道を歩む者は、悪魔の束縛から脱れるであろう。

（コメント）

この4つの詩で一つのパッケージだと考えています。

GS4章老いることの導入で記したのと同様に、お釈迦様のお口から出たお言葉でしようが、別の高次の存在からのメッセージでしょう。どうしてそう考えるかという点、これらの詩で、使われる二人称が「汝」だからです。お釈迦様の教えでは、この二人称はあまり使われません。「汝」とは同等ではない下の人たちに使う二人称だそうです。ここで、メッセージの送り主は、人間たちが、ご自分より下であることをはっきりと宣言なさっているわけです。

高次元からのメッセージは、改ざんが難しいのか、あまり悪魔の手が入っていないことが多いのです。

詩 G055：人類にとって仏道が一番有益だという事実を受け入れた上で、仏道Ⅱ「八正道」or「悟りのよすが」or「五根」か？ という問いの答えが「八正道」であるというのがこの詩句の内容です。

八正道は、サーリプッタ尊者が語った教えだという認識があります（違っていたらすみません）。ここで、「付録3 仏道」を参考にしてください。

当方がブログを記した当時は、悟りのよすがの教えが良いと思っていました。しかし、この詩では、八正道が最も優れていると宣言な

さっていて、それを否定する根拠は、当方にはありません。さらに、サーリプツタ尊者の存在が捉えることができた今となっては、とてもではありませんが、この詩を書き換えることはできません。

従って、ブログとは意見を変えて、詩も書き換えました。人類にとって仏道が一番有益だという事実を反映したいと思いましたが、詩中には仏道という言葉をつけ足しました。

「もろもろの真理のうちでは【四つの句】(＝四諦)がもつともすぐれている」では、四諦という概念が、あまたある仏道の真理の頂点にあるということを宣言するための詩です。その他の真理は、「真理のことば」内でたくさん語られますが、それら全ては、この四諦という真理の枝葉だと捉えたらいいのでしょうか。

「もろもろの徳のうちでは【情欲を離れること】が最もすぐれている。」ですが、一次詩では「情欲」↓「執着」としましたが、付録5の考察を進めた結果「情欲」に戻しました。

徳とは、神(十)様の目と心を持って行ずることです。何か見返りを期待するための善行とかでは、一応、徳を積んだと言われる、大した徳にはならないということです。

詩G058：如来という言葉で修行完成者としています。如来を使うと、宗教的になってしまうので、修行完成者とします。私は、修行完成者とは、ブツダ・真人だと考えています。

詩番号 G059 (F061, C, O277～O279, OS20) [@ GS 6道]

G059 「この世のほとんどが色(我)により形成されている。

これらは全て無常で(諸行無常)、苦しみの素(もと)へと変化する(一切皆苦)。
しかし、法(真理)は、決して色や我を含むことはない(諸法非我)。」

と明らかな知恵をもってこの世を観るときに、人は苦しみから遠ざかり放(はな)れる。
これこそ人が清らかなる道である。

元詩 O277：「一切の形成されたものは無常である。」(諸行無常)と明らかな知恵をもって観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。

これこそ人が清らかなる道である。

O278：「一切の形成されたものは苦しみである。」(一切皆苦)と明らかな知恵をもって観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。

これこそ人が清らかなる道である。

O279：「一切の事物は我ならざるものである。」(諸法非我)と明らかな知恵をもって観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。

これこそ人が清らかなる道である。

一次 「一切の形成されたものは無常である」(諸行無常)

「一切の形成されたものは苦しみである」（一切皆苦）
「一切の事物は我ならざるものである」（諸法非我）
と明らかな知恵をもってこの世の全てを観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかになる道である。

（コメント）

付録7（4）参照

詩番号 G060 (F062, A, O280, OS20) ` G061 (F063, A, O281, OS20) ` G062 (F064, A, O282, OS20) [@ GS 6 道]

G060 起きるべき時に起きないで、若くて力があるのに怠りなまけていて、意志も思考も薄弱で、怠惰で物憂い人は、明らかな知恵によって道を見出すことがない。

元詩 書換えなし

G061 言葉を慎しみ、意を落ち着けて慎しみ、身に悪を為してはならない。これらの三つの行ないの路を淨くたもつならば、私の説きたもうた道を克ち得るであろう。

元詩 ことばを慎しみ、心を落ち着けて慎しみ、身に悪を為してはならない。これらの三つの行ないの路を淨くたもつならば、仙人（＝仏）の説きたもうた道を克ち得るであろう。

一次 言葉を慎しみ、心を落ち着けて慎しみ、身に悪を為してはならない。これらの三つの行ないの路を淨くたもつならば、ブツダの説きたもうた道を克ち得るであろう。

G062 実に心が統一されたならば、豊かな知恵が生じる。心が統一されないならば、豊かな知恵がほろびる。生じることとほろびることとの、この二種の道を知って、豊かな知恵が生ずるように心を整えよ。

元詩 書換えなし

一次 実に心が統一されたならば、豊かな知恵が生じる。心が統一されないならば、豊かな知恵がほろびる。生じることとほろびることとの、この二種の道を知って、豊かな知恵が生ずるように自己を整えよ。

（コメント）

G060：愚かな人に対しての教え

G061：賢い人に対しての教え。仙人をブツダと書き換えましょう。ことばを漢字で書きます。

G062：賢い人でも真人に近い人より靈格が上の人に対しての教え。

詩番号 G063 (F065, A, O283, OS20) ` G064 (F066, C, O284, OS20) ` G065 (F067, B, O285, OS20) [@ GS 6道]

G063 一つの樹を伐るのではなくて、(煩惱の) 林を伐れ。危険は林から生じる。(煩惱の) 林とその下生えとを切って、林から脱れた者となれ。修行僧らよ。

元詩 一つの樹を伐るのではなくて、(煩惱の) 林を伐れ。危険は林から生じる。(煩惱の) 林とその下生えとを切って、林(＝煩惱)から脱れた者となれ。修行僧らよ。

G064 たとい僅かであろうとも、男女の淫らな欲望が断たれないあいだは、その人の心は束縛されている。

元詩 たとい僅かであろうとも、男の女に対する欲望が断たれないあいだは、その男の心は束縛されている。――乳を吸う子牛が母牛を恋い慕うように。

G065 心と意の妄執を断ち切れ、――池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を選び進め。めでたく行きし人であるみ仏は涅槃(悟りによる解脱)への道を説きたもうた。

元詩 自己の愛執を断ち切れ、――池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を養え。めでたく行きし人(＝仏)は安らぎを説きたもうた。

一次 自己の執着を断ち切れ、――池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を選び進め。めでたく行きし人であるブツダは安らぎへの道を説きたもうた。

(コメント)

G064：欲望自体は、不足を感じて欲しがることという意味ですから、良くも悪くもないニュートラルな意味合いで捉えます。しかし、異性間の淫らな欲望は禁じられるべきです。この詩は男性の女性に対する性的な欲求を書いています。男女両方に注意を喚起すべきだと思いますので、詩を書き換えました。

「乳を吸う子牛が母牛を恋い慕うように」という文は、子どもが母親を慕う当然の事をあらわしていますが、それを男女間の想いと重ねています。これが妥当だとは考えにくいので、削除します。

G065：ハスが生い茂るのは、夏です。秋は、すでにハスはなくなっていて寂しくなっているのですが、そこに、突如として、むくむくと生えてくる時期外れのハスのことを言っています。これはなくなっただけだと思っただけで安心していると、出てくる煩惱のことです。

「愛執」という言葉を、「執着」と書き直しましたが、「執着」の中でも性質の悪い妄執(道理を踏み外した執着)を最終的に使用しました。

み仏は教えを説くだけであるということは、涅槃（悟りによる解脱）へ至る道（方法）を説いたのでそれに従って書き換えます。

詩番号 G066 (F068, A, O286, OS20) ` G067 (F069, A, O287, OS20) ` G068 (F070, A, O288, OS20) ` G069 (F071, A, O289, OS20) [@ GS 6 道]

G066 「わたしは兩期にはここに住もう。冬と夏にはここに住もう」と愚者はこのようにくよくよと慮って、死が迫って来るのに気がつかない。

元詩 書換えなし

G067 子どもや家畜のことに気を奪われて心がそれに執著している人を、死はさらって行く。――眠っている村を大洪水が押し流すように。

元詩 書換えなし

G068 子ども救うことができない。父も親戚もまた救うことができない。死に捉えられた者を、親族も救い得る能力がない。

元詩 書換えなし

G069 賢い人はこの道理を知って、教えをまもり心を清め、涅槃（悟りによる解脱）に至る仏道をすみやかに進め。

元詩 心ある人はこの道理を知って、戒律をまもり、すみやかにニルヴァーナに至る道を清くせよ。

一次 賢い人はこの道理を知って、教えをまもり自らを清め、涅槃（悟りによる解脱）に至る仏道をすみやかに進め。

(コメント)

G066～G068 なし

G069: 「戒律」を「教え」に書き換えます。

「ニルヴァーナ」は「涅槃（悟りによる解脱）」と表記しましょう。

「心ある人」は、「賢い人」とします。

道を清めるのではなく、もともと清い道（仏道）を、吾心を清めて歩みなさいということです。

GS 7 節 千という数にちなんで

「己」は正守護神様、副守護神様が主で、本守護神様は少し別格だと考えています。靈界物語では「正守護神様を直日（なおひ）、「本守護神様を大直日」と表現していると考えています。また、自己主張が強い性質を有するのは副守護神様ですから、聖典では「自己」というのは副守護神様を、「己」は正守護神様を指していることが多いと思います。ただし、度重なる訳出で、この辺りがあいまいになっているので、各詩の内容から、適切なものを選び編集しました。

「自己の修養」とは「愚かな自己を修め養う」ということなので、良い方へ導くという意味が含まれています。このように、正しい聖典は、相手をやっつけるのではなく、正しい方向へ導くことがモットーのようです。

全般にひらがな表記が多いのですが、漢字に変えて読みやすくしました。本節は13詩から成ります。

詩番号 G070 (F072, A, O100, OS8) ` **G071** (F073, A, O101, OS8) ` **G072** (F074, A, O102, OS8) || @ GS 7 千という数にちなんで ||

G070 無益な語句を千たび語るよりも、聞いて心の静まる有益な語句を一つ聞く方が優れている。

元詩 書換えなし

G071 無益な語句よりなる詩が千もあっても、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

元詩 書換えなし

G072 無益な語句よりなる詩を百も唱えるよりも、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

元詩 書換えなし

(コメント)

なし

詩番号 G073 (F075, C, O103~O105, OS8) || @ GS 7 千という数にちなんで ||

G073 常につつしみ、心を整え、心が治ることは、愚かな自己にうち克つ事である。

愚かな自己に克った者の勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンダルヴァ(天の伎楽神)も、悪魔も、梵天もなす事ができない。唯一愚かな自己に克つ者は最上の勝利者となる。

元詩 0103：戦場において百万人に勝つよりも、唯だ一つの自己に克つこそ、じつに最上の勝利者である。

0104+0105：自己にうち克つ事は、他の人々に勝つ事よりも優れている。つねに行かないをつつしみ、自己をととのえている人、—このような人の克ち得た勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンダルヴァ(天の伎楽神)も、悪魔も、梵天もなす事ができない。

一次 常に行かないをつつしみ、自己を整え、心を治めることは、自己にうち克つ事である。

自己に克つた者の勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンダルヴァ(天の伎楽神)も、悪魔も、梵天もなす事ができない。唯だ一つの自己に克つ者は勝利者となる。

この勝利者が、あまたの賤(いや)しい愚かな人々に打ち勝てば、その人は最上の勝利者となる。

(コメント)

自己は副守護神様であるので、「愚かな自己」と書き換えました。

慎みは、身、口、意が対象ですから、その全てについて常に気をつけて慎みましようという意味にしました。

自己にうち克つ事は、他の人々に武力で勝つ事とは別の事象です。しかし、元詩にはこの点について書いてないので、一次変更でいたずらに書き足した部分は削除します。

ちなみに、他の人々に勝つ戦いの場合を考えましよう。正しい教えでは、武力ではなく相手に間違った思考回路を改めさせることが戦いだと位置付けています。武力で戦うのは、悪い旗印の戦い方法であって、正しい旗印のものとの戦いとは異なるようです。

この3個の詩は一つの詩に書き換えます。

詩番号 G074 (F076, C, O106+O107, OS8) ` G075 (F077, B, O108, OS8) [@ GS 7 千とこう数こちなんじ]

G074 百年の間、月々千回ずつ祭祀(まつり)を営む人や、林の中で祭祀(まつり)の火につかえる人々がいる。もし、それらの人々が心が治まり愚かな自己を修養した人(ブツダや真人)を尊び供養するなら、たとえその供養がつかの間であっても、ただ、百年祭祀を営むだけよりも優れている。心が治まり愚かな自己を修養した人(ブツダや真人)を尊び供養することは優れている。

元詩 0106：百年のあいだ、月々千回ずつ祭祀(まつり)を営む人がいて、またその人が自己を修養した人を一瞬間でも供養するならば、その供養する事の方が、百年祭祀を営むよりも優れている。

0107：百年のあいだ、林の中で祭祀(まつり)の火につかえる人がいて、またその人が自己を修養した人を一瞬間でも供養するならば、その供養する事の方が、百年祭祀を営むよりも優れている。

一次 百年の間、月々千回ずつ祭祀(まつり)を営む人や、林の中で祭祀(まつり)の火につかえる人々がいる。もし、それらの人々が自己を修養した人(ブツダや真人)を尊び供養するなら、たとえその供養がつかの間であっても、ただ、百年祭祀を営むだけよりも優れている。

自己を修養した人を尊び供養することは優れている。

G075 功德を得るために、人がこの世で、一年間、神をまつり、犠牲（いけにえ）をささげ、あるいは火にささげ物をする。しかし、その全てをあわせても、ただ、行ないの正しい人々を尊ぶ真正なる祭りの方が、はるかに優れている。

元詩 功德を得ようとして、ひとがこの世で一年間神をまつり犠牲（いけにえ）をささげ、あるいは火にささげ物をして、その全部をあわせても、（真正なる祭りの功德の）四分の一にも及ばない。行ないの正しい人々を尊ぶ事の方が優れている。

（コメント）

G074：「尊ぶ」より「供養する、お布施をする。」のほうが下位であるという構造を明確に表現出来る詩に書き換えますし、「自己を修養した人」は愚かな部分の自分ですから、「心が治まり愚かな自己を修養した人（ブツダや真人）」と置換えます。二つを一つの詩に合体します。

G075：中村氏の注釈によれば、「真正なる祭り」とは、行ないの正しい人々を尊ぶ事だそうです。仏道では、功德を得るためのお祭りを良しとせず、この真正な祭りを行うよう人間に教えています。日本のお祭りの対象は神様なので、仏教とは若干異なります。両方に共通して言えることは、お祭りとは、尊ぶべき存在（神様、仏様、お釈迦様、キリスト様、その他人間）に対して、感謝だけではなく、敬愛の意を表す儀式だったんですね。

詩番号 **G076** (F078, C, O109, OS8) [@ GS 7 千とごう数にちなんで]

G076 人が心が治まり愚かな自己を修養した人（ブツダや真人）に常に敬礼を守れば、魂の寿命と美しさと楽しみと力が増大する。

元詩 つねに敬礼を守り、年長者を敬う人には、四種の事がらが増大する。―すなわち、寿命と美しさと楽しみと力とである。

一次 人が、常に、自己を修養した人（ブツダや真人）に敬礼を守れば、魂の寿命と美しさと楽しみと力が増大する。

（コメント）

亀の甲より年の功というところもありますが、年齢が行けば悪知恵も付きます。ただ、日本では、年長者は伝統的に敬われていたと思いますし、昔は、年齢と人徳のあつきにもそれなりに相関があったと思います。しかし、お釈迦様は、年長者かどうかは、人の判断の材料にはなさっていません。人の分類とその判断基準等は、「第3節さまざまな人」に示されます。

お釈迦様は、心が治まり愚かな自己を修養した人（ブツダや真人）を常に敬うことと同時に、いつも、相手が心が治まり愚かな自己を修養した人かどうかを判断する方法を示されています。

寿命と美しさと楽しみと力の4種ですが、光と闇が拮抗するこの世では、神様から与えられたものかもしれないですし、悪魔からの

のかもかもしれません。この4種は、この世の私たちが得るものと言うより、私たちの霊と魂が得る事ができるものでしょう。

詩番号 G077 (F079, A, 0110, OS8) ` G078 (F080, A, 0111, OS8) ` G079 (F081, A, 0112, OS8) || @ GS 7千とじう数にちなんで ||

G077 素行が悪く、心が乱れていて百年生きるよりは、徳行あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

元詩 書換えなし

G078 愚かに迷い、心の乱れている人が百年生きるよりは、知恵あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

元詩 書換えなし

G079 怠りなまけて、気力もなく百年生きるよりは、堅固につとめ励んで一日生きる方が優れている。

元詩 書換えなし

(コメント)

なし

詩番号 G080 (F082, B, 0113, OS8) ` G081 (F083, C, 0114, OS8) ` G082 (F084, C, 0115, OS8) || @ GS 7千とじう数にちなんで ||

G080 物事が興り消え失せる因果を見極めずに百年生きるよりも、この因果を見極めて一日生きる方が優れている。

元詩 物事が興りまた消え失せることわりを見ないで百年生きるよりも、物事が興りまた消え失せることわりを見て一日生きる事の方が優れている。

G081 心が不死であるのを見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

元詩 不死の境地を見ないで百年生きるよりも、不死の境地を見て一日生きる事の方が優れている。

一次 魂の不死を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

G082 四諦の真理を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

元詩 最上の真理を見ないで百年生きるよりも、最上の真理を見て一日生きる方が優れている。

(コメント)

「見る」を「見極める」とします。

G080: 「物事が興りまた消え失せることわり」とは「物事が興り消え失せる因果」とします。

G081: 不死については、中村氏は注釈で非常に困惑しています。中村氏は、学者なので伝統を重んじて真面目に訳出してらしゃいますが、宗教的に魂の不死が言えても、学問的に簡単に書けないのでしょうか。しかし、お釈迦様は、霊と魂は死なないという、断固とした原理原則(不死)にお立ちですから、どの霊も魂もよほどのことがない限り、不死なのです。

今生限りの命では、悪いこととした者勝ちという理屈に流されやすいのが人間だと、常日頃から感じています。私は霊と魂の不死が宗教的であるとしても、これを前提にした行動規範によって、悪魔の甘言から人間が自衛できる力が育まれると思っています。本詩では「不死の境地」の主語を「心」と記述しました。

G082: 仏道の中で最も優れている真理とは、四諦であると、GS6道G055詩で述べられているので、「最上の真理」を「四諦の真理」と置き換えます。

GS 8 節 花にちなんで

覚醒者と修行者については、世間一般では、ほぼ同等な扱いがなされています。しかし、覚醒者になるために修行している人が修行者と考える方が自然なので、この考え方で、本書は進めます。

覚醒者とは、お釈迦様のおっしゃる「目覚めた人」、「真人」、「ブツダ」という言葉で表されていると思いますので、本書ではそのように使います。

正しい真理を知って、四魂が心を整えて、守護神様の力を借りて正しく心を鎮め、護り、制す(治め)れば、心が浄まります(GS1心詩G003、004で記述)。それと同時に、努力して、行いを心に伴わせませす。このステップを繰り返す(これが修行)ことにより、その人の行動規範が、「怠らずに励む」↓「努め励む」↓「学び努める」へとステップアップしていきます(詩G083、084のコメント参照)。これにより、自然と善悪の計らいがなくなり始め、何も恐れることがなくなり始めます。この境地の究極にたどり着いた人が、ブツダ・真人なのだと考えています。

この章の「花」は、真理(真利、善的)のこともあるし、六欲の対象の場合(悪的)もあります(付録5心の汚れ(2)参照)。「美」を一つ取っても、光からのものか、または、闇からのものか、なかなか見分けがつかない時もあります。この節では、この対象的なものを花と喩えています。本節は14詩から成ります。

詩番号 G083 (F085, B, 0044, OS4) · G084 (F086, B, 0045, OS4) [@ GS 8 花いちなん]

G083 だれ (どの魂) がこの大地 (心) を正しく治めるであろうか？

だれが閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを正しく治めるであろうか？

わざと巧みな人が花を摘むように、善く説かれた真理のことばを摘み集めるのはだれであろうか？

元詩 だれがこの大地を征服するであろうか？

だれが閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを征服するであろうか？

わざと巧みな人が花を摘むように、善く説かれた真理のことばを摘み集めるのはだれであろうか？

G084 学び努める人こそ、この大地 (心) を正しく整え、閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを正しく治めるであろう。

わざと巧みな人が花を摘むように、学びつとめる人々こそ善く説かれた真理のことばを摘み集めるであろう。

元詩 学びにつとめる人こそ、この大地を征服し、閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを征服するであろう。

わざと巧みな人が花を摘むように、学びつとめる人々こそ善く説かれた真理のことばを摘み集めるであろう。

一次 学び努める人こそ、この大地 (心) を正しく治め、閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを正しく治めるであろう。

わざと巧みな人が花を摘むように、学びつとめる人々こそ善く説かれた真理のことばを摘み集めるであろう。

(コメント)

詩 G083 での問いかけに対する答えが詩 G084 です。

「学びにつとめる」は「学び努める」と表記します。

中村氏の注釈では、「大地」とは「自己」という見解もあると紹介されています。しかし、私は自己は愚かな部分で副守護神様を指すと考えていますので、「治められる」「征服される」のは心、そしてその統治者は正守護神様と本守護神様であるべきという考えに立っています。よって「大地」とは「心」であるとしました。「征服する」というのは、「治める」よりは、だいぶ強い表現で、私は征服という強い語気は好みませんので、「征服する」を「正しく治める」と書き換えます。

「閻魔の世界と神々ともなるこの世界」は、三千世界 (あの世もこの世も全てミックス) の事だと思っています。

三次元のこの世界は時間は超えられませんが、色々な霊格の存在が行き交う擬似の三千世界だと私は捉えています。

また、この詩は、カッコを抜いても成立しますし、カッコだけを残しても成立します。つまり、2通りの読み方ができるわけですが、カッコを抜いた場合の詩は、世界のリーダーへの教えとなります。

(番外編1) ちなみに、初めから高い目標を掲げさせて、人を壊すというのは、悪魔の常套手段です。自分の置かれた場所、やらなければならぬ事とやりたい事を区別し、冷静に見分けて分相応に対応しないと、悪魔の思う壺です。でも、これは結構難しいので、最初は、過

小評価から始めて、徐々に上げて行き、自分の位置を見つけることによって、自分の立ち位置を自分で判断するのです。ですから、時間が必要で、焦りは禁物です。対象が大人であれば、自分でやって周囲の人たちに意見をもらったりしながら自分で考えて見極めなくてはなりません。対象が子供であれば、親が見極めて本人に納得させる必要があります。掲げる目標に対するこのチェックポイントは意外に重要です。ここで、間違えさせられて、悪魔にやられてしまう人が多いのです。しかし、私は状況も悪いので仕方ないと思っています。最後に、今の目標が習得できてきたなら、次の目標を掲げることができる勇気がある事も大切です。

(番外編2) 学ぶという言葉は、なかなか広い意味があります。普通に生きて生活する中で得られる経験により得られる知識や体験、技術なども「学ぶ」に入れるのが主流ですが、これは、実は「習う」です。これらを習得した上で、さらに自分の意思と思考でプラスαする部分が、実は「学ぶ」と言われています。後者が学問でしょう。

普通に生きていく中で、人として正しく生きることができていることは、技術の習得よりは大切で、その土台がしっかりした人が習得したものは世の中にとって価値のあるものです。その上で「学問的学ぶ」を、この詩では求めているのだと思います。この土台がない人が、「技術の習得」や「学問的学ぶ」を行っても、閻魔の世界の住人に、てい良く使われて、悪いカルマを背負わされてしまうだけです。(番外編3) 世の中のスピ系や仏教系では、「正しい」を固定的な概念で、他を排除する思想につながる言葉として忌み嫌う傾向があると思います。間違った正義が横行するので無理ありませんが、しかし「正しい」という言葉自体を否定するのはやりすぎだと思いません。真理とは唯一無二であり、(一点)に止まるという漢字の正の成り立ちを考えると、「正」の字は、真理の重要な側面を表したものではありませんかと思うのです。諸行無常の世の中で、揺るがない真理を探し、それに従うのが、私たち人間の務めで、その根本の「正」を否定することは、仏魔の言いなりになりやすくなるという危険があることを認識した方が良く考えています。

詩番号 G085 (F087, C, 0046, OS4) ① @ GS 8 花にちなんや ①

G085 死に際しこの身は泡沫(うたかた)のようだと思ふであろう。だが、死ぬよりも前に実にかげろうのようなはかないものと実はそうでないものをさとれ。かげろうのようなはかないものは悪魔の花の矢と知り、これを断ち切り悪魔に魅入られないよう生きよ。

元詩 この身は泡沫のごとくであると知り、かげろうのようなはかない本性のものであると、さとったならば、悪魔の花の矢を断ち切って、死王に見られないところへ行くであろう。

一次 この身は泡沫(うたかた)のごとくであると知り、かげろうのようなはかない本性のものであるとさとり、そして悪魔に魅入られないよう、悪魔の花の矢を断ち切れ。

(コメント)

死王＝悪魔とします。

心を守るものが体であり、とても重要な人間の要素ですから、大切にしなければいけないという立場です。「悪魔の花の矢」は五欲（本書では六欲）本体で、色によりできたかげろうのようなはかないものです。類似詩あり GS 5 世の中詩 G046。

詩番号 G086 (F088, B, 0047+0048, OS4) Ⅱ @ GS 8 花にちなんじ

G086 花を摘むのに夢中になっている人を死がさらって行き、眠っている村を洪水が押し流す。

花を摘むのに夢中になっている人が、未だ望みを果たさないうちに、死神（悪魔）が彼を征服する。

元詩 0047: 花を摘むのに夢中になっている人を、死がさらって行くように、眠っている村を、洪水が押し流して行くように。

0048: 花を摘むのに夢中になっている人が、未だ望みを果たさないうちに、死に神が彼を征服する。

(コメント)

仏弟子への教えです。

この2つの詩の「花」は、五欲（本書では六欲）であり、「悪魔の花の矢」であり、色によりできたはかないかげろうのようなこの世の虚像です。

詩番号 G087 (F089, A, 0049, OS4) Ⅱ @ GS 8 花にちなんじ

G087 蜜蜂は（花の）色香を害（そこなわず）に、汁をとって、花から飛び去る。

修行僧が村に行くときは、そのようにせよ。

元詩 蜜蜂は（花の）色香を害（そこなわず）に、汁をとって、花から飛び去る。

聖者が村に行くときは、そのようにせよ。

一次 蜜蜂は（花の）色香を害（そこなわず）に、汁をとって、花から飛び去る。

修行者が村に行くときは、そのようにせよ。

(コメント)

聖者は、ブツダ・真人（覚醒者）に当たると解釈しています。もはや覚醒者はこの教えを必要としないでしょう。ですから、聖者ではなく修行者へと記述を変更しました。この過ちは、実に犯しやすいです。

詩番号 G088 (F090, C, 0050, OS4) Ⅱ @ GS 8 花にちなんで Ⅱ

G088 他人のした事としなかった事を見極めて、他人の過ちから学び、良い行ないを実行せよ。
自分のした事としなかった事を省み、愚かな自己の過失はすみやかに改めよ。

元詩 他人の過失を見るなかれ。他人のしたこととしなかったことを見るな。
ただ自分のしたこととしなかったことだけを見よ。

一次 他人のした事としなかった事を鑑みて、他人の過失から学び、良い行ないを実行せよ。
自分のした事としなかった事を省み、自己の過失はすみやかに改めよ。

(コメント)

他人は、先生ですから、良く観察し学ぶべきです。ですから、根本的に、真逆の教えで、悪魔の教えと判断しました。そこで、常識的に書き換えました。

詩番号 G089 (F091, A, 0051, OS4) / G090 (F092, A, 0052, OS4) Ⅱ @ GS 8 花にちなんで Ⅱ

G089 うるわしく、あでやかに咲く花でも、香りの無いものがあるように、善く説かれたことばでも、それを実行しない人には
実りが無い。

元詩 書換えなし

G090 うるわしく、あでやかに咲く花で、しかも香りのあるものがあるように、善く説かれたことばも、それを実行する人には、
実りがある。

元詩 書換えなし

(コメント)

真理のことばを生かすも殺すも、個々の人間の実行次第ということです。

詩番号 G091 (F093, A, 0053, OS4) Ⅱ @ GS 8 花にちなんで Ⅱ

G091 うず高い花を集めて多くの華鬘(はなかざり)をつくるように、人として生まれまた死ぬべきであるならば、多くの善い
ことをなせ。

元詩 書換えなし

(コメント)

その通りです。ちなみに、人として生まれてまた死ぬべきであるならば、最低条件は悪いことをしないことです。

詩番号 G092(F094, A, 0054, OS4) ' G093 (F095, A, 0055, OS4) ' G094(F096, A, 0056, OS4) [@ GS 8 花にちなんで]

G092 花の香りは風に逆らっては進んで行かない。梅檀(せんだん)もタガラの花もジャスミンもみなそうである。

しかし徳のある人の香りは、風に逆らっても進んで行く。徳のある人はすべての方向に薫る。

元詩 書換えなし

G093 梅檀(セندان)、タガラ、青蓮華、ヴァツシキー—これら香りのあるものどもうちでも、徳行の香りこそ最上である。

元詩 書換えなし

G094 タガラ、梅檀(セندان)の香りは微かであって、大したことはない。しかし徳行のある人々の香りは最上であって、天の神々にもとどく。

元詩 書換えなし

(コメント)

香りで嗅ぎ分けるのが大切なんです。日月神示には、鼻と額での判断が正しいと書いてありました。私はその2つに気をつけています。

詩番号 G095 (F097, A, 0057, OS4) [@ GS 8 花にちなんで]

G095 学び努めて、徳行を完成し、正しい智慧によって解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

元詩 徳行を完成し、つとめはげんで生活し、正しい智慧によって解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

一次 慎みを完成し、学び努めて生活し、正しい智慧によって解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

(コメント)

「つとめはげんで」を「学び努めて」と書き換えます。

「徳行を完成」↓「慎みの完成」↓「徳行を完成」と書き換えを行いました。学び努めるが完成したら徳行が完成するのでしょうか、詩

文の並び替えをしました。

詩番号 G096 (F098, B, 0058+0059, OS4) [@ GS 8 花ごちなんや]

G096 塵芥にも似た盲(めしい)た凡夫のあいだにあって、正しくめざめた真人は智慧により輝く。
あたかも、大道に捨てられた塵芥(ちりあくた)の山堆(やまずみ)の中から香しく麗しい蓮華が生じ輝くように。

元詩 O058: 大道に捨てられた塵芥(ちりあくた)の山堆(やまずみ)の中から香しく麗しい蓮華が生ずるように。

O059: 塵芥にも似た盲(めしい)た凡夫のあいだにあって、正しくめざめた人(ブツダ)の弟子は智慧をもって輝く。

(コメント)

「正しくめざめた人(ブツダ)の弟子」は、当方の定義ですとかなり領域が広いので、「正しくめざめた真人」置き換えました。
2つの対詩の関係を、構築し直し合体します。

GS 9 節 楽しみ

本節に多く出る「安らぎに帰した真人」は「涅槃(悟りによる解脱)に入った真人」でありつまりは「み仏(ブツダ)」を意味すると考えられます。「み仏」の感じる楽しみを謳っている詩ではないかと思えます。本節は13詩から成ります。

詩番号 G097 (F099, C, 0197, OS15) ` G098 (F100, A, 0198, OS15) ` G099 (F101, A, 0199, OS15) [@ GS 9 楽しみ]

G097 安らぎに帰した真人は、怨みをいだいている人々の間にあって怨むこと無く大いに楽しく生きる。怨みをもっている人々の間にあって怨むこと無く暮らす。

元詩 怨みをいだいている人々の間にあって怨むこと無く、我らは大いに楽しく生きよう。怨みをもっている人々の間にあって怨むこと無く、我らは暮らしていこう。

一次 怨みをいだいている人々の間にあって、怨むこと無く、我らは暮らしていこう。

G098 安らぎに帰した真人は、悩める人々のあいだにあって、悩み無く大いに楽しく暮らす。

元詩 悩める人々のあいだにあって、悩み無く、大いに楽しく生きよう。悩める人々のあいだにあって、悩み無く暮そう。

一次 悩める人々のあいだにあって、悩み無く暮らそう。

G099 安らぎに帰した真人は、貪っている人々の間にあって患い無く貪らないで、大いに楽しく暮らす。

元詩 貪っている人々の間にあって、患い無く、大いに楽しく生きよう。貪っている人々の間にあって、貪らないで暮らそう。

一次 貪っている人々の間にあって、患い無く、貪らないで暮らそう。

(コメント)

「恨み」、「悩み」、「貪り」は、すべて煩惱で、人を墮落させる種ですので、これらに囚われることを否定します。しかし、「恨み」、「悩み」、「貪り」がきっかけで、どうやってこれらからの囚われから離れ得るのか思考・実践し人間の魂が成長するのです。ですから、これらを生む元は必ず存在するのが、この世なのです(「付録5 心の汚れ」参照)。

真人ともなれば、このように暮らしが多面的に楽になるのではないかと思われます。一連の詩は、一般人には適応できませんので、真人クラスに対応することを明示しました。

G325 詩の形式はこの3詩に似ています。

詩番号 G100 (F102, A, O219, OS16) ` G101 (F103, A, O220, OS16) [@ GS 9 楽しみ]

G100 久しく旅に出ていた人が遠方から無事に帰って来たならば、親戚・友人・親友たちは彼が帰って来たのを祝う。

元詩 書換えなし

G101 そのように善いことをしてこの世からあの世に行った人を善業が迎え受ける。――親族が愛する人が帰って来たのを迎え受けるように。

元詩 書換えなし

(コメント)

OS 16 愛するものから移動。

詩番号 G102 (削除より, C, O200, OS15) ` G103 (削除より, C, O201, OS15) [@ GS 9 楽しみ]

G102 安らぎに帰した真人は、所有にとらわれず喜びとともに、いつも楽しく生きるであろう。

元詩 われわれは一物も所有していない。楽しく生きていこう。光り輝く神々のように、喜びを食むものとなろう。

G103 安らぎに帰した真人は、勝敗と怨みから放(はな)たれる。

元詩 勝利からは怨みが起こる。敗れた人は苦しんでふす。安らぎに帰した人は安らかにふす。

(コメント)

削除しましたが、復活させました。「放たれる」は自発的ではなく、自然と離れていく意味に重きを置いています。

詩番号 G104 (F104, B, O202, OS15) ` G105 (F106, B, O204, OS15) [| @ GS 9 楽つみ |]

G104 妄執に等しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、増悪に等しい不運は存在しない。

色によるかりそめの事象に等しい苦しみは存在しない。涅槃(悟りによる解脱)にまさる楽しみは存在しない。

元詩 愛欲に等しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、増悪に等しい不運は存在しない。

このかりそめの身に等しい苦しみは存在しない。安らぎにまさる楽しみは存在しない。

一次 欲望に等しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、増悪に等しい不運は存在しない。

このかりそめの身に等しい苦しみは存在しない。安らぎにまさる楽しみは存在しない。

G105 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の親族であり、涅槃(悟りによる解脱)は最上の楽しみである。

元詩 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の知己であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。

一次 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の親族であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。

(コメント)

G104: 愛欲↓欲望↓妄執と置き換えました(付録5(2)参照)。「かりそめの身」は、荻原雲来氏訳出の法句経では「蘊(うん)」となっています。「色」によりできる事物とそれに反応する自分と捉え「色によるかりそめの事象」と書き直しました。付録7(3)般若心経 10行目の注釈参照。

G106: 「知己」を、片山一良氏の訳「親族」としました(https://76263383.at.webry.info/201004/article_6.html さん参照)。

詩番号 G106 (F107, C, O205, OS15) [| @ GS 9 楽つみ |]

G106 一人になり心を落ち着けて、禅定により真理と知慧の味を知れば、恐れがなくなっていく。

元詩 孤独(ひとりい)の味、心の安らぎの味をあげわったならば、恐れも無く、罪過も無くなる、――真理の味をあげわいながら。

一次 心を落ち着けて孤独の味を味わい、重ねて、禅定により真理と知慧の味を味わうならば、恐れがなくなっていく。

(コメント)

詩の構成順番が狂わされているのでしよう。「ブツダのことば」の詩(82)で、「この世では正しい教え(信仰)が人間の最上の富である。徳行に篤いことは安樂をもたらす。実に真実が味の中で美味である。知慧によって生きるのが最高の生活であるという」と謳われています。禅定は、真理を理解し知慧を得るためのものです。そして、禅定を行う条件として、一人になって心を落ち着かせるという環境が必要だと私は考えます。

罪過(悪いカルマ)は、自得により清算が原則と言われていますので、禅定により罪過がなくなる部分の記述は削除します。また、真理を理解し知慧を得れば恐れがなくなるだろうというのは容易に予測できますので、「恐れがなくなる。」は残します。注ですが、仏教において真実は真理と同じことを表します。

詩番号 G107 (F108, C, O206, OS15) ` G108 (F109, A, O207, OS15) [@ GS 9 楽しみ]

G107 もろもろのブツダ・真人に会うのは善いことである。愚かなる者どもに会わないならば、心はつねに楽しいであろう。

元詩 もろもろの聖者に会うのは善いことである。かれらと共に住むのはつねに楽しい。愚かなる者どもに会わないならば、心はつねに楽しいであろう。

G108 愚人とともに歩む人は長い道のりにわたって憂いがある。愚人と共に住むのは、常に辛いことである。――仇敵とともに住むように。賢い人と共に住むのは楽しい。――親族に出会うように。

元詩 愚人とともに歩む人は長い道のりにわたって憂いがある。愚人と共に住むのは、つねに辛いことである。――仇敵とともに住むように。心ある人と共に住むのは楽しい。――親族に出会うように。

(コメント)

G106: 聖者をブツダ・真人と書き換えます。中間部の「かれらと共に住むのはつねに楽しい。」は、この詩自体が「会うことと会わないこと」の対比で完結するべきだと感じましたので削除します。ブツダ・真人ともなれば、普通の人々が、彼らの一存で一緒に住むことはなかなか叶わないでしょう。

G107: 心ある人は賢い人と置き換えます。この詩が「賢い人と愚かな人」、「歩む(住む)と住まない」で対比が取れてきます。

詩番号 G109 (F110, B, O208, OS15) 〔@ GS 9 楽しみ〕

G109 よく気をつけていて、明らかな知恵あり、学ぶところ多く、忍耐づよく、真理を護る、そのような立派なブツダ・真人に親しめよ。

元詩 よく気をつけていて、明らかに知恵あり、学ぶところ多く、忍耐づよく、戒めをまもる、そのような立派な聖者・善き人、英知ある人に親しめよ。―月がもろもろの星の進む道にしたがうように。

(コメント)

聖者・善き人、英知ある人を、ブツダ・真人と置き換えましょう。

守るべき戒めは、真理を体得するために、人間のためにあるものと、私は捉えますので、真人やブツダには必要ないです。真人やブツダは真理(正しい道)を護ってくださいと考えているので、「戒め」を「真理」、「まもる」を「護る」と書き換えます。

「月がもろもろの星の進む道にしたがうように」ですが、月を観察すると、地球から一番近く、28日周期で地球を一周するだけのことはあって、遙か彼方の星たちと運行が違うのです。もちろん、惑星の火星や金星も同じように、他の多くの遠い星たちとは運行が異なります。科学的に根拠がわからないので、この部分は削除します。

GS 10 節 やまやまなこと

本節は9詩から成ります。

詩番号 G110 (F111, B, O290, OS21)´ G111 (F112, A, O291, OS21)´ G112 (F113, A, O292, OS21)´ G113 (F114, A, O293, OS21) 〔@ GS 10 やまやまなこと〕

G110 つまらぬ快樂を捨てることによって、広大なる樂しみを得ることができるのなら、賢い人は広大なる樂しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。

元詩 つまらぬ快樂を捨てることによって、広大なる樂しみを見ることができるとのなら、心ある人は広大なる樂しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。

G111 他人を苦しめることによって自分の快樂を求める人は、愚かな人であって怨みの絆にまつわれて怨みから免れることができない。

元詩 他人を苦しめることによって自分の快樂を求める人は、怨みの絆にまつわれて、怨みから免れることができない。

G112 なすべきことをなおざりにし、なすべからざることをなす、遊びたわむれ放逸なる愚かな者どもには汚れが増す。

元詩 なすべきことを、なおざりにし、なすべからざることをなす、遊びたわむれ放逸なる者どもには、汚れが増す。

G113 人が正しく努め、身体を慎み、為すべからざることを為さず、為すべきことを常に為している賢い人々は、もろもろの心の汚れがなくなる。

元詩 常に身体(の本性)を思いつづけて、為すべからざることを為さず、為すべきことを常に為して、心がけて、みずから気をつけている人々には、もろもろの汚れがなくなる。

一次 常に身体(の本性)を思い続けて、為すべからざることを為さず、為すべきことを常に為して、心がけて、自ら気をつけている賢い人々には、もろもろの汚れがなくなる。

(コメント)

これら一連の詩は、汚れをなくす具体的な実践方法を示す貴重な詩です。

G110: 「心ある人」は「賢い人」、「見る」は「得る」に置き換えましょう。

G111: 「快樂を求める人は」は「快樂を求める人は愚かな人であって」と書き換えます。

G112: 「放逸なる者ども」は「放逸なる愚かな者ども」と書き換えます。

G113: 「身体(の本性)」は意味が分かりませんので、G168詩の「身体を慎む」に変更しました。当方は、身と意と口を慎むことが心を整えることと同義だと考えています。

詩番号 G114 (F115, C, O302, OS21) ` G115 (F116, B, O305, OS21) [@ GS 10 やまゆまな]]

G114 在家の生活は困難であり、家に住むのも難しい。なぜならば、心を同じくしない人々と共に住むのは難しいからである。

出家の生活も困難であり、それを楽しむことは難しい。出家者が策を弄して利益を求めると、苦しみに遇う。だから、出家者は、策を弄して利益を求めてはならない。

元詩 出家の生活は困難であり、それを楽しむことは難しい。在家の生活も困難であり、家に住むのも難しい。心を同じくしない人々と共に住むのも難しい。(修行僧が何かを求めて)旅に出て行くと、苦しみに遇う。だから旅に出るな。また苦しみに遇うな。

G115 修行僧は、林の中でひとり坐し臥し歩むだけの行に意味がないことを知り、常になおざりになることなく心を整えることを樂しめ。

元詩 ひとり坐し、ひとり臥し、ひとり歩み、なおざりになることなく、わが身をととのえて、林のなかでひとり樂しめ。

一次 出家者は、林の中で、ひとり坐し、ひとり臥し、ひとり歩もうとも、なおざりになることなく、自己を整えることを樂しめ。

(コメント)

G114：出家と在家で、詩がごちゃごちゃに編成されているので並べ直します。

出家者や修行僧はこの世の利益を求めて策を弄することは一切禁止されていますが、これが正しく伝わるように書き換えます。

また、お釈迦様ご自身が旅でご自分の教えを広められたのですから、決して「旅に出るな」とおっしゃるはずがないので、旅に関する記述は削除します。

G115：この文章の主語が、前の詩文(O304)との関連を見てもはっきりしません。ですが、意味合い的に出家者への助言であろうと考えられますので、主語は「出家者」にします。

出家者に奨励されている修行を書き出していますが、お釈迦様はこれらは意味がないというお立場でしたから、書き出されている修行は軽く否定して、重要な「常になおざりになることなく、心を整えることを樂しめ」を強調しました。

「自己」を「心」に置き換えました。「林の中で一人樂しめ」は、「林の中で一人であっても樂しめ」に書き換えます。

「わが身をととのえて」↓「自己を整えて」↓「わが身をととのえて」と書き直しました。

修行僧、出家者は、外に出て行って、真理を在家に説くのが仕事ですから、辛いことが多くても、外に出なくてはならない時もあります。

詩番号 G116 (F117, A, O217, OS16) ` G117 (F118, A, O303, OS21) ` G118 (F119s, A, O304, OS21) Ⅱ @ GS 10 やまやまな

ハナ Ⅱ

G116 徳行と見識とをそなえ、法にしたがって生き、真実を語り、自分のなすべきことを行なう人は、人々から愛される。

元詩 書換えなし

G117 信仰あり、徳行そなわり、名声と繁栄を受けている人は、いかなる地方におもむこうとも、そこで尊ばれる。

元詩 書換えなし

G118 善き人々は遠くにいても輝く、—雪を頂く高山のように。

善からぬ人々は近くにいても見えない、—夜陰に放たれた矢のように。

元詩 書換えなし

GS 11 節象

仏教では、象は、立派な人（真人、覚醒者）、そして王様や王家などを比喻して使われることが多いようですが、明確な定義はありません。しかし、力強いものの例えとして用いられており、例えられているものは主に人ですが、心の場合（G125, G126）もあります。それらが善の場合もあり悪の場合もあるようです。

ただし、象で表現されているものに関しては、必ず力強さが前提にあり、それが無い場合でかつ良いとは言い難いものは、豚と表現しているようです（G123）。

また、時を経るに従って、口伝による劣化で、文章がぼやけてきているとは考えられますが、極めて暗示的な詩が多く、全体としては魔の手の改ざんの少ない章だと思います。それゆえに意味が分からず、地味な印象がありますが、お釈迦様やその守護神様の説法を何となく肌で感じる章です。本節は13詩から成ります。

詩番号 G119 (F120, A, O320, OS23) ` G120 (F121, B, O321, OS23) [| @ GS 11 象 |]

G119 戦場の象が、射られた矢にあたって堪え忍ぶように、われらは人のそしりを忍ぼう。多くの人は実に性質（たち）が悪いからである。

元詩 書換えなし

G120 心がおさまり、世のそしりを忍ぶ人は、人々の中にあっても最上の人となる。馴らされた象が、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなり、最上の象となるように。

元詩 馴らされた象は、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなる。世のそしりを忍び、自らをおさめた者は、人々の中にあっても最上の者である。

一次 世のそしりを忍び、心をおさめた者は、人々の中にあっても最上の者となる。馴らされた象が、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなり、最上の象となるように。

(コメント)

G119：なし

G120：象と人間の対応がよくわからないので、「最上の象となる。」という文章を挿入します。

「自らをおさめた者」は「心がおさまった」と書き換え語句を整えます。

詩番号 G121 (F122, A, O322+O323, OS23) 【@ GS 11 象】

G121 馴らされた騾馬は良い。インダス河のほとりの血統よき馬も良い。クンジャラという名の大きな象も良い。しかし心が治まった人は、これらよりもすぐれている。なぜならば、これらの乗物（身分、血統や財）によって、未到の地（涅槃）に行くことはできない。そこへは、心を整え心が治まった人がおもむく。

元詩 322： 馴らされた騾馬は良い。インダス河のほとりの血統よき馬も良い。クンジャラという名の大きな象も良い。しかし自己をととのえ

た人はそれらよりもすぐれている。

323： 何となれば、これらの乗物によっては未到の地（ニルヴァーナ）に行くことはできない。そこへは、慎しみある人が、おのれ自らをよくととのえておもむく。

一次 馴らされた騾馬は良い。インダス河のほとりの血統よき馬も良い。クンジャラという名の大きな象も良い。しかし自己を整え正しく心を治めた人は、これらよりもすぐれている。なぜならば、これらの乗物（身分、血統や財）によって、未到の地（ニルヴァーナ）に行くことはできない。そこへは、自己を整え正しく心を治めた人がおもむく。

(コメント)

322：

馴らされた騾馬は生活に余裕があるバイシヤ（カースト制における一般市民）、血統良き馬は中小王侯貴族、クンジャラという名の大きな象はクシャトリヤの中でも大王に属する人たちを指すのでしよう。

上記以外の人は人に非ずという過酷な世の中でしたが、お釈迦様は、この制度を、静かに全面否定なさいました。そこから漏れた下層の人々にも、心を整え心がおさまることによって、誰でも、最上の人（真人）になることが出来ると教えてらっしゃいます。これに関しては、「付録4人間の分類」（2）「修行者」で議論してしますので参照ください。

「自己をととのえた」と「おのれ自らをよくととのえて」という表現は改めました。

323：

乗り物は、身分、血統や財の喩えです。

二つの詩を一つに統合します。

詩番号 G122 (F123, C, O324, OS23) 【@ GS 11 象】

G122 「財を守る者」という汚れに染まった心は、いかんとも制し難く、かたくなに真理を拒む。この心は、情欲を慕っている。あたかも、捕らえられても、一口の食物も食わず、こめかみから液汁をしたたらせて強暴になっている発情期の象が象の林を慕うように。

元詩 「財を守る者」という名の象は、発情期にこめかみから液汁をしたたらせて強暴になっているときは、いかんとも制し難い。捕らえられると、一口の食物も食べない。象は象の林を慕っている。

一次 「財を守る者」という汚れに染まった心は、いかんとも制し難く、かたくなに真理を拒む。この心は、執着を慕っている。

あたかも、捕らえられても、一口の食物も食べず、こめかみから液汁をしたたらせて強暴になっている発情期の象が象の林を慕うように。
(コメント)
わからないこと極まりないのですが、「暴れ象」＝「財を守る者」としているようです。

詩番号 G123 (F124, A, O325, OS23) ` G124 (F125, A, O326, OS23) ` G125 (F126, A, O327, OS23) [@ GS 11 象]

G123 大食いをして、眠りをこのみ、ころげまわって寝て、まどろんでいる愚鈍な人は、大きな豚のように糧を食べて肥り、くりかえし母胎に入って(迷いの生存をつづける)。

元詩 書換えなし

G124 この心は、—以前には愚かな自己にしたがい—望むがままに、欲するがままに、快きがままに、さすらっていた。今やわたくしはその心をすっかり抑制しよう、—象使いが鉤をもって、発情期に狂う象を全くおさえつけるように。

元詩、一次 この心は、以前には、望むがままに、欲するがままに、快きがままに、さすらっていた。今やわたくしはその心をすっかり抑制しよう、—象使いが鉤をもって、発情期に狂う象を全くおさえつけるように。

G125 心は泥沼に落ち込んだ象のようである。

だから、努め励むのを楽しめ。おのれの心を護れ。愚かな自己を難処から救い出せ。

元詩、一次 心は泥沼に落ち込んだ象のようである。

だから、努め励むのを楽しめ。おのれの心を護れ。自己を難処から救い出せ。

(コメント)

どれもとても正確な詩文だと思います。自己とは、心に潜む悪魔の自分と考えていますので、「愚かな自己」と表し、心を正しく整え護ることに、愚かな自己を救い出すのが、私たちの役目であります。

詩番号 G126 (F127, A, O328, OS23) ` G127 (F128, A, O329, OS23) ` G128 (F129, A, O330, OS23) [@ GS 11 象]

G126 もしも思慮深く聡明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができるならば、あらゆる危険困難に打ち克つて、こころ喜び、念いをおちつけて、ともに歩め。

元詩 書換えなし

G127 しかし、もしも思慮深く聡明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができなければ、国を捨てた国王のように、また林の中の象のように、ひとり歩め。

元詩 書換えなし

G128 愚かな者を道伴れとするな。それなら独りで行くほうがよい。

悪いことをするな。

求めるところは少なくあれ。

― 林の中にある象のように。

元詩 愚かな者を道伴れとするな。独りで行くほうがよい。孤独（ひとり）で歩め。悪いことをするな。求めるところは少なくあれ。― 林の中にいる象のように。

詩番号 G129 (F130, C, O331, OS23) ` G130 (F131, C, O332, OS23) [@ GS 11 象]

G129 (大きかろうとも、小さかろうとも)、どんな果報にも満足するのは楽しい。

善いことをしておけば、命の終るときに楽しい。

(悪いことをしなかったので)、あらゆる苦しみ(の報い)を除くことは楽しい。

元詩 事がおこったときに、友だちのあるのは楽しい。(大きかろうとも、小さかろうとも)、どんなことにでも満足するのは楽しい。善いことをしておけば、命の終るときに楽しい。(悪いことをしなかったので)、あらゆる苦しみ(の報い)を除くことは楽しい。

G130 世に父を敬うことは楽しい。また母を敬うことは楽しい。世にブツダや真人を敬うことは楽しい。天下に正しい道があるのは楽しい。

元詩 世に母を敬うことは楽しい。また父を敬うことは楽しい。世に修行者を敬うことは楽しい。世にバラモンを敬うことは楽しい。

(コメント)

G129: ブツダゴースによる改ざんがなされています。中村氏の注釈によると、「事がおこったときに、友だちのあるのは楽しい」がブツ

ダゴースによる注釈に従っているらしいのですが、詩G128で、「愚かなものが一緒なくらいなら一人でいなさい。」という教えと反するのです。ですから、この部分は消去します。

「どんなことにでも」という表現はあまりに乱暴なので、「どんな果報にでも」と改めます。

G130:「ブツダゴースによる改ざんがなされています。中村氏の注釈によると、「世にバラモンを敬うことは楽しい」の部分がブツダゴースによる注です。しかし、中村氏は漢訳法句経で、「天下に道あるは樂し。」を紹介しています。

バラモンは、現在の仏魔支配の仏教では、その頂点に位置するととらえるべきです。お釈迦様は、バラモンについて「ブツダのことは第二小なる章『バラモンにふさわしいこと』で、昔のまつとうだったバラモンについて言及なさっています。このくだりは、削除されたOS22「やまやまな」と詩O294と295のコメントに載せてありますので参考にしてください。

詩番号 G131 (F132, A, O333, OS23) [@ GS 11 象]

G131 老いた日に至るまで慎みをたもつことは楽しい。信仰が確立していることは楽しい。明らかな知恵を体得することは楽しい。もろもろの悪事をなさないことは楽しい。

元詩 老いた日に至るまで戒しめをたもつことは楽しい。信仰が確立していることは楽しい。明らかな知恵を体得することは楽しい。もろもろの悪事をなさないことは楽しい。

(コメント)

「戒め」ではなく、「慎み」を使います。

老いた日に至るまで慎みを保つためには、幼少期（全て親の責任）や青年、中年時代（幼少期の影響を受けつつも自分の責任が生じる）を、如何に道を大きく誤らずに進んだか？ が問題です。人生の総決算が老齢期です。

若い時に変な宗教や歪んだイデオロギーを頭に叩き込まれると、老齢期にはその思考回路から離れられずに気付かないうちに周りに対して不快かつ迷惑な行動を取っているのです。こんな状態で老いた時に慎みなんか守れるはずはないのです。

幼少期の親の影響は絶大ですから、ある人の人生が、周りへの毒の散乱で終わった場合、その人の親には絶大な責任があるのは確かです。しかし、親から離れた20代で、自分から良くしていこうと決心したら救われる道もあります。これは、とても大変なことなわけではありません。今、こんなに世の中が乱れてしまっているのです。このような状況でアップアップしてらっしゃる方もいると思います。でも、何とか歯を食いしばって、正当な方法で三年頑張ってみてください。何かが必ず変わります。40歳以降、あまりに修正不可能であると、病魔に捕まってしまうのですが、30代までは、本当に十分に大きな軌道修正ができます。

40代以降でも、年々、修正できる範囲が狭まってはきますが、大幅な踏み外しでなければ、軌道修正はできます。とりあえず、長いけれど三年、歯を食いしばって頑張った後に自分の中に映る世の中を楽しみにしてみてください。きっと、最高の幸せ感はないでしょうが、

物事の見え方の変化に驚くことでしょう。

GS 12 ひと組ぞつ

本節は14詩から成ります。

詩番号 G132 (F133, A, 0001, OS1) / G133 (F134, A, 0002, OS1) [@ GS 12 ひと組ぞつ]

G132 ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によって作り出される。もしも、汚れた心で話したり行なったりするならば、苦しみはその人に付き従う。

— 車をひく(牛)の足跡に車輪がついてゆくように

元詩 書換えなし

G133 ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によって作り出される。もしも清らかな心で話したり行なったりするならば、福樂はその人に付き従う。
— 影がそのからだから離れないように。

元詩 書換えなし

(コメント)

これでひと組、対。

詩番号 G134 (F135, A, 0003, OS1) / G135 (F136, A, 0004, OS1) [@ GS 12 ひと組ぞつ]

G134 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝った。彼はわれから強奪した。」という思いを抱く人には、怨みはついに息(や)むことがない。

元詩 書換えなし

G135 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝った。彼はわれから強奪した。」という思いを抱かない人には、ついに怨みが息(や)む。

元詩 書換えなし

(コメント)

これでひと組、対。

詩番号 G136 (F137, A, 0005, OS1) [@ GS 12 ひと組ず]

G136 この世においては、怨みによって怨みに報いても、怨みが息(や)むことはない。怨みを離れ愛をもってこそ怨みが息(や)む。これは永遠の真理である。

元詩 実はこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息(や)むことがない。

怨みを捨ててこそ息(や)む。これは永遠の真理である。

一次 実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息(や)むことがない。

怨みを離れてこそ息(や)む。これは永遠の真理である。

(コメント)

「捨てて」ではなく、「離れて」にしました。立花俊道氏訳の法句経(ダンマパダ)より「此の世に於て怨は怨を以てしては終に解くべからず、愛を以てぞ解くべき、これ永劫不易の法なり。」

荻原雲来氏訳の法句経(ダンマパダ)「世の中に怨は怨にて息むべきやう無し。無怨にて息む、此の法易はることなし。」
「恨みが無いこと」を転じて「愛により」と訳した立花氏の大胆さとの確さに息を呑みました。

詩番号 G137 (F138, B, 0006, OS1) [@ GS 12 ひと組ず]

G137 私は常に死を覚悟している。

この覚悟を普通の人々は知らない。

しかし、(この)覚悟をした人は、(この世に常住する)争いから放たれる。

元詩 「われらは、ここにあって死ぬはずのものである。」と覚悟をしよう。―このことわりを他の人々は知ってはいない。しかし、このことわりを知る人々があれば、争いはしずまる。

一次 私は常に死を覚悟している。

この覚悟を普通の人々は知らない。

しかし、(この) 覚悟をした人には、(この世に常住する) 争いがしずまる。

(コメント)

塵穢れの多いこの三次元社会では、正しく覚醒した人は死がいつもとなり合わせだと感じることでしよう。この感覚を死の覚悟と表現しました。この世でのご利益を求めないという精神を助け、余計な悪いカルマを生産するのを防ぎます。常に死を覚悟して、この世のことを対処すれば、つまらない争いに巻き込まれないか、もしくは被害最小限という教えです。

カルマの精算時や試練中は争いに巻き込まれるのは仕方ないですが、主張すべき事ややるべき事は正しい手続きや言葉で行い、その結果には執着しないとなれば、無益な闘争が静まるのです。

詩番号 G138 (F139, A, 0007, OS1) / G139 (F140, A, 0008, OS1) [@ GS 12 ひゃ組ちひ]

G138 この世のものを浄らかだと思ひなして暮らし、(五感の) 感官を抑制せず、食事の節度を知らず、怠けて努めない者は、悪魔にうちひしがれる。

— 弱い樹木が風に倒されるように。

元詩、一次 この世のものを浄らかだと思ひなして暮らし、(眼などの) 感官を抑制せず、食事の節度を知らず、怠けて勤めない者は、悪魔にうちひしがれる。

— 弱い樹木が風に倒されるように。

G139 この世のものを不浄であると思ひなして暮らし、(五感の) 感官をよく抑制し、食事の節度を知り、信念あり、努め励む者は、悪魔にうちひしがれない。

— 岩山が風にゆるがないように。

元詩 この世のものを不浄であると思ひなして暮らし、(眼などの) 感官をよく抑制し、食事の節度を知り、信念あり、努め励む者は、悪魔にうちひしがれない。

— 岩山が風にゆるがないように。

(コメント)

(眼などの) を (五感の) と置き換えました。「五感」は、視覚聴覚触覚臭覚味覚です。付録7 (3) 三行目の注を参考にしてください。

詩番号 G140 (F141, A, 0011, OS1) / G141 (F142, A, 0012, OS1) [@ GS 12 ひゃ組ちひ]

G140 まことではないものを、まことであると見なし、まことではないと見なす人々は、あやまった思いにとらわれて、ついに真実（まこと）に達しない。

元詩 書換えなし

G141 まことであるものを、まことであると知り、まことではないものを、まことではないと見なす人は、正しい思いにしたがつて、ついに真実に達する。

元詩 書換えなし

(コメント)

その通りです。敬礼！

法句経（玄奘三蔵さんの訳）では、「まこと」は「真利」となっているそうです。漢訳の字は、なかなかイキで、実感しやすいです。ただ、中村氏は「まこと」を選んだので、それに沿わせていただきます。

詩番号 G142 (F143, C, 0013, OS1) ` G143 (F144, C, 0014, OS1) [@ GS 12 ひと組ぞく]

G142 屋根を粗雑に葺いてある家には雨が漏れ入るように、心を修養していないならば、煩惱が心に侵入する。

元詩 屋根を粗雑に葺いてある家には雨が漏れ入るように、心を修養していないならば、情欲が心に侵入する。

G143 屋根をよく葺いてある家には雨の漏れ入ることがないように、心をよく修養してあるならば、煩惱が侵入することはない。

元詩 屋根をよく葺いてある家には雨の漏れ入ることがないように、心をよく修養してあるならば、情欲の侵入することがない。

(コメント)

情欲を煩惱と書き換えます。詳しくは、「付録5 心の汚れ」を参照してください。

詩番号 G144 (F145, A, 0019, OS1) ` G145 (F146, A, 0020, OS1) [@ GS 12 ひと組ぞく]

G144 たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。

かれは道を実践する人にはならない。

元詩 たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。

かれは修行者の部類には入らない。

G145 たとえためになることを少ししか語らないにしても、

法にしたがって正しく実践するように、

妄執と憎悪と迷妄と疑惑と慢心を離れるように、
常に気をつけている人は、心を整える人であり、道を実践する人であり、心がしずまりおさまる。

元詩

たとえためになることを少ししか語らないにしても、理法にしたがって実践し、情欲と怒りと迷妄を捨てて、正しく気をつけていて、心が解脱して、執着することの無い人は、修行者である。

一次

たとえためになることを少ししか語らないにしても、
心を治めるように、

法にしたがって正しく実践するように、

執着と怒りと迷妄と疑惑と慢心を離れるように、
常に気をつけている人は、道を実践する人である。

(コメント)

G144: 「修行者」を「道を実践する人」に変えました。

G145: この2詩でひと組になるように、「道を実践する人」を軸に、詩を書き換えました。「道を実践する」の中核は「心を整えること」だということを前面に押し出しました。

第2章 やまざまな悪

「OS10節暴力」は、解散させることにしました。武力と暴力についての議論を付録6で行います。参考になさってください。
これら各詩の割り振りは下記の通りです。

- ・ O129 → 削除 (B289)´ ・ O130 → 削除 (B290)´ ・ O131 → 削除 (B291)´ ・ O132 → 削除 (B292)´
- ・ O133 → GS15節 G160 詩´ ・ O134 → GS15節 G161 詩´ ・ O135 → GS 4節 G034 詩´ ・ O136 → GS21節 G290 詩´
- ・ O137 → 削除´ ・ O140 → 削除´ ・ O141 → GS19節 G252 詩´ ・ O142 → GS19節 G242 詩´
- ・ O143+O144 → GS18節 G233 詩´
- ・ O145 → 削除

なお、残存した詩は、編入された章で考察を行い、削除した詩は、第5部削除した詩で考察を行います。

「OS16節愛するもの」はもともと詩の数が12本と少なく、内容に統一感が無いので、章を解散し、この章の構成各詩は内容によって、他の章に振り分けします。これら各詩の割り振りは下記の通りです。

・ O209 → GS13節 G146詩' ・ O210 → 削除' ・ O211 → 削除' ・ O212 ～ 216 → GS16節 G194詩'
・ O217 → GS10節 G116詩' ・ O218 → GS16節 G209詩' ・ O219 → GS 9節 G100詩' ・ O220 → GS 9節 G101詩'
なお、残存した詩は、編入された章で考察を行い、削除した詩は、第5部削除した詩で考察を行います。

第2章さまざまな悪は、5節編成で、各節番と節名は、
・ GS13節悪' ・ GS14節怒り' ・ GS15節汚れ' ・ GS16節執着と欲望' ・ GS17節悪いつくる
です。

GS13 節悪

書き直しが少ない章です。O16節愛するもの（解散章）から詩G146を編入しました。本節は13詩から成ります。

詩番号 G146 (F147, A, O209, OS16) [@ GS 13 悪]

G146 道に違（タゴ）うたことになじみ、道に順（シタガ）ったことにいそしまず、目的を捨てて快いことだけを取る人は、みずからの道に沿って進む者を羨むに至るであろう。

元詩 書換えなし

(コメント)

O16節 愛するものから移動

詩番号 G147～G156 (F148～F157, A, O116～O125, OS 9) [@ GS 13 悪]

G147 善をなすのを急げ。悪から心を退けよ。善をなすのにのろのろしたら、心は悪事をたのしむ。

元詩 書換えなし

G148 人がもしも悪いことをしたならば、それを繰り返すな。悪事を心がけるな。悪が積み重なるのは苦しみである。

元詩 書換えなし

G149 人がもしも善いことをしたならば、それを繰り返せ。善いことを心がけよ。善いことが積み重なるのは楽しみである。

元詩 書換えなし

G150 まだ悪い報いが熟さない間は、悪人でも幸運に遭うことがある。しかし悪の報いが熟したときは、悪人は災いに遭う。

元詩 書換えなし

G151 まだ善い報いが熟さない間は、善人でも災いに遭うことがある。しかし善の果報が熟したときは、善人は幸福（サイワイ）に遭う。

元詩 書換えなし

G152 「その報いは私には来ないであろう」と思って、悪を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされるのである。愚かな者は、水を少しずつでも集めるように悪を積むならば、やがて災いに満たされる。

元詩 書換えなし

G153 「その報いはわたしには来ないであろう」と思って、善を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされる。気をつけている人は、水を少しずつでも集めるように善を積むならば、やがて福德に満たされる。

元詩 書換えなし

G154 同行する仲間が少ないのに多くの財を運ばねばならぬ商人が、危険な道避けるように、また生きたいと願う人が毒を避けるように、人はもろもろの悪を避けよ。

元詩 書換えなし

G155 もしも手に傷が無いならば、その人は手で毒をとり去ることもできるであろう。傷の無い人に、毒は及ばない。悪をなさない人には、悪の及ぶことがない。

元詩 書換えなし

G156 汚れの無い人、清くて咎のない人をそこなう者がいるならば、その災いは、かえってその浅はかな人に至る。風にさからつ

て細かい塵を投げると、(その人にもどって来る) ように。

元詩 書換えなし

(コメント)

漢字への書換えと、言葉を現代語風に変えましたが、ほぼ、原文通りです。

詩番号 G157 (F158, A, O127, OS 9) / G158 (F159, A, O128, OS 9) [@ GS 13 悪]

G157 大空の中においても、大海の中においても、山の中の奥深いところに入っても、およそ世界のどこにおいても、悪業から脱れることのできる場所はない。

元詩 書換えなし

G158 大空の中においても、大海の中においても、山の中の洞窟に入っても、およそ世界のどこにおいても、死の脅威のない場所は無い。

元詩 書換えなし

GS 14 節 怒ら

本節は14詩から成ります。

詩番号 G159 (F160, A, O222+O094, OS17+OS7) [@ GS14 怒ら]

G159 御者が馬をよく馴らすように、おのが感官の高ぶりを静め、怒りの汚れをなくせ。

走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人―その人をわれは【御者】とよぶ。多くの人はただ手綱を手にしているだけである。

元詩 O222: 走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人―かれをわれは【御者】とよぶ。他の人はただ手綱を手にしているだけである。(【御者】とよぶにはふさわしくない。)

O094: 御者が馬をよく馴らしたように、おのが感官を静め、高ぶりをすて、汚れのなくなった―このような境地にある人を神々でさえも羨む。

一次 御者が馬をよく馴らすように、おのが感官の高ぶりを静め、汚れをなくせ。

走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人―その人をわれは【御者】とよぶ。他の人はただ手綱を手にしているだけである。

(コメント)

間違いなく、お釈迦様のお口から出たお言葉でしょう。離れた章においてありましたが、当初はこの二詩は対で配列されていたと考えられます。

怒りは心の六汚れの憎悪を含みます。怒りを制御することは、人間が心を整えるための一つの重要課題です。個々の怒りの元を、考察し、正しく認識することは、その人にとって大切な課題です。決して、全ての怒りを無条件で捨てることが大切のではなく、それを離れて全体像を掴み制御することが大切だという教えです。

詩番号 G160 (F161, A, O133, OS10) ` G161 (F162, A, O134, OS10) [| @ GS14 怒り |]

G160 荒々しい言葉を言うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだ言葉は苦痛である。報復が汝の身に至るであろう。

元詩 荒々しいことばを言うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだことばは苦痛である。報復が汝の身に至るであろう。

G161 壊れた鐘のように、声を荒げないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。

元詩 壊れた鐘のように、声をあらげないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。

(コメント)

OS 10 暴力から移動。

言葉の暴力について教えている詩です。

特徴は、二人称に汝が使われています。

ひらがなを漢字に直します。

詩番号 G162 (F163, C, O223, OS17) [| @ GS14 怒り |]

G162 怒りを制することによって怒りに

善いことによって悪いことに、

わかち合うことによって物惜しみに、

真実によって虚言の人に立ち向かわなくてはならない。

元詩 怒らないことによって怒りにうち勝て。善いことによって悪いことにうち勝て。わかち合うことによって物惜しみにうち勝て。真実によって虚言の人にうち勝て。

(コメント)

怒ることは必要ですから、その部分が整合が取れるように書き換えます。

打ち勝てるかどうかは、その時の天の運みたいなどころがあり、たかが人間が勝ちにこだわると、痛い目にあうので、「打ち勝つ」を「立ち向かう」と表現を変えます。

詩番号 G163 (F164, -, 新設, -) ' G164 (F165, B, O227, OS17) ' G165(F166, A, O228, OS17) ' F166 (F167, A, O229, OS17) ' G167 (F168, A, O230, OS17) 『 @ GS14 怒る 』

G163 アトウラたちは、お釈迦様に帰依した三人の長老に教えを請い求めましたが、十分に納得出来る教えを示されませんでした。彼らは不満を抱いて、ついに、お釈迦様の元を訪ね、今までの経緯を述べて、教えを請いました。そのアトウラたちにお釈迦様は、次のように語られました。

元詩 新設ですので、対応詩はありません。

G164 アトウラよ。これは昔にも言うことであり、いまに始まることでもない。沈黙している者も非難され、多く語る者も非難され、すこしだけ語る者も非難される。世に非難されない者はいない。

元詩 書換えなし

G165 ただ誹られるだけの人、またただ褒められるだけの人は、過去にもいなかったし、未来にもいないであろう、現在にもいない。

元詩 書換えなし

G166 もしも賢い人が日に日に考察して、「この人は賢明であり、行いに欠点がなく、知慧と徳行とを身にそなえている。」といて称讚するならば、

元詩 書換えなし

一次 もしも心ある人が日に日に考察して、「この人は賢明であり、行いに欠点がなく、知慧と徳行とを身にそなえている。」といて称讚する

ならば、

G167 その人を誰が非難するのか？ かれはジャンブーナダ河から得られる黄金でつくった金貨のようなものである。神々もかれを称讃する。梵天でさえもかれを称讃する。非難するものは愚かな人ばかりである。

元詩、一次 その人を誰が非難し得るだろうか？ かれはジャンブーナダ河から得られる黄金でつくった金貨のようなものである。神々もかれを称讃する。梵天でさえもかれを称讃する。

(コメント)

アトゥラとはお釈迦様の在俗信者（仏弟子：FS22、付録4参照）です。しかし彼には500人も信者がいました。全員揃って、レーヴァタ長老のところに行つて教えを聞こうとしましたが、この長老は「人静かに瞑想を行っていたために、何も説いてくれません。」

次に彼らは、サーリプッタ長老のところに行きますが、難解なアビダルマに関する議論をやたらに聞かされただけで、彼は憤ります。そして次に、アーナンダ長老のところに行きますが、ここではほんのちよつとの教えを説かれるだけでした。

ついに祇園精舎にいらつしやるお釈迦様のところに行き着いた時の、アトゥラの怒りは頂点だと想像してみることは簡単です。そして、アトゥラが、怒りに任せて、3名の長老のことをお釈迦様に申し立てたのでしよう。その時に、お釈迦様がアトゥラ達に説いた教えがこの4つの詩です（中村氏の注釈より）。

G164, G165：ついこみ上げる怒りなどの一時的な感情で、いろいろな評価・避難（・礼賛）が起こるのが、この世の中だから、ただ誹られるだけの人、また、ただ褒められるだけの人なんていないのだと教えてくださります。だから、世の中の評価・避難・礼賛を安易に信じたり、その流れに乗って「自らが無責任な批評を繰り返すことはおやめなさい。」とアトゥラに教えています。

G166：世の中で信じて良い評価もあることを説いてらっしゃいます。それは、賢い人々や真人が時間をかけて熟考した評価だとおっしゃっています。

「誰が非難しうるであろうか？」は、G164で全ての人が非難されると宣言している以上、矛盾する文章になるので、「誰が非難するであろうか？（考えよー）」という意味で書き直し、文末にその答えとして「非難するものは愚かな人ばかりである。」という答えを書き足しました。お釈迦様ご自身は、先の3長老に対して、賞賛の気持ちがおありだという旨も、ここで暗に宣言なさっていて、アトゥラ達を諫めてらっしゃいます。

以上から、この詩が、怒りの章にあるのは、怒りを抱えた人に説いた詩だからだと、私は考えています。

中村氏の注釈の内容をト書きとして、詩G163を新設し追加しました。

詩番号 G168 (F169, B, O231, OS17) ' G169 (F170, B, O232, OS17) ' G170 (F171, B, O233, OS17) ' G171 (F172, B, O234, OS17) [@ GS14 終]

G168 身体がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。身体について慎んでおれ。身体による悪い行いをやめよ。

元詩 身体がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。身体について慎んでおれ。身体による悪い行いを捨てて、身体によって善行を行なえ。

G169 言葉がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。言葉について慎んでおれ。言葉による悪い行いをやめよ。

元詩 ことばがむらむらするのを、まもり落ち着けよ。ことばについて慎んでおれ。語(コトバ)による悪い行いを捨てて、語によって善行を行なえ。

G170 意がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。意について慎んでおれ。意による悪い行いをやめよ。

元詩 心がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。心について慎んでおれ。心による悪い行いを捨てて、心によって善行を行なえ。

一次 心がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。心について慎んでおれ。心による悪い行いをやめよ。

G171 落ち着いて思慮ある人は、いかなる時でも、身を慎み、ことばを慎み、意を慎しむ。このように彼らは実によく己れをまもっている。

元詩 落ち着いて思慮ある人は身をつつしみ、ことばをつつしみ、心をつつしむ。このようにかれらは実によく己れをまもっている。

一次 落ち着いて思慮ある人は、いかなる時でも、身を慎み、ことばを慎み、心を慎しむ。このように彼らは実によく己れをまもっている。

(コメント)

「護身悪行」、「護口悪行」、「護意悪行」の三つのことを表した詩だそうですが、残念ながら漢文だと、私には細かい部分がわかりません。詩中の「むらむら」という表現は制御の難しさを表しているのでしょうか。

原始仏教では怒りは不運だと捉えているようです(詩 G185)。怒り自体は、付録5 心の汚れ(1) 汚れと煩惱で考察したように、心の汚れによって下地が作られますから、本人の責任です。ただ、何か起爆剤があって怒りが噴出するというプロセスなので、大きな起爆剤が来たりしたら、やはり不運とも言えます。この不運に襲われた時には、より一層、「護身悪行」、「護口悪行」、「護意悪行」に注意を払わなければならないということを教えてらっしゃると思われれます。きっと、これら一つ一つが修行なのです。

「捨てよ」は「やめよ」に書き換えます。

「善行を行え」という部分は不要ですので、削除します。

また、「つつしむ」という訳は、「悪の汚れに侵されないように自分を守る」という原義の意識として中村氏は使ったそうです。しかし、

本書を読み進めた結果、「慎む」という行為は、心が自己（副守護神様）の言うことに対応せず、己（正守護神様）を守る行為であると考
えることができると思います。

GS 15 節 汚れ

本節は19詩から成ります。

詩番号 G172 (F173, A, O235, OS18) ` G173 (F174, A, O238, OS18) ` G174 (F175, A, O239, OS18) ` G175 (F176, A,
O240, OS18) || @ GS 15 汚れ ||

G172 汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝に
は資糧（カテ）さえも存在しない。

元詩 汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝には資糧（カテ）
さえも存在しない。

G173 だから、心のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをほらい、罪過がなければ、汝はもはや生と老
いと近づかないであろう。

元詩 だから、自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをほらい、罪過がなければ、汝はもはや生と老いと近づか
ないであろう。

一次 だから、自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをほらい、罪過がなければ、汝はもはや生と老いと近づか
ないであろう。

G174 聡明な人は順次に少しずつ、一刹那ごとに、心の汚れを除くべし、――鍛冶工が銀の汚れを除くように。

元詩 聡明な人は順次に少しずつ、一刹那ごとに、おのが汚れを除くべし、――鍛冶工が銀の汚れを除くように。

一次 聡明な人は順次に少しずつ、一刹那ごとに、おのが汚れを除くべし、――鍛冶工が銀の汚れを除くように。

G175 鉄から起った錆が、それから起ったのに、鉄自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いと
ころにみちびく。

元詩 鉄から起った錆が、それから起ったのに、鉄自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところ（地獄）にみちびく。

（コメント）

これらは、O235(G172), O236, O237, O238(G173), O239(G174), O240(G175) 詩の連続する6詩で1セットの教えですが、中村氏は、O236, O237の二つの詩は、漢訳には見当たらないことから、後代に付け加えられた詩ではないかと注釈なさっています。

この2つの詩を削除することによって、教えが分かりやすくスムーズに頭に流れてくるようになります。あたかも、教えが動き出す感じです。削除理由は、第5章削除詩の詩O236, O237で記します。

G175：地獄を削除します。

詩番号 G176 (F177, A, O241, OS18) ` G177 (F178, A, O242, OS18) ` G178 (F179, C, O243, OS18) [@ GS 15 汚れ]

G176 読誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおざりになるならば、努め励む人が汚れる。

元詩 読誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおざりになるならば、つとめ慎しむ人が汚れる。

G177 不品行は婦女の汚れである。もの惜しみは、恵みを与える人の汚れである。悪事は、この世においてもかの世においても（つねに）汚れである。

元詩 書換えなし

G178 これらの汚れより、さらに根元的な汚れが、己を覆う無明である。修行僧らよ、努め励み、慎むことにより、もろもろの汚れを順次捨て、ついには無明が消滅するのを見とどけよ。

元詩 この汚れよりもさらに甚だしい汚れがある。無明こそ最大の汚れである。修行僧らよ。この汚れを捨てて、汚れ無き者となれ。

一次 これらの汚れより、さらに根元的な汚れが、自己を覆う無明である。修行僧らよ、努め励み、慎むことにより、もろもろの汚れを順次捨て、ついには無明が消滅するのを見とどけよ。

（コメント）

G176：「つとめ慎む」を「努め励む」と書き換えました。

無明 (avija) は付録5—(1)—⑥参照。G176, G177 詩のような汚れは、表に現れている汚れですが、これらを取り払うのは、普段の

生活を正しく送るように心がければ順次なくなっていく、自分の努力が物を言います。これが一二三神示の「洗濯」だと思います。

G178: 「自己を覆う」から「己を覆う」としました。自己は副守護神様(悪魔的自分)、己は正守護神様(正しい自分)としました。「よりどころ」については、階層的なイメージで一義的には決められないと思います。身体の抛り所は心、心の抛り所は己(正守護神様)、己の抛り所は本守護神様(神界的自分)という感じですよ。

詩番号 G179 (F180, A, O244, OS18) ` G180 (F181, A, O245, OS18) ` G181 (F182, A, O246+O247, OS18) ` G182 (F183, A, O248, OS18) Ⅱ @ GS 15 汚れ Ⅱ

G179 恥をしらず、鳥のように厚かましく、凶々しく、人を責め、大胆で、心のよこれた者は、生活し易い。

元詩 書換えなし

G180 恥を知り、常に清きをもとめ、執着を離れ、慎み深く、真理を見て清く暮す者は、生活し難い。

元詩 書換えなし

G181 不当に生きものを殺し、虚言(イツワリ)を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯す人は、この世において心(自分)の根本(己)を掘りくずす人である。

元詩 生きものを殺し、虚言(イツワリ)を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯し、穀酒・果実酒に耽溺する人は、この世において自分の根本を掘りくずす人である。

一次 不当に生きものを殺し、虚言(イツワリ)を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯す人は、この世において自分の根本を掘りくずす人である。

G182 人よ。このように知れ、――慎みがないのは悪いことである。――貪り(妄執)と不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けることのないように。

元詩 人よ。このように知れ、――慎みがないのは悪いことである。――貪りと不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けることのないように。

一次 人よ。このように知れ、――慎みがないのは悪いことである。――貪り(執着)と不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けることのないように。
(コメント)

G181: 全くの不殺生は、人が生きていく上では、あり得ませんので、「生き物を殺し」という部分を「不当に生きものを殺し」と書き換えました。

酒・薬物乱用については、他虐であるか自虐であるかの二元論で分類すると、自虐に入ります。一方、生きものを不当に殺す事、虚言を語る事、与えられていない物を取る（すなわち盗みと同じ）事、他人の妻を犯す事は他虐に入ります。

自虐も良くないですが、他虐に比べたらずっとましです。お釈迦様は他虐に対しては、非常に厳しく禁じましたので、この詩は他虐行動のみで揃えます。

「自分の根本を」ですが、「自分」は「心」で、その根本は「己（正守護神様）」となります。世の中で悪い事とされていることには、その本質に他虐性と自虐性がありますから、それをよく見極めて、善悪の判断をすべきです。

G182: 「貪り」を「貪り（妄執）」としました。

詩番号 G183 (F184, C, O249, OS18) ` G184 (F185, C, O250, OS18) [@ GS 15 汚れ]

G183 人は、信ずるところにしたがって、きよき喜びにしたがって、他の人へ施しをなすべきである。このような施しに満足しない人は、心の安定は得られない。

元詩 人は、信ずるところにしたがって、きよき喜びにしたがって、ほどこしをなす。だから、他人のくれた食物や飲料に満足しない人は、昼も夜も心の安らぎを得ない。

一次 人は、信ずるところにしたがって、清き喜びにしたがって、正しく施し（布施）をなさなくてはならない。施し（布施）に見返りを求めると汚れが増す。だから、人は施し（布施）に見返りを求めてはならない。

G184 この（不満の思い）を絶ち、根だやしにしたならば、昼も夜も心の安定を得る。

元詩 もし人がこの（不満の思い）を絶ち、根だやしにしたならば、かれは昼も夜も心のやすらぎを得る。

一次 正しくほどこされた食物や飲料に満足しない出家者は、昼も夜も心の安らぎを得ず、汚れが増す。

（コメント）

前回は、お布施と解釈し、出家者へのいさめの詩として書きました。今回は、もう少し広く捉えて、お給料からお呼ばれされた時など、他人からしてもらったことについての心得として書き直しました。もともと詩が曖昧なので、残っている本文を極力利用しました。

詩番号 G185 (F186, A, O251, OS18) ` G186 (F187, A, O252, OS18) ` G187 (F188, A, O253, OS18) [@ GS 15 汚れ]

G185 不利な骰（サイ）の目を投げたとしても、怒りに等しい不運は存在しない。迷いに等しい網は存在しない。情欲に等しい河は存在しない。妄執に等しい火は存在しない。

元詩 情欲にひとしい火は存在しない。不利な骰（サイ）の目を投げたとしても、怒りにひとしい不運は存在しない。迷妄にひとしい網は存在しない。妄執にひとしい河は存在しない。

一次 愛欲に等しい火は存在しない。不利な骰（サイ）の目を投げたとしても、怒りに等しい不運は存在しない。迷いに等しい網は存在しない。欲望に等しい河は存在しない。

G186 他人の過失は認識しやすく、自己の過失は認め難い。心の汚れた人は他人の過失を糲殻のように吹き散らす、自分の過失は、隠してしまう。――狡猾な賭博師が不利な骰（サイ）の目をかくしてしまうように。

元詩 他人の過失は見やすいけれど、自己の過失は見がたい。ひとは他人の過失を糲殻のように吹き散らす。しかし自分の過失は、隠してしまう。――狡猾な賭博師が不利な骰（サイ）の目をかくしてしまうように。

一次 他人の過失は認識しやすく、自己の過失は認識し難い。心の汚れた人は他人の過失を糲殻のように吹き散らす、自分の過失は、隠してしまう。――狡猾な賭博師が不利な骰（サイ）の目をかくしてしまうように。

G187、元詩 他人の過失を探し求め、つねに怒りたける人は、煩惱の汚れが増大する。かれは煩惱の汚れの消滅から遠く隔っている。

一次 他人の過失を探し求め、つねに怒りたける人は、心の汚れが増大する。その人は心の汚れの消滅から遠く隔っている。

（コメント）

G185：G104と同型の詩です。「情欲」と「妄執」を入れ替え、これらが並ぶように文を入れ替えます。本書におけるこの2語の定義は「付録5 心の汚れ（2）欲と執着」を参照。

G186：全ての人が、詩に書かれたようであるとは限りませんので、主語を、「人」から「心の汚れた人」と書き換えます。「見る」という言葉だと曖昧なので、「認識」（ある物事を知り、その本質・意義などを理解すること。また、そういう心の働き。goo辞書より）とします。

G187：煩惱とは「煩っている脳」、つまり「心の汚れにより誤動作している脳」のことです。このため、「煩惱の汚れ」↓「心の汚れ」↓「煩惱の汚れ」という置き換えの変遷をしました。詳細は、「付録5 心の汚れ（1）汚れと煩惱を参照。

詩番号 G188(F189, C, O226, OS17) ` G189(F190, C, O254, OS18) ` G190(F191, C, O255, OS18) [@ GS 15 汚ぞ]

G188 人が、涅槃（悟りによる解脱）を得ようとめざし、常に目ざめているように昼も夜も学び努めるならば、もろもろの汚れは消え失せる。

元詩 ひとがつねに目ざめていて、昼も夜もつとめ学び、ニルヴァーナを得ようとめざしているならば、もろもろの汚れは消え失せる。

一次 人が、ニルヴァーナを得ようとめざし、常に目ざめているように昼も夜も学び努めるならば、もろもろの汚れは消え失せる。

G189 (魔の通力による) 虚空には正しい道がなく、(仏道から外れた) 外道には道はない。愚者は論と虚栄を楽しむが、修行完成者はこれら汚れの現れを楽しまない。

元詩 虚空には足跡が無く、外面的なことを気にかけるならば、「道の人」ではない。ひとびとは汚れのあらわれをたのしむが、修行完成者は汚れのあらわれをたのしまない。

一次 心の汚れた人たちは汚れのあらわれを楽しむが、学び努める人たちは汚れのあらわれを楽しまない。

G190 (魔の通力による) 虚空には正しい道がなく、外道には道を実践する人はいない。因縁(いんねん)によって生じた現実の事象は無常だが、み仏(ブツダ)には動揺はない。

元詩 虚空には足跡が無く、外面的なことを気にかけるならば、「道の人」ではない。造り出された現象が常住であることは有り得ない。真理をさとった人々(ブツダ)は、動揺することがない。

一次 造り出された現象が常住であることは有り得ない。真理をさとった人々(ブツダ・真人)は、汚れがなくなったので、動揺することがない。

(コメント)

G188 努め励むこと(学び努めると書き換えますが)は人が目覚める(覚醒する)ための修行です(付録3参照)。ですから、この教えは展開が逆です。

ひらがなを漢字へ書き換えます。

「OS14 節 怒り」から移動しました。

この詩の教えと類似の教えが、GS9 節 楽しみ G106 詩です。

G189, G190 荻原雲来氏の法句経では、

O254: 虚空に(鳥の)跡なく、外道にサモンなく、愚夫は戯論を樂ふ、如来に戯論なし。

O255: 虚空に(鳥の)跡なく、外道にサモンなく、有為に在常なく、ブツダに動乱なし。

荻原氏の法句経を元に現代語に訳しました。「虚空」は G051 詩参照。

「虚空に(鳥の)跡なく」は、虚空自体が「真理がない」と「偉大な法」の対極的な意味を含むのですが、今回は「虚空を外道のもの」として対応を取りましたので、前者の意味で詩を訳しました。「(魔の通力による)虚空」とは、いわ

ゆる「奇跡」と「魔法」のことです。

「戯論」は「論と虚栄」と訳しました。

中村氏は、だいた冒険して詩を書き直してらっしゃるようです。

GS 16 節 欲と執着

愛執（アイシユウ）や愛欲や執著（シユウチャク）というのは、仏教用語です。しかし、中村氏の真理のことでは、これらを含めた語句が多用されますが、使い方に一貫性がなく、全体としてぼやけた感じが残ります。そこで、本書の再考作業のために付録5（2）執着と欲望で、「欲」、「情欲」、「愛欲」、「執着」、「妄執」、「愛執」の言葉の定義を行いました。これらの定義と各詩の内容を照らし合わせて詩の再考を行います。

付録5は、この章の導入のために書いた内容が中心ですので、そちらに目を通してから、以下の再考をお読み下さい。

節題は、愛執というという曖昧な言葉ではなく、はっきりと定義できた言葉を使いたいので「欲と執着」に変更しました。本節は20詩から成ります。

詩番号 G191 (F192, B, O334, OS24) [@ GS 16 執着と欲望]

G191 恣（ホシイママ）のふるまいをする人には妄執が蔓草（ツルクサ）のようにはびこる。林の中で猿が果実を探し求めるように、輪廻転生し、あちこちさまよう。

元詩 恣（ホシイママ）のふるまいをする人には愛執が蔓草（ツルクサ）のようにはびこる。林の中で猿が果実を探し求めるように、（この世からかの世へと）あちこちにさまよう。

一次 恣（ホシイママ）のふるまいをする人には執着が蔓草（ツルクサ）のようにはびこる。林の中で猿が果実を探し求めるように、輪廻転生し、あちこちさまよう。

（コメント）

恣（ホシイママ）のふるまいをする人とは、口、意、身体を慎まない（＝自制しない）、怠けていて努めない励まない学ばない人のことです。

愛欲↓執着↓妄執と置き換えが変遷しました。蔓草の例えとして、愛欲よりは妄執か執着が適当だと思います。愛執や愛欲は、執着を

妄執へと変化させる肥料のようなものでしょう。つまり、執着・愛執は心の汚れですが、その上流に心の汚れの愛欲と愛執が存在していると考えます。G192, 193 詩参照

(この世からかの世へと)は、輪廻転生していることなので、そのように表現します。

詩番号 G192 (F193, B, O335, OS24) / G193 (F194, B, O336, OS24) ② GS 16 執着と欲望 ②

G192、元詩 この世において執着のもとであるこのうずく愛欲のなすがままである人は、もろもろの憂いが増大する。――雨が降ったあとにはビ―ラナ草がはびこるように。

一次 この世において、執着のもとであるうずく汚れのなすがままである人は、もろもろの憂いが増大する。――雨が降ったあとにはビ―ラナ草がはびこるように。

G193、元詩 この世において如何ともし難いこのうずく愛欲を断ったならば、憂いはその人から消え失せる。――水の滴が蓮華から落ちるように。

一次 この世において如何ともし難いこのうずく心の汚れを断ったならば、憂いはその人から消え失せる。――水の滴が蓮華から落ちるように。
(コメント)

G191 詩のコメント参照

G192: 「執着(悪的執着)」＝「妄執(悪的執着)」≠「執着(執着全般)」。付録5(2)参照。

詩番号 G194 (F195, C, O212～O216, OS16) / G195 (F196, C, O212～O216, OS16) ② GS 16 執着と欲望 ②

G194 快樂への情欲から愛欲と妄執が生じる。快樂への情欲を離れたならば、愛欲と妄執が減る。

G195 情欲と妄執から憂いが生じ、情欲と妄執から恐れが生じる。情欲と妄執を離れたならば、憂いは存しない。どうして恐れることがあるだろうか。

元詩 212: 愛するものから憂いが生じ、愛するものから恐れが生ずる、愛するものを離れたならば、憂いは存在しない。どうして恐れることがあるだろうか?

213: 愛情から憂いが生じ、愛情から恐れが生ずる。愛情を離れたならば憂いが存在しない。どうして恐れることがあるだろうか?

214: 快樂から憂いが生じ、快樂から恐れが生じる。快樂を離れたならば憂いが存在しない。どうして恐れることがあるだろうか?

215: 欲情から憂いが生じ、欲情から恐れが生じる。欲情を離れたならば、憂いは存しない。どうして恐れることがあるだろうか?

216：妄執から憂いが生じ、妄執から恐れが生じる。妄執を離れたならば、憂いは存しない。どうして恐れることがあるのか。

一次 G194：欲の快樂から多くの執着が生じる。欲の快樂を離れたならば、執着が減る。

一次 G195：心の汚れから憂いと恐れが生じる。心の汚れを離れたならば憂いと恐れは存在しない。

(コメント)

OS16節 愛するものから移動。

第一に、これらの5詩は、「○から憂いが生じ、○から恐れが生じる。○を離れたならば憂いが存在しない。どうして恐れることがあるのか？」という詩形が共通です。

○の部分は、愛するもの、愛情、快樂、情欲、妄執です。「愛するもの、愛情、快樂、情欲」は執着する対象です。「妄執」は、執着です。しかし、生活する上で絶対に否定してはならない「愛するもの」と「愛情」については、削除とします。

第二に、「快樂」「情欲」「妄執」の関係は、「快樂への情欲に妄執する。」となります。↓G194詩にします。

第三に、「憂いが存在しない。どうして恐れることがあるのか？」は、この関係が不明瞭なので、「どうして恐れることがあるのか？」ではなく、「○を離れたならば憂いと恐れは存在しない。」としましょう。よって、基本詩文形「○から憂いが生じ、○から恐れが生じる。○を離れたならば憂いと恐れは存在しない。」を使用し、○の部分に「情欲と妄執」を入れG195詩とします。

「欲と執着（＝情欲と妄執）」で憂いと恐れを生む根源的な原因として「快樂を知り、快樂を求める欲に執着し、それを失うことや手に入らないことなどに一喜一憂する」が考えられます。

ちなみに、憂いと恐れは根本煩惱（六汚れ）ではなく、随煩惱になります。これらが、私たち人間の心に大きな負荷となるのはお分かりいただけるでしょう。

これらの詩は、大変、強い思考ループがかかった詩だったと思います。解散した章「愛するもの」にあったのも、後からの改ざんで編入されたとも考えられるのですが、詩形がしっかりしている部分もあったので、残しました。

お釈迦様が、定義のはっきりしない曖昧な言葉を並べて教えをお説きになることはありません。

これら5詩に関して、中村氏の注釈は、唯一、執着に関する詩O216で、音韻についてのみ言及しています。

詩番号 G196 (F197, C, O337, OS24) [@ GS 16 執着と欲望]

G196 わあ、皆さんに告げます。――ここに集まった皆さんに幸あれ。妄執の根（愛欲と愛執）を掘れ。

(香しい)ウシーラ根(正しい教え)を求める人が(雑草の)ビーラナ草(悪魔の教え)を掘るように、また、葦が激流に砕かれるように、魔にしばしも砕かれてはならない。

元詩 さあ、みなさんに告げます。——ここに集まったみなさんに幸あれ。欲望の根を掘れ。——(香しい)ウシーラ根を求める人がビーラナ草を掘るように。葦が激流に砕かれるように、魔にしばし砕かれてはならない。

一次 さあ、皆さんに告げます。——ここに集まった皆さんに幸あれ。執着の根(心の汚れ)を掘れ。

(香しい)ウシーラ根(正しい教え)を求める人が(雑草の)ビーラナ草(悪魔の教え)を掘るように、また、葦が激流に砕かれるように、魔にしばしも砕かれてはならない。

(コメント)

欲望は、人間にはどうにもできないという立場なので、「欲望の根を掘れ」ではなく、「妄執の根を掘れ」と書き換えます。妄執の根は愛欲と愛執です。

「ウシーラ根」は、薬草や香油の原料で、古くからインドで栽培されている植物の根っこ(ここから香油を絞るらしいです。)なので、正しい教えのことを指しているようです。ビーナラ草は、どうやら、ウシーラによく似ているようですが、掘り出して絞ってみても香油は出ないものようです。つまり、ビーナラ草は、正しい教えに偽せた悪魔の教えのようです(なるほどです)。大概の良い人がハマってしまうパターンです。

したがって、正しい教えを探求しようとしても、常に執着の根を掘る努力をしないと、ウシーラ根(正しい仏法)ではなく、ビーナラ草の根っこ(悪魔の教え)を掘ってしまうことを教えています。

詩番号 G197 (F198, B, O338, OS24) [@ GS 16 執着と欲望]

G197 たとえ樹を切っても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、妄執の根源となる潜勢力(愛欲と愛執)を滅ぼさなければ、妄執による苦しみはくりかえし現われ出る。

元詩 たとえ樹を切っても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、妄執(渴愛)の根源となる潜勢力をほろぼさないならば、この苦しみはくりかえし現われ出る。

一次 たとえ樹を切っても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、執着の根源となる潜勢力(心の汚れ)を滅ぼさなければ、執着による苦しみはくりかえし現われ出る。

(コメント)

潜勢力は、心の汚れではありませんが、この場合は「愛欲、愛執」でしょう。

「この苦しみ」とは、執着しても得られないという苦しみでしょう。

詩番号 G198 (F199, C, O339, OS24) [@ GS 16 執着と欲望]

G198 この世の中には、快いものに向って流れる激流があり、その流れは、妄執をいだく人を漂わし去る。――その流れとは、まさしく在住する様々な欲である。

元詩 快いものに向って流れる三十六の激流があれば、その波浪は、悪しき見解をいだく人を漂わし去る。――その波浪とは貪欲にねざした想いである。

一次 この世の中には、快いものに向って流れる激流があり、その流れは、執着をいだく人を漂わし去る。――その流れとは、まさしく在住する様々な欲である。

(コメント)

三十六の激流は、諸説あり、これといって決め手となる説がないので、記述から外します。

この詩の波浪とは、この激流によってできる流れです。また、これを私たち人間が止める事はできないとするのが、本書の立場でした。したがって、「波浪が想い」ではなく、「その流れは、まさしく様々な欲である。」という内容に書き換えます。

詩番号 G199 (F200, C, O341, OS24) ` G200 (F201, C, O340, OS24) [@ GS 16 執着と欲望]

G199、元詩 人の快楽を求める執着は、はびこるもので、また愛欲と愛執で潤される。実に人々は歓楽にふけり、楽しみをもとめて、生れと老衰を受ける。

元詩 人の快楽ははびこるもので、また愛執で潤される。実に人々は歓楽にふけり、楽しみをもとめて、生れと老衰を受ける。

一次 人の快楽を求める執着は、はびこるもので、また心の汚れで潤される。実に人々は歓楽にふけり、楽しみをもとめて、生れと老衰を受ける。

G200 (情欲の) 流れは至るところに流れる。(妄執の) 蔓草は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知恵によってその根を断ち切れ。

元詩 流れ(欲望)は至るところに流れる。蔓草(執着)は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知恵によってその根を断ち切れ。

一次 (愛欲の) 流れは至るところに流れる。(欲情の) 蔓草は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知恵によってその根を断

ち切れ。

(コメント)

G199: はびこりやすいものは快樂を求める執着とします。また、執着を潤すものは心の汚れの中でも「愛欲と愛執」としました。

G200: 欲の流れでも良いのですが、未熟な心が欲する欲である情欲の流れと捉えました。というのも、付録5で記した通り、欲も執着も一概に全て悪いものだという議論は暴論だと思っからです。

「知恵によって」とは、真人に近いぐらいの靈格の高い人たちに對する詩なのでしょう。

詩番号 G201 (F202, B, O342+O343, OS24) 〔@ GS 16 執着と欲望〕

G201 愛欲と愛執に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。妄執になずみ、情欲の激流に束縛され、永い間繰り返して執着しては得られない苦悩を受ける。それ故に、愚かな自己の愛欲と愛執を除き去れ。

元詩 O342: 愛欲に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。束縛の絆にしばられ愛著になずみ、永いあいだくりかえし苦悩を受ける。

O343: 愛欲に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。それ故に修行僧は、自己の愛欲を除き去れ。

一次 欲望への執着に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。欲望になずみ、欲望の激流に束縛され、永い間繰り返して執着しては得られない苦悩を受ける。それ故に修行僧は、自己の執着を除き去れ。

(コメント)

二つの詩を一つに合体します。

言葉を定義したものに置き換えます。大量の置き直しがありましたので下記に列挙します。

愛欲↓欲望への執着↓愛欲、

愛著になずみ↓欲望になずみ↓妄執になずみ

束縛の絆にしばられ↓欲望の激流に束縛され↓情欲の激流に束縛され

自己の愛欲↓愚かな自己の執着↓愚かな自己の愛欲と愛執

詩番号 G202 (F203, B, O344, OS24) 〔@ GS 16 執着と欲望〕

G202 欲の林から出ていながら、また欲の林に身をゆだね、欲の林から免れていながら、また欲の林に向かって走る。その人にはまだ愛欲が残っている。見よ！ 束縛から脱しているのに、また束縛に向かって走る。その人にはまだ愛欲が残っている。

元詩 愛欲の林から出ていながら、また愛欲の林に身をゆだね、愛欲の林から免れていながら、また愛欲の林に向って走る。その人を見よ！ 束縛から脱しているのに、また束縛に向って走る。

一次 欲望の林から出ていながら、また欲望の林に身をゆだね、欲望の林から免れていながら、また欲望の林に向って走る。その人を見よ！ 束縛から脱しているのに、また束縛に向かつて走る。

(コメント)

愛欲↓欲望↓欲に置き換えます。様々な要因で一時的に妄執がなくせても、愛欲と愛執をなくさなければ、また妄執が湧いてくるという意味だと思います。

詩番号 G203 (F204, C, O345+O346, OS24) ② @ GS 16 執着と欲望 ②

G203 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、ブツダや真人は堅固な縛とは呼ばない。

財や寶石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、なりふりかまわず家族に惹かれること、

—それが堅固な縛である、と彼らは呼ぶ。

それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。

賢い人々は、これらへの執着を統べなくてはならない。

元詩 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、思慮ある人々は堅固な縛とは呼ばない。

寶石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、妻や子にひかれること、

—それが堅固な縛である、と思慮ある人々は呼ぶ。

それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。

かれらはこれをさえも断ち切つて、顧みること無く、欲楽をすてて、遍歴修行する。

一次 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、ブツダや真人は堅固な縛とは呼ばない。

財や寶石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、むやみに家族に惹かれること、

—それが堅固な縛である、と彼らは呼ぶ。

それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。

賢い人々は、これらへの執着を離れなくてはならない。

(コメント)

家族の構成員は、それぞれ、自分の家庭を維持し守るための勤めは遂行しなくてはなりません。しかし、対外的な場合、むやみやたら

に家族を中心に考えると、正しい判断ができず、悪魔に魅入られることを注意をしていると、考えました。もちろん家族は大切にしなければなりませんし、装飾品も人の心を豊かに明るくしてくれる物でもあります。でも、社会的に責任のある人は、バランスをとって身を処し、むやみやたらな執着を持たないようにという意味をこめて「統べる」を使用しました。

詩番号 G204 (F205, B, O347, OS24) [@ GS 16 執着と欲望]

G204 愛欲、愛執にならずにいる人々は、自らの妄執により激流に押し流される。――蜘蛛がみずから作った網にしたがって行くようなものである。思慮ある人々は、これを断ち切って顧みることなくすべての執着を離れ制して歩んで行く。

元詩 愛欲にならずにいる人々は、激流に押し流される、――蜘蛛がみずから作った網にしたがって行くようなものである。思慮ある人々はこれをも断ち切って、顧みることなく、すべての苦悩をすてて、歩んで行く。

一次 欲望にならずにいる人々は、自らの執着により、激流に押し流される。――蜘蛛がみずから作った網にしたがって行くようなものである。思慮ある人々はこれを断ち切って、顧みることなく、すべての執着を捨てて、歩んで行く。

(コメント)

「愛欲」↓「欲望」↓「愛欲、愛執」、
「すべての苦悩をすてて」↓「執着を捨てて」↓「執着を離れ制して」と変えます。

詩番号 G205 (F206, C, O356～O359, OS24) [@ GS 16 執着と欲望]

G205 田畑は雑草によって害(ソコナ)われ、この世の人々は、妄執、怒り、誤った見解(迷妄)、疑惑、慢心によって、害(ソコナ)われる。

元詩 O356: 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は愛欲によって害われる。それ故に愛欲を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

O357: 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は怒りによって害われる。これ故に怒りを離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

O358: 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は迷妄によって害われる。それ故に迷妄を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

O359: 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は欲求によって害われる。それ故に欲求を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる

る果報を受ける。

一次 田畑は雑草によって害（ソコナ）われ、この世の人々は、執着、怒り、誤った見解（迷妄）、疑惑、慢心によって、害（ソコナ）われる。
（コメント）

GS15節汚れ G183詩で見返りを求める施し（供養）は禁止されましたので、全ての詩の後半部分は削除します。

詩 O356 中の「愛欲」は妄執と置き換えることにします。さらに、O359の欲求は執着ですから、執着に集約します。さらに無明を除く六汚れ…怒り、悪見、疑惑、慢心を足します。

書き出す順番は、妄執、怒り、悪見、疑惑、慢心とします。

詩番号 G206 (F207, C, O349, OS24) ` G207 (F208, B, O350, OS24) [| @ GS 16 執着と欲望 |]

G206、元詩 あれこれ考えて心が乱れ、愛欲がはげしくうづくのに、愛欲を淨らかだと見なす人には、愛執がますます増大する。この人は実に束縛の絆を堅固たらしめる。

一次 あれこれ考えて心が乱れ、汚れにより心がはげしくうづくのに、心の汚れ（不浄）を淨らかだと見なす人には、執着がますます増大する。この人は実に束縛の絆を堅固たらしめる。

G207 あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、常に心身の汚れ（不浄）を観察して心を整える人は、実に悪魔の束縛の絆を取り除き、断ち切るであろう。

元詩 あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、つねに心にかけて、（身体などを）不浄であると観じて修する人は、実に悪魔の束縛の絆をとりぞぎ、断ち切るであろう。

一次 あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、常に心身の汚れ（不浄）を観察して心を治める人は、実に悪魔の束縛の絆を取り除き、断ち切るであろう。

（コメント）

G206：愛欲は愛執よりもさらに上流の心の汚れであることがわかります。

G207：不浄という言葉は、よく使うのですが、このテキストで出てくる汚れと同じだと思います。「修する」、「観じて」に関しては、わかりやすいように現代語に意識しました。

詩番号 G208 (F209, B, O355, OS24) [| @ GS 16 執着と欲望 |]

G208 激流の中で、涅槃（悟りによる解脱）を求める賢い人は享樂に害（ソコナ）われることがない。愚かな人は享樂のために害（ソコナ）われるが、享樂を妄執するがゆえに、愚かな人は他人を害（ソコナ）うように己（おのれ）も害（ソコナ）う。
元詩 彼岸にわたることを求める人々は享樂に害われることがない。愚人は享樂のために害われるが、享樂を妄執するがゆえに、愚者は他人を害うように自分も害う。

一次 流の中で、解脱（彼岸、ニルヴァーナ）を求める賢い人は享樂に害（ソコナ）われることがない。愚かな人は享樂のために害（ソコナ）われるが、享樂を執着するがゆえに、愚かな人は他人を害（ソコナ）うように自分も害（ソコナ）う。

（コメント）

人々↓賢い人

妄執↓執着↓妄執

愚者、愚人↓愚かな人

彼岸に関しては、意味を付け加え、涅槃（悟りによる解脱）として書き換えました。

そこなつてはならないのは正しい「己」で、これが心の拠り所です。

詩番号 G209 (F210, A, O218, OS16) [@ GS 16 執着と欲望]

G209 言葉で説き得ないもの涅槃（悟りによる解脱）に達しようとする志を起し、意（オモイ）は満たされ、欲の激流に心の礙（サマタ）げられることのない人は、（流れを上る者）と呼ばれる。

元詩 ことばで説き得ないもの（ニルヴァーナ）に達しようとする志を起し、意（オモイ）は満たされ、諸の愛欲に心の礙げられることのない人は、（流れを上る者）とよばれる。

一次 言葉で説き得ないもの（ニルヴァーナ）に達しようとする志を起し、意（オモイ）は満たされ、欲の激流に心の礙（サマタ）げられることのない人は、（流れを上る者）と呼ばれる。

（コメント）

OS16 節愛するもの から移動。

「諸の愛欲に」を「欲の激流に」と書き換えました。

詩番号 G210 (F211, A, O354, OS24) [@ GS 16 執着と欲望]

G210、元詩 教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えの妙味はすべての味にまさり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまさる。妄執を滅ぼすことはすべての苦しみにうち勝つ。

一次 教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えの妙味はすべての味にまさり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまさる。執着を滅ぼすことは全てのの苦しみにうち勝つ。

(コメント)

元詩に戻しました。「妄執を滅ぼす」ためには、愛執がなくなり、愛欲もなくなるといけないうことです。

GS 17 節 悪くやいふ

「地獄」という言葉を使うことを、一二三神示により禁じられていますので、「地獄」は、「悪いところ」と書き換えます。したがって、この章のタイトルは、「地獄」から「悪いところ」になり、文中もこの原則に従います。

この節のオリジナルは O306～O319 詩の 14 詩からなりますが、O307 詩(→GS19 節 G247 詩)、O308 詩(→GS19 節 G259 詩)、O311 詩(→GS19 節 G260 詩)、O313 詩(→GS19 節 G261 詩)は、本節から外しました。移動した詩は、移動先の GS19 節 修行僧で再考を行います。本節は、O306、309、310、312、314～319 詩、最後に OS9 節 悪から移動した G221 (O126) 詩を編入し、1 詩の構成となりました。

地獄というと、どうしても死後の世界だと認識してしまいがちですが、そうではなく、現世から良いところから悪いところにかけて分別するふりは存在すると思うのです。

そう感じた理由は、私が仕事をしている時、職務上、不正や不適切なことを行っている人たちと自分は全く別世界の人間だなど思っていたからです。これは、同じ職場にいても、存在する場所が違ふと感じ取った時なのでしょう。

私が見ている、不正に手を出している彼らはいつも苦しそうです。もつと言ってしまうえば、窒息しているような感じです。しかし、本人たちは、精一杯やっている自分に自己陶醉していて、素晴らしいなんて感じているようにも見えます。

逆に、行いの正しい人たちや性質の良い人たちは、苦しい状況でもなぜか悲壮感が少ないと感じるのです。

このふりによる分別が貧富の差や社会的ステータスと、相関があるかと言われたら、もちろん答えは「Yes」です。この世の中は極めて正確な行いによる分別があることに驚いています。ただ、例外というものが必ずあって、例外(悪魔に魅入られた人たち)が目立ってしまい、この分別がうまく働いていないように感じてしまうことも多々あります。おおむね、若い頃は例外が多いと感じています。

靈界（あの世）では、靈格が別の人たちとの交流はほとんどないようですが、この3次元は、一緒にいながら違うと言いつつも、やはり靈界に比べたらはるかに交流がありますので、その分、各々にストレスがかかりますが、他の靈格の存在との交流こそが、実は三次元に生まれてきて行う修行の主目的なのだと思います。

詩番号 G211 (F212, A, O306, OS22) [@ GS 17 悪くやる]

G211 偽りを語る人、あるいは自分でしておきながら「私はしませんでした。」と言う人、——この両者は死後には等しくなる——来世では行ないの下劣な業を持った人々なのであるから。

元詩 いつわりを語る人、あるいは自分でしておきながら「わたしはしませんでした」と言う人、——この両者は死後にはひとしくなる、——来世では行ないの下劣な業をもった人々なのであるから。

(コメント)

ひらがなが多く、読みにくいので、漢字に変換します。

詩番号 G212 (F213, A, O309, OS22) / G213 (F214, A, O310, OS22) [@ GS 17 悪くやる]

G212 放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。——すなわち、禍をまねき、臥して楽しからず、第三に非難を受け、第四に悪しきところに墜ちる。

元詩 放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。——すなわち、禍をまねき、臥して楽しからず、第三に非難に地獄に墜ちる。

G213 禍をまねき、悪しきところに墜ち、相ともにおびえた男女の愉楽は少なく、王は重罰を課する。それ故に人は他人の妻になれ近づくな。

元詩 禍をまねき、悪しきところ(地獄)に墜ち、相ともにおびえた男女の愉楽はすくなく、王は重罰を課する。それ故にひとは他人の妻になれ近づくな。

(コメント)

G212：地獄↓悪しきところ とします。

G213：(地獄)を削除。「すくなく」を「少なく」と漢字表記します。

詩番号 G214 (F215, A, O312, OS22) ` G215 (F216, A, O314, OS22) [@ GS 17 悪(ゑ)]

G214 その行ないがだらしく、慎みが乱れ、清らかな行ないなるものもあやしげであるならば、大きな果報はやって来ない。

元詩 その行ないがだらしく、身のいましめが乱れ、清らかな行ないなるものもあやしげであるならば、大きな果報はやって来ない。

G215 悪いことをするよりは、何もしない方が良い。悪いことをすれば、後で悔いる。単に何かの行為をするよりは、善いことをする方が良い。なし終わって後で悔いがない。

元詩 悪いことをするよりは、何もしないほうがよい。悪いことをすれば、後で悔いる。単に何かの行為をするよりは、善いことをするほうがよい。なしおわって、後で悔いがない。

(コメント)

G214: 「身のいましめ」を、「慎み」と書き換えます。

G215: ひらがなが多く、読みにくいので、漢字に変換します。

詩番号 G216 (F217, A, O315, OS22) [@ GS 17 悪(ゑ)]

G216 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られているように、そのように己を守れ。瞬時も空しく過ぎすな。時を空しく過ぎた人々は悪いところに墜ちて、苦しみ悩む。

元詩 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られているように、そのように自己を守れ。瞬時も空しく過ぎすな。時を空しく過ぎた人々は地獄に墜ちて、苦しみ悩む。

一次 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られているように、そのように自己を守れ。瞬時も空しく過ぎすな。時を空しく過ぎた人々は悪いところに墜ちて、苦しみ悩む。

(コメント)

地獄 ↓ 悪いところ、自己 ↓ 己 にします。

詩番号 G217 (F218, A, O316, OS22) ` G218 (F219, A, O317, OS22) ` G219 (F220, A, O318, OS22) ` G220 (F221, A, O319, OS22) [@ GS 17 悪(ゑ)]

G217 恥(は)なくてよいことを恥(は)じ、恥(は)すべきことを恥(は)じない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

元詩 恥じなくてよいことを恥じ、恥ずべきことを恥じない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところ(＝地獄)におもむく。

G218 恐れなくてもよいことに恐れをいだき、恐れねばならぬことに恐れをいだかない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

元詩 恐れなくてもよいことに恐れをいだき、恐れねばならぬことに恐れをいだかない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところ(＝地獄)におもむく。

G219 避けねばならぬことを避けなくてもよいと思ひ、避けてはならぬ(＝必ず為さねばならぬ)ことを避けてもよいと考える人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

元詩 避けねばならぬことを避けなくてもよいと思ひ、避けてはならぬ(＝必ず為さねばならぬ)ことを避けてもよいと考える人々は、邪な見解をいだいて、悪いところ(＝地獄)におもむく。

G220 遠ざけるべきこと(＝罪)を遠ざけるべきであると知り、遠ざけてはならぬ(＝必ず為さねばならぬ)ことを遠ざけてはならぬと考える人々は、正しい見解をいだいて、善いところにおもむく。

元詩 遠ざけるべきこと(＝罪)を遠ざけるべきであると知り、遠ざけてはならぬ(＝必ず為さねばならぬ)ことを遠ざけてはならぬと考える人々は、正しい見解をいだいて、善いところ(＝天上)におもむく。

(コメント)

G217～G219：地獄を削除

G220：天上を削除

詩番号 G221 (F222, C, O126, OS9) [@ GS 17 悪さゝころ]

G221 汚れの無い人々は全き安らぎに入り輪廻を離れ、それ以外の人々は輪廻にとどまり、行いにより死後に赴く所が決まる。

元詩 或る人々は「人の」胎に宿り、悪をなした者どもは地獄に墜ち、行ないの良い人々は天におもむき、汚れの無い人々は全き安らぎに入る。
(コメント)

お釈迦様も、地獄という言葉をお使いになったとは、考えにくいと私は思っています。一二三神示が示すように、それぞれの魂の格によって、同種・同レベルが集まる場所が死後の世界であるならば、居心地が良いはずで、その魂は地獄とは感じないと、地獄という定義すら成り立たなくなってしまうのです。なんだか天才バカボンのパパのようですが、正しいとは感じます(証明なんてできません)。

この書き換え作業では、地獄という言葉を定義しない、あの世はどの魂にとっても天国という立場です。

第3章 さまざまな人

この節は、まず「付録4 人間の分類」を参照して読んでください。

GS 18節 仏弟子においては、御仏を奉じる者たちへの教えがまとめられています。

GS 19節 修行僧では、出家者という立場を有する人たちの守るべきルールや生活の送り方なども書かれています。詩の内容は、出家者への批判もあり、厳しい内容もあります。これらを守るのであれば、出家をした方がブツダへの到達は早いでしょうが、在家である経験も多種多様ですから若い人たちは生活を営むためにも在家で努めることをお釈迦様は推奨なさったと思われます。また、在家であっても、真人・ブツダへ進む最終段階では、同じ状況に身を置くことが余儀無くされると感じています。この章の詩は、主に出家の修行僧への詩ですが、決して在家の人の参考にならないということではありません。ただし、真理の探究を直接目指すことが目的の修行僧の節は結果的に難解な詩が多くなりました。

GS 20節 道を実践する人では、社会的に高い地位を有する人たちの道の実践について歌った詩という観点で振り分けています。GS 21節 愚かな人／＼GS 23節 賢い人では、仏道の観点から、霊格・精神性による分類「真人―賢い人―愚かな人」の各カテゴリーの性質や目標が説明されています。もちろん分類の対象者は、在家か出家かのいかに問わず生きとし生けるもの全体で、動物も入るでしょう。

さて、お釈迦様は、人類の構成者の圧倒的多数である在家に対して正しく世の中に身を処す教えを最優先されたであろうことは、「はじめに」で述べました。この点が、出家者とくにバラモンへの偏りがあるヒンズー教（バラモン教）とは一線を画したのであろうと感じます。

つまり、お釈迦様は在家か出家か？ 信仰の種類を問う？ ことに疑問を抱き、これらのいかに問わない教えを説かれ、圧倒的多数の者たちから支持を得たのでしょうか。そのため、本書では、今回からヒンズー教の聖職者名「バラモン」という言葉を用いず、必要に応じてGS 19 修行僧にその存在を繰り返すことにしました。したがって、本書では、特定の宗教を信望している出家者ではなく、どの教えであっても出家修行している方々を「修行僧」として表現しています。

第3節さまざまな人の章編成は下記の通りとなります。

(旧編成)

(新編成)

- FS 18 愚かな人 — GS 18 仏弟子 (17 詩)
- FS 19 賢い人 — GS 19 修行僧 (32 詩)
- FS 20 真人 — GS 20 道を實踐する人 (9 詩)
- FS 21 道を實踐する人 — GS 21 愚かな人 (16 詩)
- FS 22 仏弟子 — GS 22 賢い人 (14 詩)
- FS 23 修行僧 — GS 23 真人 (20 詩)
- FS 24 バラモン — GS 24 ブツダ (20 詩)
- FS 25 ブツダ — バラモンは無くし振り分ける。

また、前回は§バラモンの章にあった詩は、下記の通り割り振りました。

- GS 18 仏弟子 F343.
- GS 19 修行僧 F328, F330～F337, F342.
- GS 23 真人 F309 (修行僧→バラモン) F327, F329, F338～F341, F344～F346

GS 18 節 仏弟子

詩番号 G222 (F291, A, O183, OS14) / G223 (F292, B, O185, OS14) [@ GS 18 仏弟子]

G222 すべて悪しきことをなさず、善いことを行ない、心を浄めること、—これが諸のみ仏の教えである。
元詩、一次 すべて悪しきことをなさず、善いことを行ない、自己の心を浄めること、—これが諸の仏の教えである。

G223 他を罵らず、害わず、慎んで己を守り、食事に関して(適当な)量を知り、適時禪定(念定)を行ない、心に関することに努め励む。—これがもろもろのみ仏の教えである。

元詩 罵らず、害(がい)せず、自分は戒律を守り、食事に関して(適当な)量を知り、淋しいところにひとり臥し、坐し、心に関することにつとめはげむ。—これがもろもろのブツダの教えである。

一次 他を罵らず、害わず、慎んで自己を守り、食事に関して(適当な)量を知り、適時禪定(念定)を行ない、心に関することに努め励む。—
これがもろもろのみ仏の教えである。

一次 他を罵らず、害わず、慎んでおのれを守り、食事に関して(適当な)量を知り、適時念定(禪定)を行ない、心に関することに努め励む。
—これがもろもろのブツダの教えである。

(コメント)

G222: 「もろもろの」という複数表現から、み仏はお釈迦様だけではなく、たくさんいらっしやることを表しています。ここでは、仏道の師と捉えます。

G223: 法(真理)を順守することを最優先にするのが、仏道です。当然、法を遵守すれば、戒律は必要なくなりますので、戒律という語は用いませぬ。

「淋しいところにひとり臥し、坐し、」は、必要な時もそうでない時もあるので、削除しました。

詩番号 G224 (F310, C, O360, OS25) / G225 (F311, C, O361, OS25) [@ GS 18 仏弟子]

G224 目について、耳について、鼻について、舌について、身について、意について、言葉について慎しもう。

元詩 眼について慎むのは善い。耳について慎むは善い。鼻について慎むのは善い。舌について慎むのは善い。

一次 修行僧は、眼について、耳について、鼻について、舌について、身について、言葉について、心について慎しもう。

G225 あらゆることについて慎しめば、すべての苦しみを超える。

元詩 身について慎むのは善い。ことばについて慎むのは善い。心について慎むのは善い。あらゆることについて慎むのは善いことである。修行僧はあらゆることについて慎しみ、すべての苦しみから脱れる。

一次 修行僧は、あらゆることについて慎しめば、すべての苦しみから脱れる。

(コメント)

この2つの詩は、六根と言われるものに帰着されるようです。六根とは、目、耳、鼻、舌、体、意(心)で、私たちが知覚する機関です。これを慎もうと、この2詩は教えています。その結果、この世に存在する六境形、音、匂い、味、触覚、意の知覚対象に執着することがなくなるというのが、パーリ經典による六六経教えだそうです。一般に「形」は「色」とも言われますが、当方は「色」は気の流れと捉えますので、本書では「形≠色」と考えます。詳細は付録7—(3)参照。

また、付録1で述べたように、「心」には、顕在意識(意)と潜在意識がありますが、能動的に慎む(制御する)ことができるのは顕在

意識(意)ですので、「心」ではなく「意」を使います。ただし、この2詩では、身、言葉が抜けているので、これらを補います。六根という言葉を使わずに、原文のように具体的な記述を残します。

詩番号 G226 (F297, C, O188, OS14)´ G227 (F298, C, O189, OS14)´ G228 (F299, C, O190+O191, OS14)´ G229 (F300, C, O192, OS14) Ⅱ @ GS 28 仏弟子 Ⅱ

G226 人々は恐怖にかられて、山々、林、園、樹木、霊樹など多くのものにたよろうとする。

元詩 書き換えなし

G227 しかしこれは安らかなよりどころではない。これは最上のよりどころではない。それらのよりどころによってはあらゆる苦悩から免(まのが)れることはできない。

元詩 書き換えなし

G228 法(真理)とみ仏と真人(聖者)の集いを愛し敬い、四つの尊い真理を見る事によって、あらゆる苦悩から免(まのが)れることができる。

元詩 さとれる者(Ⅱ仏)と真理のことわり(Ⅱ法)と聖者の集い(Ⅱ僧)とに帰依する人は、正しい知恵をもって、四つの尊い真理を見る。――すなわち(一)苦しみと、(二)苦しみの成り立ちと、(三)苦しみの超克(チョウコク)と、(四)苦しみの終滅(オワリ)におもむく八つの尊い道(八聖道)とを(見る)。

一次 四つの尊い真理の四諦が、安らかなよりどころであり、最上のよりどころであり、あらゆる苦悩から免れるよりどころである。

G229 この四つの尊い真理とは、(1)苦しみと(2)苦しみの成り立ちと(3)苦しみの超克(チョウコク)と(4)苦しみの終滅(オワリ)におもむく八つの尊い道(八聖道)である。

元詩 これは安らかなよりどころである。これは最上のよりどころである。このよりどころにたよってあらゆる苦悩から免れる。

(コメント)

この4詩で一つと考えます。

み仏ですら法(真理)に従っている存在であって、「法(真理)」がまずありきなので、トップバッターは「法(真理)」としました。したがって、「仏法僧への帰依」は順番が間違っています。

また、僧に関しては付録4に順守し出家の立場を有する人たちであるというだけなので、「聖者の集い」を「み仏と真人の集い」としま

した。「聖者の集い」は精神性に軸がありますので、出家か在家かは問題になりません。仏弟子は、お釈迦様の説かれた四諦の真実と八正道の道を歩んで、個人の靈性の向上に努めなくてはならないという、シンプルな宣言を行なう詩になりました。

詩番号 G230 (F306, C, O392, OS26) [@ GS 18 仏弟子]

G230 正しく覚った人(≡み仏)の説かれた教えを、はっきりと学び得たなら、教示した人が、いかなる人であろうとも、その人を恭しく敬礼せよ。また、その師に頼ることなく、常に自分で考え判断する自立した心を養え。

元詩 正しく覚った人(≡ブツダ)の説かれた教えを、はっきりといかなる人から学び得たのであろうとも、その人を恭しく敬礼せよ、――バラモンが祭の火を恭しく尊ぶように

一次 正しく覚った人(≡ブツダ)の説かれた教えを、はっきりと学び得たなら、教示した人が、いかなる人であろうとも、その人を恭しく敬礼しつつ、その師に頼ることなく、常に自分で考え判断する自立した心を養え。

(コメント)

バラモンの章から移動しました。

人にも、世の如同様に 諸行無常が適応される可能性を理解し、師匠ですら時間が経てば、人格すらも変わるかもしれないのです。よって、常に自分で考え判断し行動することが人間としての義務でもあり責任であるということです。しかし、真理を教授してくださった師匠への敬愛の念を保つことの重要性を示しています。

詩番号 G231 (F296, A, O194, OS14) [@ GS 18 仏弟子]

G231 もろもろのみ仏の現われたまうのは楽しい。

正しい教えを説くのは楽しい。

つどいが和合しているのは楽しい。

和合している人々がいそしむのは楽しい。

元詩 書き換えなし

詩番号 G232 (F301, C, O296～301, OS21) [@ GS 18 仏弟子]

G232 必要に応じ「法(真理)、み仏、心身」について禅定(念定)をすれば空を体現し、常に気をつけてこれを繰り返せば、覚醒し涅槃(悟りによる解脱)の境地に入る。

元詩

- 0296 ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、昼も夜も常に仏を念じている。
0297 ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、昼も夜も常に法を念じている。
0298 ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、昼も夜も常にサンガ(修行者のつどい)を念じている。
0299 ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、昼も夜も常に身体(の真相)を念じている。
0300 ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、その心は昼も夜も不傷害を楽しんでいる。
0301 ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、その心は昼も夜も瞑想を楽しんでいる。

一次 ゴータマの弟子が、昼も夜も起きている間は、常に「仏、法、心、体、善」について念い続けければ、覚醒し、その後も常に覚醒が持続する。そこで、彼らは、念定(禅定)を楽しむであろう。

(コメント)

中村氏の訳出が「AだからBです。」としたら、パーリ語では、「BだからAです。」なのです。これは、中村氏の訳出ミスでしょう。各詩の、パーリ語の直訳を下に記します。

- 0296 彼らにとって昼も夜も常にブツダを念じているなら常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める
(http://76263383.at.webry.info/201211/article_26.html ェんよら)
- 0297 彼らにとって昼も夜も常に法に向いて念じているなら常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める
(http://76263383.at.webry.info/201212/article_1.html ェんよら)
- 0298 彼らにとって昼も夜も常に僧に向いて念じているなら常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める
(http://76263383.at.webry.info/201212/article_2.html ェんよら)
- 0299 彼らにとって昼も夜も常に身体に向いて念じているなら常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める
(http://76263383.at.webry.info/201212/article_3.html ェんよら)
- 0300 彼らにとって昼も夜も常に不害の心を楽しむならば常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める
(http://76263383.at.webry.info/201212/article_4.html ェんよら)
- 0301 彼らにとって昼も夜も常に瞑想の心を楽しむならば常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める
(http://76263383.at.webry.info/201212/article_5.html ェんよら)

「起きている間はずっと念定する」を「必要に応じて適切に禅定する」と捉え直しました。

「覚醒＝涅槃(悟りによる解脱)に入る＝常に空を認識(体現)する」という関係だと考えます。

仏弟子が禅定し(念じ)なくてはならない対象を「法、み仏、(自分の)心身」と考えました。

詩番号 G233 (F260, B, O143+144, OS10) 〔@ GS 18 仏弟子〕

G233 みずから恥じて意を制し、良い馬が鞭に邪魔されないように、世の非難に邪魔されない人が、この世に誰か居るだろうか？ 鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。

正しい信仰、慎み、努め、禅定により思念をこらし、真理を確かに知り、この少なからぬ苦しみを除けよ。そして、知恵と行ないを完成させよ。

元詩 O143: みずから恥じて自己を制し、良い馬が鞭を気につけないように、世の非難を気につけない人が、この世に誰か居るだろうか？

O144: 鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。信仰により、戒しめにより、はげみにより、精神統一により、真理を確かに知ることにより、知恵と行ないを完成した人々は、思念をこらし、この少なからぬ苦しみを除けよ。

一次 みずから恥じて自己を制し、良い馬が鞭を気につけないように、世の非難を気につけない人が、この世に誰か居るだろうか？

賢い人よ、鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。

正しい信仰、慎み（戒しめ）、努め、禅定により思念をこらし、真理を確かに知り、この少なからぬ苦しみを除けよ。そして、知恵と行ないを完成させよ。

(コメント)

「自己を制し」は「守護神を制し」となるので、「意を制し」としました。

「世の避難」は、重要な情報であることも往々にしてあるので、「気につけず」から「邪魔されない」に変更します。

詩番号 G234 (F302, A, O075, OS6) 〔@ GS 18 仏弟子〕

G234 我の利得ばかりを求めると、心が退化する道を進む。この道はあたり一面張り巡らされ選択しやすい。しかし、繁栄と心の成長をもたらす涅槃への道もある。仏弟子はこのことわりを知って、虚栄を求めず、涅槃への道を努め励み進め。

元詩 一つは利得に達する道であり、他の一つは安らぎにいたる道である。ブツダの弟子である修行僧はこのことわりを知って、榮譽を喜ぶな。孤独の境地に励め。

一次 利得に達する道もあり、安らぎに達する道もある。ブツダの弟子はこのことわりを知って、榮譽を求めず、努め励め。

(コメント)

利得だけを求める虚栄心が、自分の精神性の退化へと通じる道を選択し、この道が正しく自分の心を成長させる道よりも圧倒的に多いこ

とを表現しました。

詩番号 G235 (F323, A, O364, OS25) [@ GS 18 仏弟子]

G235 真理を喜び、真理を楽しみ、真理をよく知り分けて、真理にしたがっている者たちは、正しいことわりから墜落することがない。

元詩 真理を喜び、真理を楽しみ、真理をよく知り分けて、真理にしたがっている修行僧は、正しいことわりから墜落することがない。
(コメント)

前回は元詩をそのまま使いましたが、今回は修行僧の節から仏弟子の節に移したので、詩中の「修行僧」を「者たち」と変更しました。

詩番号 G236 (F294, A, O368+O381, OS25) [@ GS 18 仏弟子]

G236 仏の教えを喜び、慈しみに住し、怠らずに努め励めば、悪因の形成が止み、涅槃(悟りによる解脱)に到達する。

元詩 O368: 仏の教えを喜び、慈しみに住する修行僧は、動く形成作用の静まった、安楽な、静けさの境地に到達するであろう。
O381: 喜びにみちて仏の教えを喜ぶ修行僧は、動く形成作用の静まった、幸いな、やすらぎの境地に達するであろう。

一次 仏の教えを喜び、慈しみに住し、怠らずに励めば、悪因の形成が止み、安楽な、静けさの境地(ニルヴァーナ)に到達する。
(コメント)

「動く形成作用の静まった」を「悪因の形成が止み」と書き換えました。
ニルヴァーナ⇨涅槃なので、変更しました。

O368 と O381 も同じ教えの詩なので、一つにまとめました。

詩番号 G237 (F343, B, O384, OS26) [@ GS 18 仏弟子]

G237 禪定(止)と智慧を得ること(観)が完成したならば、その人はよく知る人であるので、その人の束縛はすべて消え失せるであろう。

元詩 バラモンが二つのことから(⇨止と観)について彼岸に達した(⇨完全になった)ならば、かれはよく知る人であるので、かれの束縛はすべて消え失せるであろう。

一次 バラモンが、瞑想と智慧を得ることについて彼岸に達した（＝瞑想を完成する）ならば、その人はよく知る人であるので、その人の束縛はすべて消え失せるであろう。

（コメント）

延暦寺では、「止」とは禅定、「観」とは智慧と、教えられています。

悟りのよすが・八正道・五根で当てはめると、「止が定と念、観が慧」ということになります。

禅定により智慧を得れば、その人が知らなくてはならないこの世の中のことは何でも分かるようになると思います。

詩番号 G238 (F295, C, O187, OS14) [@ GS 18 仏弟子]

G238 天上の快樂はめでたいものだが、妄執の消滅はさらにめでたい。

元詩 天上の快樂にさえもこころ楽しまない。正しく覚った人（＝仏）の弟子は妄執の消滅を楽しむ。

一次 天上の快樂は楽しいものだが、仏弟子にとって、妄執の消滅はさらに楽しい。

（コメント）

天上とは、天国だと思っています。かなり、靈格の高い存在が集うあの世で、そこに存在するものすべてが一級品だと言われています。

しかし、三界からは出られていない場所での、楽しみ（天人の音楽 etc.）が天上の快樂なのでしょう。これらを楽しむ心境は正常だと言えますので、これを否定しないように、詩文を比較の表現に変えました。

「妄執」＝「道理を踏み外した執着」

GS 19 節 修行僧

修行僧は、社会的立場の出家―在家分類における、出家側の方々です。古くは「比丘（ビク）」と書かれていたようです。前回の再考「真理のことば」ver. 1では、出家側で、地位が高いものをバラモンとしていましたが、ヒンズー（バラモン）教における役職名ですので、本書では使用しません。「バラモン」に対応する言葉として、必要に応じて「真の修行僧」（真人になった修行僧）を当てはめました。在家であっても、真人やこれに近くなれば出家と変わらない生活様式に自然と移行していくと感じていますので、修行僧以外の方々にも有益であると思います。

本節は32詩から成ります。

詩番号 G239 (F342, B, O388, OS26) [@ GS 19 修行僧]

G239 禅定と慎みが完成し、悪を鎮めたので、真の修行僧と呼ばれ、正しい教えのもとで出家し努め励むので、修行僧と呼ばれる。

元詩 悪を取り除いたので【バラモン】(婆羅門)と呼ばれ、行ないが静かにやまっているので【道の人】(沙門)と呼ばれる。おのれの汚れを除いたので、そのゆえに【出家者】と呼ばれる。

一次 悪を静め、瞑想と慎みが完成したのでバラモンと呼ばれ、正しい教えのもとで出家し努め励むので、修行僧と呼ばれる。

(コメント)

真の修行僧と修行僧の定義を表した詩として、付録4に合うように、全面的に書き換えました。

詩番号 G240 (F305, C, O375, OS25) [@ GS 19 修行僧]

G240 この世において明らかな知恵を求める修行僧のはじめのつとめは、

怠らず

感官に気をくばる

分限と足るを知る

慎みを守る

淨らかに生きる善い友と付き合う

ことである。

元詩 これは、この世において明らかな知恵のある修行僧の初めのつとめである。―感官に気をくばり、満足し、戒律をつつしみ行ない、怠らないで、淨らかに生きる善い友とつき合え。

一次 この世において明らかな知恵を求める修行僧の初めのつとめは、

怠らないで、

感官に気をくばり、

分限と足るを知り、

戒め(慎み)を守り、

淨らかに生きる善い友とつき合う、

ことである。

(コメント)

・元詩は、明らかな智慧を持っていないという詩になっています。しかし、この世において明らかな智慧を有するものが、修行僧の最終目的の一つだと思います。したがって、「明らかな智慧のある」を「明らかな智慧を求める」とします。

・「戒」は「法」と「慎」と「教(え)」と「掟」などに置き換えられると思いますが、「戒」は武器を持って罰することを前提としたルール／【掟】は手の運び方を定めるルール／【慎】は心をうわつつかせないこと／【法】はこの世の中に絶対不変に存在するもので、何人も侵すことができないもの

ということ、他者に威圧的な意味を含む「戒」や対象領域が狭い「掟」を使うよりは、これらの字が出てきた時に「法」や「慎」や「教」の字に換えるよう検討しています。

・「満足し」は具体性がないので、「分限と足るを知り」と書き換えます。

・項目の並び順と日本語を整えます。

詩番号 G241 (F314, C, O390, OS26) [@ GS 19 修行僧]

G241 愛好するものへの執着から意(オモイ)を遠ざけることは、修行僧にとって少なからずすぐれたことである。この執着する意は心を害する妄執となるからである。

この妄執がやむにつれて、苦悩が静まる。

元詩 愛好するものから心を遠ざけるならば、このことはバラモンにとって少なからずすぐれたことである。害する意(オモイ)がやむにつれて、苦悩が静まる。

一次 愛好するものから心を遠ざけることは、修行僧にとって必要なことである。

(コメント)

バラモンの章から移動。

中村氏も、注釈で解釈に苦しんでいます。愛好するものは、家族ではないかと論じていますが、はっきりしません。言葉通り、趣味から家族まで、すべての愛するものくらいに考えるしかありません。

一次詩では後半を削除しましたが、本書では「害する意」には、対象として「心」を補足しました。この「心」は付録1の心定義2に準書し、潜在部分の心と顕在部分の脳です。これにより、前半と後半の整合が取れてきました。つまり、やみくもに執着する意(妄執)が心を蝕み、これから離れたなら苦悩が減るとい詩になります。

G242 修行僧は、身の装いはどうあろうとも、心身を整え慎しみ深い行いを実行し、生きとし生けるものに対して（不当な）暴力を用いず、心が正しくおさまらなくてはならない。

元詩 身の装いはどうあろうとも、行ない静かに、心おさまり、身をととのえて、慎みぶかく、行ない正しく、生きとし生けるものに対して暴力を用いない人こそ、「バラモン」とも、「道の人」とも、また【托鉢遍歴僧】ともいうべきである。

一次 修行僧は、身の装いはどうあろうとも、自己（魂）を整えて心を治めて、正しく、慎しみ深い行いを実行し、生きとし生けるものに対して（不当な）暴力を用いてはならない。

（コメント）

この詩が、暴力の章にあるのは、どう考えても不自然でした。

「バラモン」とも、「道の人」とも、また【托鉢遍歴僧】ともいうべきである。」を【修行僧】に集約し、詩を全面的に書き換えました。「行ない静か」と「慎みぶかく」はオーバースラップしますので、「慎みぶかく」の方を残し、「行ない静か」は消します。

心について努めることが第一ではあるのですが、それと同時に心と不可分な身体についても気を配ることは大切なので、「心を整え」ではなく、あえて「心身を整え」としました。

詩番号 G243 (F285, A, O266, OS19) ` G244 (F286, A, O267, OS19) [@ GS 19 修行僧]

G243 他人に食を乞うからとて、それだけでは托鉢僧なのではない。汚らわしい行ないをしているならば、それは托鉢僧ではない。

元詩 他人に食を乞うからとて、それだけでは【托鉢僧】なのではない。汚らわしい行ないをしているならば、それでは【托鉢僧】ではない。

G244 この世の福樂も罪惡も見極め、執着を離れ続べ、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、その人こそ托鉢僧である。

元詩 この世の福樂も罪惡も捨て去って、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、かれこそ【托鉢僧】と呼ばれる。

一次 この世の福樂も罪惡も見極め、執着せず、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、その人こそ托鉢僧である。

（コメント）

常に托鉢を受けるに値するか否かを修行僧が自問自答しようという托鉢をする修行僧への教えです。「執着せず」↓「執着を離れ続べ」としました。

詩番号 G245 (F307, C, O365, OS25) ` G246 (F308, C, O366, OS25) [@ GS 19 修行僧]

G245 自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ることができない。
元詩 (托鉢によって)自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ることができない。

G246 修行僧は、怠ることなく清く生き、自分の得たものをが少なくても、それを軽んじない。

元詩 たとい得たものは少なくても、修行僧が自分の得たものを軽んずることが無いならば、怠ることなく清く生きるその人を、神々も称讃する。

(コメント)

ここで托鉢によって得たものと限定してしまうことは、もったいないです。この詩で人が得るものとは、学びによる知識、禅定による気づきまでです。

また、両詩とも、修行僧への教えとして位置付けました。

詩番号 G247 (F333, B, O393, OS26) ` G248 (F334, A, O307, OS22) ` G249 (F335, B, O394, OS26) ` G250 (F336, C, O395, OS26) ` G251 (F337, C, O396, OS26) || @ GS 19 修行僧 ||

G247 氏姓と生れによってバラモンとなる。

氏姓と生れによって修行僧となるのではない。真理と理法とをまもり涅槃(悟りによる解脱)に入りし修行僧が、真の修行僧でありバラモンとは言わない。

元詩 螺髪を結んでいるからバラモンなのではない。氏姓によってバラモンなのでもない。生れによってバラモンなのでもない。真理と理法とをまもる人は、安楽である。かれこそ(真の)バラモンなのである。

一次 身なりによってバラモンなのではない。氏姓によってバラモンなのでもない。生れによってバラモンなのでもない。真理と理法とをまもる人は、安楽である。その人こそ(真の)バラモンなのである。

G248 袈裟を頭から纏っていても、性質(タチ)が悪く、つつしみのないバラモンが多い。かれら悪人は、悪いふるまいによって、悪いところに生まれる。

元詩 袈裟を頭から纏っていても、性質(タチ)が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人は、悪いふるまいによって、悪いところに(地獄)に生まれる。

一次 袈裟を頭から纏っていても、性質(タチ)が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人は、悪いふるまいによって、悪いと

ころに生まれる。

G249 愚かなバラモンよ。身なりだけ整えて、何になるのだ。汝は内に密林(≡汚れ)を蔵して、外側だけを飾る。

元詩 愚者よ。螺旋を結うて何になるのだ。かもしかの皮をまとって何になるのだ。汝は内に密林(≡汚れ)を蔵して、外側だけを飾る。

一次 愚者よ。バラモンの身なりだけ整えて、何になるのだ。汝は内に密林(≡汚れ)を蔵して、外側だけを飾る。

G250 またバラモンは粗末な身なりで、痩せて、血管があらわれていようとも寂しい場所で一人で瞑想に専念するとも言われている。

元詩 糞掃衣をまとい、痩せて、血管があらわれ、ひとり林の中にあつて瞑想する人、——かれをわれはバラモンと呼ぶ。

一次 粗末な身なりで、痩せて、血管があらわれていようとも、寂しい場所で一人で瞑想に専念する人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

G251 しかし、(バラモン女の)胎から生れ(バラモンの)母から生れた人をバラモンと呼ぶのである。この人が「君よ」といつて呼びかける者」でも、「妄執にとらわれている者」でもバラモンである。

執着を離れ制す修行僧、——その人を吾は真の修行僧と呼び、バラモンとは呼ばない。

元詩 われは、(バラモン女の)胎から生れ(バラモンの)母から生れた人をバラモンと呼ぶのではない。かれは「きみよ」といつて呼びかける者」といわれる。かれは何か所有物の思いにとらわれている。無一物であつて執着のない人、——かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 われは、(バラモン女の)胎から生れ(バラモンの)母から生れた人をバラモンと呼ぶのではない。この人は「君よ」といつて呼びかける者」といわれる。かれは何か所有物の思いにとらわれている。無一物であつても執着のない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

(コメント)

バラモンは、厳然と親の身分が反映されるのは周知の事実ですから、ヒンズー(バラモン)教における身分と役職です。「氏姓と生れによってバラモンとなる。」という事実を受け入れて、詩を書き換えました。

執着を執着と書き換えます。

G247: OS22 地獄 から移動。

G250: 「きみよと言つて呼びかけるもの」とは、本来なら尊敬しなくてはならない人に「君よ」と呼びかけてしまう愚かな人がする行為を表しています。すなわち、この世(三次元)における身分の上下しか理解できず、霊格の区別が分からず、威張ったバラモンが多かったのでしょうか。ただし、彼ら自身は、善良を心掛けていた者も多かったでしょうし、この根本的な間違えに気づかず主体的な嫌がらせを積

極的に行なった者はごく一部ではないかと思っています。しかし、お釈迦様がバラモンという血筋による優遇制度とそれにあぐらをかくバラモンを強く非難していることを表現するように詩文を全面的に書き換えました。

詩番号 G252 (F284, B, O264, OS19) 〔@ GS 19 修行僧〕

G252 頭を剃ったからとて、教えをまもらず、偽りを語る人は、出家した修行僧ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして出家者であろうか？

元詩 頭を剃ったからとて、いましめをまもらず、偽りを語る人は、〔道の人〕ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして〔道の人〕であらうか？

一次 頭を剃ったからとて、戒めをまもらず、偽りを語る人は、出家者ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして出家者であろうか？

詩番号 G253 (F303, A, O141, OS10) 〔@ GS 19 修行僧〕

G253 裸の行も、髻に結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、蹲って動かないのも、――真理とみ仏への疑いを離れない人を浄めることはできない。

元詩、一次 裸の行も、髻に結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、蹲って動かないのも、――疑いを離れていない人を浄めることはできない。

(コメント)

疑いの対象を「真理とみ仏」として、詩文に書き込みました。

この詩が、暴力の章にあるのは不自然です。

ジャイナ教の修行者が行っていた苦行に関する記述だそうです。お釈迦様は、従来の信仰（ヒンズー教やジャイナ教）の行っていた苦行は全面的に否定なさいました。

詩番号 G254 (F312, B, O363, OS25) 〔@ GS 19 修行僧〕

G254 修行僧が、意が浮わつくことなく、言葉をつつしみ、思慮して語り、事実と真理とを明らかにするならば、その人の説くところはやさしく甘美になる。

元詩 口をつつしみ、思慮して語り、心が浮わつくことなく、事がらと真理とを明らかにする修行僧――かれの説くところはやさしく甘美である。

一次 修行僧が、心が浮わつくことなく、言葉をつつしみ、思慮して語り、事実と真理とを明らかにするならば、その人の説くところはやさしく甘美になる。

(コメント)

詩中の言葉を使って文章を整理しました。

詩番号 G255 (F313, B, O379, OS25) [@ GS 19 修行僧]

G255 心を励まし、行いを反省せよ。修行僧よ。心を整え、正しい念いをたもてば、汝は安樂に住するであろう。

元詩 みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修行僧よ。自己を護り、正しい念いをたもてば、汝は安樂に住するであろう。

一次 みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修行僧よ。心を整え、正しい念いをたもてば、汝は安樂に住するであろう。

(コメント)

「みずから自分」を「心」、「行い」と書き換えました。これに続く、「正しい念い」を保つために必要と思われる最小限の変更を行いました。既に述べていますが、当方は、心を整えるように慎みある行いと反省をした場合、正守護神様や本守護神様（自己）が心を治め守って正しい今の心（念）が保たれるという立場です。

詩番号 G256 (F315, B, O369+377, OS25) [@ GS 19 修行僧]

G256 修行僧よ。この舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。貪りと憎悪を断ち、ジャスミンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと憎悪を捨て去れば、汝は安らぎにおもむくであろう。

元詩 O369：修行僧よ。この舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。貪りと怒りを断つたならば、汝はニルヴァーナにおもむくであろう。

O377：修行僧らよ。ジャスミンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと怒りを捨て去れよ

一次 修行僧よ。この舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。貪りと怒りを断ち、ジャスミンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと怒りを捨て去れば、汝は安らぎにおもむくであろう。

(コメント)

O369…中村氏の注釈による

舟：個人存在

水：誤った思考

です（異論ありません）。

「貪りと怒り」といっても、怒りの中には収めてはいけない怒りもあるので、最終的に「憎悪」としました。

詩番号 G257(F316, B, O370, OS25) Ⅱ @ GS 19 修行僧 Ⅱ

G257 五下分結の五上分結の順に理解して、これらの執着を離れ続べよ。

さらに、信、精進、念、定、慧による五つ（のはたらき）を修めよ。

そうすれば、修行僧は、五つの汚れ（貪り、憎悪、迷妄、高慢、疑惑）を超え、激流を渡った者とよばれる。

元詩 五つ（の束縛）を断て。五つ（の束縛）を捨てよ。さらに五つ（のはたらき）を修めよ。五つの執着を超えた修行僧は、【激流を渡った者】とよばれる。

一次 まず、五下分結を断ち、次に、五上分結を捨てよ。

さらに、信、精進、念、定、慧による五つ（のはたらき）を修めよ。

そうすれば、修行僧は、五つの汚れ（貪り、怒り、迷妄、高慢、疑惑）を超え、激流を渡った者とよばれる。

（コメント）

これは、五上分結と五下分結、五根、5つの執着を教えてください。それらを具体的に書き出して、文章を整えました。詳しくは「付録5 心の汚れ (1)①、(4)」を参照してください。本書の定義では「貪り」＝「愛欲」となります。

「五つの執着」は「五つの汚れ」（六汚れのうち無明を抜いたもの…付録5参照）と書き直します。

詩番号 G258 (F290, C, O271+272, OS19) Ⅱ @ GS 19 修行僧 Ⅱ

G258 私は、解脱の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけでも、また博学によっても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによっても、得られないものである。修行僧らよ、正しい禅定により法（真理）を体得し汚れが消え失せない限りは、油断するな。

元詩 O271+O272: わたしは、出離の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけでも、また博学によっても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによっても、得られないものである。修行僧よ。汚れが消え失せない限りは、油断するな。

一次 私は、解脱の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけでも、また博学によ

ても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによっても、得られないものである。道を実践する者達よ。汚れが消え失せない限りは、油断するな。

(コメント)

「出離」は、「解脱」のことでしょう。解脱は、在家的な生活を送っていても、到達できると、私は感じています。この詩は、【修行僧】以外にも【道を実践する人】や【賢い人】や【仏弟子】にも与えられた詩句と捉えた方が良いでしょう。

詩番号 G259 (F317, A, O371, OS25) ` G260 (F318, A, O308, OS22) ` G261 (F319, A, O311, OS22) ` G262 (F320, A, O313, OS22) [@ GS 19 修行僧]

G259 修行僧よ。禅定せよ。なおざりになるな。汝の心を欲情の対象に向けるな。なおざりのゆえに鉄丸を呑むな。(灼熱した鉄丸で)焼かれるときに、「これは苦しい!」と泣き叫ぶな。

元詩 修行僧よ。瞑想せよ。なおざりになるな。汝の心を情欲の対象に向けるな。なおざりのゆえに鉄丸を呑むな。(灼熱した鉄丸で)焼かれるときに、「これは苦しい!」と泣き叫ぶな。

G260 法(真理)を守らず、自ら慎むことがないのに国の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがまだ。

元詩 戒律をまもらず、みずから慎むことがないのに国の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがまだ。
一次 戒律を守らず、自ら慎むことがないのに国の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがまだ。

G261 茅草でも、とらえ方を誤ると、手のひらを切るように、修行僧の行も、誤っておこなうと、地獄にひきずりおろす。
元詩 書換えなし

G262 もしも為すべきことであるならば、それを為すべきである。それを断乎として実行せよ。行ないの乱れた修行者はいつそう多く塵をまき散らす。

元詩 書換えなし

(コメント)

G258: 「欲情」→「情欲」としました(「付録5」(2)「欲と執着」参照)。在家よりも出家側の方が、悪いことしくく守られているのですから、それをわざわざ悪いことしに行くのならば、お仕置きだって厳しくなります。修行僧にとっては、厳しい言葉で叱ってくださいる有

難い詩ですから、「瞑想」を「禅定」と替えて、あとはそのままにします。

G258～G261：OS22 地獄 から移動。

G261：ひらがなを漢字に書き換えました。

詩番号 G263 (F332, A, O389, OS26) Ⅱ @ GS 19 修行僧

G263 修行僧を打つな。修行僧は打つ人に対して怒りを放つな。修行僧を打つものには禍がある。しかしただ怒るだけの修行僧にはさらに禍がある。

元詩 バラモンを打つな。バラモンはかれ(Ⅱ打つ人)にたいして怒りを放つな。バラモンを打つものには禍がある。しかし(打たれて)怒る者にはさらに禍がある。

一次 バラモンを打つな。バラモンは打つ人に対して怒りだけを放つな。バラモンを打つものには禍がある。しかしただ怒るだけのバラモンにはさらに禍がある。

(コメント)

落ち着いている心(もしくは理性)でも込み上げてくる怒りに関しては、上手に伝えることが必要ですが、修行僧たるもの安易に「売り言葉に買い言葉」的な慎みのない行為は禁じられていると考えています。修行僧という言葉を使っていますが、リーダーになる人たちが全てへの教えとも言えます。

詩番号 G264 (F321, B, O373+374, OS25) Ⅱ @ GS 19 修行僧

G264 修行僧が念と定の修行のために、人のいない場所で心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。この修行により、個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを、徐々に正しく理解する。それにつれ、個人存在の不死のこわりを知り、それによる喜びを、彼は体得する。

元詩 OS13：修行僧が人のいない空家に入って心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。

OS14：個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを正しく理解するに従って、その不死のこわりを知り得た人々にとって喜びと悦楽なるものを、かれは体得する。

一次 修行僧が念と定の修行のために、人のいない空家に入って心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。

この修行により、個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを、徐々に正しく理解する。それにつれ、個人存在の不死のこわりを知り、それによる喜びを、彼は体得する。

(コメント)

二つの詩を一つにまとめます。

修行僧にとって念と定の修行（＝真理を正しく観ずる）を行うことにより得られるメリットが示されていると思います。

ここで言う喜びは、実際に体得しないと、言葉では説明できないと思うのです。だから、「信じて修行を行ってください。」と御教示してください。

「人のいない空家」↓「人のいない場所」としました。

詩番号 G265 (F322, C, O181, OS14) [@ GS 19 修行僧]

G265 世間から離れた静けさの中で、念いを静め、禅定に専中している修行僧は、正しいさとりを開く。神々でさえもその人を羨む。

元詩 正しいさとりを開き、念いに耽り、瞑想に専中している心ある人々は世間から離れた静けさを楽しむ。神々でさえもかれを羨む。

詩番号 G266 (F326, A, O382, OS25) [@ GS 19 修行僧]

G266 たとい年の若い修行僧でも、仏の道にいそしむならば、雲を離れた月のように、この世を照らす。

元詩 書換えなし

詩番号 G267 (F328, B, O383, OS26) [@ GS 19 修行僧]

G267 修行僧よ。勇敢であれ。情欲の流れを断ち、諸の妄執を去れ。諸の現象の生成と消滅を知って、作られざるもの―法（真理）を知る者であれ。

元詩 バラモンよ。流れを断て。勇敢であれ。諸の欲望を去れ。諸の現象の消滅を知って、作られざるもの（ニルヴァーナ）を知る者であれ。

一次 バラモンよ。流れを断て。勇敢であれ。諸の欲望を去れ。諸の現象の生成と消滅を知って、作られざるもの―法を知る者であれ。

(コメント)

「諸の現象の生成と消滅」は、人の情欲によって色により生成される事象が多いことを説かれているのでしよう（「付録5 (c) 欲と執着」参照）。さらに「色相を知りなさい。」ということで、同時に「空相」（真理）を知らねばならないという教えでしよう。したがって、「作ら

れざるもの（ニルヴァーナ）」という解釈より「作られざるもの―法」の方が正しいと考えられます。「消滅」は「生成と消滅」としました。

詩番号 G268 (F324, C, O378, OS25) 〔@ GS 19 修行僧〕

G268 修行僧が、身も静か、語(ことば)も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享樂物を吐きすてたならば、真の修行僧とも真人とも呼ばれる。

元詩 修行僧は、身も静か、語(ことば)も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享樂物を吐きすてたならば、【やすらぎに帰した人】と呼ばれる。

一次 修行僧が、身も静か、語(ことば)も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享樂物を吐きすてたならば、バラモンと呼ばれる。

(コメント)

【やすらぎに帰した人】は解脱者のことでしょう。そうすると、【真人】か【真の修行僧】の方が、正確です。

詩番号 G269 (F330, C, O415, OS26) / G270 (F331, C, O416, OS26) 〔@ GS 19 修行僧〕

G269 出家して修行し、この世の情欲の激流を超え、妄執の尽きた人、―その人を吾は【真の修行僧】と呼ぶ。

元詩 この世の欲望を断ち切り、出家して遍歴し、欲望の生活の尽きた人、―かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 出家して修行し、この世の欲望の激流を超え、執着の尽きた人、―その人を我はバラモンと呼ぶ。

G270 出家して修行し、愛欲を断ち切り、愛欲の生存の尽きた人、その人を吾は【真の修行僧】と呼ぶ。

元詩 この世の愛執を断ち切り、出家して遍歴し、愛執の生存の尽きた人、―かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 出家して修行し、心をよく治めて、心の汚れの尽きた人、―その人を我はバラモンと呼ぶ。

(コメント)

元詩が、「付録5(2) 欲と執着」の定義とは合わないので、付録5で記したように、心の汚れの中に執着は入るのですが、この世に設定されている欲望の激流に直接感応するのは、執着なので、分けて詩を書きました。

GS 20 節 道を實踐する人

道を實踐する人とは、「付録4 人間の分類」で紹介した真理の探究分類法です。本節は9詩から成ります。

詩番号 G271 (F278, B, O256+257, OS19) ` G272 (F279, A, O258, OS19) ` G273 (F280, A, O259, OS19)

II @ GS 20 道を實踐する人 II

G271 あらあらしく軽率な裁断する人は道を實踐する人ではない。法（真理）に照らして誠と誠でないものをはっきりと區別する人が法を守る 道を實踐する賢い人である。

元詩 O256 : あらあらしく事がらを處理するからとて、公正な人ではない。賢明であつて、義と不義との両者を見きわめる人
O257 : 粗暴になることなく、きまりにしたがつて、公正なしかたで他人を導く人は、正義を守る人であり、道を實踐する人であり、聡明な人であるといわれる。

一次 あらあらしく事がらを處理するからとて、公正な人ではない。義と不義との両者を見きわめる人、粗暴になることなく、きまりにしたがつて、公正なしかたで他人を導く人は、正義を守る人であり、道を實踐する人であり、賢い人であるといわれる。

G272 多く説くからとて、それゆえに賢明なのではない。心穏やかに、怨むことなく、恐れることのない人、その人こそ道を実踐する賢い人である。

元詩 多く説くからとて、それゆえにかれが賢明なのではない。こころおだやかに、怨むことなく、恐れることのない人、かれこそ「賢者」と呼ばれる。

一次 多く説くからとて、それゆえに賢明なのではない。心を落ち着けて、怨むことなく、恐れることのない人、その人こそ賢明であつて、道を実踐する人である。

G273 多く説くからとて、それゆえに道を實踐している人なのではない。たとい教えを聞くことが少なくても、身をもって真理を見る人、怠つて道からはずれることの無い人―その人こそ道を実踐している人である。

元詩 多く説くからとて、それゆえにかれが道を実踐している人なのではない。たとい教えを聞くことが少なくても、身をもって真理を見る人、怠つて道からはずれることの無い人―かれこそ道を実踐する人である。

（コメント）

G271: 「道を実践する人」と「賢い人」がどういう人なのかをうたっていますから、長くなりますが、2詩を1詩にします。「聡明な人」を「賢い人」と書き変えましょう。

「義」という漢字は「正しいやり方」という、とても良い意味があります。ただし、成り立ちとしては「羊の我」と記されていることから、「羊の面を被った悪魔の自分(我)」もしくは「我よしの人間」という負のイメージを有します。「義」の一般的な意味には賛同するのですが、経典等の読み解きでは漢字の成り立ちの意味を重視しないとよくわからない部分が多いのです。同義であるならばその成り立ちも問題ないものに書き換えます。決して、通例の意味を表すその字を否定するものではありません。

詩番号 G274 (F281, A, O260, OS19) ` G275 (F282, B, O261, OS19) [@ GS 20 道を実践する人]

G274 頭髪が白くなったからとて【長老】なのではない。ただ年をとっただけならば「空しく老いぼれた人」と言われる。

元詩 書き換えなし

275 誠あり徳あり慈しみがあって他を害せずつつしみあり心身を整え汚れを除くよう気をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

元詩 誠あり、徳あり、慈しみがあって、傷わず、つつしみあり、みずからとのえ、汚れを除き、気をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。
一次 誠あり、徳あり、慈しみがあって、つつしみあり、みずからとのえ、汚れを除き、気をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

(コメント)

G275: 「傷わず」の意味が曖昧なので「他を害せず」としました。人間は心身共に整えなければならないので、「心身を整える」としました。ただ、くれぐれも注意したいのは、心の方に注意をたくさん向けないといけないということです。

詩番号 G276 (F283, B, O262+O263, OS19) [@ GS 20 道を実践する人]

G276 嫉み、吝嗇(りんしょくヶチ)、偽りを断ち、根絶やしにし、さらに、憎しみをのぞき、聡明である人、かれこそ「端正な人」とよばれる。口先や美しい容貌では、「端正な人」とはならない。

元詩 O262: 嫉みぶかく、吝嗇(りんしょくヶチ)で、偽る人は、ただ口先だけでも、美しい容貌によっても、「端正な人」とはならない。
O263: これを断ち、根絶やしにし、憎しみをのぞき、聡明である人、かれこそ「端正な人」とよばれる。

(コメント)

端正とは、「行儀や姿などが整っていて立派なこと。乱れた所がなく見事なこと。」と辞書に書かれています。在家で生活する立派に見える

る人たちが、見た目だけ端正なのか？ 心も端正なのか？ を見極める必要があるということですよ。

詩番号 G277 (F287, C, O268+O269, OS19) ` G278 (F288, C, O268+O269, OS19) ` G279 (F289, C, O270, OS19) || @ GS
20 道を実践する人 ||

G277 ただ沈黙しているからとて、道を実践する人と思っはならない。そのような中には、愚かに迷い無智なる人がたくさんいる。

G278 秤を手にもっているように、いみじきものを取り、もろもろの悪を除く賢者こそ道を実践する人なのである。この世にあって善悪の両者を（秤りにかけてはかるように）よく考える人こそ道を実践する人とよばれる。

元詩 O268+O269：ただ沈黙しているからとて、愚かに迷い無智なる人が【聖者】なのではない。秤を手にもっているように、いみじきものを取りもろもろの悪を除く賢者こそ【聖者】なのである。かれはそのゆえに聖者なのである。この世にあって善悪の両者を（秤りにかけてはかるように）よく考える人こそ【聖者】とよばれる。

G279（悪だからといって）他の生きものを害なうのは、聖者の道の実践ではない。
生きとし生けるもの全てを害わないのが聖者の道の実践という。

元詩 生きものを害うからとて【聖者】なのではない。生きとし生けるものどもを害わないので【聖者】と呼ばれる。

一次 道を実践する人と呼ばれる人は、生きとし生けるものを無益に害わない。生きものを無益に害うのは、道を実践する人ではない。

（コメント）

G279：「聖者」を「道を実践する聖者」と捉えます。本書では、【聖者】はみ仏と真人を合わせた場合に使います。【聖者】と言われる人々の道の実践の仕方を説かれていると受け止めました。

前半は何か詩文が抜けているようで、どうしても意味不明でした。相手が悪いから徹底的に排除するという行き過ぎた風潮に対して、お釈迦様が教えを述べられているのではないかと思ひ、そのような意味を足して書き換えました。

GS 21 節 愚かな人

本節は16詩から成ります。

詩番号 G280～G289 各詩とも元詩通り。『@GS 21 愚かな人』

G280 (F223, A, 0060, OS5)

眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い。

G281 (F224, A, 0061, OS5)

旅に出て、もしも自分よりもすぐれた者が、または自分にひとしい者に出会わなかったら、むしろきっぱりと独りで行け。愚かな者を道伴(づ)れにしてはならぬ。

G282 (F225, A, 0062, OS5)

「わたしたちには子がある。わたしには財がある。」と違って愚かな者は悩む。

しかしすでに己が自分のものではない。

ましてどうして子が自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか。

G283 (F226, A, 0063, OS5)

もしも愚者がみずから愚であると考えれば、すなわち賢者である。愚者でありながら、しかもみずから賢者だと思ふ者こそ、「愚者」だと言われる。

G284 (F227, A, 0064, OS5)

愚かな者は生涯賢者に仕えても、真理を知ることが無い。匙が汁の味を知ることができないように。

G285 (F228, A, 0065, OS5)

聡明な人は瞬時(またたき)のあいだ賢者に仕えても、ただちに真理を知る。舌が汁の味をただちに知るように。

G286 (F229, A, 0066, OS5)

あさはかな愚人どもは、己(おのれ)に対して仇敵(かたき)に対するようにふるまう。悪い行いをして、苦い果実(このみ)をむすぶ。

G287 (F230, A, 0067, OS5)

もしも或る行為をした後に、それを後悔して、顔に涙を流して泣きながら、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善くない。

G288 (F231, A, 0068, OS5)

もしも或る行為をしたのちに、それを後悔しないで、嬉しく喜んで、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善い。

G289 (F232, A, 0069, OS5)

愚かな者は、悪いことを行っても、その報いの現れないあいだは、それを蜜のように思いなす。しかし、その罪の報いの現れたときには、苦悩を受ける。

(コメント)

G282 と G286 の「口」は「自口」から置き換えています。

詩番号 G290 (F233, A, 0136, OS10) 〔 @ GS 21 愚かな人 〕

G290 愚かな者は、悪い行ないをしておきながら、気がつかない。しかし浅はかな愚者は自分自身のしたことによって悩まされる。あたかも、火がこの愚者を焼きこがすように。

元詩 しかし愚かな者は、悪い行ないをしておきながら、気がつかない。浅はかな愚者は自分自身のしたことによって悩まされる。火に焼きこがされた人のように。

一次 しかし、愚かな者は、悪い行ないをしておきながら、気がつかない。しかし浅はかな愚者は自分自身のしたことによって悩まされる。あたかも、火がこの愚者を焼きこがすように。

(コメント)

OS10 暴力から移動。

比喻部分は意味が通じるようにします。

詩番号 G291 (F234, B, 0070, OS5) 〔 @ GS 21 愚かな人 〕

G291 愚かなものは、真理をわきまえた人が得る功德と同じように、断食行により功德が得られると考える。しかし、愚者の行う行に功德はない。

元詩 愚かなものは、たとい毎月(苦行者の風習にならって一月に一度だけ)茅草の端につけて(極く少量の)食べ物を摂るようなことをしても、(その功德は)真理をわきまえた人々の16分の1にも及ばない。

一次 愚かなものは、真理をわきまえた人が得る功德と同じように、断食行により功德が得られると考える。しかし、愚者の行う断食行に功德はない。

(コメント)

一二三神示の日月の巻第03帖(176)にも、下記のように修行についての教えがあります。

此の神示声立てて読みて下されと申してあるがな。臣民ばかりに聞かすのでないぞ。守護神殿、神々様にも聞かすので、声出して読みてさへおればよくなるのぞぞよ。じゃと申して、仕事休むでないぞ。仕事は行であるから務め務めた上にも精出して呉れよ。それがまことで行であるぞ。滝に打たれ断食する様な行は幽界(がいこく)の行ぞ。神の国のお土踏み、神国の光いきして、神国から生れる食物(たべもの)頂きて、神国のおん仕事してゐる臣民には行は要らぬのぞぞ。此の事よく心得よ。十月十九日、一二。
(http://18.pro.tok2.com/~solht0920070/sunmoon/123_06_sunmoon/sunmoon_06_176.htm きんよの) — 他利的でない苦行のご利益を盲目的に信じ、こだわっている人々を見て、お釈迦様は愚かな者と断じてらっしゃるのでしよう。ですから、愚者が行う断食行のみならず全ての行には功德がなく、真理をわきまえた人の絶大な功德とは比べられないのです。

詩番号 G292 (F235, A, 0071, OS5) ` G293 (F236, A, 0072, OS5) ` G294 (F237, A, 0074, OS5) ` G295 (F238, A, 0073,

OS5) Ⅱ @ GS 21 愚かな人 Ⅱ

G292 悪事をして、その業は、しぼり立ての牛乳のように、すぐに固まることではない。(徐々に固まって熟する)その業は、灰に覆われた火のように、(徐々に)燃えて悩ましながら、愚者につきまとう。

元詩 書換えなし

G293 愚かな者に念慮(オモイ)が生じて、ついにその人には不利なことになってしまう。その念慮はその人の好運(シアワセ)を滅ぼし、その人の頭を打ち砕く。

元詩 愚かな者に念慮(オモイ)が生じて、ついにかれには不利なことになってしまう。その念慮は彼の好運(シアワセ)を滅ぼし、かれの頭を打ち砕く。

G294 「これは、わたしのしたことである。在家の人々も出家の人々も、ともにこのことを知れよ。およそなすべきこととなすべからざることについては、私の意に従え」—愚かな者はこのように思う。こうして欲求と高慢(たかぶり)とがたかまる。こうして欲求と高慢(たかぶり)とがたかまる。

元詩、一次 「これは、わたしのしたことである。在家の人々も出家の人々も、ともにこのことを知れよ。およそなすべきこととなすべからざることについては、私の意に従え」—愚かな者はこのように思う。こうして欲求と高慢(たかぶり)とがたかまる。

G295 愚かなバラモンや修行僧は、実にそぐぬ虚しい尊敬を得ようと願うであろう。修行僧らのあいだでは上位を得ようとし、僧房にあっては権勢を得ようとし、他人の家に行つては供養を得ようと願うであろう。

元詩 書換えなし

(コメント)

G293: 「かれ」を「その人」としました。

G295: 愚かな出家者のことを表しています。明らかに愚かなバラモンの行儀の悪い部分を謳った詩です。ですから、このことがはっきりわかるように主語を「バラモンや修行僧」と書き換えます。

光の守護下の人間であれば、カルマの清算は割合にすぐにやってきます。そんなのいらないうと悪態をつきたくなるくらいです(笑)。しかし、悪魔の守護下になると、カルマの清算が来ないのです。だから、悪人は交通違反しても捕まらないのです。しかし、溜まる一方のカルマで、自分が壊れていく危険をはらみます。

一二三神示では、この世の人々や様々な団体に溜まった悪いカルマを「借錢」と言い表しているようです。これが溜まってしまつて二進も三進もいかないのが、現在のこの世の中なんだと思います。

GS 22 節 賢い人

この章は順番が大幅に乱されていると感じて、詩の並び順、構成も大幅に修正をしました。本書では F259 と F261 詩を、それぞれ G329、G335 詩とし §23 節 真人に編入しました。

神道や仏道について考えをふくらませた時、習得した後の世界は雑音はきわめて低いのですが揺らぎが存在しないほどの静まりが広がっているとは想像ができません。どうしても「静か」という表現で、この個人的な思いが引っかけってしまう部分については「穏(おだ)やか」という表現で代替えました。

本節は 14 詩から成ります。

詩番号 G296 (F293, G, O184, OS14) ② GS 22 賢い人 ①

G296 忍耐・堪忍は最上の苦行である。涅槃(悟りによる解脱)は最高のものであると、もろもろのみ仏は説きたまう。他人を害する人悩ます人は、賢い人ではない。

元詩 忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものであると、もろもろのブツダは説きたまう。他人を害する人は出家者ではない。他人を悩ます人は「道の人」ではない。

一次 忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものであると、もろもろのブツダは説きたまう。他人を害する人、悩ます人は仏弟子ではない。

(コメント)

【道の人】は定義できていないので、「賢い人」としました。

詩番号 G297 (F240, C, O380, OS25) G298 (F239, B, O080, OS6) [@ GS 22 賢い人]

G297 実に己(守護神)は心(自分)の主(あるじ)であり、帰趨(よるべ)である。故に心を整えよ。商人が良い馬を調教するよ
うに。

元詩 実に自己は自分の主(あるじ)である。自己は自分の帰趨(よるべ)である。故に自分をととのえよ。商人が良い馬を調教するように。

一次 実に魂(自己)は心(自分)の主(あるじ)であり、帰趨(よるべ)である。故に魂により心を治めよ。商人が良い馬を調教するように。

G298 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は心を整えよ。

元詩 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は自己を整えよ。

一次 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は自己を整え、心を治めよ。

(コメント)

G297: 靈魂の関係は、霊が上で魂が下です。心(自分)の構成の多数である魂は、守護神(霊)と繋がっているので、心(自分、意識)をそちらに向ければ、心が必要とする様々な回答が得られます。ただし、この過程で心の汚れがひどいと、正しい回答が得られなくなります。

「付録2 「心が治まる」と「心を整える」についての考察」参照。

G298: 「自己を整えよ」の部分で、「心を整えよ」と変更。

詩番号 G299 (F241, C, O091, OS7) [@ GS 22 賢い人]

G299 賢い人々は努め励みあの執着この執着から離れ統べる。
元詩 こころをとどめている人々は努めはげむ。かれらは住居を楽しまない。白鳥が立ち去るように、かれらはあの家、この家を捨てる。

一次 賢い人々は努めはげむ。かれらは執着を遠ざける。彼らは、あの執着、この執着を捨てる。

(コメント)

中村氏により、住居Ⅱ執着であるという注釈がなされています。私は、出家礼賛は、人を正しい方向には導かないと考えていますので、ストレートに住居や家を執着と置き換え、文章を整えます。また、正しい教えの中には、「捨てる」という概念は入らないという考え方に立って、詩文を直しています。その結果、元詩とは似ても似つかない詩に書き換わりました。

詩番号 G300 (F242, A, 0076, OS6) Ⅱ @ GS 22 賢い人 Ⅱ

G300 (おのが) 罪過 (ツミトガ) を指し示し過ちを告げてくれる聡明な人に会ったならば、その賢い人につき従えー隠してある財宝のありかを告げてくれる人につき従うように。そのような人につき従うならば、善いことがあり、悪いことは無い。

元詩 書き換えなし

詩番号 G301 (F243, A, 0078, OS6) Ⅱ @ GS 22 賢い人 Ⅱ

G301 悪い友と交わるな。卑しい人と交わるな。善い友と交われ。尊い人と交われ。

元詩 書き換えなし

詩番号 G302 (F244, B, 0083, OS6) Ⅱ @ GS 22 賢い人 Ⅱ

G302 賢者は、どこにいても、執着を離れ続けるので、楽しみを欲してしゃべることは無い。楽しいことに遭 (あ) っても、賢者は心の慎みを忘れず動ずることはない。

元詩、一次 高尚な人々は、どこにいても、執着することが無い。快樂を欲してしゃべることが無い。楽しいことに遭 (あ) っても、賢者は動ずる色がない。

(コメント)

「動ずる色がない」を「心を慎み動ずることはない」に置き換えました。

詩番号 G303 (F245, B, 0081, OS6) Ⅱ @ GS 22 賢い人 Ⅱ

G303 一つの岩の塊りが風に揺るがないように、賢者は非難と賞賛により心が乱れることはない。

元詩、一次 一つの岩の塊りが風に揺るがないように、賢者は非難と賞賛とに動じない。

(コメント)

賞賛は嬉しいし、非難は心が暗くなりますが、そこは素直に感じて良いと思います。そこから心を乱されるか、それとも心を整えて守って正しく身が処せるかが大切だということです。

詩番号 G304 (F246, A, O376, OS25) Ⅱ @ GS 22 賢い人 Ⅱ

G304 その行ないが親切であれ。(何ものでも)わかち合え。善いことを実行せよ。そうすれば、喜びにみち、苦悩を減するであろう。

元詩 書き換えなし

詩番号 G305 (F247, C, O077, OS6) Ⅱ @ GS 22 賢い人 Ⅱ

G305 聖者が道を説く時、その聖者を賢い人は愛し、愚かな人は疎む。

元詩 (他人を) 訓戒せよ、教えさとせ。宜しくないことから(他人を)遠ざけよ。そうすればその人は善人に愛せられ、悪人からは疎まれる。

一次 道を説く賢い人は善人に愛せられ、悪人からは疎まれる。

(コメント)

道を説く人は、聖者(ブツダと真人)くらいのレベルでしょう。これを喜んで受け入れる人々が賢者であり、疎むものが愚者だとう判断をお示しになられていると思います。

詩の前半部分のように、積極的に他人に関わるというより、仏道は困っている人に道は説くものの、それを押し付けるのではなく、あくまでも、自分が愚だと気づくことから、心や意識に浮かんできたことを自分で実践することを大切にするのです。よってこの部分は、仏道ではない別の教えが併設されていると考えられるので削除します。

詩番号 G306 (F248, A, O084, OS6) Ⅱ @ GS 22 賢い人 Ⅱ

G306 自分のためにも、他人のためにも、子を望んではならぬ。財をも国をも望んではならぬ。邪なしかたによって自己の繁栄を願うてはならぬ。

(道にかなった) 行いあり、明かな智慧ある者と真理にしたがっておれ。

元詩 自分のためにも、他人のためにも、子を望んではならぬ。財をも国をも望んではならぬ。邪なしかたによって自己の繁栄を願うてはならぬ。

(道にかなった) 行いあり、明かな智慧があり、真理にしたがっておれ。

(コメント)

自身が「明らかな智慧」を持っていたら、もはや詩文の前半の部分を注意する必要がありませんので、この部分は「明らかな智慧あるものに従う」と置き換えます。

詩番号 G307 (F249, A, O186, OS14) Ⅱ @ GS 22 賢い人 Ⅱ

G307 たまえ貨幣の雨を降らすとも、愚者の妄執が満足されることはない。「愚かな楽しみは短くして後は苦となる。」と知るのが賢い人である。

元詩 たまえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。「快樂の味は短くて苦痛である」としるのが賢者である。

一次 たまえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。「快樂の味は短くて苦痛である」と知るのが賢い人である。

(コメント)

快樂という言葉はネガティブなイメージの強いことばですので、「楽しみ」と置き換えました。「欲望」は、本書では同じ意味とした「妄執」に置き換えます(付録5(2)参照)。

お釈迦様は、楽しみや快樂を味わいそれに正しく対処するのがこの世の中の醍醐味だと教えてくださっているので、楽しみや快樂が一概に悪い物とは考えてらっしゃらないと思います。これに遭遇した時の対処の仕方によって賢愚が決定することを説いてくださっているのです。

詩番号 G308 (F250, A, O087, OS6) Ⅱ @ GS 22 賢い人 Ⅱ

G308 賢者は、悪いことがらを行わず、善いことがらを行え。愚者には楽しみ難い孤独(ひとりい)のうちにも、賢者は喜びを見出すであろう。

元詩 賢者は、悪いことがらを捨てて、善いことがらを行え。家から出て、家の無い生活に入り、楽しみ難いことではあるが、孤独(ひとりい)のうちにも、喜びを求めよ。

一次 賢者は、悪いことがらを捨てて、善いことがらを行え。楽しみ難いことではあるが、孤独（ひとりい）のうちにも、喜びを求めよ。
(コメント)

出家の勧めを弱める文章にしました。また、積極的な「求め」は妄執につながるので、常に危険をはらみます。賢くなってくれば、自ずと静寂や孤独のなかに大切なものを見出すであろうと考えますので、この考えに従い詩を書き直しました。

詩番号 G309 (F251, B, O182, OS14) ` G310 (F252, B, O193, OS14) [@ GS 22 賢く人]

G309 人は、身体が死んでも魂は存在したままである。

人の身を受けることは、稀で貴重ゆえ、無駄にしてはならない。

もろもろのみ仏の出現したもうことも正しい教えを聞く機会も稀であり、人間の身を受けなくては実現し難い。

元詩 人間の身を受けることは難しい。死すべき人々に寿命があるのも難しい。正しい教えを聞くのも難しい。もろもろのみ仏の出現したもうことも難しい。

一次 人間の身を受け、人生修行することは貴重で、無駄にしてはならない。

死ぬ運命にあると言われる人間は、実は、身体が死んでも、魂は連続的に存在する。

ただ、もろもろのみ仏の出現したもうことは稀であり、よって、正しい教えを聞く機会も稀である。

G310 尊い人(≡み仏)は得がたい。その人はどこにでも生れるのではない。思慮深い人(≡み仏)の生れるところは、光り輝くであらう。

元詩 尊い人(≡ブツダ)は得がたい。かれはどこにでも生れるのではない。思慮深い人(≡ブツダ)の生れる家は、幸福に栄える。

一次 尊い人(≡ブツダ)は得がたい。かれはどこにでも生れるのではない。思慮深い人(≡ブツダ)の生れる家は、光り輝く。

(コメント)

G309: 魂のみの生活の方が圧倒的に分量が多く、人間として身を受けて生まれてくることは非常に稀だと言われています。また、霊は同類同士が集まると言われており、異なる性質を持つ存在同士の交流はほとんどないとも、一二三神示で示されています。したがって、身体を離れた後の生活は似た物同士が集まるので、比較のおだやかでスムーズですが、自分に足りない考えに触れる機会がありません。しかし、この世はさまざまな性質を持つ魂が人間の身体に入って活動するので、自分に足りない考え方や性質に気づきやすいのです。さまざまな霊格や霊質と交流できる場がこの世であり、成長のチャンスであると言うことです。したがって、人間の身を受けているのは貴重で無駄にはいけないということを表す詩文にしました。

「死すべき人々に寿命があるのも難しい。」は、死ぬと言われている人間も、死によって、無に帰るということが声高に言われますが、お釈迦様の立場では、これは虚偽であると主張なさってらっしゃるので、この点も正しく伝わるように書き換えてみました。

G310：「幸福に榮える」とは、中村氏の注釈によると「光り輝く」という意味だそうです。「み仏」がご出現なさる単位として「家」だと心許ないので「ところ」としました。

この詩はお釈迦様の黙示録のような感じがしますので、未来形に書き換えました。

詩番号 G311 (F253, C, 0086, OS6) ` G312 (F254, C, 0079+0082, OS6) 〔@ GS 22 賢い人〕

G311 真理が正しく説かれたときに、真理にしたがう人々は、渡りがたい輪廻転生を超えて、涅槃（さとりによる解脱）にいたるであろう。

元詩 真理が正しく説かれたときに、真理にしたがう人々は、渡りがたい死の領域を超えて、彼岸（かなたのきし）にいたるであろう。

一次 真理が正しく説かれたときに、真理にしたがう人々は、渡りがたい輪廻転生を超えて、安らぎにいたるであろう。

G312 真理を喜ぶ賢い人は、真理を聞き、正しく生活を送り心穏やかに暮らす。その人の心は、深い澄んだ湖のように穏（おだ）やかで清らかなになる。

元詩 0079：真理を喜ぶ人は、心きよらかに澄んで、安らかに臥す。聖者の説きたまうた真理を、賢者はつねに楽しむ。

0082：深い湖が、澄んで、清らかであるように、賢者は真理を聞いて、こころ清らかである。

一次 真理を喜ぶ賢い人は、真理を聞き、正しく生活を送り安らかに臥す。その人の心は、深い澄んだ湖のように静かで清らかなになる。

(コメント)

G311：「渡りがたい死の領域」を「輪廻転生」と置き換えます。

G312：似ている二詩を一つにして、構成順序を整えました。真理を説くのは、み仏か真人（＝聖者）です。

「静か」を「穏やか」に書き換えます。

詩番号 G313 (F255, C, 0095, OS7) 〔@ GS 22 賢い人〕

G313 大地のように慎み深く、整った門のように分別を保ち、汚れた泥がない深い湖のように心が清らかな、そのような境地にある人には、もはや生死の世は絶たれている。

元詩 大地のように逆らうことなく、門のしまりのように慎み深く、(深い) 湖は汚れた泥がないように、— そのような境地にある人には、もはや生死の世は絶たれている。

(コメント)

大地と門の比喩が不明ですから、以下の視点で書き換えます。

- ・ 大地は、生きとし生けるものすべてに恩恵を与えていても、いつも静かで自分を主張するということがありませんので、慎しみ深いのは大地と考えます。ただ、火山爆発や地震などは稀ですので、例外事項とします。
- ・ 門は閉めたり開けたりすることで、人の出入りを監視しますので、正しい分別を持つということを比喻していると考えます。
- ・ 湖は、心のたとえと考えます。

詩番号 G314 (F256, B, 0085, OS6) Ⅱ @ GS 22 賢い人 Ⅱ

G314 人々が多いが、涅槃(さとりによる解脱)に達する人々は少ない。他の(多くの)人々は輪廻転生をさまよっている。

元詩 人々が多いが、彼岸(かなたのきし)に達する人々は少ない。他の(多くの)人々はこなたの岸の上でさまよっている。

一次 人々が多いが、安らぎ(解脱)に達する人々は少ない。他の(多くの)人々は輪廻転生をさまよっている。

(コメント)

彼岸は「涅槃(さとりによる解脱)」に書き換えました。

詩番号 G315 (F257, C, 0092+093, OS7) Ⅱ @ GS 22 賢い人 Ⅱ

G315 心の汚れが消え失せ解脱するとは、空を体現してこの世の実相を認識することである。この解脱者たちの行く手は広大で測りがたい。— 空飛ぶ鳥の行く手が測り難いように。

元詩 0092: 財を蓄えることなく、食べ物についてその本性を知り、その人々の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれらの行く路(足跡)は知り難い。— 空飛ぶ鳥の迹の知り難いように。

0093: その人の汚れは消え失せ、食べ物をむさぼらず、その人の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれの足跡は知り難い。— 空飛ぶ鳥の迹の知り難いように。

一次 心の汚れが消え失せ解脱することは、空を体現してこの世の実相を認識することでもある。この解脱者たちの行く路(足跡)は知り難い。— 空飛ぶ鳥の迹の知り難いように。

(コメント)

付録7参照

無相という「何もかも無いと同じ」というイメージを持ってしまい、非常に危険です。

解脱は、持続的に空を体現して、この世の実相と色相を区別することに他なりません。これに従って、詩を書き換えました。

そして、空の体現と「食べ物を食わず」や「食べ物の本性を知る」は同等のではありません。従って、この2句は削除します。

また、この教えは、在家と出家の両者に与えられているので、財は結果として溜まってしまふことまで禁じえません。突き詰めて言ってしまうと、「財を蓄えること＝悪」と言う関係は間違いで、悪魔のトラップです。従って、これに関する句も削除します。

結果として、両詩はほとんど同様な詩句になるので、合体させます。

「行く跡(足跡)」を、未来的な意味合いを出すため「行く手」に置き換えました。

詩番号 G316 (F258, C, O096, OS7) [@ GS 22 賢く人]

G316 空の体現によって解脱して、やすらいに帰した人―そのような人の心は穏(おだ)やかである。ことばも穏(おだ)やかである。行いも穏(おだ)やかである。

元詩 正しい智慧によって解脱して、やすらいに帰した人―そのような人の心は静かである。ことばも静かである。行いも静かである。

一次 無相の体現によって解脱して、やすらいに帰した人―そのような人の心は静かである。ことばも静かである。行いも静かである。

(コメント)

この世の中の実相が認識できる(空の体現)により、涅槃(悟りによる解脱)し、智慧が湧く順番であろうと考えています。また、空の体現は心の汚れがある程度以下に無くなることによつてなされると考えています(付録7「悟りと空」参照)。

GS 23 節真人

第一に、「吾」は神のお告げという意味が大元の意味です。一人称に吾を使った場合、本・正守護神優位の本人を指していると考えられます。一方、「我」は自己主張ばかりする自分、つまり副守護神的自分です。

自分が使う一人称に「われ」が来た場合、「吾」か「我」のどちらを使う方が無難か、考えて「吾」をあてました。真理のことばで出てくる「われ」はお釈迦様の師匠様の本守護神様がご自身の一人称として使われている場合が多いと考えています。

第二に、基本的に、バラモンを賛美する詩はブツダの賛美詩とします。

また、中村氏は、真人の章の注釈のトップで、真人とは、「尊敬されるべき人」、「拝まれるべき人」、「尊敬供養を受けるべき人」と書かれています。真人とブツダ（み仏）の境界は、付録4（1）分類方法の後半で議論しましたので、参照ください。

今回は、真人とブツダ（み仏）の境界を厳密にしたことにより、基本的に真人の賛美詩はなくなりました。GS 23 節真人もGS 24 節ブツダも、それぞれ、20 詩から成ります。

詩番号 G317 (F269, B, 0098, OS7) ` G318 (F270, B, 0099, OS7) ② GS 23 真人 ①

G317 村にせよ、荒れ地にせよ、低地にせよ、平地にせよ、真人の住む土地は楽しい。

元詩 村にせよ、林にせよ、低地にせよ、平地にせよ、聖者の住む土地は楽しい。

G318 真人は人のいない荒れ地でも楽しい。世人の楽しまないところにおいて、愛執なき真人は楽しむであろう。かれらは快樂を求めないからである。

元詩 人のいない林は楽しい。世人の楽しまないところにおいて、愛著なき人々は楽しむであろう。かれらは快樂を求めないからである。
一次 真人は人のいない荒れ地でも楽しい。世人の楽しまないところにおいて、執着なき真人は楽しむであろう。かれらは快樂を求めないからである。

(コメント)

G317: 「聖者」を「真人」と書き換えておきます。

G318: 愛著↓執着↓愛執(本書)と置き換えをしました。

全体: 中村氏の注釈によると、インドには、日本で考える「林」というものが存在しないようで(本当かな? いきなりジャングルになっ
てしまうとかそういう話なのでしょうか?)、ここでいう「林」は、「荒れた空き地」くらいの意味だそうです。ですから、「林」を「荒れ
地」と書き換えます。

詩番号 G319 (F338, C, 0404, OS26) ② GS 23 真人 ①

G319 在家者・出家者のいずれとも束縛の絆を作らず、住居にこだわらずに修行し、愛欲の少ない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩 在家者・出家者のいずれとも交らず、住家がなくて遍歴し、欲の少ない人、―かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 在家者・出家者のいずれとも不要に交らず、住居にこだわらずに修行し、欲の少ない人、―その人を我はバラモンと呼ぶ。

(コメント)

「在家者・出家者のいずれとも交らず」では、この世に生きている意味が半減しますので、「在家者・出家者のいずれとも束縛の絆を作らず」としました。

「欲」↓「愛欲」としました。

詩番号 G320 (F271, C, O090, OS7) ① @ GS 23 真人 ①

G320 (この世で) 正しく生きて涅槃(悟りによる解脱)に入った真人は、束縛の絆をのがれ憂いや悩みは存在しない。

元詩 すでに(人生の)旅路を終え、憂いをはなれ、あらゆることがらくつろいで、あらゆる束縛の絆をのがれた人には、悩みは存在しない。

一次 あらゆる束縛の絆をのがれ真人は、憂いや悩みは存在せず、生きていながら人生の苦を終える。

(コメント)

詩の構成が正しくないため理解に苦しむ詩になっていましたので、言葉はそのまま利用して並び替えて書き換えました。この際、荻原雲来氏訳の法句経を参考にしました。

九〇 経べき途を已に過ぎ、憂を除き、一切に於て解脱し、一切の縛を断てる人には苦惱あることなし。

真人やブツダでも、この世に存在するのであれば、人生の旅は終わっていないのです。人生の旅が終わっていない以上、なすべきことがあるはずです。

詩番号 G321 (F272, B, O372, OS25) ① @ GS 23 真人 ①

G321 精神の安定統一していない人には明らかな智慧が無い。

精神の安定統一と明らかな智慧とがそなわっている人は涅槃(悟りによる解脱)に入る。

元詩 明らかな智慧の無い人には精神の安定統一が無い。精神の安定統一していない人には明らかな智慧が無い。精神の安定統一と明らかな智慧とがそなわっている人こそ、すでにニルヴァーナの近くにいる。

一次 明らかな智慧の無い人には精神の安定統一が無い。

精神の安定統一していない人には明らかな智慧が無い。

精神の安定統一と明らかな知慧とがそなわっている人は安らぎに帰す。

(コメント)

心を整え治まり禅定により精神を統一し「空」(真理)を見定めて智慧を得るというのが、順序だと考えますので、「明らかな知慧の無い人には精神の安定統一が無い。」という部分は順序が逆転しているので削除しました。
在家でも、真人の段階にいる人には、禅定が必要であることを教えています。

正しい神様と真理を捉える作業が禅定で、これには「正しい念」つまり「精神の安定統一」を必要とし、これにより智慧を得ます。一時、知慧を得たからといって、安定統一を心がけるのをやめてはダメで、常に安定統一と知慧を得る事を心がけることは必要だと思いますが、これが詩の最後の部分で歌われています。すでに述べましたが、念(正しい念)、定(禅定)、慧は不可分です(付録3四諦と仏道参照)

詩番号 G322 (F309, C, O391, OS26) ② @ GS 23 真人 ①

G322 身にも、言葉にも、心にも、悪い事を為さず、(この)三つについて常に慎んでいる人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩 身にも、ことばにも、心にも、悪い事を為さず、三つのところについてつつしんでいる人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 身にも、言葉にも、心にも、悪い事を為さず、(この)三つのところについて慎んでいる人、—その人を我は修行僧と呼ぶ。

(コメント)

OS26 バラモンの章から移動。これは、慎みの完成を歌っているので、修行僧の詩から真人の詩に変えました。

詩番号 G323 (F341, B, O408, OS26) ② @ GS 23 真人 ①

G323 粗野ならず、ことがらをはっきりと伝える真実のことばを発し、ことばによって何人の心を害する意のない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩 粗野ならず、ことがらをはっきりと伝える真実のことばを発し、ことばによって何人の感情をも害することのない人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 粗野ならず、ことがらをはっきりと伝える真実のことばを発し、ことばによって何人の心を害する意のない人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

(コメント)

地獄↓悪いところ バラモン↓真人としました。

詩番号 G324 (F329, A, O399, OS26) [@ GS 23 真人]

G324 罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩 罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、—その人をわれはバラモンと呼ぶ。

(コメント)

「かれを」↓「その人」、「われ」↓「吾」、「バラモン」↓「真人」とします。

詩番号 G325 (F327, C, O406, OS26) [@ GS 23 真人]

G325 敵意ある者どもの間にあつて敵意なく、暴力を用いる者どもの間にあつて心おだやかに、妄執する者どもの間にあつて妄執しない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩 敵意ある者どもの間にあつて敵意なく、暴力を用いる者どもの間にあつて心おだやかに、執著する者どもの間にあつて執著しない人、—その人を我は「バラモン」と呼ぶ。

一次 敵意ある者どもの間にあつて敵意なく、暴力を用いる者どもの間にあつて恐れず立ち向かい、執着する者どもの間にあつて執着しない人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

(コメント)

「暴力を用いる者どもの間にあつて心おだやかに」という表現に戻しました。

「執著」↓「妄執」、「我」↓「吾」、「バラモン」↓「真人」としました。

G097～099 詩の3詩は、この詩とよく似た形式の詩です。

詩番号 G326 (F339, C, O405, OS26) G327 (F340, A, O409, OS26) [@ GS 23 真人]

G326 強くあるいは弱い生きものに対して暴力を加えることなく、無益な殺生を行うことも、行わせることもない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩 強くあるいは弱い生きものに対して暴力を加えることなく、殺さずまた殺させることのない人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 強くあるいは弱い生きものに対して暴力を加えることなく、無益な殺生を行うことも、行わせることもない人、—その人を我はバラモン

と呼ぶ。

G327 この世において、長かろうと短かろうと、微細であろうとも粗大であろうとも、浄かろうとも不浄であろうとも、すべて与えられていない物を取らない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩、一次 この世において、長かろうと短かろうと、微細であろうとも粗大であろうとも、浄かろうとも不浄であろうとも、すべて与えられていない物を取らない人、—かれをわれはバラモンと呼ぶ。

(コメント)

G327: 暴力は、不当な武力と定義しました。全く、「生き物を殺さず殺させることのない」なんて無理ですから、無益にという言葉をつけておきます。

「かれをわれは「バラモン」」↓「その人を吾は真人」

詩番号 G328 (F325, C, O367, OS25) ② GS 23 修行僧 ①

G328 名称とかたちについて「わがもの」という想いが全く存在しない、何ものも無いからとて憂えることの無い人は、真人とよばれる。

元詩 名称とかたちについて「わがもの」という想いが全く存在しないで、何ものも無いからとて憂えることの無い人、—かれこそ【修行僧】とよばれる。

一次 名称とかたちについて「わがもの」という想いが全く存在しない、何ものも無いからとて憂えることの無い修行僧は、【バラモン】とよばれる。

(コメント)

この詩は真人のことを謳った詩ですから、「修行僧」↓「真人」として書き換えます。

詩番号 G329 (F259, B, O089, OS6) ② GS 23 真人 ①

G329 八正道により、心を正しくおさめ、妄執なく貪りを捨てるのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほぐされている。

元詩 覚りのよすがに心を正しくおさめ、執着なく貪りを捨てるのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほ

い)されている。

一次 八正道により、心を正しくおさめ、執着なく貪りを捨てるのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほ
か)されている。

(コメント)

「覚りのよすがに」↓「八正道により」、執着↓「妄執」に書き換えました。

詩番号 G330 (F273, C, O352, OS24) ` G331 (F274, C, O351, OS24) || @ GS 23 真人 ||

G330 愛欲を離れ、妄執なく、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、その人は最後の身体をたもつものであり、「大
いなる知慧ある人」と呼ばれる。

元詩 愛欲を離れ、執着なく、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、その人は最後の身体をたもつものであり、「大いなる知慧あ
る人」と呼ばれる。

一次 執着をなくし欲望の激流を離れ、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、「大いなる知慧ある人」と呼ばれる。

G331 愛欲をなくし、汚れを滅ぼしつくした真人は、さどりの究極に達した人で、生存の矢を断ち切った人となる。

元詩 さどりの究極に達し、恐れること無く、無欲で、わずらいの無い人は、生存の矢を断ち切った。これが最後の身体である。

一次 執着をなくし、さらに、汚れを滅ぼしつくした真人は、さどりの究極に達した人で、生存の矢を断ち切った人となる。

(コメント)

OS24 愛執から移動しました。

O274: 付録5で定義した言葉に置き換えました。み仏に近い真人の状態の特徴の一つが、「生存の矢を断ち切る」だと思っています。

詩番号 G332 (F277, A, O398+O356~359, OS26+OS24) || @ GS 23 真人 ||

G332 いの世の人々は、憎悪、誤った見解、愛欲・愛執、疑惑、慢心、無明によって害われる。

憎悪、誤った見解、愛欲・愛執、疑惑、慢心を消滅させ、さらに、無明を滅ぼした真人―その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩

O398: 紐と革帯と網とを、手綱ともども断ち切り、門をどぎす門(カンヌキ)を滅ぼして、めざめた人、―かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。
O356: 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は愛欲によって害われる。それ故に愛欲を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる

果報を受ける。

0357： 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は怒りによって害われる。これ故に怒りを離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

0358： 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は迷妄によって害われる。それ故に迷妄を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

0359： 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は欲求によって害われる。それ故に欲求を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

一次 この世の人々は、執着、怒り、誤った見解（迷妄）、疑惑、慢心によって害われる。

怒り、執着、誤った見解、疑惑、慢心ともども断ち切り、さらに、無明を滅ぼした真人、—その人を我はブツダと呼ぶ。

(コメント)

中村氏の注釈によると、

紐＝怒り、革帯＝愛執、網＝誤った見解、手網＝潜んでいる煩惱、門＝無明

ですが、G159 詩では「手網＝怒り」となっています。「潜んでいる煩惱」とは見えにくい特徴があるので、網ではなく紐（ひも）で「疑惑、慢心」と考えています。網＝誤った見解のままで行けば、本書では革帯＝愛欲（＋愛執）と捉えます。また、「怒り」事態には正邪が混合しますので、「憎悪」を使用します。したがって、当方は、

紐＝疑惑、慢心（潜んでいる煩惱）、革帯＝愛欲、網＝誤った見解、手網＝憎悪、門＝無明

と解釈します。比喻を用いるとわからないので、これらの比喻は使用せず、具体的に記述します。

つまり、0356～0359 をまとめて、「この世の人々は、憎悪、誤った見解、愛欲・愛執、疑惑、慢心、無明によって害われる。」としました。なお、悪的執着の妄執のもとが愛執で、愛執のもとが愛欲なので、六汚れの「執着」の部分を「愛欲・愛執」としました。以上で、六汚れが揃いました。

詩番号 G333 (F276+F346+F344, C, 0386+0386+0400, OS26) ② GS 23 真人 ①

G333 慎みと禅定を完成させ、常になすべきことをなし、汚れと汚れによる身体形成の絆を消滅させ、涅槃（悟りによる解脱）に達した真人を最後の身体に達したと言う。その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 0386 (F276, F346)： 静かに思い、塵垢（チリケガレ）なく、おちついて、為すべきことをなしとげ、煩惱を去り、最高の目的を達した

人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

0400 (F344)： 怒るゝとなく、つつしみあり、戒律を奉じ、欲を増すことなく、身をととのえ、最後の身体に達した人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 F276： 慎みを完成させ、塵汚れ（チリケガレ）なく、常に為すべきことをなし、解脱に達した真人、—その人を我はブツダと呼ぶ。

F346： 念い静かで、塵垢（チリケガレ）なく、常に為すべきことをなし、最高の目的である解脱に達した人、—かれをわれはブツダと呼ぶ。

F344： 慎みと瞑想を完成させ、汚れを消滅させて最後の身体に達したバラモン、—その人をわれはブツダと呼ぶ。

（コメント）

「再考 真理のことば ver. 1」では、F276、F346 詩は、元詩がどちらも O386 詩で、それぞれ FS20 真人と FS24 バラモンに配置してありました。当方の単純ミスです。O400 (F344) 詩も合わせて同じことを唱えていると考えられるので、一つの詩にまとめ、真人の節に配置します。

「かれをわれは」↓「その人を吾は」に変更しました。

詩番号 G334 (F345, C, O385, OS26) [@ GS 23 真人]

G334 彼岸（カナタノキシ）もなく、此岸（コナタノキシ）もなく、恐れもなく、束縛もない真人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 彼岸（カナタノキシ）もなく、此岸（コナタノキシ）もなく、彼岸・此岸なるものもなく、恐れもなく、束縛もない人、—かれをわれはバラモンと呼ぶ。

一次 彼岸（カナタノキシ）もなく、此岸（コナタノキシ）もなく、恐れもなく、束縛もないバラモン、—その人をわれはブツダと呼ぶ。

（コメント）

「かれをわれは」↓「その人を吾は」に変更しました。

詩番号 G335 (F261, B, O097, OS7) [@ GS 23 真人]

G335 作られたもの—既存の信仰や神を軽信することなく、作られざるもの—法を知り、生死の絆が絶たれ、善悪の計らい、もろもろの情欲から離れた真人—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 何ものかを信ずることなく、作られざるもの（ニルヴァーナ）を知り、生死の絆を断ち、（善悪をなすに）よしなく、欲求を捨て去った人—かれこそ実に最上の人である。

一次 作られたもの—既存の信仰や神を軽信することなく、作られざるもの—法を知り、生死の絆が絶たれ、善悪の計らい、もろもろの欲求から離れた人、彼こそ実に最上の人、真人である。

(コメント)

「作られざるもの」とは、神々や人々が作ったものではなく、この世の元から厳然と存在しているもので、誰も変更できない法（真理）の事と考えられます。

「何ものかを信ずることなく」は、次の「作られざるもの」と対応した句ですから、「何ものか」作られたもの」となるでしょう。これらは作られたものですから、既存の宗教、信仰や教え、教育、つまり「色」の産物ということになります。これらへの軽信を警戒せよという教えでしょう。

「欲求」↓「情欲」としました。

「人―かれこそ実に最上の人である。」を「真人―その人を吾はブツダと呼ぶ。」としました。

詩番号 G336 (E275, A, O421+348, OS26+24) [@ GS 23 真人]

G336 現在、過去、未来の全ての汚れを精算せよ。

その様な人を生存の彼岸に達したという。

その様な人は覚醒していて、もはや汚れによる生れと老いを受けることが無いであろう。

そして、現在、過去、未来の全てのものを認識するであろう。

―その真人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 O348: 前を捨てよ。後を捨てよ。中間を棄てよ。生存の彼岸に達した人は、あらゆることについて心が解脱していて、もはや生れと老いを受けることが無いであろう。

O421: 前にも、後にも、中間にも、一物をも所有せず、無一物で、何ものをも執著して取りおさえることの無い人、―かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 現在、過去、未来の全ての汚れを離れよ。

その様な人を生存の彼岸に達したという。

その様な人は解脱していて、もはや生れと老いを受けることが無いであろう。

そして、現在、過去、未来の全てのものを認識するであろう。

―その真人を我はブツダと呼ぶ。

(コメント)

O348とO421は、構造が似ており、合わせて一つにした方が、理解しやすくなると考えます。

「前、後、中間」という比喻表現を、「現在、過去、未来」と直接表現に置き換えます。

「あらゆることごとがらについて心が解脱」は、心が解脱するのではなく、その人が解脱することだと思うので、「解脱していて」と置き換えます。

「所有しない」という言葉が、真理のことばにはよく出てきますが、お釈迦様は、正当な所有を禁じるような妙な教えをしたはずはありません。ですから、「所有する、しない」のことばに関しては、基本的に削除していきま

す。「生存の彼岸に達する」は、「付録3 (3) 仏道の目標」を参照ください。

GS 24 節 ブツダ

詩番号 G337 (F350, A, O387, OS26) [@ GS 24 ブツダ]

G337 太陽は昼にかがやき、月は夜に照し、武士は鎧を着てかがやき、真人は禅定に専念してかがやく。しかしブツダはつねに威力もて昼夜に輝く。

元詩、一次 太陽は昼にかがやき、月は夜に照し、武士は鎧を着てかがやき、バラモンは瞑想に専念してかがやく。しかしブツダはつねに威力もて昼夜に輝く。

(コメント)

「バラモンは瞑想」を「真人は禅定」と変更しました。

詩番号 G338 (F351, C, O403, OS26) ` G339 (F352, C, O397, OS26) ` G340 (F353, C, O414, OS26) [@ GS 24 ブツダ]

G338 明らかな知慧が深くて、聡明で、種々の道に通達し、禅定を完成させ涅槃（悟りによる解脱）に入りし人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 明らかな知慧が深くて、聡明で、種々の道に通達し、最後の目的を達した人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 明らかな知慧が深くて、聡明で、種々の道に通達し、最後の目的を達した人、—その人を我はブツダと呼ぶ。

G339 すべての束縛から放たれ、恐れることなく、執着を超越して、とらわれることの無い人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 すべての束縛を断ち切り、恐れることなく、執着を超越して、とらわれることの無い人、—かれを吾は「バラモン」と呼ぶ。

一次 すべての束縛を断ち切り、恐れることなく、執着を超越して、とらわれることの無い人、—その人を我はブツダと呼ぶ。

G340 この障害・險道・輪廻（サマヨイ）・迷妄を超えて、渡り終わって彼岸に達し、禅定・熟考し、興奮することなく、疑惑なく、妄執することなく、心穏やかな人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 この障害・險道・輪廻（サマヨイ）・迷妄を超えて、渡り終わって彼岸に達し、瞑想し、興奮することなく、疑惑なく、執著することなく、心安らかな人、—かれを吾は「バラモン」と呼ぶ。

一次 この障害・險道・輪廻（サマヨイ）・迷妄を超えて、渡り終わって彼岸に達し、瞑想・熟考し、興奮することなく、疑惑なく、執着することなく、心安らかな人、—その人を我はブツダと呼ぶ。

（コメント）

OS26 バラモンの章から移動しました。

「かれをわれは「バラモン」を「その人を吾はブツダ」と変更しました。

G338 : 「最後の目的を達した人」を「禅定を完成させ涅槃（悟りによる解脱）に入りし人」と書き換えました。

G339 : 「断ち切り」→「放たれ」としました。

G340 : 「瞑想」→「禅定」、「執着」→「妄執」としました。

詩番号 G341 (F347, A, O353, OS24) [@ GS 24 ブツダ]

G341 我はすべてに打ち勝ち、すべてを知り、あらゆることに関して汚されていない。すべてを捨てて、愛欲は尽きたので、こころは解脱している。みずからさとしたのであって、誰を（師と）呼ぼうか。（「その我とは何ぞや、釈迦よ、答えよ。」）

元詩 われはすべてに打ち勝ち、すべてを知り、あらゆることに関して汚されていない。すべてを捨てて、愛欲は尽きたので、こころは解脱している。みずからさとしたのであって、誰を（師と）呼ぼうか。

一次 我は全てに打ち勝ち、全てを知り、あらゆることに関して汚されていない。全ての執着を捨てて、汚れが尽き、心は解脱している。自らさとしたのであって、誰を（師と）呼ぼうか。

（コメント）

OS24 愛執から移動。

最初にこの詩文を反語用法「〜であろうか？（いや、〜でない。）」で書かれていると捉えていました。しかし、今となってはお釈迦様の中の「我」が発した詩に対して（ ）内が本守護神様が正守護神に対して問いという形でお答えになっているのではないかと考えています。

まず、この詩は全体的に傲慢な感じがします。

一度、真理を教示してくれた人を頼ることはだめでも師として敬愛の念を持つことが徳や誠というものです。次に、色々な関係や出来事から悟るのであって、それを鑑みたときに「みずから悟る」という言葉は出てきません。最後に、お釈迦様の教えは和を大切にすること、勝敗を議論することを完全に否定する教えです。

これに対して、指導なさる本守護神様が問いかけで気づかせようとなさっています。さて、お釈迦様はどのようにお答えになったのでしょうか？　これが、皆様にとつても最終試験なのかもしれないです。

ここまで書いてきて、当方は最終的な師は「法（真理）」であるのではないかと、思うようになりました。

「自燈明、法燈明」の言葉の捉え方なのですが、「おのずと（自然にそこに）ある灯（あか）りが、法の灯りですよ。誰の近くにも自然とあるんですよ。」という意味であって、「自分を抛り所にしなさい。」つまり、「法＝自分」という強烈に傲慢な意味になりかねない捉え方は、全く平和を誘うことなどできないと思に至るのです。

以下に当方がお釈迦様だったらと思ひ、返歌を書き記しました。皆様もご自身でお考えください。

G343の返歌 吾は、全ての愛欲を消滅させ、汚れが尽き、涅槃（悟りによる解脱）を得た。これからは法を頼りとし生きとし生けるものを慈しみ生きていこう。

詩番号 G342 (F348, C, O179, OS14) ` G343 (F349, A, O180, OS14) [@ GS 24「ブツダ」]

G342 ブツダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、ブツダの勝利には達しえない。ブツダの境地はひろくて涯しがない。足跡をもたないブツダを、いかなる道によって誘い得るであろうか？
(さあ、答えよ、釈迦よ。)

元詩 ブツダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、かれの勝利には達しえない。ブツダの境地はひろくて涯しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

一次 ブツダの勝利は敗れることがない。

ブツダの境地はひろくて涯しがない。

足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

G343 誘うために網のようからみつき執着をなす妄執は、ブツダにはどこにも存在しない。ブツダの境地は、ひろくて涯しがない。足跡をもたないブツダを、いかなる道によって誘い得るであろうか？
(さあ、答えよ、釈迦よ。)

元詩 誘なうために網のようにならみつき執着をなす妄執は、かれにはどこにも存在しない。ブツダの境地は、ひろくて涯しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

一次 誘なうために網のようにならみつき執着は、その人にはどこにも存在しない。ブツダの境地は、ひろくて涯しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

(コメント)

この二詩とも「かれ」は男性に対する人称になりますので、全て「ブツダ」に置き換えました。ブツダと言えども、法(真理)に従わねばならない存在だと思われ、やはり抛り所は法(真理)となるのではないでしょうか？ここが理解できているか否かが、み仏と人間の最終的課題のような気がします。以下に当方がお釈迦様だったらと思ひ、返歌を書き記しました。皆様もご自身でお考えください。

G342の返歌 この世においてはブツダが最高の存在なので、この世で敗れることはない。この世でブツダを誘うのは法(真理)であり、しかして、ブツダがこの世を護る。

G343の返歌 ブツダがこの世において邪道にいざなわれることはない。この世でブツダをいざなえるのは法(真理)であり、そして、ブツダがこの世で法をまもる。

詩番号 G344 (F262, C, O401, OS26)´ G345 (F263, C, O407, OS26)´ G346 (F264, C, O412, OS26)´ G347 (F265, C, O411,

OS26)´ G348 (F266, C, O410, OS26)´ G349 (F267, C, O402, OS26)´ G350 (F268, C, O413, OS26) Ⅱ @ GS 24 「ブツダ」

G344 蓮葉の上の露のように、錐(キリ)の尖(サキ)の芥子のように、緒の情欲に汚されない人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。
元詩 蓮葉の上の露のように、錐の尖の芥子のように、緒の欲情に汚されない人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 蓮葉の上の露のように、錐(キリ)の尖(サキ)の芥子のように、緒の欲望に汚されない人、—その人を我は真人と呼ぶ。

G345 芥子粒が錐(キリ)の尖端から落ちたように、愛欲と憎悪と高ぶりと隠し立てとが脱落した人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。
呼ぶ。

元詩 芥子粒が錐(キリ)の尖端から落ちたように、愛著と憎悪と高ぶりと隠し立てとが脱落した人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 芥子粒が錐(キリ)の尖端から落ちたように、執着と怒りと高ぶりと隠し立てとが脱落した人、—その人を我は真人と呼ぶ。

G346 この世の禍福いづれにも妄執することなく、憂いなく、清らかな人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 この世の禍福いづれにも執著することなく、憂いなく、汚れなく、清らかな人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 この世の禍福いずれにも執着することなく、憂いなく、清らかな人、—その人を我は真人と呼ぶ。

G347 こだわりあることなく、疑惑なく、不死の底に達した人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 こだわりあることなく、さとりおわって、疑惑なく、不死の底に達した人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 こだわりあることなく、疑惑なく、不死の底に達した人、—その人を我は真人と呼ぶ。

G348 この世でもあの世でも、妄執を抱かず、意を慎み、束縛を持たない人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 現世を望まず、来世をも望まず、欲求がなくて、とらわれの無い人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 現世を望まず、来世をも望まず、欲求がなくて、とらわれの無い人、—その人を我は真人と呼ぶ。

G349 すでにこの世において自分の苦しみの滅びたことを知り、重荷をおろし、とらわれの無い人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 すでにこの世において自分の苦しみの滅びたことを知り、重荷をおろし、とらわれの無い人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 すでにこの世において自分の苦しみの滅びたことを知り、重荷をおろし、とらわれの無い人、—その人を我は真人と呼ぶ。

G350 曇りのない月のように、清く、澄み、濁りがなくなった人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 曇りのない月のように、清く、澄み、濁りがなく、歓楽の生活の尽きた人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 曇りのない月のように、清く、澄み、濁りがなくなった人、—その人を我は真人と呼ぶ。

(コメント)

これらは、比喩を用いながら対象を賛美する賛美詩です。

「かれをわれは【バラモン】」↓「その人を吾はブツダ」と書き換えています。

G344 : 情欲↓欲望↓情欲

G345 : 愛著↓執着↓愛欲、憎悪↓怒り↓憎悪

G346 : 「執着することなく、憂いなく、汚れなく、清らかな人」↓「妄執することなく、憂いなく、清らかな人」

G347 : 「やとりおわって」を削除

G348 : 立花俊道氏訳の法句経を参考にしました。110 此の世にも彼の世にも、欲望あるなく、意楽なく、繫縛を離れたる、我は之を婆羅

門と云ふ。G350 : 「歓樂の生活の尽きた人」を削除

詩番号 G351 (F354, C, 0417, OS26) ` G352 (F355, C, 0418, OS26) ` G353 (F356, C, 0419, OS26) ` G354 (F357, C, 0420, OS26) ` G355 (F358, C, 0422, OS26) ` G356 (F359, C, 0423, OS26) [@ GS 24 ハンダ]

G351 人間の絆を越え、天界の絆を越え、すべての絆を越えた人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 人間の絆を捨て、天界の絆を越え、すべての絆をはなれた人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 人間の絆を越え、天界の絆を越え、すべての絆を越えた人、—その人を我はブツダと呼ぶ。

G352 【快樂】と【不快】にとらわれることなく、清らかに涼しく、苦樂にうち勝った英雄、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 【快樂】と【不快】とを捨て、清らかに涼しく、とらわれることなく、全世界にうち勝った英雄、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 【快樂】と【不快】にとらわれることなく、清らかに涼しく、全世界にうち勝った英雄、—その人を我はブツダと呼ぶ。

G353 生きとし生ける者の生死をすべて知り、妄執なく、良く生きし人、覚った人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 生きとし生ける者の生死をすべて知り、執著なく、よく行きし人、覚った人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 生きとし生ける者の生死をすべて知り、執着なく、良く生きし人、覚った人、—その人を我はブツダと呼ぶ。

G354 神々も天の伎樂神（ガンダルヴァ）たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした人、—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 神々も天の伎樂神（ガンダルヴァ）たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした真人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 神々も天の伎樂神（ガンダルヴァ）たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした人、—その人を我はブツダと呼ぶ。

G355 牡牛のように雄々しく、氣高く、英雄・勝利者・汚れの無い人・解脱者—その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 牡牛のように雄々しく、氣高く、英雄・大仙人・勝利者・欲望の無い人・沐浴者・覚った人（ブツダ）、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 牡牛のように雄々しく、氣高く、英雄・勝利者・汚れの無い人・解脱者—その人を我はブツダと呼ぶ。

GS56 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至って、直観智を完成した聖者、完成すべきことをすべて完成した人、――その人を吾はブツダと呼ぶ。

元詩 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至って、直観智を完成した聖者、完成すべきことをすべて完成した人、――かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

一次 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至って、直観智を完成した聖者、完成すべきことをすべて完成した人、――その人を我はブツダと呼ぶ。

(コメント)

共通：「かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。」を「その人を吾はブツダと呼ぶ。」と書き換えます。

GS51：「捨て」、「越え」、「離れ」と表現を変える意味がよくわかりませんので、全て「越える」とします。

GS52：詩中の「とらわれる」対象がわかりませんので、「快樂と不快にとらわれない」と、対象を明記して、文章を整えました。「全世界にうち勝つ」ではなく、「苦樂に打ち勝つ」としました。

GS53：「よく行きし人」の意味がわかりませんので、「よく生きし人」とします。

GS55：大仙人、沐浴者を削除。欲望のない人↓汚れのない人、さとった人(ブツダ) ↓解脱者と書き換えました。

第4部 付録

付録1 魂と脳と守護霊 最終版ーリプレイス

1節はじめに

二〇二〇年九月二十九日記す。

これは、<https://newbuddhawords.blogspot.com/2018/11/blog-post.html> に載せた記事のリプレイス版であり、同時に再考「真理のことば」ver. 1の付録1のリプレイス版です。この記事は過去の内容も今回は含んでいますので、初見の方は過去の記事を参照する必要があります。

本書では、心について大幅な変更をしました。

前回の定義(一)…心⇕顕在意識+潜在意識

を新定義とし、もう一方の

魂の定義(一)：魂(⇕自己)⇕心(⇕自分)+DNA1+DNA2

は撤回し、一霊四魂を取り入れて新定義(二)を構築しました(後述)。

変更の概要は、魂は心を構成するものとし、前回の「魂は心より上に位置する」という解釈をしましたが、本書では、魂が心を構成する、つまり両者は対等の存在になったことです。この変更により、脳機能を多少拡張しましたが、全体的に変更点は少なく、話がすっきりと流れて読みやすくなりました。

二〇一九年二月十九日記す。

私がマシューさんに、「人間の魂と身体、また、守護霊と言われる方との関係をはっきりとさせてみてはどうですか?自分と自分の先祖のことについても、あなたは先祖と自分を切り離して考えているところがありますが、それは甚大な誤解なのですよ。」と言われて、2017年6月19日現在ですでに一年以上が経っていました。私自身も、自分と先祖、身体を持たないバックアップしている存在との関係には強い興味を持っていました。そこで、二つの命題

- 人間の魂と心とは何か?
- 人間の身体と心の繋がりはあるのか、否、あるのは確かですが、どういう関係なのか?

を立てました。壮大な命題であると同時に、現在の人間の科学では、残念ながら、証明は不可能です。したがって、この記事も科学的バックアップは受けられないでしょう。でも、腑に落ちる説というものを、私の審神者を使った上で、情報を集め、考えをまとめてみたいと思った次第です。なせならば、今後生きていく私たちが有意義な人生を送るための情報になると確信したからです。さらに、重大な病気で苦しんでいる方々にとっても有益ではないかと考えたのです。

でも、半年くらい思索を続けた2017年9月あたりに、「とても大変な課題に手を出してしまった。」と、かなり後悔した時期がありました。審神者を行い、ネットで色々調べても、誰も答えが出せないのを良い事に、似て非なるような説が飛び交う世界が広がっているではありませんか。悪魔の広めている情報を拾い集めながら正しいものを考えろという作業は、審神者を使う私にとっては、神経に与えるダメージがとて強いのです。「なかったことに。」なんて思ったこともありましたが、マシユーさんはきつとアメリカ上空でこのネットを見ていると思うと：。「まだ宿題、終わってないよ」って、お声が聞こえる私でした。

しかし、当時、並行して「真理のことば」の読み直しを始めました。その時に、達成するためには、変じ改めるべし、いろいろな情報（山）を重ね合わせて、正しいもの（お釈迦様の教えとマシユーさんからの宿題の解）との出会いをする時期なのだというご託宣が降りてきました。

「真理のことば」を変じ改めるためには、どうしても、マシユーさんからの宿題の解が必要であることに気づき、これらが別立てで存在しているのではなく、同じ源から発生している事を理解しました。上記の命題の解を考えるにあたって、情報を細かく調べて吟味し、熟考しますが、核は審神者の情報になりました。

2節 人間の霊的システム

2-1 一霊四魂

心とは、魂が凝（こ）っているものという意味から来ているそうです。そして魂は、「鬼の云うことが聞けるもの」で、ここで「云う」は、「言う」と異なり、単なる伝聞を、また、「鬼」とは、「隠れた存在」を意味するのだそうです。実は、神道ではオニは神様でもあり邪鬼でもあって、われわれが思い浮かべる邪鬼と同時に正反対の善神的な存在も指すようです。つまり、魂とは、神様の御託宣もしくは邪鬼（悪魔）のささやきを私たちに届けてくれる存在と言うことです。

魂が凝っている心という捉え方は、神道の一霊四魂という教えに非常に似ています（図2参照）。私は江戸時代後期の比較的新しい教えだと思っていました。日本書紀の大国主尊と少彦名尊の物語にも出てくる古来からの日本の叡智とされているようです。

一霊四魂についての説明は、個性認識学 (<https://4soul.jp/ichireishikon/>) さんからの引用をさせていただきます。

心は、四つの魂とそれを統御する一つの霊から成り立っています。四つとは、荒魂、和魂、幸魂、奇魂であり、一霊は直霊（直昆）という神様の名前がついています。荒魂の働きは「勇」で前進する力、和魂の働きは「親」で調和する力、幸魂の働きは「愛」で愛し育てる力、奇魂の働きは智で真理を探究する力です。…

補足すると、霊界物語では、直霊（なおひ）は直日（なおひ）と書かれています。私は、以前は一霊四魂を荒唐無稽かなと感じたのでこの記事でも参考引用はしませんでした。時間が経った現在では、経験として素晴らしい概念（事実！？）だと思に至り、本書で取り入れることとしました。

2-2 守護神

前回は、本守護神様+正副守護神様については、資料に載せた「一二三神示冬の巻第一帖」を参考にしていました。その後、霊界物語を読み初め、「人間の霊的システム」について、もう少しはつきりとそのあらましが掴め始めましたので、守護神様についても、新たな情報を付加して書き改めました。

まず、本守護神様と正守護神様と副守護神様について、参考にした霊界物語の記述を下記に列挙します。

- 直日の御霊は本守護神である。
(霊界物語第6巻第6篇百舌鳥の囁第36章三五教より)
- 本守護神と正守護神と副守護神は、自分が宿っている人間を見ることができない。なぜならば、それらの知覚世界は精霊界であり、この世の中は見れなくなっている。
(霊界物語 第4巻第2篇天国巡覧第12章天界行より)
- 人間の本体である精霊である三つの守護神は人間の体の中に入っていて、共に居ることは少しも知らない。

日本古来の心の考え方 『一霊四魂』



図2 一霊四魂

直霊が4つの魂を統括し、省みることで人格が発達する。

(霊界物語第ㄆ卷第㉟篇 天国巡覧第㉞章 天界行より)

● 本守護神は天霊、正守護神は善霊、副守護神は悪霊である。

(霊界物語第ㄆ卷第㉟篇 天国巡覧第㉞章 天界行より)

● 副守護神は人間の記憶・想念の中にある悪しき事物の間に潜入する。

(霊界物語第ㄆ卷第㉟篇 天国巡覧第㉞章 天界行より)

● 正守護神は善き事物の間に侵入する。

(霊界物語第ㄆ卷第㉟篇 天国巡覧第㉞章 天界行より)

● 守護神たちは、人間の記憶や想念を自分たちのものだとしんじている。

(霊界物語第ㄆ卷第㉟篇 天国巡覧第㉞章 天界行より)

● 欲は四魂の働きの遂行から生じる。

(3) より、守護神と言われるものは精霊と言われる存在で、実はその宿主である人間を認知しておらず、心で共有されている記憶や想念を認識しているようです。一二三神示では本守護神様も正守護神様も、実は、それぞれ神界と霊界の自分であると説かれています。このことから、「真理のことば」で、「己」と呼ばれるものは、本守護神様(ハイヤーセルフ)と正守護神様(セルフ)だと考えています。

2.3 心

人間の心を作っているのは、ベースとして一霊四魂であるという説を前章で記しましたが、ただ㉞で後述しますが、本守護神様は、少し離れて心や人間本体を見守っている様に私は感じています。心には正守護神様と副守護神様が(㉞)や(㉟)のように潜伏なさっています。つまり、心は

心Ⅱ(一霊) 四魂+正守護神様+副守護神様(新定義1)

となっていると考えられるのです(㉞3参照)。

そして、四魂が持っている記憶や想念(欲も含む)を、心でみんなが共有するというシステムのようにです。そして、四魂こそが体現された三次元の自分に最も近いのだらうと思います。今、人が問題に直面したと心が判断した時に、凝り固まった存在(魂㉞精霊)たちが自分のことのように親身になって解決するためのアドバイスをします。その時、一番権限があるのは、理想的には正守護神で、このような時には、善意に根差した常識的な判断がなされます。しかし、ここで副守護神が権限を持ってしまうと、とにかく心から割り出される解決策や対応が悪となって現れます。

正守護神様が上手に働いている良いスパイラルでは、四魂には滋養が行き渡り、心に新たな善を植え付けることができます。このことを「心を整える」と表しているのでしょうか。これを推し進めることにより、セルフ（自己）である本守護神様や正守護神様が守られ、その力の発動が容易になり人間から真人（神人）となれるのでしょうか。

本守護神様は、正守護神様が霊界から一段上上がった神界へ移行できるように指導していらつしやると同時に、副守護神様が悪魔的振る舞いを悔い改めるように指導していらつしやるのでしょうか。正守護神様が神界に近づいた時に、その人は真人となり、完全に神界に入ってしまうばブツダ（目覚めた人）になるのではないのでしょうか。四魂に直接的に働きかけるのは正副守護神様方でしょうか。

反対に悪いスパイラルは四魂を壊していく力があります。その行き着く先は、心が悪だらけになり四魂が劣化し、副守護神の言いなり、つまり人間が悪魔の容れ物となります。本守護神様は、だいぶ位が高いので悪に引きずり込まれることはない様ですが、酷い場合は正守護神様も道連れにして悪魔にしてしまいます。

2-4 心臓と脳

脳と心臓についての自分の考察のきっかけは、「資料4 人型図上の指によるエネルギー測定の実行」で、この考察から

- 脳の働きは、心で割り出した対応方法を三次元に焼き直し身体の各器官に命令し、また、外界の情報を心が理解できるように翻訳する装置で、コンピューターで言えばCPUにあたる部分
- 心は心臓にいと主張する資料2は妥当

だと私は考えています。

ここで、脳を通して心からの情報が認識されうるものを（顕在）意識と言えば、（顕在）意識は主に脳にあると言って良いと思います。また、意識として現れない心（凝った魂・文献1のオートマン）を潜在意識とすれば、心は顕在意識と潜在意識からなると考えても良いと思います。つまり、

心Ⅱ 顕在意識＋潜在意識 （新定義2）

です。（新定義2）は、（新定義1）を否定するものではなく、心の見方を変えて定義を変えただけのことです。顕在意識が潜在意識の上に出てきたものですが、はつきりと線を引いて分けることは難しいでしょう。（新定義2）に関しては「資料3 中村元氏の心と意に関する記述」も参照してください。

ただし、脳は必ずしも顕在意識的な状況のみではなく、潜在意識から発せられる情報の翻訳も行っているようです。不随意筋など

が動くのも認識はせず、本能とされるのでしようが、やはり脳の働きは必要です。また、脳も80%以上の脳細胞が活発に働いていないと言われていますが、これらが心の潜在意識部分からの情報の処理を担っていると考えています。その結果、頭で理解して納得したつもりでも心臓がドクドクすることや、意識を通さずに身体が動く体得というものが存在するのでしよう。また、顕在的に脳が出した指令があまり妥当ではない時など、それを否定する信号が、意識しないままに、脳から身体に送られることもあるようです。

以上より、脳と心臓は不可分であることを説明しましたが、心臓（心）と脳の連携のほとんどは、身体の神経機能を使って行われているようです。さらに、神経が大量に通っている器官は脳と心臓（心）とより強く繋がっていると云えるのです。言い換えると、そのような器官は心の潜在部分も強く体現してしまう性質を持っているのです。ですから、発達した視覚神経が通る目は心の窓と言われ、他にも「つい手が出ちゃう」、「つい口からでちゃう」というような慣用表現が生まれたのでしよう。考察は、図4に記します。

本文中の「心」については、考察した上で「意」に置き換えた部分がありますが、「意」は顕在意識のこととしました（後述の資料3を参照ください）。というのも、「心」より「意」の方が、人間にとっては制御しやすいと判断したからです。

2-5 丹田

本守護神様の直日（なおい）様は、正守護神様や副守護神様が心の中にいらっしやるのとは異なり、少し離れたところから心全体を見てらっしやるようです。そして、場所としては下っ腹の丹田あたりから心を観察していらっしやるようで、私の予想としては、三次元の間人本体の状況もよく見てらっしやると思います。したがって、下っ腹に意識を集中して、自分の心や行動を省みることにより、直日様からのアドバイスが自分の内部から湧き上がって伝わるようです。ですから、禅定（瞑想）を行う時に、丹田に意識を集中するのは、禅定のいろはなのでしよう。

また、本守護神様はとも力のある善神様なので状況の改善が図られることもありますが、それが奇跡的には見えないのが特徴だと、一二三神示では記されています。また、本守護神様は、平常運転時にはご発動なさることはなく、何か危機的な状況や非常に重要な局面でご発動なさるようです。

実は、本当に重要なことは資料2で記されたハート（心臓）に聞くのも有効ですが、心臓部分を落ち着けて（すなわち心を落ち着けて）自省しながら、下っ腹に意識を集中して考えることが有意義だと思えます。また、脳（器官）と心臓（心）の連絡は、物理的に神経細胞が介しているようですが、下っ腹と心臓の間は、両端が霊なのでテレパシーのような別の情報伝達手法がメインではないかと思っています。

次に、肉体本体を作り出すDNAについて考えます。資料の一二三神示では「人間の肉体は想念の最外部、最底部をなすものであるから肉体的動きの以前に於て霊的動きが必ずあるのであるぞ」と記されています。体はDNAによって、設計されています。これは先祖から受け継いだものが多いでしょう。

また、DNAは体質を決めるDNAと、働きが全くわからないDNAがあることがわかっています。前者は数パーセントしかないのですから、働きがわからないDNAの多さにびっくりします。これは24で記した脳細胞の構成と似ています。ここで、

- DNA1：三次元の肉体を設計する（体の丈夫さ、運動神経、頭の良し悪しなど）
- DNA2：いまだに役割が特定できていないもの

に分類しましょう。私は、資料の一二三神示の情報から、神様やご先祖様からの指令やその人の元来の性格や考え方の癖などは、DNA2に情報があるのではないかと考えています。したがって、DNA2は、常に心と情報をやり取りしていて、実は心の記憶装置（ハードディスク）として働いているのではないかと考えています。ただ、もちろん顕在意識とのやりとりはなく、顕在意識には現れないと考えています。

一方、DNA1も身体を作り方を記憶しているので、こちらも身体設計用の記憶装置と捉えることができます。こちらも顕在意識が認識することはないでしょう。いずれにしても、DNAは心身が必要とする情報を格納する役割があると考えられます。

3節 人間システムの維持

3-1 情報伝達

身体の各器官が何らかの情報を受けた時、その器官から脳に送られた情報は脳で翻訳され心に伝達されます。その対応策は心で各魂や守護神により会議決定され、その情報を脳に返送し、脳が翻訳して身体の隅々に働きを命じて、私たちの生活が成り立っていると考えています。脳は、顕在意識としても意識されない潜在情報も情報処理をしているので、想像以上に沢山の情報処理をしているようです。

例えば、体調不良を認識しないまま、完治するなどと言うことは日常茶飯事ですから、このような場合は、潜在意識のみで脳を通して身体の各器官に対応策が送られている結果でしょう。

身体の器官・末端の細胞が受信する情報は、外界の音や映像などの五感情報だけでなく、霊的な働きかけの情報もあるようです。その一例としては、外部霊の認知でしょう。これらは、人によりませんが、身体のどこかで受け取り、その情報は潜在的に脳を

通して心に伝わることが多いようです。ただし、人間は、基本的にこれらを顕在的に認知する能力も備えているようです。何だか、ドキドキするとか、虫の知らせとかが、その例です。そして、この感度の強弱はやはり個人差があり、感度の良い人は靈感のある人で、さらに、いろいろな情報を得られる人たちが霊能者なのでしょう。一二三神示では、この五感を、超五感と記しています。この超五感により悪霊が副守護神と共鳴して、その人を破壊したりもします。

話は変わりますが、精神障害には、

- 1 身体の脳が物理的に誤動作、故障する場合
- 2 副守護神や外部悪霊により、心に歪みが生じ誤動作する場合

の心通りがあるのではないかと思えます。どちらも、もちろん霊的な作用がありますが、下記のような特徴があるのではないかと考えています。

- 1 死に至るために生じる場合も多い
- 2 心が正しく治っておらず、正守護神や四魂が苦しんでいるサインを脳に出している場合です。これを改善すれば治る可能性が高いと考えていますが、この時に精神分裂的な症状が現れます。それは、正守護神と副守護神の対立の現れでしょう。ただし、悪い方に振り切れると、副守護神率いる悪魔の単一守護となるので、落ち着いたように見えます。

最後に、通常は心臓死より脳死が先になりますが、これは心が情報処理部である脳のスイッチを切るからでしょう。そして、心臓のスイッチは本守護神様が切るのでしょうか。これは、魂が安全に身体から抜けるためだと考えています。

3-2 心と身体とDNAの連携

どんな（論理的な）思考も、心で為され、思考を司っているのは主に心臓部分であろうということは、私にとっては驚愕の事実です。なぜならば、日常的に使われる「頭を使う」という表現を疑ったことはなく、思考を行うのは頭だと信じきっていたからです。もちろん、三次元的な現れをするために、脳が担っている仕事量はものすごく多く、やはりその性能が良い、つまり頭が良いということとは、重要なことでしょう。しかし、脳から出るものは、心の有様を超えることができない、心と脳という関係があるのです。そして、心の状態は、四魂と守護神様方の中で、その時もっとも影響力のある守護神様によって決定されます。そして、その候補としては、正守護神様か副守護神様ですが、そのどちらを自分の主人にするのかを決めるのが四魂でしょう。正守護神様のご主人様は本守護神様ですが、副守護神様のご主人様はよその悪魔です。

一般的に、脳は心を制御できないのですが、外部と心との通路も脳ですから、心に作用するための一番有意義な器官は脳ということになります。

脳に対する良い作用は、心が正守護神様の下で正しく治り、正しい行いや精進を行っている場合に起こります。脳から心には正常な情報が多く送られ、脳にも心から正常な情報が送られますので、心も脳も壊されにくくなります。その結果、その人は、安全に霊性の向上を目指せます。この場合、後述する悪魔による脳に向けられた致命的な妨害工作は、本守護神様のご発動により阻止されます。

逆に脳に対する悪い作用は、心を封印する、もしくは、破壊するための攻撃で、悪党のプロパガンダによる洗脳、劣化した教育、あからさまな不当行為などが代表例です。これにより、顕在意識から悪い思考やネガティブな念いを侵入させて思考回路を壊したり乱したりして、潜在意識の書き換えすら行ってしまうのです。このような事態に陥った時は、考えがスムーズに流れにくくなります。その原因は、正守護神様と副守護神様の対立があるからで、心を落ち着けて自省し下っ腹に意識を集中させて考えてみてください。それでも上手くいかないときは、一度棚上げにして放置するのが有効です。他にも、様々な薬物や電磁波により身体の末端の器官から脳へ異常信号を送る事や、DNAを損傷させることで脳に異常な情報を送る事などによって、心（潜在意識）を攻撃する方法もあります。

脳はDNAを記憶装置として管理していますが、脳がDNAの書き換えもできる機能を持っていると、私は思っています。

例えば、常に正精進を行い鍛錬した場合には、本守護神様や正守護神様の許可のもとに、心が脳にDNAの書き換えを命じ、それに沿って脳がDNAの書き換えを行うというものです。ですから、スポーツなども鍛錬すれば、体が覚えるというのは、DNAにその情報が蓄積された、つまりDNAに書き換えが施されたと考えられるのです。一三三神示によると、この変化は本人の努力に見合ったペースで行われるようで、結果的には奇跡的だったのでしようが、あからさまな奇跡には見えないのが特徴だそうです。そして、もちろん顕在意識では認識できない作業です。

反対に、副守護神を通して、脳がDNAを書き換えてしまうこともあります。この場合は、稀に奇跡的な飛躍に見えることもあります。最終的には連続した劣化が主になります。

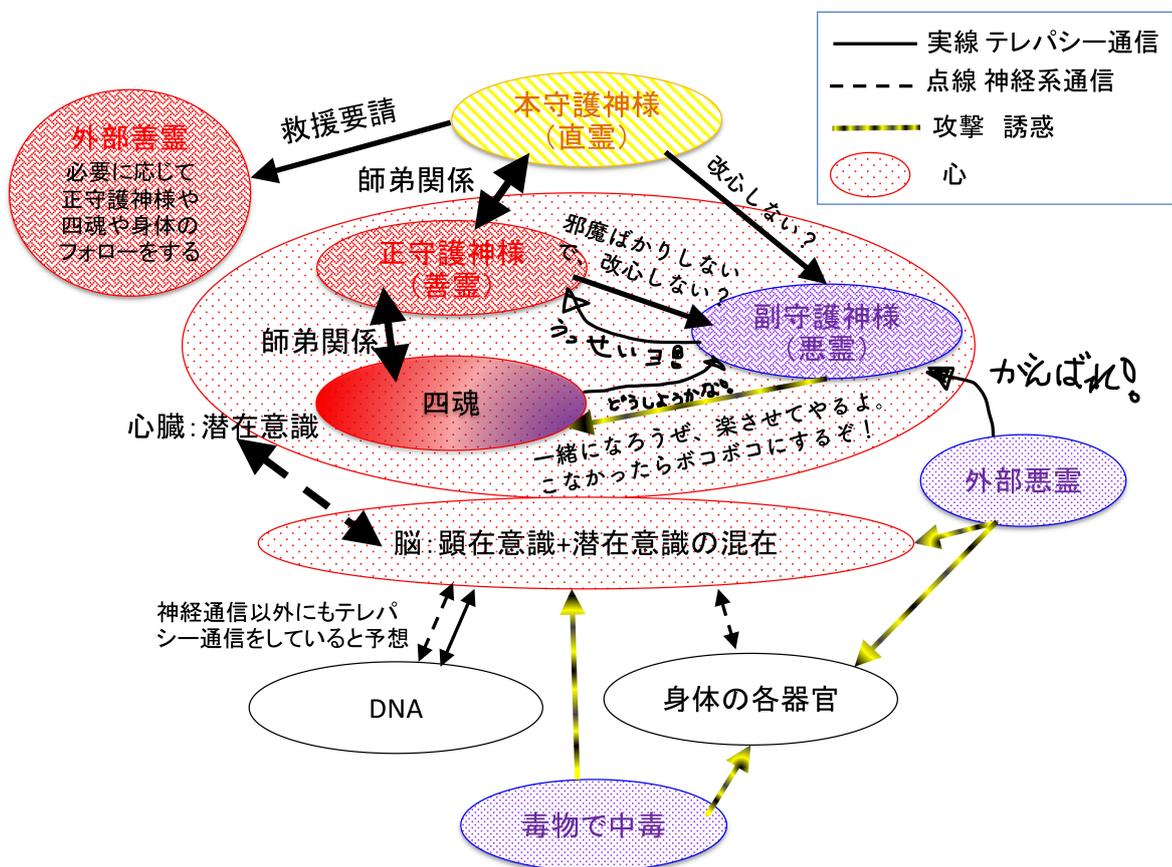
教父の一人であるテルトゥリアヌスは、「肉」を「魂のからだ」と呼び、魂を「霊の入れ物」と呼びました。彼は、「魂は霊と体の中間に位置するとし、霊と体が直接交流することは不可能である。魂が仲介することによって、両者ははじめて交流することができる。」としました。 <http://sugano.us/sei/rei-0.htm> さんより

私の考えは、一霊四魂を取り入れ、魂が4つ集まって心という場を創生し、そこに正守護神様と副守護神様が納まってくださり、心という場が完成すると思いました。したがって、霊に仕えるすなわち入れ物となっている魂の集合体が心であって、心の入れ物になっているのが身体という認識です。

霊界物語には、四魂も全部揃っている人間は少なく、普通レベルの人間は2つくらいだと記述されています。4つ揃っていると、なかなか霊格の高い立派な御人だそうです。

霊も魂も個別に見れば、精霊と呼ぶべきものだと思います。つまり霊格的に「霊」魂」という相対的な関係を満たし主従関係が結ばれている精霊たちを区別するために使われる言葉で、個別に見た場合には、両者とも精霊と読んで区別することは困難であろうと推察します。

図3 守護神と魂とDNAと外部霊の情報伝達



3-4 まとめ

「はじめに」で述べた2つの命題の結論は、

● 「人間の魂と心とは何か？」

↓ 人間の心は魂が寄り集まったもの

↓ 心Ⅱ 一霊四魂＋正守護神＋副守護神（新定義1）

↓ 心Ⅲ 顕在意識＋潜在意識（新定義2）

● 「人間の身体と心の繋がりはあるのか、否、あるのは確実ですが、どういう関係なのか？」

↓ 図3に守護神と魂とDNAと外部霊の情報伝達としてまとめました。

です。

皆様、お付き合いいただきありがとうございます。マシユーさん、長い間、見守りいただき、ありがとうございます。2020/10/1
(合掌)

資料1 一二三神示第30巻冬の巻第一帖

宇宙は霊の霊と物質とからなつてゐるぞ。人間も又同様であるぞ。宇宙にあるものは皆人間にあり。人間にあるものは皆宇宙にあるぞ。人間は小宇宙と申して、神のヒナガタと申してあらう。人間には物質界を感知するために五官器があるぞ。霊界を感知するために超五官器があるぞ。神界は五官と超五官と和して知り得るのであるぞ。この点誤るなよ。霊的自分を正守護神と申し、神の自分を本守護神と申すぞ。幽界的自分が副守護神ぢや。本守護神は大神の歡喜であるぞ。

神と霊は一つであつて、幽と現、合せて三ぞ。この三は三にして一、一にして二、二にして三であるぞ。故に肉体のみの自分もなければ霊だけの自分もない。神界から真直ぐに感応する想念を正流と申す。幽界を経て又幽界より来る想念を外流と申すぞ。人間の肉体は想念の最外部、最底部をなすものであるから肉体的動きの以前に於て霊的動きが必ずあるのであるぞ。故に人間の肉体は霊のいれものと申してあるので。

(…)

人間は霊界より動かされるが、又人間自体よりかもし出した霊波は反射的に霊界に反影するのであるぞ。人間の心の凸凹によつて、一は神界に、一は幽界に反影するのであるぞ。幽界は人間の心の影が生み出したものと申してあらうがな。

(…)

故に、人間の生活は靈的生活、言の生活であるぞ。肉体に食ふことあれば靈にもあり、言を食べているのが靈ぞ。靈は言ぞ。この点が最も大切なことじゃから、くどう申しておくぞ

死んでも物質界とつながりなくならん。生きてゐる時も靈界とは切れんつながりあること、とくと會得せよ。そなた達は神をまつるにも、祖先まつるにも物質のめあてつくるであらうがな。それはまだまだ未熟な事ぞ。

(…)

更に祖先は過去の自分であり、子孫は新しき自分、未来の自分であるぞ。兄弟姉妹は最も近き横の自分であるぞ。人類は横の自分、動、植、鉱物は更にその外の自分であるぞ。切りはなすこと出来ん。

自分のみの自分はないぞ。縦には神とのつながり切れんぞ。限りなき靈とのつながり切れんぞ。故に、神は自分であるぞ。一切は自分であるぞ。一切がよろこびであるぞ。

靈界に於ける自分は、殊に先祖との交流、交渉深いぞ。よって、自分の肉体は自分のみのものでないぞ。先祖靈と交渉深いぞ。神はもとより一切の交渉あるのであるぞ。その祖先靈は神界に属するものと幽界に属するものとあるぞ。中間に属するものもあるぞ。神界に属するものは、正流を通じ、幽界に属するものは外流を通じて自分に反応してくるぞ。正流に属する祖先は正守護神の一柱であり、外流に加はるものは、副守護神の一柱と現はれてくるのであるぞ。外流の中には、動植物靈も交ってくることもあるぞ。それは己の心の中にその靈と通ずるものがあるためぞ。

一切が自分であるためぞ。常に一切を浄化せなならんぞ。靈は常に体を求め、体は靈を求めて御座るからぞ。靈体一致が喜びの根本であるぞ。一つの肉体に無数の靈が感応し得るのぞ。それは靈なるが故にであるぞ。靈には靈の靈が感応する。又高度の靈は無限に分靈するのであるぞ。

(…)

人間は現界、靈界共に住んで居り、その調和をはからねばならん。自分は自分一人でなく、タテにもヨコにも無限につながつてゐるのであるから、その調和をはからねばならん。それが人間の使命の最も大切なことであるぞ。

調和乱すが悪ぞ。人間のみならず、総て偏してならん。靈に偏してもならん。靈も五、体も五と申してあらう。ぢやが主は靈であり体は従ぞ。神は主であり、人間は従であるぞ。五と五と同じであると申してあらう。差別則平等と申してあらう。取り違い禁物ぞ。

資料2 心臓についての参考文献

資料4に示しましたが、心臓は特異ですから、心臓には何があるのかなと調べたところ、二つの文献がありました。

一つ目は、「真理の心」とば OS03 章心 O37」の詩の中村氏による注釈に、「胸の奥の洞窟：（略）古ウパニシヤド以来、アートマン（心）は心臓の内にある空処に住すると考えられていた。それを受けている。」と記述があったのです。二つ目は、マシユウ君のメッセージを掲載してらっしゃる森田玄さんのブログ (<http://moritagen.blogspot.jp>) 2017/5/4 の記事の一部が参考になりますので、ご紹介します。

「心（ハート）に聞きなさい」と昔からあらゆる文化で言われていますが、ではどうしたら聞こえるのか、その方法が具体的に示されたことはありません。英語ではハート（心）と心臓は同じ言葉（Heart）ですが、日本語は心と心臓は別です。でも、どうして昔の人は「心の臓器」と呼んだのでしょうか。過去20年間の心臓神経学の発達によって、心臓には「心臓脳」と呼ばれる脳と同じ神経節ネットワークがあること、心臓と脳が常にコミュニケーションしていること、そして心臓から脳に送られる情報量は脳から心臓に送られるものより100倍以上も多いなどが発見されています。単なる血液の循環ポンプだと思われていた心臓が、脳と全身の機能だけでなく、人間の感情、認知、行動、反応、能力に決定的な影響を与えていることが科学的に実証されています。

資料3 中村元氏の心と意に関する記述

「真理のことば」第2章「心」では、訳者の中村元氏が注釈で、漢訳版で「心意品」と記されている題名を「心」と意識し、別の箇所でも漢訳では「意」と表記されている部分を「心」と意識しています。「意」というと認識できる意識（顕在意識）を中国では表すのでしよう。「意」を心の音と漢字の成り立ち通りに捉えてたら、音がある心、つまり気づきやすい心となり、顕在意識であるのがわかります。一方、当時の中国人訳出者は心を潜在意識と捉えたのだと思います。ですから、題名は「心意品」となっているのでしょうか。

日本人は、古来より心を顕在部分と潜在部分の集合体と捉えていたのでしょうか。「心意」と書かれるより、「やまと言葉」の「心」を使ったかった、中村氏の訳出も、日本人としては賛同できます。しかし、漢訳の厳密な表記は、心という概念がわかるだけの感覚を失った現代人にとって大切で、心の正しい状況を端的に言い表していると称賛せずにはいられません。

資料4 人型図上の指によるエネルギー測定を試行

今回の題目に取り掛かる前に、白い紙に人型を書いて、目をつぶって人型の上を自分の指で撫でていく試行を行いました。どうして、そんな事をしたのかと言えば、指先に意識を集中すると何かを感じ取ることができるのかなと言う、疑問からです。ですから、このテキストのためにこの試行を行なったわけではないのです。しかし、私の指は、違いを感知しました。ちょっとした振動が伝わってくる場所があったのです。2回の試行ともほぼ同じ結果をえました。

- ・ 心臓部は全く疑う余地がないほど、強く振動を伝えてきました。
- ・ 喉部が次に強い振動を伝えてきました。
- ・ 頭とお腹は同じくらいの振動ですが、心臓と喉に比べるとだいぶ小さくなりました。

- ・ 手と股間は同じくらいですが、弱かったです。
- ・ 足は、振動を感じませんでした。

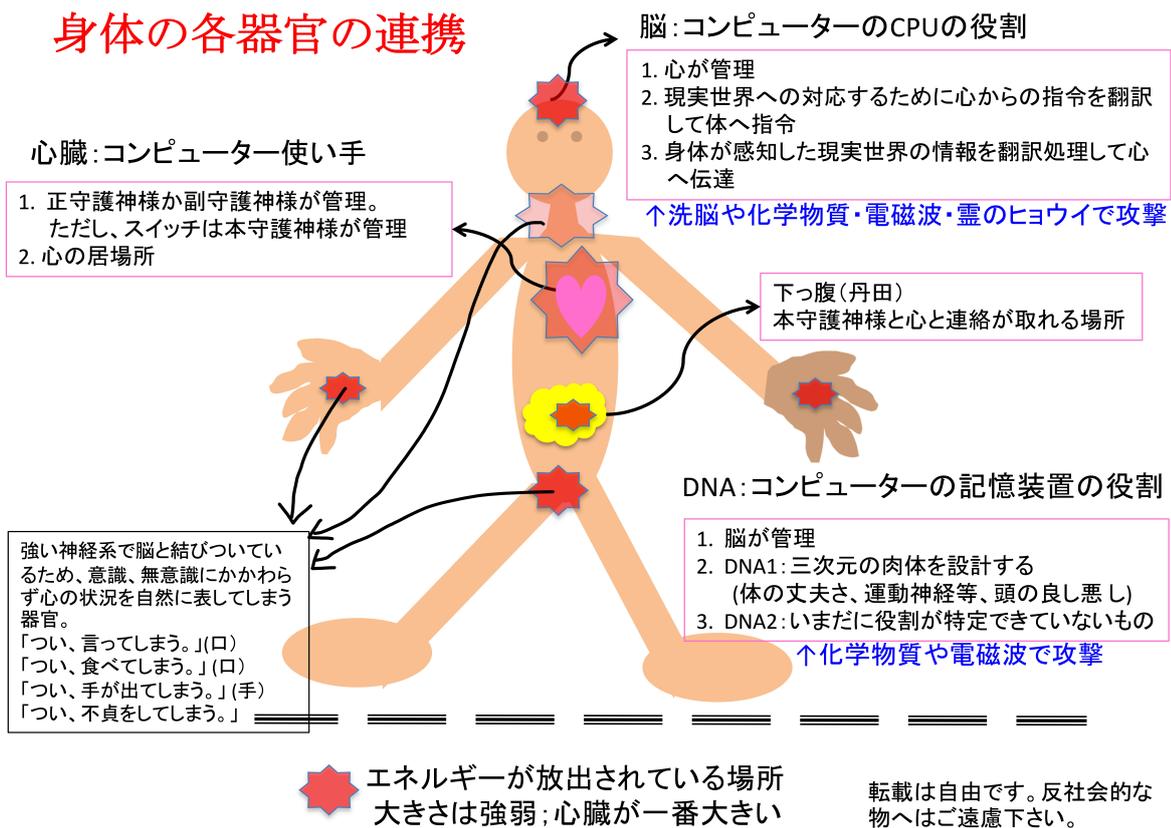
図4に人型図上の指によるエネルギー測定の結果を書き込みます。半年の停滞期間に、この試行結果が、顕在意識や潜在意識、守護神と関係があるのではないかと考えるようになりました。

この辺りは、私が訂正を入れまくったことからわかるように、非常に苦勞した部分です。しかし、初期にはツイッターでの記事だったので、バラバラになっています。

私が感じた身体から放出されるエネルギーが頭の部分で他の器官よりは多く感じられたのは脳が原因ではないかと思っています。しかし、心臓はさらに一桁以上多いエネルギーです（紙の人型を使って、指で感知してみてください。心臓だけは分かる方も多いと思います）。これには本当に驚きました。頭が一番大きなエネルギーを出していると思っていたので、とても意外でした。それ以外で、強いエネルギーを感じた部分の考察は図3に記しました。

最後に、一二三神示では、心臓のみではなく肺を合わせた「心肺による呼吸と脈打ち」が人間にとって大切だと説いていることを付記して終わりとします。

図4 魂と守護神と身体部位の役割と人型図上の指によるエネルギー測定結果



付録2 「心を整える」と「心が治まる」と「心を慎（つつし）む」についての考察

「心を整える」と「心が治まる」

「心こころの構造かこうの複雑ふくさんな心こころ」、心が自治をするのでしょうか？¹ まずは、これを考えます。ここでは、治められる心とは顕在意識と潜在意識の複合体です（付録1参照）。

「付録1+2心」において、心の構造を議論し、心の主体は四魂で、強い発言権を有するのが正副守護神様であると考えました。このことから、心を治めるのは正守護神様か副守護神様であり、治められる対象の中心は四魂で、どちらの守護神様を統治者として選ぶかは四魂が決めるという形式ではないかと考えてみます。²

前回は、魂と記述したものが、今回では四魂なのですが、基本的に四魂は自治（＝整える）をしていると考えています。この自治に必要な情報を与えてくれるのが、守護神様なのです。よって、正守護神様＝本守護神様の流れを統治者として選んだ四魂は、統治者から有益な情報が流れ込み、魂にも良いエネルギーが運ばれます。他方、副守護神様を統治者に選んだ際には、ことごとく悪意のある情報と四魂が有していたエネルギーが搾取されていきます。したがって、心を鎮めるとは、四魂が正しい守護神様を選択し、心に鎮座していただく事だと考えます。ちなみに、四魂に近い次元に位置しているのが、副守護神様であり、こちらの声のほうに正守護神様の声より大きく聞こえると、一三神示では記されています。

もし、不幸にも、副守護神様の情報をもとに心が動いて暴走した時には、その結果や外部の人の反応から、自分がまずかったという情報が脳（顕在意識）から送られてきます。この脳からの情報（外部情報）に関して、真理（天則、正しい教え、正しい学）やさらにDNAなど身体に蓄積された情報に照らし合わせて、心で熟考・反省します。この心で熟考（反省）がうまくいくためには、自分は誤ったことをしたという立場に立ち、きちんと考え反省するという心構えで行うと、驚くほどたくさん情報が正守護神様から流れてきて、心が正しく治ってくるのです。心に滋養が行き渡るといえることは、この正しい情報とエネルギーが心に流れてくることだと思います。つまり四魂が正しい教えを護っていくようにすることが、心を護ることだと考えています。そして、正しい教えを護るために、副守護神様の情報を制していくことが必要です。このような行為が、心を制するだと考えます。

また、正か副のどちらの守護神様の情報か判断に困る場合は、解決策を保留すべきです。時間を置くことによって、副守護神様

1 以前は、顕在意識と潜在意識を分けて、治められる部分の中心が顕在意識であると議論したのですが、付録1のリブレースに伴い改めました。

2 前回は、「心を治める」のは魂だとし、「心を治める」を「心を鎮め、護り、制する」と定義しました。しかし、付録1のリブレースで「心の上位に位置するのが魂である」という前提から、「心を構成するのが魂たち」と改めましたので、「心を治めるのは守護神様である。」と変更しました。

これに伴い、詩 F004 の大幅変更は行わず削除としました。

からの情報が減幅する効果があります。

ここで、自己（セルフ）は正守護神様、ハイヤーセルフは本守護神様で、四魂が3次元的に現れる自分に最も近い部分という前提で、上記の話から「心を整える」とは、

1. 主語は「(四)魂」であると考ええる。

2. 「整える」が指すところは、

(1) 魂が心に正守護神様を鎮める。「心をしずめる」と「正守護神様に鎮座して頂く」の掛け言葉

(2) 魂が正しい教えを護る。「心をまもる」と「決まり事（真理）をまもる」の掛け言葉

(3) 魂が副守護神様からの命令を制する。

としました。

実は、心という場合は、本、正守護神様が治めるといふ形で守られるのと同時に、四魂も整える（自治）という行為によって心を守る働きをしていると考えられるのです。一方、副守護神様は心を守る体をして心を破壊する働きを有するのです。そして副守護神様を選んだ四魂は、心を守るために副守護神様の命に従いますが、自らが心を壊しているという自覚がないのが特徴ではないかと思えます。

以上を鑑みるに、「守護神様は心を治める」のですが、より、理想的なパターンでは「心が（正しく）治まる」という表現が的確だと思ふ次第です。

心を慎む

この語句に関しては、G168～G170詩に説かれています。中村氏の注釈では、「護身悪行（身を慎む）」「護口悪行（口を慎む）」「護意悪行（意を慎む）」の三つのことを表した詩だそうす。当方としては、「心を慎む」とは、「身、口、意を慎む」ことだと考えています。心で己をつつみこむ（守る）という解釈をしています。つまり、心を慎む行為は、心（四魂）が己（本、正守護神様方）を守る行為であると解釈を換言できます。

付録3 仏道

(1) 四諦

四諦（したい）とは、お釈迦様が禅定により得た知慧で構築された概念だと言われています。³

四諦とは、字を見れば明らかのように、四つの真理（諦）から成り、それらは、

- (一) 苦しみの原因（苦諦）
 - (二) 苦しみの現れ（集諦）
 - (三) 苦しみの消滅の原因（滅諦）
 - (四) 苦しみを消滅させる方法（道諦：仏道）
- と命名され、今日の私たちが知るところとなっています。

この世が悪に支配されている時期に、まっとうな人間が生きるには、「悪いこともあれば、いいこともあるさ！」と言った甘い状況ではなく、苦の連続になるからその苦の因果をしっかりと考え身を処すことを教えてくださっていると私は考えています。

では、ブログ「四諦（四聖諦、苦集滅道）「仏教の基礎知識（2）」

(http://way-to-buddha.blogspot.com/2011/05/blog-post_21.html)さんを引用しながら、一つずつ、もう少し詳しく書いていきたいと思います（引用部分はカッコで表します）。

1. 苦諦

「苦諦とは、人生が苦であるということである。

苦とは、人生の真相、現実であり、ブツダの人生観の根本である。そして、これこそ人間の生存自身のもつ必然的な姿である。このような人間存在の苦を示すために、仏教では四苦を説き、さらには四苦八苦を説いている。

四苦とは、次のものである。

(一) 生（生きること）

³ ver. 1では、「お釈迦様は、「この世の中は一切皆苦（いっさいかいく）と捉えましょう。」と提起なさり、この世の中を人間が正しく生きていく方法を説かれました。」としましたが、「一切皆苦」の解釈を変更しましたので、この部分の説明は削除します。一切皆苦の説明は、付録7（4）を参照ください。

- (2) 老（老いること）
- (3) 病（病気になること）
- (4) 死（死ぬこと）

さらに四苦八苦という場合には、次のものを付け加える。

- (5) 愛別離苦（愛する対象と別れねばならない苦）
 - (6) 怨憎会苦（憎む対象に出会わなければならない苦）
 - (7) 求不得苦（求めても得られない苦）
 - (8) 五陰盛苦（人間の生存自身を示す苦、五陰を集めたものすべてが苦）
- 五陰（蘊）（ごうん）は、付録7（3）三行目注を参照ください。

2. 集諦

「集諦とは、さまざまな悪因を集めたことよって、苦が現れたものであるということである。「集」とは招き集めることで、苦を招き集めるものが、煩惱（「付録4 欲と煩惱」参照）であるというのである。」

3. 滅諦

「滅諦とは、苦のなくなった状態のことである。苦の滅という状態が存在することであり、苦のなくなった状態とは、ニルヴァーナの境地であり、一切の煩惱から解放された境地であり、解脱といえる。」

ただし、解脱は、この世の中では考えられないパワーを得られる状態で、善による解脱と悪による解脱と両者が存在すると私は考えています。仏魔仏教に従うと、悪による解脱をしてしまい、正しい仏道を修めると善による解脱が得られると考えています。

4. 道諦

「道諦とは、苦を滅した状態（ニルヴァーナ）を獲得する方法のことである。つまり、ニルヴァーナへと到る実践的な修行体系を指している。これが仏道と呼ばれるもの、すなわちお釈迦様が体得した解脱への道である。」

この部分がまさに仏道で、「八正道」や、「悟りのよすが」、「五根」がこの部分の教えです！ さらに、GS6 G055詩で、この中で最も優れている（人を正しく解脱させる）仏道が「八正道」であるとお釈迦様が宣言なさっています。

(2) 仏道

仏道は、四諦の中の一つで、人を正しく解脱させるための方法です。その中で最も優れているものが「八正道」だと真理のこぼのGS6 GS55詩で謳われています。古来からインドにはヴェーダにより、さまざまな教えがあり、「八正道」の他にも、有名なものとして、「悟りのよすが」、「五根」があります。それぞれを紹介していきましょう。

【1】八正道は8ステップで構成され、それぞれが、

- (1) 正見…正しいものの見方、考え方を示す教えに沿って、自分や世の中を観察する。悟りのよすがの択法や五根の信に対応する。
- (2) 正思惟…正見に基づいた正しい意識を持つ。
- (3) 正語…正見に基づいた正しい言葉を使う。
- (4) 正業…正見に基づいた正しい行いを持つ。
- (5) 正命…正見に基づき、道徳に反する職業や仕事はせず、正当なりわいを持って生活を営む。
- (6) 正精進…正見に基づいた正しい努力をする。
- (7) 正念…以上の6道の実践し、今の心の状態を正しくする。つまり、精神の安定統一をする。
- (8) 正定…正念により整った心で、正しい神様と法（真理）を心で定める（＝禅定）。これにより智慧を得る。

【2】悟りのよすがは、次の7ステップで構成されます。

- (1) 択法…教えの中から真実なるものを選び取り偽りのものを捨てること
- (2) 精進…一心に努力すること
- (3) 喜…真実の教えを実行する喜びに住すること
- (4) 軽安（きょうあん）…心身を軽やかに快適にすること

- (5) 捨… 対象への捉われを捨てること
- (6) 定… 心を集中して乱さな事
- (7) 念… おも(念) いを平らかにすること

【3】五根は、決まり文句として、悟りを得るための5つの力と言われています。この5つのステップとは、

- (1) 信… 正しいものを信じるといことなので、正見や択法と同じです。
- (2) 精進… 八正道で言えば、正思惟、正語、正業、正命、正精進の部分です。悟りのよすがで言えば、喜、軽安、捨の部分です。
- (3) 念… 八正道や悟りのよすがの念と同じ
- (4) 定… 五根の定と慧は八正道や悟りのよすがの定の部分です。
- (5) 慧… これは八正道や悟りのよすがの定(禅定)の一部で、高次の存在から智慧が授かることです。

皆様、お釈迦様が、仏道では、八正道が一番優れているとおっしゃった理由がわかった方もいらっしゃるでしょうし、そうでない方もいらっしゃると思います。八正道では正しく〇〇という風に、正しいという言葉が大切になっているのです。他の教えも悪くはないと思いますが、具体的に記されていて、人間に一番理解しやすいのが八正道なのかもしれないと、最近では感じています。これら三つの教えを図5の表にまとめましたので参照してください。

名称	悟りのよすが	八正道	五根
意味	悟りを得るための頼りになる指針	人が正しい生き方をするための8つの実践法	悟りを得るための5つの力
スタート地点	自分が愚かだと知る。		
<small>併せん。）</small> 各成分とその説明 (左詰めの成分は、各成分で同等と考えたものを高きで揃えて表しましたが、それより下位の喜、軽、捨、正思惟の高さは、フナーツト上のもので、同じ高さと行って同等という意味ではありません。)	択法 (正しい教えを選択する)	正見 (正しく世の中を見る)	信 (正しい教えを信じる。キリスト教で言えば、信仰宣言、クレドの部分)
	精進	正語 (正しく言葉を使う)	精進
		正業 (正しい行いをする)	
		正命 (正しい仕事に従事する。)	
		正精進 (正しい精進をする)	
	喜 (真実の教えを実行する喜びに住すること。精進を行うための指針の1つ。)	正思惟 (正しく物事の根本を意識(脳)と無意識(心)で考える。正念を行うための指針の1つ。)	
軽安 (心身を軽やかに快適にする。精進を行うための指針の1つ。)			
捨 (対象へのこだわりを捨てること。精進を行うための指針の1つ。)			
念 (正しい念を保つこと)	正念 (正しい念を保つこと)	念 (正しい念を保つこと)	
定 (意識を自分の命に集中させて心を乱さない。)	正定 (意識を自分の命に集中させて心を乱さない。)	定 (意識を自分の命に集中させて心を乱さない。)	
	悟りの領域	慧	

図5 八正道と他2道のステップ対応表

人は皆、一番初めに四諦の真実を受け入れて仏道に入るのが理想ですが、そんな人なかなかいま

せん。では、どうしたら仏教を知らないところから仏道に近づいていけるのかというのが、私の重大な関心事でした。色々と経験して考えた結果、苦難に直面した時に、その解決の糸口を、多くの人がこれまでに習得した道徳と知識に求めるのだと思います。もちろん、直接的情報源は、インターネットや「くかもしれません。しかし、正しい道を求めるとつかかりは、やはり身についた道徳と知識になるのではないかと思いうに至りました。そして、まずは「自分は愚かである。」と認識した上で他の中の自分を知り、解決策を探るという道程が最も効率的ではないかと感じています。

最後のまとめですが、正しい神様と真理を捉える作業が禅定で、これには「正しい念」つまり「精神の安定統一」を必要とし、これにより智慧を得ます（本書では空の体現とも表現します）。この作業を繰り返すことにより、涅槃（悟りによる解脱）に持続的に入ることができ、つまり真人からみ仏（ブツダ）へと進化できるのでしよう。

(3) 仏道の目標

真人とブツダ（み仏）の境界については、いまだに自分が到達した領域ではないのでよくわかりませんが、GS23節真人を書くにあたり、「仏道の最高の目的」が何であるのか？ について考えなくてはならなくなりました。この仏教の目的は、「輪廻転生から離れること」、「解脱すること」がよく言われます。しかし、この辺りは過程であって目的と言って良いか、悩ましいところでした。

GS35とGS33詩は、「生存の彼岸に達する」は、「汚れによる身体形成の絆」がなくなることによって「最後の身体になる。」と考えて書き換えを行なっています。裏を返すと、身体形成の絆が止まなければ必ず体が作られて転生するという捉え方です。しかし、当方はカルマはなくても必要があつて転生する方々も多くいらつしやると感じています。

このことから、仏道の最終目的は「輪廻転生のサイクルからの完全脱却ではない。」と当方は考えます。ここは、従来から仏教で語られたことと大きく異なる立場です。また、仏道の最高の目的を終了したら、そこでおしまいなのか、非常に哲学的な疑問が湧いてしまうのです。そこではたと、「これが仏教の虫なる害虫なんだ。」と思ひ至りました。

実は、仏道の完成（最終目的）は次のステージへの入り口に立つことであつて、終わりではないというのが、当方の現在の認識となっています。ただし、その次のステージがどんなものは、まだはつきりと掴めないです。

付録4 人間の分類

(1) 分類方法

ここでは、仏道における人の分類について考察を進めます。当方が読んだ仏教の文献では、この点に関する細かく明記したものに会えませんでした。したがって、本書で独自に分類を構築しました。

分類が一種類だけでは精度を上げられないので、以下の3つの分類を構築しました。⁴ それが、

(a) 精神性（霊格）分類法、

(b) 実践分類法、

(c) 社会的立場分類法

です。この分類によって、「第3節さまざまな人」の全詩が一通り分類可能となりました。

真理のことばの節名や詩中で使われている、「愚かな人」と「賢い人」と「真人」、「道を実践する人」、「仏弟子」、「出家者」、「在家者」、「バラモン」、「修行僧」、「サモン」と、分類 (a) ～ (c) の対応を、下記に示します。

(a) 精神性（霊格）分類法 「愚かな人―賢い人―真人」

(b) 実践分類法 「道を実践する人―道を実践しない人」

(c) 社会的立場分類法 「出家者（「修行僧」）―在家者」

出家者 金銭の授受が生じる経済活動には直接に参加せず、本人の行ったことに対する報酬ではなく、在家者からの捧げもの（お供物）や先祖から引き継いだものなどで生活する形態の人たち。本書では、これを「修行僧」と呼びます。参考までに、以下に、インドにおける出家者の代表的な名称を記します。

・バラモン 出家者の中で、最高の立場に付けられた役職的名称

・修行僧 平（ひら）の出家者

・サモン ヴェータ以外の修行僧のことを呼んだという説が最も有力で、お釈迦様は「サモン」と呼ばれていた可能性が高いとのことです。

在家者 経済活動に参加し、生業により生活する人たち

⁴ 実全バージョンでは四種類に分けましたが、本書では一つ減らしました。

以下に、上述の補足を記します。

インドの身分制度のカースト制は、社会的立場分類法の一つになるでしょう。

お釈迦様は、しばしば「サモン」と呼ばれてらっしゃるのは、ヴェータを批判した修行者だったからだと言われます。また、インドではバラモンは、今も昔も、血筋によりバラモンなのですが、血筋は重要なファクターとしても、せめて分類（カ）も使って、「真人になつていくこと」の条件も必要だという当然の結論に至ります。本来は、バラモンは出家者（僧）で真人であることが理想だと思えます。

お釈迦様は、昔の正しいバラモンが存在したことを、「ブツダの言葉第二小なる章7バラモンに相応しいこと」でお話になっている記述があります。しかし、「はじめに」で記したように、バラモンとは、「それぞれの教え」であるヒンズー（バラモン）教の中で規定されるものですから、普遍性を高めた全人類のための教えを目指す本書の「真理のことば」では、バラモンを修行僧に繰り込んだのは既述の通りです。

「真人」と「賢い人」の境は、禅定が明瞭にできて対応したことがあるか否かで幅があると考えています。

そして、「真人」が、より霊格的に進化した「み仏（ブツダ）」の境界は、以前は、超人的であるか、悪いカルマが残っているか否かで議論しましたが、あまりに幼稚な議論でしたので、ここで再び考えることにしました。

まず確認すべき点としては、「み仏（ブツダ）」は、「バラモン」の延長上ではなく、「真人」の延長線上に位置すると考えます。当方は空を認識できたとしても一時的な現象で留まるのですが、もしそのハイテンションな状態が必要な時は常に行えるとしたらと考えました。一時的に空を体現した人が空を体現したことのない人とは、世の中の見え方が大幅に異なるように、一時的に空を体現する（解脱する）人と必要な時には禅定により体現できる人では、それ以上の差が存在するのではないだろうか？ という結論に達しました。

つまり、前バージョンで記した通り真人とブツダ（み仏）の境界は、

ブツダ 煩惱（心の汚れ、執着、無知など）、悪いカルマまで完全に消滅させた人で超人的な力を発揮する人

真人 煩惱（心の汚れ、執着、無知など）をほぼ消滅させた人

ではあるのですが、

「解脱状態つまり空を体現（解脱）している状態が持続的でいつでも智慧を得ることができのがみ仏で、必要な時に禅定により智慧を得ることができなのが真人」

という、み仏（ブツダ）と真人の境界を付け加えるべきだと考えています（参考 G337 詩）。

出家的生活を送ったほうがブツダへの到達が速くなると感じていますが、ブツダになるには、出家が絶対条件ではないようです。

ただし、靈格が上がるにつれ、出家に準じた立場や生活が自然と整ってくるように見受けられます。

お釈迦様は、日々の生活を正しく過ごすことが最も大切だと主張され、「怠らずに励む↓努め励む↓学び努める」という具体的な言葉の上に具体的なアドバイスを添えて、在家の人達に教えを述べられたと私は考えています。

在家か出家に関わらず、正しい真理に従って、正しい道で生きている人たちを総称して「道を実践する人」としたのですが、「道を実践しない人」との分かれ目は、愚かな人と賢い人のあたりだと考えています。愚かな人と賢い人の境は、詩Q128で示されたように、自分が愚かであると認識することとなっています。お釈迦様は、賢愚の境界を非常にはつきりと宣言していることを確認してください。

(2) 仏弟子

「仏弟子」は、分類というより、靈格の向上を目指すべき存在でまだ真人には到達していない者は、本人の希望とはかかわらず、全てが仏弟子になると、今回の考察で考えを改めました。ですから、人間であろうが、宇宙人(?)であろうが、妖怪(?)と言われる存在であろうが、みな仏弟子に自然にカテゴリーズされていると考えます。本書の真理のことばは、普遍性を持つようにという軸で考察していますので、これがさまざまな地域の教えでは別の言葉で表現されることになることとなります。ただし、その教えには、正しいお釈迦様の教え(中核は、「怠らずに励む↓努め励む↓学び努める」ように生活を送り、四諦の真実や、八正道などと矛盾しない教えでなくてはならないこと)でしょう。

(3) 修行者

社会的立場の分類において、出家者と在家者を分けました。在家、出家問わず、すべての存在は靈性の向上を目的として生きていくので、全ての存在は修行者と言えます。

お釈迦様は、当時のインドのヒンズー教の廃退を指摘しました。経典であるヴェータも、出家者への教えがほとんどだったことでしょう。しかし、多勢は在家の人たちです。また、本当の教えが必要だったのも特権を有さない在家の方々だったことは明らかです。ですから、お釈迦様が説いた仏道は、在家への教えが多かったとは思いますが。既存の「真理のことば」では、バラモンと修行僧中心の経典になっているので、ここの部分がなかなか伝わらないのです。

では、お釈迦様は修行者をどのように捉えてらしたのでしょうか？ この部分を考えてみましょう。修行者について参考になる記述が、「ブツダのことは第一蛇の章の、チエンダ」で以下のように、述べられています。

師（ブツダ）は答えた、「チユンダよ。四種の修行者があり、第五の者はありません。面と向かって問われたのだから、それらをあなたに明かしましょう。―「道による勝者」と「道を説く者」と「道において生活する者」と及び「道を汚す者」とです。」

この教えは、出家、在家を問わない真理の追求分類方法の「(㉑)実践分類方」を軸に説かれていると考えています。

この4種類に対応するカテゴリーは、

「道による勝者」 ↓ 「ブツダ」

「道を説く者」 ↓ 「真人」 以上の霊格

「道において生活する者」 ↓ 「賢い人」 以上の霊格、もしくは

は「道を実践する人」

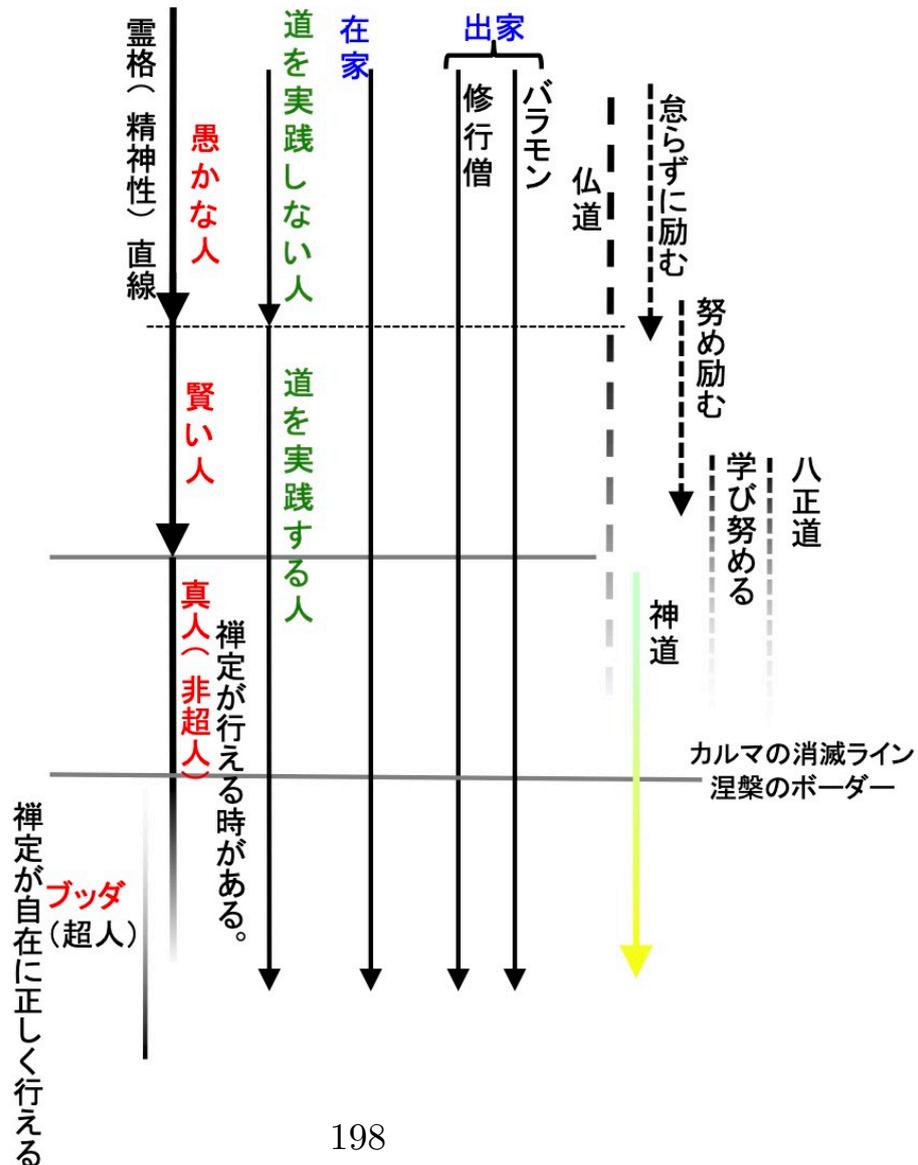
「道を汚す者」 ↓ 「愚かな者」、もしくは、「道を実践しない人」

となると、当方は考えています。

この書き出したリストを眺め「真理のことは」を読むと、お釈迦様は、「道において生活する者」を主眼に置かれて、教えを説かれたのでしようが、「道を説く者」や「愚かな者」への

教えも多々あります。これは、ヴェータやバラモンの廃退を鑑みて修行僧への教えが必要と思われる、愚かな者の救済誓願が必要だと思われるのかもしれませんが、これらのことから、仏道の教えは、お釈迦様がさまざまな精神性（霊格）の者に対して与えた教えだと考えられます。

図6 霊格（精神性）直線・(㉑)精神性の分類は赤、(㉒)真理の追求の分類は緑、(㉓)社会的立場の分類は青色



付録5 心の汚れ

(一) 汚れと煩惱

㊦ 煩惱 煩惱とは、漢字の原意は、心と頭(悩のへんとつくり)の特に頭を焼く(害する)ものです。つまり、煩惱は心と脳を害するものですが特に脳を中心に分布し害を及ぼすもの(火)と言ったところでは、仏教では、煩惱は、身心を乱し悩ませ智慧を妨げる心の働きとされ、三毒、浄土宗の根本煩惱(6分類)、十毒、108の煩惱などで説明されています。要するに仏教では煩惱は心の汚れだと考えられています。そして、根本的な煩惱と、これらの煩惱が原因で表に現れる随煩惱があるとされています。

㊧ 三毒 根本煩惱を3つに分類するものが、三毒と呼ばれる教えで、これは入門編だと思っています。ブログでは、「お釈迦様もこの3分類で、仏道を説かれたのだと思います。」と記しましたが、ヴェータが発達していた当時のインドですから、もう少し細かい分類を知った上で、教えを説かれる相手によって、3分類や6分類を使い分けられたのではないかと考えるに至りました。

三毒の3分類の煩惱は、

貪(とん)・・・欲望への執着

瞋(じん)・・・怒り

痴(ち)・・・無知(含無明)、慢心、疑惑、悪見とされています。

㊨ 根本煩惱(6分類) 根本となる煩惱を貪・瞋・慢・無明・見・疑の六つであるとする教えです。これは、三毒のうちの痴の部分を慢・無明・見・疑に分けたものです。これは、多すぎず少なすぎず、当を得ていて素晴らしいです。分類項目のそれぞれは、

貪・・・貪は愛と等しく、好ましい対象に対する愛着

瞋・・・好ましくない対象に対する拒絶や反発 怒り、妬み

慢・・・自らを高く評し他を軽視する自己中心的感情

無明・・・正しい道理にくらく真実を知る知見が具わっていないこと

見・・・仏教以外の誤った見解を信じること

疑・・・仏教の真理である四諦・縁起・業報等に対して疑念を持つこと

(<http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php>/根本煩惱 さんより)
とされています。

④ 六汚れ

三毒の解説だと、分類が少し大雑把で、説明がしづらいつ感じ、しかし多く分類すると(108の煩惱、十煩惱etc.) 「これとあれはかぶつてる?」となつてしまい、余計に訳が分からなくなりまふ。

結果、浄土宗の根本煩惱の教えを基に当方は根本煩惱の再考を行ない「六汚れ」と命名し下記に示します。
愛欲…欲しいと思う行為を愛する心↓(2) 欲と執着参照。

憎悪…怒りと妬み。度を越えた不当な怒りのことです。

慢…奢ること

悪見…悪い教えや考えを持ち、信じること

疑惑…真理を疑うこと

無明… ⑤ 無明 参照

「怒」と「欲」に関しては全く悪とは考えません。正当な怒りは良しとしたので「怒」を使用せず「憎悪」を使用しました。ただ、正当な怒りであつてもそれらに支配されずに意を離し制する必要があると当方は考えまふ。「欲」も同様に考えまふ。

他方、慢、悪見、疑惑、無明については、一貫して影(悪)と捉えまふ。図7に六汚れと随煩惱をまとめましたので参照してください。

⑤ 無明 前回の説明に付け足すことが増えまふ。前回の説明の要約は以下の通りです。

「無明とは、人間が根本的に持つてゐる無知のことである。人生における人間の苦しみは、すべてこの無明から始まることをブツダは、瞑想の中から発見した。人は、その無明というものを取り払うことで、心安らかに生きていける。」

(http://www.st.rim.or.jp/~success/mumyou_ye.html さんより)

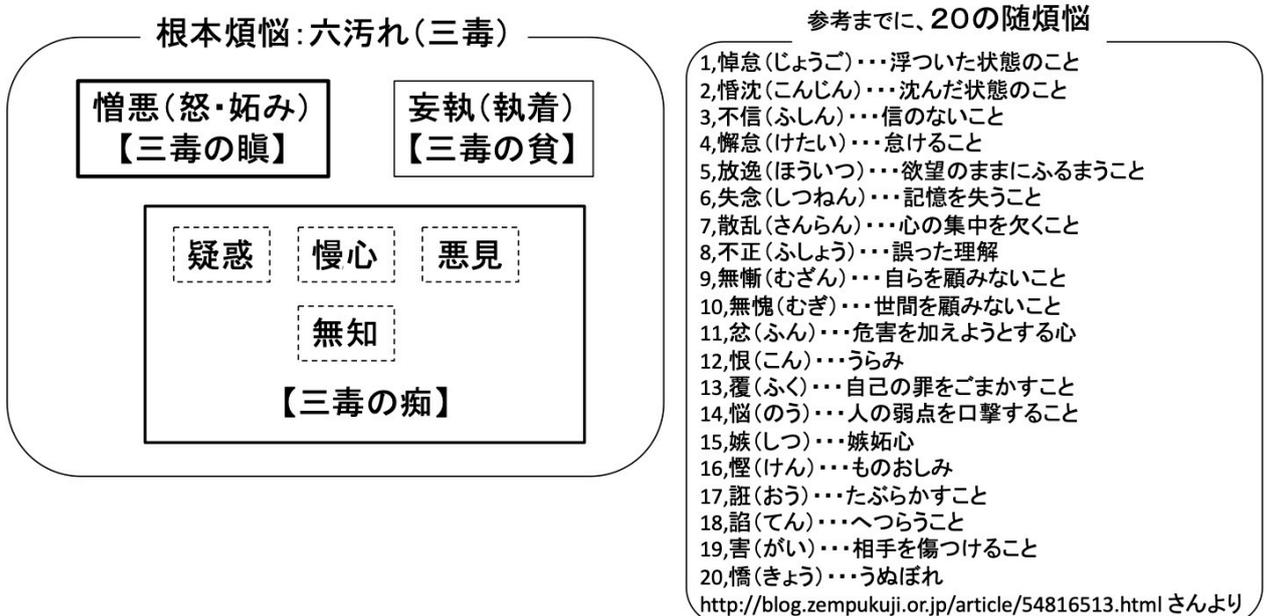
無明(avija)という言葉は、お釈迦様が初めて使われたのかどうか? はわかりませんが、このようなものが存在するとは、私も最近は切に感じています。慢、悪見、疑惑がなくなつてくると、この無明の存在がどうやら感じられて、これが何であるのか理解できるよつになつてくるものだと思ひまふ。以下にあえて、説明を試みまふ。

この無明は、他の5つの分類項目が悪い方向に働くと増幅され、反対にこの5項目の悪い作用を増幅させる元にもなると考えています。また、無明は随煩惱の働きによっても増すようです。正精進によつて、努力して自力で六汚れは減らすことはできるのですが、最後にわずかに無明が残ると言われ、私は、この最後の無明は上位の存在（本守護神様）によつて取り払われ、み仏（ブツダ）や真人となるのではないか、これにより上位の存在とも直接つながるので、自分が何をなすべきか直接のご指導ご鞭撻が受けられるために、非常に高い能力を発揮することが可能になるのでは？と考えています。しかし、この無明が取れてしまうと、荒波や激流だらけのこの世の中で与えられた絶大な力を正しく発揮できる強靱な心が必要で、それに耐えうる強さを心が持っていないければ、その力が悪に転じてその人の全てを打ち砕いてしまいます。ですから、その心が安全に処理できる力が大きくなりあるリミットを超えているか否かが、無明を取り外す基準だと考えています。無明を、外してもらえないように正精進するのが私たち人間の務め課題ですが、まだこの世の中では絶大なパワーを有して修行できない普通の心には保護バリアとしての役割もあると感じ、無明が、最大の汚れであると同時に、この世を渡るためのその人の保護バリアであるという二面性を持つと考えています。

現在、当方は無明は副守護神様つまり悪魔の自分（先祖）ではないかと考えています。副守護神様も私たち同様に私たちの生で修行をなさり気づきを得て進化をなさつてらっしゃり、副守護神様が持つ悪魔性を減らすには、私たちの日々の生き方が非常に重要になる、でもやはり自分なので最後まで残ってしまう悪になるのではないかと考えています。無明以外の六汚れ（五つの汚れ）は、無明（副守護神様）を潤す物なのだと考えています。それらが多い時には、心が無明の副守護神様を感じることで、その人自身になってしまおうのでしょうか。

⑥ 六汚れと随煩惱の連携 何らかの欲に妄執（執著）があり 一次節(㊂)欲と執着 参照ー、それが満たされない時には、憎悪や憂いや恐れ（悪見）が起こります。憎悪や憂いや恐れが増えれば、ますます執着が激しくなり、ますます憎悪や憂いや恐れが増えます。また、慢心があり、その自分の慢心を満たす執着を持てば、前述の執着が得られない

図7 六汚れ、三毒、20の随煩惱



時と同様なことが起こります。

両者とも、真理(本当の教え)を聞いて疑わなければ、(妄執を産む情)欲と慢と悪見と憎悪と悪見の対処が行えますが、疑ってしまえば、これらの負のスパイラルを止めることはできなくなります。

怒は強くなれば、表に現れる随煩惱をたくさん誘発させ、結果として理性を失わせる働きがあります。慢、悪見、疑惑は外からの情報で植え付けることが多いのですが、無明から伝搬してくる生まれつき持っている悪い考え方の癖があると思います。

このように、六汚れ(煩惱)と随煩惱は連携しており、それぞれがそれぞれを誘発し、それにより生産された汚れが、その種類に応じて、根本的な各六汚れに分配されるのです。

以上では悪循環パターンを述べましたが、次は好循環パターンをご紹介します。

自分が、生きていく中で苦しくなったり辛くなる場合があります。ここで、反省して、正しく世の中や自分を見つめようと努力することが、実は八正道の起点の正見となります。そして八正道(摂法)の教えを信じ実践することによって、いきなり六汚れを減らすのは難しいので、まずは手始めに随煩惱を減らす努力をします。随煩惱の発現を抑えることによって、六汚れが減少し自分に取って良い行動が判別できそれを実行できるのです。これらの繰り返し、好循環パターンです。

⑦ 三界の五上分結と五下分結 この部分は、中村氏の注釈の書き下しと、
http://way-to-buddha.blogspot.jp/2011/05/blog-post_1655.htmlさんの内容で構成しました。このサイトはとてもよく書いてあると思いますので、ぜひ立ち寄って一読ください。

三界ですが、欲界、色界、無色界と呼ばれる3つの世界のことを指します(図8参照)。最下層が欲界、その上が欲界、さらにその上が無色界となっていますが、この三界に属している状態は、ニルバーナ(涅槃)に安らぎ、や 解脱状態ではないとされています。

三界の五上分結と五下分結は、GS 19 修行僧 G257 詩に出きます。
五下分結は、魂を欲界に結びつける5つの煩惱ですが、一心を外から縛り付けるものなのか?—G257 詩内では、断つものと示されています。

五上分結は、魂を上界(色界と無色界)に結びつける5つの煩惱ですが、一心に内包される煩惱なのか?—捨てるものだとG257 詩に示されています。

これら10個の煩惱の個別の意味を図8に示し、各煩惱に対応すると当方が考える六汚れも記しました。この対応は、無理のないものになったと思います。

(2) 欲と執着

真理のことばには、諸所に「欲」、「情欲」、「愛欲」、「執着」、「妄執」、「愛執」という言葉が登場します。まずは、これらの意味を考えましょう。⁵⁾

欲 人間が欲しいと望むもの…善悪の区別をつけない欲の全て

情欲 「青い心の欲」となりますから、「これは未熟な心が欲しがるもの」という漢字の成り立ち通りに捉えます。これは、欲の具体的な種類ではないことに注意してください。

愛欲 欲を愛する事（食欲は欲を食ることなので、愛欲とほぼ同じ意味）

執着 欲の対象を追い求める事…善悪の区別をつけない執着の全て

妄執 道理を逸した執着（欲望、渴望とも言える。）また、仏教用語の執著（しゅうちやく）は執着の悪いものを表しているようです。

愛執 執着を愛する事

としました。

仏教では代表的な欲として、五欲（食欲、財欲、色欲、名誉欲、睡眠欲）が提唱されています。しかし、当方の経験では五欲では足りず、「人から愛されたい、認めてもらいたい。」という【承認欲】が入るべきだと考えています（以前はこれを【愛欲】としました）。五欲に承認欲が加わり六欲になります。この六つの欲を生存上必要な順に並べると、

【食欲 ≡ 睡眠欲 ≡ 承認欲 ≡ 色欲 ≡ 財欲 ≡ 名誉欲】 ↑ 六欲

になると、私は考えています。以上を六欲と命名します（ただし、並び順は人によりある程度前後すると思います）。

現状の仏教では、これらの言葉の定義がなされていないので、欲と執着に関して思考ループを作ってしまうという事態を招いています。

しかし欲も執着も全てが悪いわけでもなく、生存を支える生存欲（睡眠欲、食欲、色欲）・社会的にスムーズに生きていくため

⁵⁾ Ver. 1で当方は、「愛欲と情欲は同一とし、愛欲とは、他者からの愛情（愛欲）や人気を求める欲」としましたが、本書では全面撤回となりました。

の財欲、名誉欲、承認欲には程よく執着することが必要だと思えます。ですから、本書では、「執着（執着全般で善悪混合）」≠「妄執（悪的執着）」≡「執著（悪的執着）」と考えます。

他方、欲というものも、この三次元の世界に既に設定されていて、全てが悪ではないのです。しかし悪的執着の【妄執】が求める欲が悪的欲の【情欲】で、人として生まれたからには、【妄執】を消滅させることが大切なのです。このためには、【愛欲】と【愛執】という心の作用（心の汚れ）を制し【妄執】をなくしていかなくはなりません。言い換えると、欲への執着から離れた位置で執着を制し続べながら生きる事が人間にとって重要な努めになるのだと考えています。

今、快樂が得られる欲があるとしみましょう。これを愛する心が愛欲で、この愛欲が強くなればこれを得ようとしみますので執着が出てきます。この対象物（欲）の放つ快樂が素晴らしければこれを得ようとする執着すら愛するようになり愛執が起こりこの時点で執着から妄執へと変化します。この順番から、「妄執」の根源は「愛執」、「愛執」の根源は六汚れの「愛欲」と言えます。

お釈迦様は、この世の中には激流が存在して、その激流と一緒に流れている無常のものに恋い焦がれて、精一杯追いかけるのが人間の心であるとしています（G199～G202 詩参照）。この激流に引っ張られる要因が、妄執でこれは主に顕在意識の中に分布します。実際には、妄執によって激流（欲）と一緒に流されているだけなのですが、その求めているものは、激流の中なので、なかなか掴めません。しかし、自分では激流の中で一生懸命追い求めている気になっているのです。図9に、この世の中に設定されている欲（激流）とそれに流される心のイメージ（心を牽引しているベクトルが妄執であり意欲の悪い部分です。）を描きます。

「真理のことは」において、流れて例えられるのが情欲（悪的欲）です。一方、「著は草を集めて焼く」という意味で漢字が成り立っていますので、火で暗示されるものが執著や妄執です。

では、欲をなぜ激流とたとえるのでしょうか？ この欲というものは、理科学という場のようなもので、すでにこの3次元の世の中に設定されているのでしょうか？ これは、人間の力でなくすことなどできないものです。ですから、「欲をなくせ。」という表現は、本書の定義では、「情欲への妄執をなくせ。」とするべきです。どの欲の流れに流されるかは、その心の執着する癖によりま

す。食欲に弱い人もいれば、名誉欲に弱い人もいるっていうのが、現実です。ちなみに、人間が恋い焦がれて追い求める「激流と一緒に流れている無常のもの」は、流れによって形作られたもので、実体的ないもの、すなわち「色」⁶であると認識するべきであるというのが、般若心経の教えです。

6 以前は「空」と書いてしまつて間違えていました。詳しくは付録7を参照ください。

(コーヒーブレイク) 仏道のキーンナンバー

GS19 修行僧 G257 詩では、キーンナンバーは5です。しかし、G257 詩の「五上分結と五下分結」は、図8で記した通り、心の汚れに相当するものを10個書き出しており、六汚れの重複で考えて良いと思います。

また、五根「信、精進、念、定、慧」(付録3参照)は、精進の範囲が広すぎますので、精進を「行動」と「思考」で分けて、六根道にすべきだと思う次第です。

他にも般若心経での一節「眼耳鼻舌身意」、「色声香味触法(〓意)」をそれぞれ六根と六境と言います(六根と五根改め六根道は、少しややこしいです)。さらに、六道輪廻、六神通があります。さらに前述の六欲です。

以上から、仏道のキーンナンバーは6ではないかと思うに至りました。

(コーヒーブレイク) 三界についての感想

この世の中、大体の人が「色界」で生きていると思います。ですから無闇やたらと欲に任せた事件が起きてなく、起こったら一大事件になるのです。欲界の部分が多い存在もいるけれど、それはもはや人間に分類してはならずそういった存在が凶悪事件やテロを起こすのでしよう。

当方としては、「欲界」と「色界」と「色界」には異存はないのですが、「色界」と「無色界」については、少し感想を述べたいと思います。この二つですが、「色界」で色と空を正しく認識せずに、誤った認識をした場合に到達するのが「無色界」ではないかと思うのです。ですから、「無色界」は悪魔による解脱であって、涅槃(悟りによる解脱)ではないと思われる。ある程度立派になって良い線まで行っても途中からとち狂う人たちは、まさにこの辺りで真理(空)を誤認した人たちではないかと思う次第です。これは、当方の主観ですので感想文程度に記しました。

三界

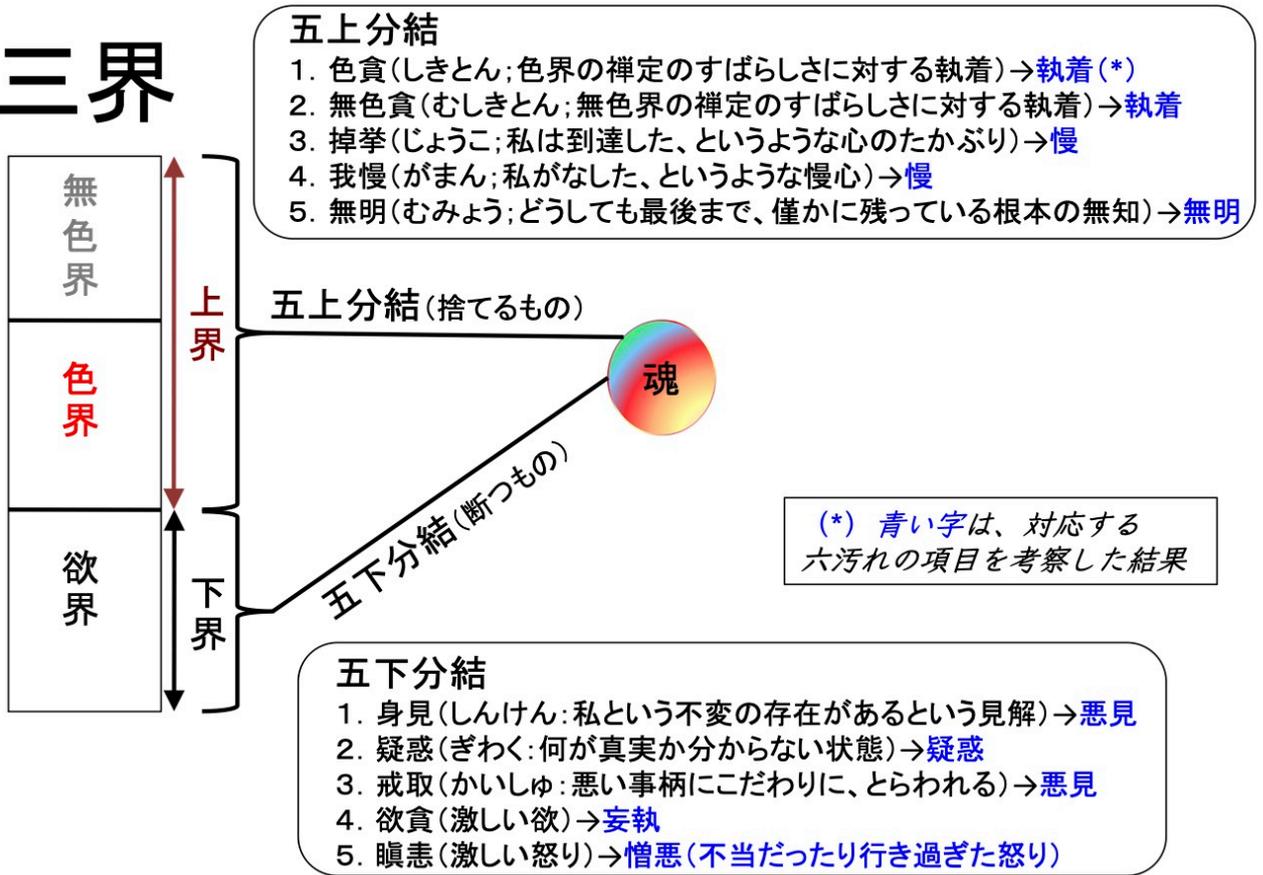
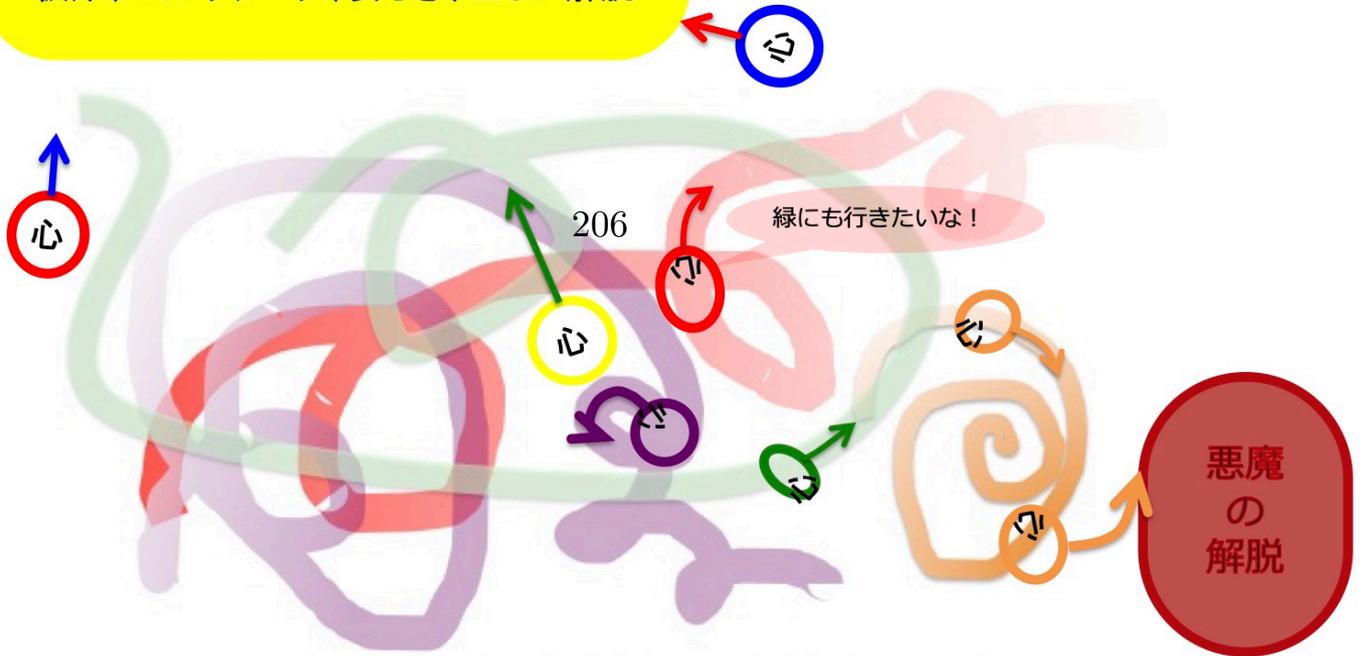


図8 三界の五上分結と五下分結

彼岸、ニルヴァーナ、安らぎ、正しい解脱



この世の中に設定されている欲望をイメージ化

- ①色によって欲望の種類を分けています。私は、食欲、財欲、色欲、承認欲、名誉欲、睡眠欲が六欲であると考えています。この図では、4本の流れしか書いていませんが、心がこれらの流れに乗って流される様子を表しました。流れに乗って、心が悪魔の領域に近づくと、悪魔たちにトラップされやすくなるイメージがあります。
- ②ニルヴァーナに正しく近づいている心もあります。心の丸が潜在意識でベクトルが顕在意識というイメージです。

図9 欲望(激流)とそれに流される心のイメージ

付録6 武力と暴力

私が平和で安全な場所で生まれ育ったので、本書に取り組んだことを機に、初めて暴力という言葉に熟考しました。私の生い立ちからは、ただ自分の欲得のために、人の命や土地を暴力によって奪う人なんてこの世にはいないと信じていました。近くにそういう人間がいなかったのも、そう思ってしまうのも、仕方ないのでしょうか。

ただ、今から考えれば、「あのハラスメントは暴力の部類だな！」と思ったりもしますが、私は武力行使が伴ったものを暴力と考えていたので、暴力という言葉自体の認識が曖昧でした。そこで暴力という言葉調べてみました。

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説 (<https://kotobank.jp/word/暴力-132521>) によると、暴力とは、

(一) 政治学的には、物理的強制力の行使一般をいう。

(二) 法学的には、不当ないし不法な方法による物理的強制力の使用をいう。

(一) の政治学および社会学的意味における暴力の概念には、単に法的考察によって定義される不当不法な力の行使をいうのではなく、いわゆる革命集団による国家秩序の暴力的転覆(武装蜂起)や暴力団による腕力などの行使から、国家が合法的かつ正当的に所有する軍隊や警察のいわゆる実力行使までも内包されるのが普通である。

(二) の法学的見地の暴力は、法によって許容されない力の行使をいう。したがって軍隊や警察の実力行使は、それが法に依拠しているかぎり、正当化され暴力とは呼称されない。また正当防衛のような場合、個人による実力の行使であっても、それは法の許容内と考えられ、暴力とは呼称されない。

であると説明されています。

政治学的な説明と法学的な説明では、やはり法学的説明の方が普遍性が高いと言わざるおえないと思います。というのも、世の中には、法を侵して、もしくは、脱法で悪事を働く愚かな人たちが沢山いるのですから。これに対応するために武力を用いた際に、ネガティブなイメージの暴力という言葉を使うのはやはり不自然です。きちんとした分類をせずに、一括りに議論をするというのは、悪魔の常套手段ですから、政治学的な暴力についての説明にも、悪魔の存在が見え隠れします。

では次に、正当な武力行使に至るまでの道筋を、私なりに考えたいと思います。

ある問題が起こるとしましょう。この問題の当事者たちは、この問題を解決するために、この問題の原因をまずは調べなくては

なりません。この原因をはっきりさせる目的は、発端となった事や経緯で過失であれ故意であれ、どの当事者に非があったのかをはっきりさせる必要があるのです。そして、ここまで来て、ようやく話し合いによって非がある当事者に改善を促します。ここまでの段階で、この非のある当事者に武力を一方的に使うと暴力と認定されます。

しかし、正当な話し合いをしたにも関わらず、その当事者が改善を行わなければ、武力を用いて滅ぼす、もしくは、制圧する事を暴力と定義することは不当な定義です。

正当な話し合いだったかどうかを認定するのが、大変ですが、これは多少でも関わった人たちが、自分の利害に関係なくとも、各自で、なるべく正しく判断するように心がけなければなりません。というのも、自分が、何時、どのような事態に落ちるかかわりません。世の中は、そのような相互保証で成り立っているのです。もし、この時に、みんなが知らん顔したら、不当行為が勝ってしまうのです。そうして、世の中が悪魔の支配になっていくのです。「他人のことに関わると、厄介な上に、自分が変な勢力から攻撃されるから嫌だ」という人々の姿勢が世の中を圧巻した、ここ30年で、散々、味わった悪夢です。

以上から、本書では、暴力を「不法 不当な方法による物理的強制力の使用」という意味で使用します。

実は武力行使にいたる前の話し合いで、不当な主張をする者たちに撤回させ説得することが理想であることはお分かりいただけますか？　そしてこれが人類に与えられた唯一の戦い手法なのです。というのも人類の武力では、その不当な主張を繰り返す悪魔どもには太刀打ちができないからです。正しい教えとその実践と智慧が、人類に与えられている武器なのです。

付録7 さとりと空

(1) さとりと解脱と涅槃

「悟り」、「解脱」、「涅槃」について、浄土宗大辞典WEB版（深謝）から抜粋させていただいたものを次に記します。

悟り（さとり）真理に目覚めること、あるいは（真理に）目覚めることで無明がなくなった状態。

解脱（げだつ）苦から解き放たれ脱すること、一切の煩惱や束縛から離れて精神的な自由を得ること。

涅槃（ねはん）苦しみが消滅した状態。仏道修行者の目指すべき到達点である。また涅槃は、煩惱の火が滅した状態、あるいは煩惱という薪たきぎが智慧の火によって焼き尽くされた状態に喩えられる。

まず、人間についてよく言われている、「私は人間様だ、すごいだろ！」と「所詮、人間、汝の愚を知れ！」は、私は極論に感じ好ましいと思いません。しかし、「上には上がいる。」という謙虚な自覚があることは、悟りを得るためには強い武器になると思えます。「上には上がいる」という標語的表現は、私も師から教わったのですが、確かに忘れがちなポイントだと強く反省した覚えがあります。この姿勢を持たなければ、悟りを得る情報が自分に流れ込んでこない、否、流れ込んできても気づかないことになるでしょう。

悟りが得られると、執着していた事物（心の汚れとも言えます。付録5参照）から離れる精神力が得られます。それにより、新しい悪い想念やカルマを獲得せず、既存のそれらの精算だけが進み、最終的にはこれらを一切持たない自分へとなります。付録4の人間の分類において、真人は悟りが得られた以上のレベルの人間で、御仏（ブツダ）は悪いカルマを一切持たない存在で、神道的には神人、キリスト教的には無原罪の存在と表現しているようです。

さらに、神人、御仏との差を取る（なので「さとり」というと、師から伺ったことがあります。）ために人間の行うべき日々の行を、お釈迦様は私たちに知らせてくださったと考えています。仏道とは、悟りによる解脱で人間が涅槃へと進み真人や神人（仏）へと進化するための教えで、人間に与えられた非常に大切な教えだと考えています。

（2）空相色

「空（くう）」は抽象的で難しい概念だと思えます。ネットでは、「分別のない世界を一切空」という曖昧な説明が多いのが現状です。浄土宗大辞典WEB版さんでは、「空」について詳しい解説がありますので抜粋すると、

「すべての事物が因縁によつて生起していることを意味する縁起を説くが、この因縁によつて生起しているということは、一切は他に依つて存在し、それ自身で独立して存在してはいないから、永遠不変の固定的実体はなく、したがって空ということになる。」となります（深謝）。

この伝統仏教による空の解釈は、諸行無常を因縁として登場したと推察しています。しかし、「空」は仏道では次章で紹介する般若心経により説かれる主要な教えであると言え、「空」が、そのようなはかない対象を土台に発生したとは考えにくいと思ひ至りました。「空」を読み解くことは、仏道において避けて通れないキーワードだと思ひますので、以下に、当方による漢字の成り立ちをヒントに、当方の体験も交えて「空」の議論を展開します。

「空」という漢字は、穴かんむりと工からなります。工は巧みなものという意味がありますが、上下の横棒（一）は、それぞれ上

の世界と下の世界を表し、結ぶ縦棒（一）により連絡されている世界を表して、これにより巧みな物を表すようになったでしょう。巧みな物の中で穴のようなものを「空」と呼んだのでしよう。つまり、私たちが上を見上げた時に見える空（そら）は、巧みな物の一部である地球に通っている穴という意味から「そら」に「空」があてられたのだと思います。ちなみに、地上にいる人間にとっては、空は広大で穴なんかじゃないので、創造神様が上から見た状況を表してらっしゃるのでしよう。

議論を戻すと、「本来、空」という字の意味は虚しいとか空っぽという意味ではなく、全てを貫く穴とは不変なもの、つまり創造主（神様）がお創りになった真理であると解釈することもできるのです。実は私たちが暮らすこの世の物質的な事物ですら、真理で作られていると考えています。科学は限定的ではあり、まだまだ未熟ですが、この世の中の物質的現象を不変的に説明する真理（法または法則）を探究する学問です。つまり、私の捉えた「空」は真理です。

「空」の対局をなす「色」ですが、これはこの真理（巧みな穴の空）を、覆い隠しているもので、いわゆる気とも表現できる（エネルギーでも良いのでしょうか。）媒質の流れ（エネルギー流みたいなもの）ではないかと考えています。なお、この「空」は、穴なのでこのような気や気の流れは存在していないようで、次章に載せた般若心経の十七行目でも、「それゆえ、空の中には色がないのである。」と書いてあります。

「相」という漢字は、目で見える木（気）と書きます。枝葉が張り巡らされた大きな木とその背景を含めた部分を母相（マトリックス）と見立てた時、このマトリックスは「空」と「色」の部分から成っていると捉えます。そして、それぞれの部分を、空相と色相と表現します。

このマトリックスを見て、真理部分の「空相」を認識するのが人間の務めです。しかし、次節に記した般若心経では、十行目の「受想行識」で記されている通り、各個人の想念と行いと知識により、「色」が「空」にもなるし、「空」が「色」にもなるし十行目の「亦復如是」で教えてくださっています。この意図を受けている行が、六行〜九行の「色不異空空不異色色即是空空即是色」だと思います。

「色」は、人間の意思でなくすることができない、人間にとっては既存のものと考えて差し支えないと考えています。ただし、「色」は人間の念いによって流れ方が変わり、良い念いは良い流れ（色）を作り、悪い念いは悪い流れ（色）を作ります。一度形成された色は、善悪の性質を問わず、時間と共に姿を変え、場所により異なってしまう。一方、空は時間や場所には左右されません。つまり、仏教で言う諸行無常とは、「色」の持つ特性であって、「空」の持つ特性は真逆の絶対不変であると考えられます。

木であれば、木漏れ日をたよりに「空」を見出し出すことは可能ですが、この世のマトリックスから空相を見分けるためには、人間は、自分の思い込みや先入観（色眼鏡）を外して、与えられた感覚全てを使い、マトリックスを観測するよう努めなくてはならないでしょう。各個人の想念と行いと知識により、「色」が「空」にもなるし、「空」が「色」にもなるので、心の汚れを取り払って

この世の中を見なくてはならないのです。このために、お釈迦様は、煩惱や心の汚れがどんなものであるか、事細かに説かれ、その除去方法を説いてくださっているのです。そして、人間には本来、それを正しく理解する力が備わっているのです。どのような心の汚れが自分の中に存在するのかを常に気にかけて認識し、なくす努力を続けることが大切なのです。

ちなみに、私の経験では、空を認識した時（空を体現するともいう）は、必死で思考していた時でした。その時認識した空は、「物事も分別」もはつきりした答えが現れたというイメージです。これらが、自分がぼやっと普通にそれまで考えて（見て）いた「物事や答え（分別）」とは、かなり異なったことも事実です。ですから、空を体現することは、色相を取り除いて、実相である空相、すなわち真理を認識する事だと考えています。

本来、禅定は真理を探求するために行うものですから、空を体現するために行うものでしょう。「禅定のためには心を空っぽにする」という説明は正しくなく、「心の汚れを取り払って、丹田に集中して、熟考する。」というのが正しいアドバイスだと思います。もちろん、思考などが上手くいかないときに立ち止まって頭や心を休憩することは非常に重要ですが、心からっぽにするのではなく、邪念を捨てる必要があります。また、無相は「相を無くしてください。」となりますので、空相（実相、真理）までなきものにしてしまう呪文になりかねませんので、今後は、「無色相」という言い方などの工夫が必要かもしれないです。

（3） 般若心経

仏道の「空の概念」は、「空」という漢字が、「全てを貫く穴」と、かなり真逆の「からっぽ」の意味があることから、議論が混乱してしまったのだと思います。これは、悪魔崇拝教のトラップが入り込んだ結果でしょう。般若心経に登場なさるのは、観音様とサリプッタ尊者様です。これをお釈迦様は必死でお唱えしながら仏道をお広めになられたのだと、私は推察しております。あらかじめ、般若心経が悪魔に侵されにくいように、また侵された時を想定なさって、お作りになられたと思われます。以下に、このように考える理由を二つ記します。

第一点 私たちが目にする般若心経は漢文なのですが、とにかく意味を捉えるのが難しいことです。かけ言葉もあるようで、返り点など打てる状況にないのです。さらに短いですから、本体への改ざんは至難の技です。原文から受け取る情報は、読んだ人によって異なり幅が広くなると思います。よって、いい加減な解説を権威づけたり、文章の切れ目を変えたりして般若心経の真理を覆い隠しているようです。

第二点 般若心経は、音を大切に編まれた詩で、読み上げるだけで功德があると言われる点です。私が聞き及んだ限りでは、この音自体に魔除けとしての役割があるとのこと。したがって、漢訳なされた玄奘三蔵法師様も細心の注意をお払いになつて、漢字をあてられたことだと思ひます。

仏弟子等（人間等）に対する神々様の愛情あふれるおはからいを感じる次第です。

般若心経について、以下の点について考慮し、当方が考えた切れ目に沿つて、全文・読み方・意識を記しました。

三行目 五蘊については、一般に「人間を成り立たせている五つの要素。色（しき）（|| 肉体）・受（|| 感覚）・想（|| 想像）・行（ぎよう）（|| 心の作用）・識（|| 意識）」（Oxford Languagesさんより）となっています。

しかし、当方では、色（しき）は肉体とは捉えず、いわゆる気の流れと捉えます。般若心経の十行目の「受想行識」は「想念、行い、知識を受け」と訳しました。この解釈に基づけば、色（しき）（|| 肉体）::の「||」関係は成立しません。

ここで「蘊」と言う字について、考察しましょう。人間が囚われている状態を表す「囚」がお皿の上に乗っています。これは囚われた人間（心がおさまっていない普通の人々）と食糧を糸のように寄り合わせようとしている邪な（くさい）ものが「蘊」という字の意味だと感じています。実際に人間を食べるとかそう言う意味ではなく、俗に言う「食い物にする」とか「カモにする」という意味でお皿の上に乗せる表現をしているのでしよう。

したがって、本書では、五蘊とは人間をとらえ縛り付けている五つの要素で、いずれも色を感受する身体・五感・想念・行い（掛け言葉で業）・意識であると再定義します。

五感 前述の五感は、一般に、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚とされています。

十行目 行（修行）と業（カルマ）がかけ言葉になっていると思ひます。

十九、二十一行 「眼」は「限」がかけ言葉となっているようですので、双方の場合の意味を記しました。「眼」は、一二三神示（日月神示）に出てくる良（うしとら）金神様の目であり「霊能力」と考えました。

十九、二十行 この世は「色」が作る相にがあたかも真理のように横行し、人々を惑わしている訳ですが、「色」を最も認識するのが、五感の中でも「視覚」です。したがって、視覚（目）の情報により惑わされやすいから、聴覚（耳）・嗅覚（鼻）・味覚（舌）・触覚（肌）・意識（額；前頭葉）からの研ぎ澄まされた情報を大切にすべきだと主張していると考えました。

三十二行 大いなる教え（般若心経）の真理（空）を得たことから、悟りを得て涅槃へ到達するという道筋が示されていますが、この順序はとても大切だと思います。日頃の「努め励み」と「慎み」に気を付けて生活を送るうちに、（実は）真理は与えられるのでしょうか、正しい道筋である場合自分では、「与えられたのか？」それとも「自分で気づいたのか？」を判別ができませんというものが、大方の正直な感想ではないかと思えます。

*1、*2 「垂」「圭」漢字はパソコンで出力できる字となりました。写経等で使用されている文字は下記の通りです。
呪 この字は、「真言」（真の言葉）という意味で、感覚的には「呪（のろ）い」とは逆です。

垂 ↓ 埤

圭 ↓ 隄

般若心経（三蔵法師玄奘訳）<http://structure.cande.iwate-u.ac.jp/religion/hannya.htm> やん参照（深謝）

（一行） 観自在菩薩（観音菩薩様が）

かんじざいぼさつ

（二行） 行深般若波羅蜜多時（深遠な知恵を完成するための実践（熟考）されている時、）

ぎょうじんはんにはやはらみったじ

（三行） 照見五蘊皆空（人間を囚え縛り付ける五つの要素【五蘊】と全ての空（真理）を熟考して）

しょうけんごうんかいこう

（四行） 度一切苦厄。（すべての苦しみを渡ることができた。）

どいつさいくやく

（五行） 舍利子、（舍利子よ、）

しゃりし

（六行） 色不異空（色は空とは異ならず、）

しきふいくう

（七行） 空不異色（空は色とは異ならず、）

くうふいしき

（八行） 色即是空（色は空でもあり、）

しきそくぜくう

(九行) 空即是色 (空は色でもあり、【実際はそんな出鱈目なことではないのであるが、】
くうそくぜしき

(十行) 受想行(業)識 (【各自の】想念、修行(カルマ)、知識を受け、
じゆそうぎようしき

(十一行) 亦復如是。(色は空に、空は色に帰せられると【誤】認識してしまう。)
やくぶによぜ

(十二行) 舍利子、(舍利子よ、)
しやりし

(十三行) 是諸法空相、(諸々の真理(法)は空相であり、)
ぜしよほうくうそう

(十四行) 不生不滅 (【空相は、】もともと、生じたり滅んだりするものでもなく、)
ふしようふめつ

(十五行) 不垢不淨 (よごれていものでも、浄らかなものでもなく、)
ふくふじよう

(十六行) 不増不減 (増えることもなく、減ることもないのである。)
ふぞうふげん

(十七行) 是故空中無色。(なぜならば、空は色ではない部分であるからだ。)
ぜこくうちゆうむしき

(十八行) 無受想行識 (各自の想念、行い、知識を受けなければ、)
むじゆそうぎようしき

(十九行) 無限(眼)耳鼻舌身意(創造主の良金神の目【靈能】が無くとも、耳と鼻と舌と肌と意識が限り無く【研ぎ澄まされ】)
むげんにびぜつしんに

(二十行) 無色声香味触法 (色のない聴覚・嗅覚・味覚・触覚・法を理解する。)
むしきしょうこうみそくほう

(二十一行) 無限(眼)界 乃至無意識界。(創造主の良金神の目【靈能】が無くとも、「限」限界がなくなり、意識界とは異なる
世界へと至ることができる。)

むげんかないしむいしきかい

(二十二行) 無無明 亦無無明尽 (そこに到れば、無明もないので、無明が尽きるということもなく)
むむみよう やくむむみようじん

(二十三行) 乃至無老死 亦無老死尽 (老と死がなくなるので、老と死が尽きることもなく)
ないしむろうし やくむろうしじん

(二十四行) 無苦集滅道 (苦しみを集めることも、真理を滅ぼすことも無くなるので、)
むくしゆうめつどう

(二十五行) 無知亦無得 (【真理を】知ることもなければ、得ることもなく)
むちやくむとく

(二十六行) 以無所得故。(したがって、【真理を】与えられることもない。)
いむしよとくこ

(二十七行) 菩提薩垂 依般若波羅蜜多 (悟りを求めている人々は、大いなる教えに依拠し、) (*1)
ぼだいさつた えはんにはらみつた

(二十八行) 故心無圭礙。(よって、心に疑いと妨げがない。)(*2)
こしんむけいげ

(二十九行) 無圭礙故無有恐怖。(疑いと妨げがなければ、さらに、これにより恐怖が無くなる。)(*2)
むけいげこむうくふ

(三十行) 遠離一切転倒夢想 究境涅槃。(一切の逆転した夢想(色)から遠く離れている究極の境地が涅槃である。)
おんりいつさいてんどうむそう くきようねはん

(三十一行) 三世諸仏 依般若波羅蜜多 (過去・現在・未来にわたる仏様たちは、大いなる教えに依拠しているので、)
さんぜしよぶつ えはんにはらみつた

(三十二行) 故得阿耨多羅三十藐三十菩提。(この上なき真実を得たので、悟られているのである。)
ことくあのかたらさんみやくさんぼだい

(三十三行) 故知 (したがって次のように知るがよい。)
こち

(三十四行) 般若波羅蜜多 (大いなる教えこそが)
はんにはらみつた

(三十五行) 是大神呪 (偉大な真言であり)

ぜだいじんしゅ

(三十六行) 是大明呪 (悟りのための真言であり)

ぜだいまいしゅ

(三十七行) は無上呪 (この上なき真言であり)

ぜむじょうしゅ

(三十八行) 是无等等呪 (比較するものがない真言なのである。)

ぜむとうどうしゅ

(三十九行) 能除一切苦 (これこそが、あらゆる苦しみを除き)

のうじょいつさいく

(四十行) 真実不虛。(真実そのものであって虚妄ではないのである、と。)

しんじつふこ

(四十一行) 故説般若波羅蜜多呪 (そこで最後に、大いなる教えの真言を述べよう。)

こせつはんにはやはらみつたしゅ

(四十二行) 即説呪曰 (すなわち次のような真言である。)

そくせつしゅわつ

(四十三行) 羯帝羯帝波羅羯帝 波羅僧羯帝 菩提。(往き往きて、涅槃に到り、さらに涅槃に入りしことが、悟りである。)

ぎやていぎやていはらぎやてい はらそうぎやてい ぼうじ

(四十四行) 僧莎訶 般若心経。(めでたし、大いなる教えの般若心経。)

そわか はんにやしんぎょう

(4) 諸行無常、一切皆苦、諸法非我

「諸行無常とは、「色」の持つ特性であって、「空」の持つ特性は真逆の絶対不変であると考えられます。」と(2)で述べました。つまり、人の思考や行為で作られたエネルギーにより色(気)が流れて、さまざまな現象や事物を作り出していると考えているのです。これらの現象や事物は、常に気の流れの影響を受けるので、不変であるはずはありません。これを諸行無常と捉えました。

他方「空」は、この世の中もあの世も全ての世界を貫く真理であると考えたので絶対不変になるのです。

以上の考え方に則れば、この世のものは全てが諸行無常なわけではなく、絶対不変である真理（空）も混在していることになるのです。従って、この世の中は、諸行無常の部分が多いとは思いますが、全てが諸行無常ではないとなるため、「色により形成された全ての事象は諸行無常である。」ということが結論づけられます。

一切皆苦も同様に、色に属する事象が変化するにつれ、規制事象が変化した事象に合わなくなることによって苦を感じる人間の性質を教える詩だと考えます。しかしいったん絶対不変の「空」を体現した場合、この世のもの全てが苦であると考えることは難しいと思います。つまり、自然も自分の身体も平等に愛おしくなる感覚といえます。したがって、「真理（空）を体得せねば、色により形成された事象がこの世の全てだと信じ、この世の中は一切皆苦と誤認する。」ということが結論づけられます。

諸法非我については、まず「我」という文字について考えましょう。我||手十戈（ほこ…武器）で出来ていて、本意はどうやら「武器を手取る」という字が正しいです。しかし一般には「我」の音が近いことから自分という意味を指したと言われています。「我」と同じ意味で「吾」という字がありますが、「吾」は神のお告げというのが本意だったということで、五つの口と書きますから、正守護神様+四魂からの正しい言葉を発する自分と解釈できます。一方、我は武器を取るような乱暴な自分、いつも自己主張ばかりする自分、つまり副守護神様を指していると、私は確信しました。

そこで、一二三神示の言説「我よし」の精神を取り入れて考えてみます。「我よし」こそ「我」であり、さらにその発信源が幽界に住する副守護神様であると考えられます。「諸法非我」とは、諸法つまり諸々の真理には、「自分だけ良ければガチャガチャ自己主張しても、最終的には武器をとっても許容される。」という幽界的な要素は全く存在しないという意味になるでしょう。

第5部 削除詩

* OS01 ひと組ずし

0009 けがれた汚物を除いていないのに、黄褐色の法衣をまとうと欲する人は、自制がなく真実もないのであるから、黄褐色の法衣はふさわしくない。

0010 けがれた汚物を除いていて、戒律を守ることに専念している人は、自制と真実とをそなえているから、黄褐色の法衣をまとうのにふさわしい。

(コメント)

法衣を纏う条件ですが、お釈迦様が法衣を規定したのか疑わしいものです。

お釈迦様の説かれた仏法が、仏教という宗教へ誘われた時に、教団が付け足した詩文と、私は認識致しましたので削除としました。

ちなみに、神様が手を入れることすらできない法（真理）に対して、戒律や法律は神様より下位の存在（含人間）が時代と組織に合うように法を咀嚼して作ったものだと思います。どちらかと言えば、法律は法を重視したもの、戒律は、戒めや慎みという道徳的なものを重視したものなのでしょう。法律は、戒律よりは普遍性があり、また、社会人としては守らないと、国家、社会が成り立たないものでもあります。

0015 悪いことをした人は、この世で憂え、来世でも憂え、ふたつのところで共に憂える。彼は自分の行為が汚れているのを見て、憂え、悩む。

0016 善いことをした人は、この世で喜び、来世でも喜び、ふたつのところで共に喜ぶ。彼は自分の行為が浄らかなのを見て、喜び、楽しむ。

0017 悪いことをなす者は、この世で悔いに悩み、来世でも悔いに悩み、ふたつのところで悔いに悩む。「私は悪いことをしました。」という悔いに悩み、苦難のところ（地獄など）におもむいて（罪のむくいを受けて）さらに悩む。

0018 善いことをなす者は、この世で歓喜し、来世でも歓喜し、ふたつのところで共に歓喜する。「私は善いことをしました。」というて歓喜し、幸あるところ（天の世界）におもむいて、さらに喜ぶ。

(コメント)

お釈迦様は、来世を幸せに過ごすために仏法を説かれたわけではありません。これが諸宗教の諸悪の根源…オネダリ信仰なのですよ！

お釈迦様は、今が大切、今、心を整え、心が治まる方法、そして神様が創られた、そして神様の一部でもある、法（則）を、塵穢れに満ちた三次元を生きている人間に伝授されに、この世にいらしたのです。法というものは、人間にとって遠く離れたものではなく、正しく話を聞けば何となくでも理解できるものなのです。なぜなら、人間も法の一部だからです。それに対して、来世とか苦難のところとか、幸あるところという曖昧な言葉で連想される世界は、理解と言うより想像しかできないのです。曖昧な世界の描出、来世へのオネダリ系

の詩句は削除します。

* OS03 はげみ

O036 心は極めて見難く、極めて微妙であり、欲するがままにおもむく。英知ある人は守れかし。心を守ったならば、安樂をもたらず。

F004：悪魔は、この心の支配を狙う。心を悪魔から守らなければ、安樂は得られない。心を正しく治めれば安樂を得る。

(コメント)

(F004, C, O036, OS3) 「極めて見難く」、「極めて微妙」というのは潜在意識部分だと考えましたが、あまりにあやふやなので、ver.2の再考にあたり削除しました。

* OS06 賢い人

O088 (B080) 賢者は欲樂をすてて、無一物となり、心の汚れを去って、おのれを浄めよ。

(コメント)

無一物となる必要はないので、詩自体を削除します。

* OS10 暴力

O129 (B289) すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺させてはならぬ。

O130 (B290) すべての者は暴力におびえ、すべての(生きもの)にとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺させてはならぬ。

O131 (B291) 生きとし生ける者は幸せをもとめている。もしも暴力によって生きものを害するならば、その人は自分の幸せをもとめている。も、死後には幸せが得られない。

O132 (B292) 生きとし生ける者は幸せをもとめている。もしも暴力によって生きものを害しないならば、その人は自分の幸せをもとめているが、死後には幸せが得られる。

(コメント)

詩 O129 と O130 に関しては、「すべての者は暴力におびえ」と「すべての者は死をおそれる」が、誤りです。「暴力に怯える」のではなく、「暴力を嫌悪する」なら間違えではないでしょう。

他方、お釈迦様は、「ブツダのことば」の 516 詩にて、「全世界のうちで内面的にも外面的にも諸々の感官を修養し、この世とかの世と

を厭(いと)い離れ、身を修めて、死ぬ時の到来を願っている人、——かれは(自己を制した人)である。とおっしゃっています。「自己を制した人」↓「心を整えた人」(付録2参照)とします。ここでは、真人としましょう。真人になったあかつきには、死を恐れるどころか、「死ぬ時の到来を願っている人」になるとおっしゃっています。新人でも、死ぬのを恐れる人もいれば死の到来を願っている人もいます。うお釈迦様の教えと整合が取れません。

「暴力に怯えて」そして「死をおそれて」ばかりいたのでは、悪魔のやりたい放題の世の中になります。あちらは、私たちに武力と暴力の境目をぼやかして全面禁止し、正当な智慧の武力の行使さえ抑えて、自分たちは暴力し放題なのです。暴力を禁ずる教えは、同時に正当な武力や戦いまでも禁ずる行き過ぎにつなげてきていますので、要注意です。

詩0131と0132に関しては、何度も書きますが、お釈迦様は、来世を幸せに過ごすために仏法を説かれたわけではありません。これが諸宗教の諸悪の根源・オネダリ信仰なのです。

以上より、これら4詩は、全くと言って良いほど、整合が取れず、書き直しのレベルではなく、悪魔による改ざんと判定したので、一度は書き直しましたが、削除します。

0137 + 0140

手むかうことなく罪咎の無い人々に害を加えるならば、次に挙げる十種の場合のうちのどれかに速やかに出会うであろう、(一)激しい痛み、(二)老衰、(三)身体の傷害、(四)重い病い、(五)乱心、(六)国王からの災い、(七)恐ろしい告げ口、(八)親族の滅亡と、(九)財産の損失と、(十)その人の家を火が焼く。

この愚かな者は、身やぶれてのちに、地獄に生まれる。

(コメント)

GS13 悪 G156 詩とほぼ同じ内容です。

詩番号の付き方が不明です。

さらにこの詩に挙げられている10個の災いの根拠が不明なことや、「地獄に生まれる」といった表現がお釈迦様が使ったとは考えにくいこと、などから、この詩は、代替もありますし、削除します。

0145 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯め、慎しみ深い人々は自己をととのえる。

(コメント)

GS13 悪 G156 と、前半部分が同じです。

GS22 G297 詩とほぼ同じで、慎み深い人が、賢い人と変わっているだけです。当詩は削除します。

どうして暴力の章にあるのか？ 不明です。

以上より、この詩は削除します。

* OS12 卍

O159 詩 G014 参照

* OS14 ブツダ

O195 + O196 (B166) すでに虚妄な論議をのりこえ、憂いと苦しみをわたり、何ものをも恐れず、安らぎに帰した、拜むにふさわしいそのような人々、もろもろのブツダまたその弟子たちを供養するならば、この功德はいかなる人でもそれを計ることができない。

(コメント)

ブツダを供養するならまだしもですが、その弟子とまでなると、あやふやになってしまうので、削除しました。供養に関する教えの詩は、GS7 節 G074, 075 詩で考察し述べられています。

* FS15 楽つみ

O203 飢えは最大の病いであり、形成せられる存在(わが身)は最もひどい苦しみである。このことわりをあるがままに知ったならば、ニルヴァーナという最上の楽しみがある。

F105: 飢えは最大の病いであり、形成せられる存在(わが身)は最もひどい苦しみである。このことわりをあるがままに知ったならば、ニルヴァーナという最上の楽しみがあることを知るであろう。

(コメント)

(F105, B, O203, OS15)

本書で再考した結果、「飢えが最大の病」とか「わが身が最もひどい苦しみ」とか書き直しようないので削除しました。

* OS16 愛するもの

O210 愛する人と会うな。愛しない人とも会うな。愛する人に会わないのは苦しい。また愛しない人に会うのも苦しい。

O211 それ故に愛する人をつくるな。愛する人を失うのはわざわざいである。愛する人も憎む人もいない人々には、わずらいの絆が存在しない。

(コメント)

「愛する人と会うな」etc. なんて、人間の一存でできるわけではないのです。

「神になるよう修行せよ」とか、「欲望をなくせ」とか、土台人間では無理な事を言って、頑張らせるのが、悪魔の常套手段です。人間って真面目ですから、できるはずと思ひ込んで、それでできないと、自分を責めてしまって、発狂するのです。

・人間である以上、できないものもある

・できない理由が本当はどこにあるのかを、冷静に考えることが、実は人間の務め
私が、お釈迦様に代わって僭越ながら勝手に宣言いたします。

この2詩などは、虚偽で、悪しきところに引っ張られる人たちの増やすので、削除しなくてはなりません。

* OS17 怒り

O221 怒りを捨てよ。慢心を除き去れ。いかなる束縛をも超越せよ。名称と形態とにこだわらず、無一物となった者は、苦悩に追われることがない。

(コメント)

怒りは全てが悪いことではないのです。それに振り回されてはなりません、怒りを捨てる、や、殺すでは、悪人のやりたい放題です。

O224 真実を語れ。怒るな。請われたならば、乏しいなかから与えよ。これらの三つの事によって(死後には天の)神々のもとに至り得るであらう。

(コメント)

時と場合によって、語って良い真実も、語ってはまずい真実もあるのですが、真実なら全部語らなくてはならないと誤解を生じる詩句になっていきます。

怒りを制し、怒るべきことは怒らなくてはなりません。

詩中の3つを守ったなら、死後に神々のもとに至り得る保証をお釈迦様がお与えになるとは考えられません。お釈迦様の教えは、死後に神々の元や天国に行くためのものではなく、生きている間に、自分と人類を含めた生類に尽力し、自らが進化するための道筋を示されているのです。

この詩の中で、否定できない部分は、「請われたならば、乏しいなかから与えよ。」ですが、これは分かち合いの教えです。これに関する詩は別立てに GS 5 世の中 G053 詩、GS15 汚れ G177 詩にあります。

以上から、この詩は削除します。

O225 生きやものを殺すことなく、つねに身をつつしんでいる聖者は、不死の境地(くに)におもむく。そこに至れば、憂えることがない。

(コメント)

肉体は滅んでも、魂はなかなか滅ばないというのが、お釈迦様の教えです(詩 F083、F251 など参照)。基本的に、魂は不死なのです。さらに、不死の境地が何を意味するのかはつきりしません。

生き物を殺すとは、不当に殺すことはいけなけれど、正当性があれば仕方ないと言わざるおえません。

怒りの章にあるのですから、怒りに任せて生き物を殺してはならないということなのかもしれませんが、この部分は意味がはっきりしません。

さらに、憂えることがないという部分も、意味がわかりません。

以上から、全体的に意味がわからなくなり過ぎていて、悪魔による改竄だと考えられますので、この詩は削除します。

* OS18 汚れ

O236 だから、自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをほらい、罪過がなければ、天の尊い処に至るであろう。

(コメント)

詩 O236 は G173(O238) 詩も非常に似ているのですが、O236 詩の「天の尊い処に至る」と G173(O238) 詩の「汝はもはや生と老いと近づかないであろう」が異なっています。仏法は、死後の世界をよりよくするために説かれているのではなく、精神性(靈性)・魂の向上を目指し、今、自分がどう努め励むべきかを説いた教えです。よって、詩 O236 の「天の尊い処に至る」という部分は不適当で、詩 238 では、「汝はもはや生と老いと近づかないであろう」という部分は、転生からの離脱を説いているので、よりお釈迦様の教えを忠実に述べています。したがって、詩 236 は削除して、詩 G173(O238) を残します。

O237 汝の生涯は終りに近づいた。汝は、閻魔王の近くにおもむいた。汝には、みちすがら休らう宿もなく、旅の資糧も存在しない。

(コメント)

O237 詩は O235(G172) 詩とほぼ同じなので、後代の付け足しと言われている O237 詩は削除し、O235(G172) 詩を残します。

【参考】詩 O235(F173)

汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝には資糧(かて)さえも存在しない。

* OS19 道を実践する人

O265 (B097) 大きかろうとも小さかろうとも悪をすべてとどめた人は、もろもろの悪を静め滅ぼしたのであるから、<道の人>と呼ばれる。

(コメント)

悪にも必要悪があること、道の人という曖昧な表現があることの二点から、書き換えで対応せず、削除としました。

* OS21 様々な人

O294 「妄愛」という(母と)「われありという慢心」である(父とを滅ぼし、(永久に存在するという見解と滅びて無くなるという見解という)二人の武家の王を滅ぼし、(主観的機官と客観的対象とあわせて十二の領域である)国土と)「喜び貪り」という(従臣とを滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。

O295 「妄愛」という(母と)「われありという慢心」である(父とを滅ぼし、(永久に存在するという見解と滅びて無くなるという見解という)二人の、学問を誇るバラモン王を滅ぼし、第五には)「疑い」という(虎を滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。
(コメント)

この二つの詩は、中村氏の注釈が非常に多いのですが、そのすべてがブツダゴースの注釈を日本語で紹介しているだけです。そして、後代に出来る仏教教義を彷彿させる内容です。これらの事から考えても、両詩は、お釈迦様が起因ではなく、ブツダゴースが起因ではないかと、私は考えています。

両方の詩ともに、似たことが書いてありますが、残念ながら整合が取れず、さっぱり意味不明です。もし仮に、ブツダゴースがこの詩を作ったとして、この整合の取れない二つの詩を残したのであれば、なぜ、みすみす、少し考えれば、「頭おかしいじゃない?」とわかる、この二つの詩を並べておいたのでしょうか? この二つの詩の作られた目的が定かではありませんが、私たち一般人にはわからない暗号ではないかと、私は推察します。

ここで、(…)の部分を取って、文章のスキームを見てみましょう。

「母と父とを滅ぼし、二人の武家の王を滅ぼし、12の国土と従臣とを滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。」

「母と父とを滅ぼし、二人の学問を誇るバラモン王を滅ぼし、第五には虎を滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。」
何だか、相当おかしな暗号もどきが出てきました。

汚れないバラモンになるには、母と父を滅ぼすことが、第一条件なのでしょう。尊属殺人で、汚れの境地ではあるのですが。

この仏魔の試験に合格したバラモンに、仏魔が私たち人間の住む12の領土(12支族の国)と人間を守る武家と学問の王や従臣、そして、神様を表す虎の順で滅亡させる命令を出している、そんな感じの詩です。

ブツダゴースは仏魔の化身なんですね。それを逐一、記述してくださる中村元氏です。これは、すごい文献です。

お釈迦様が活躍なさった当時は、実は、すでに魔がヴェータに入り込み、バラモンは魔の手先に成り下がっていたのです。この仏魔バラモン達は、その見返りに、優遇され莫大な富を貯めていました。これを示す記述は「ブツダのことは第二小なる章7バラモンにふさわ

しいこと」(<https://www.youtube.com/watch?v=WknuwXGyE9Ck> 22:57あたりより)に書かれています。教えを述べられたお釈迦様に対して、「大富豪であるバラモンたちは、師に言った」と記述があります。大富豪のバラモンって、笑っちゃうよね。普通は読み過ぎしちゃうけれど、気づくと笑っちゃいます。しかも、彼らは自分たちで、お釈迦様に「在俗信者として受け入れてください。」って懇願するんです。自分たちの財を投げ打つ出家なんて真っ平御免なんですよ。本当に大爆笑！

このバラモンたちは、学問を誇るバラモン王のお釈迦様を滅ぼしに来た、仏魔バラモンなんですよ。でも、お釈迦様はその攻撃を智慧により打破されたのだと思います。

* OS25 修行僧

O362 手をつつしみ、足をつつしみ、ことばをつつしみ、最高につつしみ、内心に楽しみ、心を安定統一し、ひとりで居て、満足している、
—その人をく修行僧くと呼ぶ。

(コメント)

G225, G253 詩と同じ教えの詩ですが、「内心に楽しみ」とか「ひとりで居て満足している」など、不要な語が多いので、わざわざ書き直さず、削除しました。

謝辞

本書を記すにあたり、たくさんのご指導とご守護をくださった師匠の方々、特にお釈迦様に、心より感謝申し上げます。

また、当方を支えてくれた家族に大きな負担をかけてしまったことにお詫び申し上げます。それでも、最後まで続けさせてくれた事に感謝でいっぱいです。 合掌